柴錬捕物帖

岡っ引どぶ

柴田錬三郎

講談社文庫

し2-8

カバー装画 東啓三郎

柴錬捕物帖
岡っ引どぶ
柴田錬三郎

講談社文庫

柴田錬三郎 し2-8 柴錬捕物帖 岡っ引どぶ

講談社文庫
¥560

柴錬捕物帖
岡っ引どぶ
柴田錬三郎

定価560円

し2-8

どぶは飲む、打つ、買うの三拍子揃ったとんでもない岡っ引。そのどぶの度胸と推理力と行動力を買ったのは、盲目の与力、町小路左門。本郷の怨霊屋敷で名刀が消えた「名刀因果」、将軍の娘にまつわる猟奇事件「白骨御殿」、怨恨の女ミイラ事件「大凶祈願」と、江戸に続出する奇怪な事件を描く柴錬捕物帖。

ISBN4-06-131351-7 C0193 ¥560E (2)

講談社文庫
柴田錬三郎 作品

三国志英雄ここにあり(上中下)
決闘者 宮本武蔵 少年篇
決闘者 宮本武蔵 青年篇
決闘者 宮本武蔵 壮年篇(上下)
柴錬捕物帖 岡っ引どぶ
柴錬捕物帖 岡っ引どぶ(続)
異常の門(上下)
源九郎颯爽記
秘剣揚羽蝶 源九郎颯爽記
血汐笛
お江戸日本橋(上下)
おれは侍だ
顔十郎罷り通る(上下)
主水血笑録

柴錬捕物帖

岡っ引どぶ

柴田錬三郎

講談社文庫

講談社文庫

柴錬捕物帖

岡っ引どぶ

柴田錬三郎

講談社

目次

第一話　名刀因果　九
めくら旗本　一〇
忍びわざ　三四
怨霊屋敷　五三
異　変　七三
その行方　九六
女心無情　一三〇

第二話　白骨御殿　一三三
夢遊役者　一三四
恋慕くずれ　一五四

今様吉田御殿　一七四
誰も知らない　一九七
地獄極楽　二一三
散り別れ　二三五

第三話　大凶祈願　二五一
迷信時代　二五三
怪　異　二七三
からくり　二九三
賭祈禱　三一一
職人たち　三三八
江戸の春　三五六
人間蒸発　三八一

木　馬　四〇一
姫と泉水　四二一
五つの位牌　四三六
祈願成る　四六〇

解　説　尾崎秀樹　四六七

柴錬捕物帖 岡っ引どぶ

第一話　名刀因果

めくら旗本

一

五月の鯉が、晴れた空にひるがえっている午さがり——。

吉原堤を吹く風は、もう夏のものであった。

廓から出て来た客が、ふところ手で、ゆっくりと歩いて行く。

小肥りで、頸も短いが、つけているものは、いかにも通客である。丹後縞の小袖を着流し、裾がひるがえるたびに、艶な紅絹がちらつく。腰には脇差を一本だけさしているが、坊主である。

それに、宗匠頭巾をかぶっている。

しぶいのどをきかせて行くのだが、文句もいい。

夕化粧
むかう鏡に、面やせて
恋に心も乱れ髪
むすぼれかかるおくれ毛は
アレ
青柳の雨沿いて
夜風にゆらぐ水の月

この美声をきいて、編笠茶屋のひとつから、親爺が、ひょいと顔をのぞけた。

「河内山の旦那、お寄んなさいまし」

と呼びかけて、ふと、そのうしろに、つけて来ている五六人の男たちを一瞥して、眉をしかめた。

いずれも、ひと癖もふた癖もある面がまえの男たちばかりであった。

「旦那——どうなすったので？　附馬にしちゃ、頭数がそろっていますね」

「はは……、まさに、その通り——」

お数寄屋坊主河内山宗俊は、いかにも屈託なさそうに、高い笑い声をたてた。

「奉行所には犬、吉原には馬、妾宅には猫——と相場がきまっている、と思っていたが、当節万事セチがらくなると、飼うものもちがって来たな。吉原に、馬のほかに、狼まで飼っていると は、今日まで、少しも知らなんだ。どうだ、親爺、見るがいい。どの面を見ても、人を二人や三人、殺しているだろう」

河内山宗俊は、ずけずけと云った。

男たちは、むすっとして、目を光らせているばかりである。

尤も、対手が、名だたるお数寄屋坊主なので、表面ではさからえないことである。

「河内山の旦那ともあろうお方が、廓の中で、まさか、イカサマ博奕をおやんなさったわけでもございますまい」

「はは……、イカサマ博奕よりも、もっと悪いことをやってのけてな、それが、ばれた。すまきにされるどころか、この首があぶない」

河内山は、扇子で、頸根をポンとたたいてから、
「ところで、どぶを見かけなかったか？」
と、たずねた。
「へえ、ここ二三日、見かけて居りませんが……、馬道あたりで、とぐろをまいているのじゃございますまいか」
「ふむ」
河内山は、首をかしげた。
「いまの時刻じゃ、湯屋の二階にいるかな。ま——行ってみよう」
河内山は、そのどぶというあだ名の男に、会わなければ、本当に、生命があぶないのであった。

二

河内山宗俊は、馬道に足をはこぶと、とある湯屋に入った。
当時、湯屋の二階は、楽隠居や遊び人や休み日のお店者などの、ひまつぶしの場所であった。舟宿などは高いので、ここで、あいびきをする者たちもいた。
茶菓子も出たし、将棋盤も置いてあった。
河内山は、二階に、岡っ引のどぶがいることをたしかめると、すぐには、階段をのぼって行かずに、湯につかった。
おもてに、生命知らずのやくざを待たせておいて、平然として、湯煙りの中で、流行歌を口ずさむところは、いかにも、河内山らしかった。
やがて、二階にあがった河内山は、片隅の壁ぎわに、むこう向きに手枕で寝そべっている男をみとめて、近づいた。
「おい——、起きてもらおう」
河内山は、腰を足で小突いた。
男は、やおら、起きあがると、両手をさしのべて、大きなあくびをした。
まずい面である。
極端に目が小さい。鼻孔がひらいているし、口も大きかった。頤が張り出していて、恰度将棋の駒のかたちをしている。
しかし、どことなく憎めない、むしろ愛敬のある顔だちではある。すくなくとも、河内山がつれて来たやくざどもの悪党面とは、一線を劃している。
着たきり雀のよれよれの唐桟留は、冬でも夏でも、これ一枚で通している無精さで、入る金は、ことごとく酒と女に費されてしまっているあんばいである。
腰に、十手をさしていなければ、これは、この湯屋でお断りの浮浪者である。
ところで、その十手だが、普通の十手とは、すこしちがっている。長さが五寸ばかり長かったし、太さも倍はあろう。
自分で勝手に作ったしろものである。
一時代前ならば、こういうでたらめは許されなかったであろうが、天保も十年経った今日、一年にたった二分のすて金しか呉れてやらぬ岡っ引に御用ききをさせるには、規則ずくめでしばる

わけにはいかなくなっている。

下女の給金でさえ、一年三両にはねあがっている時世であった。

たった二分では、ものの十日もくらせる道理がないのである。

盛り場とか岡場所とか内緒の博奕場とか私娼窟などを巡って、顔をきかせて、いくばくかのひねり銭を取って、くらすのが、しがない岡っ引稼業であった。

しち面倒な規則を押しつけられれば、当節、岡っ引のなり手はなくなってしまうのだ。

それに、また——。

去年、町奉行に、遠山左衛門尉景元が、就いてから、このどぶのような殆どごろつきの岡っ引の方が、かえって役に立つ、と重宝がられるようになったのである。

三

このどぶの本名を、知っている者は、殆どない。まして、生地がどこか、どんな育ちかたをしたのか、誰も知っていない。

三年ばかり前に、いまと同様のよれよれ姿で、腰に十手をさし込んで、ふらりと、浅草へ現れたのであった。

最初は、ひどくうさん臭がられたが、この男は、他の岡っ引のように顔をきかせて、たかることを、絶対にしなかった。どこから、金を手に入れるのか、酒代に不自由していなかったし、吉原の小格子女郎や岡場所の女も、まめに買った。酒好きで、女好きなのであった。

しけた時は、夜鷹を抱いて、夜をすごしている模様であった。

どぶの名が、一躍、江戸中にひろまったのは、浅草寺が大晦日に集めたお賽銭八百七十両が、正月三日うちに盗まれて、大騒動になったのを、どうやって探索したか、狸穴坂下の谷あいにある古洞の中から、発見して、持って来た手柄によってであった。

その古洞の中には、二人の浪人者が、互いにのどを突いて、相果てていた。

下手人は、その浪人者たちに相違ない、という判断が下されたが、どぶは、ただ、

「あっしが、金を見つけて、はこび出す時には、そんな浪人者の影もかたちもありませんでした」

と、奉行所へ報告していた。

どぶが、その二人の浪人者と闘って、のどを得物で刺しつらぬいて、殺したものだ、と看破したのは、町小路左門という盲目の与力ただ一人であった。

どぶをひろいあげて、岡っ引にしてやったのは、その町小路左門だったのである。

どぶは、その大手柄のほかに、三年間に、いくつかの手柄をたてている。

しかし、また、この男は、世間の目をしかめさせる不良行為も、かずかず、やってのけているのであった。

駒形町の質屋の後家を、酔いに乗じて、手ごめにしたのも、そのひとつであった。

後家の訴えで、どぶはあやうく縄をかけられそうになったが、町小路左門の力で、まぬがれた。

町小路左門は、町奉行所では、例外といえる特殊な席を与えられている与力であった。

町奉行所の与力というものは、二百石取り、お目見え以下の身分であった。

ところが、町小路左門は、三千石の旗本大身の家に生れ、ゆくゆくは書院番頭になる身であった。

それが、二十歳の年、病いのため盲目になると、自らすすんで、高禄を返上して、与力の株を買って、町奉行附属になったのである。

与力は、事実上世襲であったが、法規の上では抱席といい、一代限りのことになっていた。左門は、そこを利用したのである。

こういう与力を後楯にしているどぶは、また、他の岡っ引とは、別人種といってよかったのである。

四

「おい、どぶ――弱ったことに相成った」

河内山宗俊は、その前に坐ると、首を振ってみせた。

「三浦屋の花紫を、難波へ売りとばしたのが、お前様とあっしのしわざだと、ばれましたかい」

どぶは、そう云いあてて、湯呑みへ手をのばすと、飲みのこしの冷酒を、すすった。

「どうして判る？」

「それア判りまさ。お前様が、わざわざ、あっしを、さがしまわらねばならねえほどの用件は、ほかには、ねえ。おもてには、やくざを待たせていなさる――」

先月のはじめのことであった。

河内山宗俊は、どぶと共謀して、二百両仕事をやってのけたのである。

日本橋北の本小田原町の薬問屋小田原屋のあるじが、吉原の三浦屋抱えの散茶女郎花紫に、執心した。しかし、花紫は、疱瘡わずらいで化物面になった小田原屋を、きらって、首をたてに振ろうとしなかった。

このことを耳にした河内山が、小田原屋に、「わしが、仲に入ってやろう」ともちかけて、百両の身請金を受けとり、三浦屋に対しては、抜荷の品を多数買い入れていることを、奉行所へ報らせるとおどして、花紫をわずか五十両で身請し、そのまま、大坂の難波の廓へ、百五十両で売ってしまったのであった。

三浦屋が、抜荷の品を多数買い込んでいることを、かぎつけたのは、どぶであった。

三浦屋は、はじめは、河内山に対して、しらばくれていたが、どぶが現れて、ひとつひとつ品目をならべたてるや、かぶとをぬいだのである。

河内山は、どぶに五十両渡し、百五十両を着服してしまった。

この悪事は、遠からず露見することは、判っていた。

露見したら、どういうことになるか――まア出たとこ勝負だ、と河内山は、タカをくくっていた。

ところが、三浦屋の方は、いつの間にか、生命知らずのやくざをやとっていたのである。

三浦屋としては、抜荷のことがあるので、奉行所へ訴え出ることはしないが、その代り、花紫の身請金を、あと百両出さねば、たとえお数寄屋坊主の河内山宗俊といえども、生かしておかぬ、とひらきなおり、廓を出て行く河内山に、やくざどもを附けた、という次第であった。

「どうだ、どぶ――。なにか、いい智慧はないか。この河内山も、まだ四十になったばかりで、

三途の川を渡るのは、チト早すぎるようだ」

「あの金は、もうみんな、使ってしまったのですかい！」

どぶは、小さな目を、まばたかせながら、たずねた。

「借金を払ったら、二分ものこらなかった。……百両つくるか、三途の川を渡るかだ。どっちでも、ごめんだて」

「……」

どぶは、ちょっと考えていたが、出窓へ寄って、往還を、見下した。

五

「成程、悪党面をそろえていやがる」

どぶは、頤をなでた。

往還には、一応の間隔を置いて、五人の男が、立っていた。

人殺しには馴れている手輩であることは、一瞥して明らかであった。

「あいつらに食いつかれていちゃ、どうにも、荷厄介で、しんどい。智慧をはたらかせてもらおう」

河内山は、云った。

「……」

どぶは、なにか思案している様子であったが、河内山の前にもどると、黙って、腕を組んだ。

「どうだ？」

河内山は、返辞をもとめた。

「荒療治をやれ、と云いなさる？」

「しかたがあるまい」

「あっしゃ、御用聞きですがねえ」

どぶは、うすら笑った。

「毒をもって毒を制す、というやつだな。だにをつぶすのも、岡っ引のつとめのひとつだろう」

「しかたがねえ」

どぶは、立ち上った。

河内山の方は、

「わしは、しばらく、ここで昼寝でもして行こう。ゆうべの相方が北山（接吻）だけで、からだ中を火にする女だったのでな……疲れた」

と云って、ごろりと横になってしまった。

どぶは、のそのそと湯屋を出て行くと、待ちかまえたやくざどもを見わたして、

「あっしに、ついて来てくれ」

と、云いすてて、歩き出した。

「おい、おめえに、百両つくる才覚があるのか？」

一人が、訊ねた。

「まアな」

どぶのいかにものんびりとした態度に、やくざどもは、顔を見合せた。

三浦屋の楼主からは、
「金をつくらなかったら、片づけてもらってもかまわぬ」
と云われているかれらは、このうすぎたない岡っ引一人ぐらい殺すのは、造作もないことに考えている。
当然、どぶの方も、金をつくらなければ殺されると覚悟をきめているに相違ないから、多分あてはあるのであろう、と思われた。
五人は、二間ばかりおくれて、ついて行った。
どぶは、吾妻橋を渡ると、本所の裏町を抜けて、北割下水の方角へ向って、黙々と足をはこんで行く。
このあたりは、小役人の家がならんでいる。
割下水は、横川へ通じていて、横川を越えると、小梅村になる。横川を境にして、景色は一変して、ひろびろとした野がひらける。
どぶが五人をともなったのは、小梅村の古い寺院にとなり合せた、かなりな構えの屋敷であった。

六

どぶが、潜り戸を入ろうとするのを眺めて、やくざどもは、さすがに、しりごみした。
「おい、ここは、旗本屋敷じゃねえか」
一人から、険しい目つきで、云われたどぶは、ふりかえって、

「そうよ。三千石のご大身のお屋敷だ」
と、こたえた。
「この旗本に、百両借りる、とでも云うのか？」
「まアな」
どぶは、にやりとしてみせた。
「おい、てめえ、おれたちに、一杯食わせようというこんたんじゃねえだろうな？」
「ついて来りゃ、わからあ」
こういう際のどぶの態度は、ちょっとつかみどころがないほど飄々としている。
やくざどもは、半信半疑のまま、屋敷の中へ、ぞろぞろと入って来た。
どぶは、表玄関へは行かず、植込みをくぐって、中門を入った。
荒れ放題になったひろい庭は、まるで武蔵野へ還ろうとしている景色であった。
「ひでえ景色だ」
やくざの目にも、なんとも荒廃したものに映った。
げんに、行手の苑路を、栗鼠が二匹、ちょろちょろと走りぬけて行った。飼っているのではなく、人気がないので、住みついたに相違ない。
樹木の高い梢には、鷺も六七羽、とまっていた。そこに巣をつくっているらしい。
広い池泉があったが、水面は落葉で掩われていた。
池泉のほとりを通ってどぶは、書院の前に至ると、
「旦那――」

と、呼んだ。

「旦那――、どぶでござんす」

三度ばかり、呼ぶと、くらい屋内から、ゆっくりと、黒い人影が、うごいた。

広縁に現れたのは、すらりと高い武士であった。気品もある。

黒の着流しがよく似合う美男であった。年歯はまだ二十代と半ばであろうが、おちついた物腰に、風格があった。

ただ、気の毒なことに、その双眼が、かたく閉じられていた。目蓋は、おそらく、永久に開かないのであろう。

「連れがあるようだな、どぶ？」

「へえ。……それで、この連中とのかたをつけたいので、お庭を拝借いたしとう存じます」

どぶは、云った。

「それは、一向にかまわぬが、五六人はいるようだな」

「へえ、まあ、これぐらいの頭数なら、あっし一人で、なんとか……」

そうこたえて、どぶは、なんとなく、片手でつるりと顔をなでた。

「お前は、岡っ引だ。たとえ、対手がたが、ごくつぶしのごろつきであろうとも、殺してはならぬ」

盲目の旗本は、云った。

七

どぶは、のそのそと、やくざどもの前へひきかえして来ると、

「おめえらに、渡す金は、ねえ」

と云った。

「なんだと！」

五人は、さっと、血相を変えた。

「てめえ、やっぱり、だましやがったな！」

「だましたわけじゃねえや。おれは、おめえらに、この屋敷で、金をつくってやる、とは云わなかったぜ」

「ふざけるなっ！」

五人は、一斉に、匕首を、抜きはなった。

どぶは、にやりとした。

「正当防衛というやつだ」

「野郎っ！」

猛然と突きかけて来た一人を、ひょい、とかわしざま、したたか、股間を蹴あげた。

なんともすばやい身ごなしであった。

「くそっ！」

「やっちまえっ！」

「このどぶ犬め！」

やくざどもは、口々に叫びつつ、身構えた。

生命のやりとりには、馴れている手輩であった。

たった一人を、とりかこんで、やっつけるのである。なんの造作はない、と思っていた。

ところが、どぶの方は、一向に、平然たるもので、包囲されるにまかせている。

その態度が、いささか不気味といえばいえた。

「くらえっ！」

背後へまわった一人が、体当りで襲った。

瞬間——。

そのやくざは、絶鳴をあげて、たたらをふむと、どさっと坐り込んでしまった。

その一方の目から、血汐が噴き出ていた。

いつの間にか、どぶの右手には、武器があった。

それは、手槍の穂さきを、ずっと細くしたような双刃の武器であった。

どぶの長い十手は、仕込みになっていたのである。

突く、斬る——いずれにも使える。そして、これを使う修練も成っているのであった。

さすがに、残りのやくざどもは、ひるんだ。

「おめえら、一分か二分かの日当で、片目になりてえか」

どぶは、にやにやしながら、云った。

「ほざくなっ！」

もう一人が、真正面から、はねあがるようにして、襲った。

しかし、その者も、次の瞬間には、悲鳴をあげて、のけぞらねばならなかった。

同じく、一方の目が、突き刺されて、みるみる鮮血を、流した。

「どうだね、無職衆——。ここは、北町奉行所与力様のお屋敷だ。場合によっては、押し入った罪で、ひっ捕えて、佐渡送りにできるんだぜ」

どぶの言葉は、ひるんだやくざどもの闘志を完全にうばう効果があった。

八

しばらくのち——。

どぶは、書院で、盲目の旗本と対座していた。

実は、どぶは、この町小路左門という美男子と向い合うのは、最も苦手なのである。

まず第一に、容貌に於ける甚しい劣等感が生ずる。同じく人間に生れながら、どうして、こうも、顔のつくりに、雲泥の差があるのか。これは、やりきれぬことである。

つぎに——。

これほどの美男子に生れながら、盲目であることに、どぶは、心から同情せざるを得ない。元来、どぶは、人に同情したり、好意を抱いたりすることの大きらいな男なのである。しかし、この町小路左門に対してだけは、自分が負け犬とみとめた以上、盲目というハンディキャップを持たれるのは、どうしてもイヤであった。

さて——。

実はこれが最も肝心なことなのだが、どぶは、対座していると、双眼を閉じた左門の姿に、すこし大袈裟にいえば、一種の妖気のようなものがただようのに、息苦しくなって来るのであった。

この圧迫感は、どぶだけでなく、向い合う人すべてが、受けるもののようであった。

そして、その人その人によって、感じかたが、すこしずつ、ちがっているらしい。

——なにか、先祖におそろしいことが起って、そののろいが、この御仁にふりかかっているのではあるまいか？

そうおそれる者もいた。

——これは、何万人に一人といわれるほどの天才ではなかろうか？

そう直感する者もあった。

——氷のように冷酷な人柄に相違ない。

単純にそうきめてしまう者もいた。

いずれにしても、尋常一様の人物ではない、と思い、親しくつきあうのはご免を蒙りたい、としりごみすることに於ては、共通していた。

どぶとても、自分からすすんで、家来になった次第ではない。

しかし、左門から受けた恩は深かったし、また、この人物の鋭く冴えた神経の前には、無条件に頭を下げざるを得なかったのである。

左門は、どぶから、やくざどもと斬り合うことになったいきさつを、ききながら、黙然として、相槌も打たなかった。

どぶの話が、おわると、左門は、はじめて、口をひらいた。

「河内山宗俊も、そろそろ、年貢の納めどきのようだ」

そう云った。

「まさか、あれだけのお数寄屋坊主が、揚屋入りにはなりますまい」

「毒殺、という手がある」

左門は、冷然と、云いすてた。

「へえ——」

どぶは、頸すじのあたりが、うそ寒くなった。

九

「お前も、これからは、要心することだ」

左門は、云った。

「へえ——」

「飲む打つ買うのを、ひかえいと申すのではない。ふるまいかたに工夫が要るであろうな」

「下種に生れついた野郎に、身の動きを制限しろ、と仰言っても、少々むりじゃござんすまいか」

「のぞみによっては、市井で野方図にくらすひまがないように、面倒な仕事を与えてやってもよいが——」

左門は、云った。

「へえ、お願えしましょう」
「ことわっておくが、この仕事は、お前のような吹けば飛ぶような岡っ引風情では、とうてい、突き破れぬ壁かも知れぬ。しかし、わしのえらぶ男は、お前を措いて、他には居らぬ。やってみてもらおう」
「べつに、惜しい生命じゃありません。壁は、なるべく厚い方が、ぶち破る甲斐があります」
「よし――」
左門は、しばらく沈黙を置いてから、話しはじめた。
「本郷菊坂台町の、むなつき坂を下ったところに、怨霊屋敷がある」
「怨霊屋敷？」
「旗本たちは、ひそかに、そう呼んで居る。大番組八千石、近藤右京亮友資。旗本の中で、これ以上の高禄の三河譜代は居らぬ。と同時に、これほど陰惨な家系を持った旗本も居らぬ」
「……」
どぶは、息をつめた。
「近藤家は、代々必ず一人は、狂人か白痴が出て居る。げんに、当主右京亮友資は、二十年前に、乱心して、爾来一度も登城して居らぬ。すでに、六十を越えて居るし、生来、おとなしい性情ゆえ、乱心はしても、見たところは常人とかわらぬ模様だが、口走ることは人をおどろかせるらしい。長男市之助は、三十を越えているが、いまだ七八歳の知能しか持たぬ。市之助には、妹が一人いる。これは、絶世と申してよい美女だが、あわれにも、片端だ」
「へえ。足でもわるいので？」

「いや、わしと同様、闇の中に居る」
「めくらで――」
「左様。呪われた血統も、きわまって居る。しかし、これは、先祖が悪業を積んだむくい、という次第ではないようだ。代々、狂人、白痴、片端が生まれるに就いては、それなりの原因があるのであろうが、まだ、わしの調べは、そこまでは及んで居らぬ。……ところで、お前に、やってもらいたいことは、近藤の屋敷に忍び入って、来月、上様へ献上する近藤家の家宝のひとつ大盗正宗を、守ってもらいたいことだ」
「へえ――」
「大盗正宗は、太閤秀吉が、関白であった頃、首級を狙って寝所へ押し入って来た盗賊石川五右衛門を、足ばらいにして、しりぞけた、といういわれを持つ名刀だ」

十

左門は、つづけた。
「大坂夏の陣に、炎上する大坂城へ一番乗りした近藤右京亮友一は、自刃した豊臣秀頼を、発見し、その咽喉を突いた大盗正宗を、取って来た。その武勲によって、大盗正宗は、そのまま、近藤家の家宝として、下し置かれた。……さて、このたび、征夷大将軍譲職にあたり、特にもとめられて、近藤家より、その大盗正宗が、献上されることになった」
十一代将軍家斉は、五十年の永きにわたったその職を、いよいよ、来月はじめ、世子家慶に譲って、西ノ丸に移ることを、布告したのである。

当然、三百諸侯をはじめ、二万余の旗本は、身分地位に応じて、祝賀の品を献上しなければならなかった。

しかし、将軍家の方から、その品を指定されたのは、近藤家の大盗正宗だけであった。

家慶は、守護刀を欲しい、と云い出し、老中が、それならば、近藤家の大盗正宗こそふさわしゅう存じます、と言上したのである。

「ところで、先日、近藤家の用人佐倉なにがしが、わしに、内々で、面談を申し入れて参った」

左門が、会うと、佐倉某は、左門配下の手練者をえらんで、大盗正宗の守護を願い出たのである。

しかも、近藤家の人々にも気づかれぬように、姿をかくして、物蔭から、そっと守護して頂きたい、ということであった。

「大盗正宗を、狙う者がいる気配があるのか？」

左門が、問うと、佐倉は、

「不吉な予感とでも、申しましょうか、このところ昼夜、おちつきませぬ」

と、妙にあいまいなこたえかたをした。

もし、大盗正宗が盗まれれば、近藤家は、それを口実として、改易になることは、明白である。

ただでさえ、嫡子が白痴である近藤家の存続は、おぼつかぬのである。

当時、旗本としては、不具はもとより、病弱の者は、将軍家ご馬前のご奉公ができぬ、として、家を継ぐことは許されなかった。

近藤家の嫡子市之助に、家督を襲う資格はなかった。

ところが、右京亮友資は、市之助がまだ十歳の頃に、狂人となってしまい、廃嫡にして、養子を迎えることができなかったのである。

用人佐倉としては、大盗正宗を献上するのを好機として、新将軍家慶に乞うて、市之助を廃して、あらたに、他家から秀才を養子に迎えようと、考えたのである。

佐倉が、主家大事に、生涯をささげて来た忠臣であることは、盲目の左門にも、瞭然とした。

ただ、佐倉が、なにか、肝心の事柄を、かたくかくしていることは、気にかかったが……。

左門は、佐倉の依頼を引きうけた時、すぐ、どぶの顔を思いうかべたのであった。

十一

「どぶ、これは、ひどう辛抱を要する仕事だ。献上日までは、まだ二十日ある。それまで、近藤の屋敷内に、ひそんでいなければならぬのだ。よいな？」

左門に、そう云われて、どぶは、にやりとした。

「五年前、京から江戸まで、畑の芋を盗んでかじりかじり、辿りついた二十日間にくらべりゃ、楽なものでございます。……ところで、御当主が狂気、御嫡子が痴呆、お娘御がめくらで――いってえ、その名刀を、どなたが、守っておいでなので？」

「たぶん……、雪という娘であろうな」

「めくらで、守れましょうか？」

「わしは、一度会ったことがあるが、打てばひびく頭脳の冴えがあった。ただの娘ではない」

「その名刀が、一度や二度、雲がくれしたことがあるんでございましょうかね？」
「あったろうな。それでなければ、用人が、わざわざ、わしにたのみには参るまい」
「殿様――。場合によっては、この十手を抜いても、かまいますまいね？」
「お前は、岡っ引だ。十手の使いかたを、もうすこし心得たら、どうか」
「へい。……では、これで――」
どぶはぺこりと頭を下げると、縁側へさがった。
「どぶ――」
左門が、呼びとめた。
「へい」
「念のために、もうひとつ、教えておく。怨霊屋敷には、近藤家の遠縁にあたる浪人者が食客になって居る。これは、腕は立つ。忍び入ったお前を発見すれば、襲いかかるであろう。敵わぬかも知れぬぞ」
「わかりました。では、いずれ、のちほど――」
どぶは、庭を横切って、裏門から出ようとして、そこで、小間使いの小夜に会った。
御家人の娘で、どぶは、こんなういういしい娘を二人と知らぬ。ようやく十七歳になったばかりであった。
盲目の左門にとっては、小夜は、なくてはならぬ手足であった。
「小夜さん、まだ、殿様のお手がつきませんかい？」
どぶは、いきなり、ぶしつけな質問をした。

「存じませぬ」
小夜は、頬をそめて、視線をそ向けた。
「もったいねえ。殿様も、案外野暮だ。……小夜さんの方から、寝所へ押しかけちゃ、どうでげしょうな」
「そんな――、いやな親分ですこと」
「へへ、親分と呼んでくれるのは、小夜さんだけだ。こんど来る時は、土産を持って来やすぜ。欲しいものを云っておくんなさい」
「なにも欲しゅうはありませぬ」
「天竺渡りの緋牡丹の手絡なんざ、どうでげす？」
「要りませぬ」
「へへ、かけて欲しいは薄なさけ、か。
　ぬしに逢う夜は、小萩の笑顔、
かたみ小袖を波こえて、
末の松山、末までも、
かわるまいぞえ、百夜草
と来た」

忍びわざ

一

町小路屋敷を出たどぶは、顔に似合わぬ佳い声で、流行歌を口ずさみながら、やがて、両国橋を渡った。

竝び茶屋の前を、行きすぎようとすると、

「ちょいと、どぶ旦那」

声が、かかった。

視線を向けると、緋毛氈をかけた茶のみ台に、長船あたまの、小股のきれあがった女が、放俗な姿勢で、笑っていた。

「てめえが、旦那をくっつける時には、ろくなたのみをしやがらねえ」

そう云いながらも、どぶは、そばへ寄った。

「なんでえ?」

「あたまから、そうぽんぽんお云いでないよ」

女は、目もとに媚をうかべた。

「おい、ことわっておくが、てめえとおれとは、同じ追いつ追われつでも、色のかけひきじゃねえんだぜ。巾着切と岡っ引の間柄だぜ。たやすく、身内面をしてもらうめえ」

女は、はなれ島のお仙というすりであった。

「とんでもない。あたしが、いつ、おまいさんを、仲間あつかいにしたのさ。どんな時でも、ちゃんと、折目色目をわけて、たてまつっているじゃないか」

「置きやがれ。……用件ぬかせ、用件を――」

「まま、こなさんは、そのようにせかさずと、もそっと、こちゃへ、寄ってたもいのう」

「ちぇっ! 脳天が破れたような声を出しやがるねえ。てめえは、おれが、金輪際、女にもてねえ、と見くびっていやがるが、男は、面じゃねえぞ。心意気だ。てめえ自身いつの間にやら、おれに、少々いかれてやがるに相違ねえんだ。てめえ自身が、気づいていねえだけよ」

どぶは、そう云って、お仙の手をにぎった。

「そろそろ往生してもいい頃合だぜ」

「腕も立つし、心意気もあるこなさんだけどねえ、抱かれた時に、つい、あたしゃ、薄目をあけて、男の顔を見ることがあるんでねえ」

「このあま! ふざけやがって――」

どぶは、お仙を突きはなすと、

「ぬかせ、用件を――。おれは、いそいでいるんだ」

「どぶ旦那。はなれ島のお仙が、後生一生のお願いを、きいておくれな。ね、おまいさんの親分に、会わせておくれ」

「なんだと?」

「あたしゃ、つい先日、竪川の置材木の上で、釣糸をたらしているおさむらいを見かけて、その

佳い男っぷり、というよりも、なんだか、浮世の風もさけて通るような凄味のある様子に、ぞっこん、参っちまってね、どこの殿様か、きいたところ、町小路左門――三千石を返上して、与力の株を買った変り者、と教えられて、そいじゃ、どぶ旦那の親分じゃないか、やれうれしや、近づくてだてがあるわいな」

二

どぶは、お仙のたのみをきくと、笑い出した。

「こいつは、お笑い草だ。女すりが、旗本の与力と、首尾したいと、岡っ引に、仲だちをたのむなんざ、前代未聞だ。……おい、お仙、陽気のせいで、少々頭が御座っているのじゃねえのか」

「本気さ。あたしゃね、浮気をした男は、一人や二人じゃないことは、かくさないよ。たんといましたさ。けどね、しんそこ、惚れて血道をあげた男は、一人もいないんだよ。日本中の神様に、誓ってもいいさ。……ところが、あの殿様を、ひと目見た時、なんていうんだろうね、女の血が疼いちゃった。それから、まる二日、そのお姿が、はなれないのさ。三日目に、やっと、自分をとりもどしたら、はっきり、わかったんだ。女は、男のために生きて死ぬんだ、と」

「あいにくだったな、姐御。日本中の男をくどき落す自信があっても、あの旦那だけは、難攻不落だ。……第一、おめえ、町小路の旦那には、おめえの仇姿は、見えねえのだぜ」

「あの、目蓋をとじて、じっと、釣竿をさしのばしておいでの姿が、あたしには、こたえられないのさ。……ね、おねがい！　ひき合せておくれ！」

「駄目だ。あきらめな」

どぶは、立ち上ろうとした。

「待っとくれ！　あたしゃ、本気なんだよ。後生！　おねがい！」

「うるせえ！　……おい、お仙、あんまり、男をこけにするな」

「なんだって？」

「おれは、てめえと一度は、必ず寝てやろう、と肚をきめている男だぜ。その男に、人もあろうに、自分の親分と首尾させてくれ、とたのみやがるとは、なんてえこった！　いい加減、頭に北山だあ！　くそ面白くもねえ」

とび出しかけたどぶは、ふと、脳裡にひらめいたことがあって、お仙を見下した。

「お仙、おめえの料簡次第では、ひき合せねえこともねえ」

「おや、急に、風向きが、かわったね」

「おめえの仲間に、大名屋敷へ忍び込むのに、馴れている野郎がいるだろう？」

「どうするのさ？」

「そいつに、一丁、忍びのわざを、教えてもらいてえんだ」

「岡っ引が、夜働きをするのかえ？」

「おい、いるなら、いると云え」

「そりゃ、いるわさ。でも、うっかり、おまいさんをつれて行ったら、あとで、小っぴどく、とっちめられるから、あたしゃ、まっぴらだよ」

「たのむ！」

「ほほ……、こんどは、どぶ旦那が、頭を下げる番になったね。じゃ、あたしのたのみも、きっ

と、きいてくれるんだね」

「お屋敷へつれて行ってやることだけは、約束してやる。あとは、おめえの腕次第だ。尤も、こわってておくが、町小路の旦那は、ただの色仕掛じゃ、金輪際、落ちねえぞ。肚をきめて、かかれ」

三

その夜、かなり更けて——。

どぶは、本所一つ目橋の袂にある小料理屋の二階で、手酌で飲んでいた。

はなれ島のお仙が、ここで待っていれば、その男が、必ずやって来る、と教えてくれたのであった。

その二階の十畳の座敷は、ひくい衝立で、いくつかに、仕切ってあった。

しかし、もうこの時刻には、客の出入りは絶えていた。

しんとした重い夜気を感じながら、手酌で飲むのが、どぶは、好きであった。

酒はつよく、もう六本ばかり空けていた。

どぶは、左門のことを、考えていた。

——どういうんだろうな?

左門が、どうしてあのように、孤独な生活をつづけて、自分自身に対して、きびしい戒律を加えているのか、どぶには、合点がいかなかった。

左門自身その気になれば、いかようにも、その日を愉しむことができるはずであった。げんに、はなれ島のお仙という小股のきれあがった仇っぽい莫連でさえ、ひと目惚れしているのである。

左門は、女も寄せつけなければ、酒もたしなまず、人との交際ももとめようとせぬ。唯一の趣味といえば、釣だけであるが、それも、出かけるのは、一年のうち、かぞえるほどしかない。

どぶが見かけるのは、常に、端然と坐った姿だけである。

——なにが、面白くて、生きていなさるのか?

どぶは、双眼を閉じて、正座している左門の姿を想いうかべるたびに、妙に、胸の奥が押しつけられるような、息苦しさをおぼえる。

と——。

どぶを、われにかえらせたのは、衝立を二つばかりへだてたむこうからきこえて来たいびきであった。

いつの間にか、人がいたのである。

——妙だな。

どぶは、首をひねった。

——おれが、上って来た時には、たしかに、誰もいなかったんだが……。

酒を飲んでいるあいだにも、人の上って来る気配はなかった。

——ひそんでいやがったとしか思えねえが……?

自分につぶやいたとたん、どぶは、はっとなった。

「そうか!」

どぶは、腰をあげると、衝立ごしに、そこを見やった。
職人ていの男が、寝そべっていた。
どぶは、衝立をまわって行くと、
「おい！」
と、声をかけた。
返辞はなかった。
豆しぼりで、顔を掩うている。
「おい、判ったぜ。おれが約束したのは、お前さんだろう。……起きてくれ」
どぶに、うながされて、男は、ようやく、身を起した。

四

小肥りの、童顔といっていい、べつに特長のない四十男であった。
「一昼夜、ぶっ通しで、賭場にいたのでね、おまけに、オケラになったので、すっかりくたびれたんだ。もうすこし、寝かせてもらえりゃ、よかった」
男は、そう云って、生あくびすると、「ねてい」と云った。
どぶは、前に坐ると、
「おれが、上って来た時、あんたは、ここにいたかい？」
と、たずねた。
「いいや――」

男は、首を振った。
「わしが、そこの高窓から、そっと入って来た時、お前さんはまだ二本空けたばかりだったね」
――畜生！
どぶは、肚のうちで、うめいた。
――この野郎、おれを、試しやがった。
全く気づかなかったのは、こっちの不覚である。岡っ引としては、この上もない恥というよりほかはない。
「お仙から、ききなすったろうが、おれは、どぶだ」
「わしは、次郎吉とおぼえておいておくんなさい」
「見事な忍び込みぶりだ。かぶとをぬいだぜ」
「お前さんは、何か考えごとをしていなすったようだ」
「それにしてもだ。おれは、滅多にこんな不覚はとらねえ男なんだが……、一本参ったね」
どぶは、正直にそう云って、にやっとしてみせた。
次郎吉と名のる男も、にこやかに見かえして、
「お仙さんの話だと、どこかの旗本の御大身の屋敷へ、忍び込むことを、企てていなさるとか……」
「ああ、そうなんだ。大番組八千石、本郷菊坂台町のむなつき坂を下ったところにある――」
「存じて居ります。怨霊屋敷でござんしょう」
「あんたは、そこへ、忍び込んだことがあるのかい？」

「いや、べつに、わざわざ、怨霊にたたられに、忍び入ることもないので、塀を越えたことはありませんがね。噂だけは、きいて居りますよ」

「近所でも、そう呼んでいるのかい？　おれは旗本仲間だけが、そう呼んでいるのだ、ときいたんだが……」

「旗本屋敷内のことは、世間は知りませんね。わしも、別の旗本屋敷に忍び込んだ時、耳にしたんでさ。御当主が気が狂っていて、ご嫡男が痴呆で、お娘御がめくらだとか――」

「そうなんだ。その怨霊屋敷へ、おれは、忍び込む用があるのだ。しかし、おれは、武家屋敷へ忍び込んだ経験が、まだ、ねえのだ。要領というか、コツというものを、教えてもらいてえ」

五

次郎吉は、ちょっと、考えていたが、

「お前さんは、寐だめ、食いだめをしたことが、おありなさるか？」

と、たずねた。

「まだ、ねえやな。水っ腹で三日もすごしたことはあるが――」

「それが、できないと、忍び込みは、苦労だね」

「やってみるさ。おれには、それよりも、広い建物の中を、うろうろする方が、つらいように思えるぜ」

どぶが云うと、次郎吉は、笑った。

「なに、廊下や座敷を歩くわけじゃねえ。天井裏をわたるのだ。方角をまちがえることは、滅多

にないね。大名も旗本も、格式と石高で、それぞれ、造りがきまっているから、八千石屋敷の絵図面を見ておけば、たいがい、見当がつく。……ところで、お前さんは、怨霊屋敷の、どこらあたりを、のぞこうと考えていなさるので？」

「ある品が置いてあるところを、見つけて、そこに、しばらく、腰をおちつけてえのだ」

「ある品とは？」

「それは、云えねえ。……あんたは、盗っ人だろう。おれが云ったら、ひと足さきに、そいつを、盗み出すかも知れねえ」

「やけに用心ぶかいんだね」

「あたりめえじゃねえか。こっちは、生命がけの仕事を、引受けたんだ。横あいから、荒されちゃ、かなわねえ」

そう云うどぶを、次郎吉は、じっと見まもっていたが、

「わしに手引きをさせると、忍び込むのも、造作はないのだが……」

と、つぶやくように、云った。

「おれは、岡っ引だ。盗っ人に手引きされたのじゃ、面目にかかわらあ」

「それは、まあ、そういうことだが……、わしが、ここへ入って来たことにも、気がつかないようなうかつなところがあっちゃ、旗本屋敷へ忍び込むのは、考えものだね。すぐ、発見されて、追いまわされるおそれがある」

「いいから、コツだけを、教えてもらおう。礼はする」

どぶは、ぺこりと頭を下げた。

次郎吉は、どうやら、どぶに対して、好感を抱いた様子であった。
まず、こまかく、忍び込む手順を、教えてくれた。
それから、長い時間をひそむには、どのあたりがいいか。万一発見された場合は、どうやって、逃走すればいいか。などを、納得のゆく教えかたをした。
「有難てえ。これで、もうしめたものだ」
どぶが、にやりとすると、次郎吉は、首を振って、
「その屋敷、屋敷で、思いがけぬことが起るものでね。ただ、要領とかコツとか、おぼえていても、必ずしも、その通りには、いかねえものだが……、まあ、やってみなさることだ」
「わかった。……ことわるまでもねえことだが、これは、秘密だぜ。他人にしゃべってくれては、こまるんだ」
どぶは、念を押した。

六

同じ時刻——。
小梅村の夜道を、一挺の駕籠が、ひそやかにやって来て、町小路家の門前で、停った。
小者が一人、供をしていた。
「お嬢様、ここでございます」
告げて、小者は、おろされた駕籠の前へ、草履をそろえた。
あらわれたのは、お高祖頭巾で顔を包んだ武家娘であった。

提灯のあかりに、浮きあがった姿は、なにかの化生のように、美しかった。
美しく生れたものが、そのまま、その美しさをみせているのではなく、この武家娘は、妖しい雰囲気をただよわせるなにかを、心に持っているようである。
駕籠をそこに待たせておいて、武家娘は、小者に手をひかれて、潜り戸を入った。
いかにも、おぼつかない足どりは、闇のせいではなかった。
盲目だったのである。
表玄関で案内を乞うと、取次ぎに出て来たのは、もう古稀を越えたとおぼしい、からだが二つに曲った老人であった。
「かような夜半に、おうかがい申し、まことに、非礼のきわみでございまする。火急のお願いのために、非礼かえりみず、参上いたした次第にございます。近藤右京亮が女雪、ぜひとも、お目もじ叶いますよう、願い上げまする」
小者の口上は、それであった。
老人は、耳が遠いらしく、片手を耳にあてて、きいたが、
「しばらく、お待ちを——」
と、云いおいて、奥へ——長廊下をゆっくり歩いて、入った。
あるじの居間には、まだ、灯があった。
尤も、灯が入っていようといまいと、町小路左門の目には、どちらでもよいことだったが……。
老人は、廊下にうずくまると、
「殿——」

と、呼んだ。

「客か」

あるじの声が、打てばひびくように、応じた。

「はい。近藤右京亮様のご息女とか……」

「書院へ、通しておけ」

「かしこまりました」

老人は、ひきかえして行った。

居間では、その時、左門は、いっぴきの小猿を対手に、妙な遊びをしていた。

左門の右手には、半分ばかりに短く切った釣竿がにぎられていた。

てぐすのさきには、生きた鼠がくくりつけられていた。

畳の上を駆けまわる鼠にむかって、小猿が、狙いをつけて、ぱっと、とびかかる。瞬間、左門は、釣竿をはねあげる。鼠は、宙を舞って、小猿から、のがれる。

これが、くりかえされていた。

いかにも、盲人らしい遊びであった。

小猿は、どうしても、鼠が、とらえられないのであった。

左門の手練といえた。

七

鼠が、畳の上を、駆けまわるのは、早い。それに向って、とびかかる小猿の動作も、すばやい。

しかし、左門が、釣竿をはねあげるのは、鼠よりも小猿よりも、迅速だったのである。のみならず、小猿が鼠にとびかかる刹那をはずさず、文字通り間一髪の差で、さっと、はねあげる手練は、まことに見事であった。

とうてい、盲人の業とは思われないことであった。

左門は、なおしばらく、その遊びをつづけていたが、やがて、てぐすをたぐって、鼠をひき寄せると、自由の身にしてやった。

鼠は、必死になって、奔った。

それをめがけて、小猿が、跳んだ。

左門は、やおら、立ち上ると、廊下へ出た。

手さぐりで歩く必要はない。

わが屋敷内に於けるかぎり、左門は、目あきと同じように、歩くことができたのである。

書院に入った左門は、おのが座へ、しずかな足どりですすむと、就いた。

「近藤友資のむすめ雪にございます」

このような美しい声音を、はじめて耳にした左門は、しかし、眉宇もうごかさず、

「お互いに、闇の中に住んでいる。自我は強くなる」

まず、そう云った。

「はい」

「思いつめると、夜中であろうと、かまわずに、人をたずねる振舞いも、その自我の強さゆえで

あろう。……ところが、それを受けるわたしの方は、そなた以上に、自我が強い。したがって、そなたにとっては、いかに必死の願いであろうとも、こちらには、同情とか憐憫の心は薄い、と思ってもらおう」

「わかりました。……でもお願いの儀、おききとり頂けるのでございましょうか？」

「うかがおう」

「先日、てまえどもの用人佐倉織部が、おうかがいいたしました由にございますが……？」

「うむ」

「たぶん、佐倉は、てまえどもが、このたび献上いたすことに相成りました大盗正宗の守護を、貴方様に、お願い申したのであろう、と存じます」

「その通りだな」

「そのことに就きまして……。佐倉のお願いを、取り下げたく、今夜、おうかがいいたしたのでございます」

「御当家用人は、大盗正宗を盗み取ろうとする者がいるゆえ、守護をたのんで参った。その危険はない、とそなたは云われるのか？」

「はい」

「それは、そなた自身の考えか？」

「はい」

「用人の話では、危険は今日にも、といった模様であった」

「いえ、その心配は、すこしもありませぬ」

雪は、きっぱりとこたえた。

「てまえどもの屋敷には、怪しい者は一人も、住まわせては居りませぬ」

八

旗本仲間から、「怨霊屋敷」とひそかに呼ばれている近藤家に、怪しい者は住んで居らぬ、と雪は、断言してみせたのである。

左門は、それに対して、しばし、沈黙を示した。

雪は、膝で手を組み、じっとうつ向いていた。

互いに、暗黒の中にいて、この夜中の寂寞を、受けとめている。

「ひとつ、うかがっておこうか」

左門が、云った。

「はい――」

「近藤家の先祖の一人に、寛永の頃、長崎奉行をつとめ、数万の切支丹宗徒を、処罰した仁が居られる、ときいたことがある。まことであろうか？」

「まことでございます。右京亮友正と申されたその御仁は、当時、九州一円の信徒の怨嗟の的であった、ときいて居ります」

「その晩年は、いかがであったか？」

「狂い死をなされたとか……」

雪は、先祖の恥をかくさなかった。

「それだけ、うかがっておけばよい」
「あの……」
雪は、声音に必死のひびきをこめて、
「わたくしのお願いを、おききとどけ下さいましょうか？」
「わたしが依頼を受けたのは、用人佐倉織部である。依頼を取り下げるのは、佐倉自身の口からであるべきかと思う。それが、筋道ではあるまいか」
「佐倉は、わたくしが、こうして取り下げに参ったときいたならば、不服をとなえるに相違ございませぬ」
「そなたには、気の毒だが、いったん引受けたものを、止めるわけにはいかぬ。……大盗正宗が、もし、盗まれたならば、近藤家は改易の危機に見舞われよう。佐倉が、お家大事に、大盗正宗を守ろうとするのは、当然であろう。そなた自身も、それをのぞんでしかるべきではないか。依頼を取り下げる気持が、奈辺にあるか知らぬが、近藤家の一員として、家のつぶされるのを、さけたい気持は同じであろう？」
「……」
「佐倉織部も、そなたも、なにやら、肝心のことを、かくしているように、わたしには、思えるが、いかがであろう？」
「……」
「話したくなければ、しいては、きかぬ。……ひきとって頂こう」
「では、どうあっても、わたくしのお願いを、おき入れ下さいませぬか？」

「くどい」
左門は、冷然とこたえた。
老人が、入って来て、雪の手をとると、玄関へ、ともなおうとした。
いったん、廊下へ出た雪は、急に、それまでおさえにおさえていた感情を、ほとばしらせて、
「お願いでございます！」
と、叫んだ。
その悲痛な態度に、左門は、ある大きな疑惑をおぼえた。

九

雪が去ってから、なお、しばらく、左門は、書院に坐っていた。
「旦那様――」
小間使いの小夜の声が、廊下で、呼んだ。
「うむ」
「お夜食の用意ができました」
左門は、夜明けまで起きていて、午すぎまで寝ているので、三食がずれていた。
「ここへ、はこんでくれ」
「はい」
膳部が、左門の前へ、据えられた。芋粥であった。
左門が、食事についやす時間は、長い。小夜は、その給仕をしているのが、いちばん好きで

あった。

箸を置いた左門が、珍しく、小夜に、質問をした。

「そなたは、心の優しさは無類だが、それでも、自分のなかに、イヤなものがあるのに、気づくことがあるか？」

「はい、ございます」

小夜は、ためらわずに、こたえた。

「どういうことで、気づく？」

「飲んだくれの父を憎んだことがございます。くさい息を吐きながら、いびきをかいている父を眺めた時、いっそこのまま、死んで欲しい、と祈ったことをおぼえて居ります。すぐ、おそろしくなって、うち消しましたけど――」

「母をいじめた父が、憎かったのであろう？」

「はい。物心ついた頃から、母が苦労するのを、見せられましたゆえ……」

「父が亡くなった時、そなた、泣いたか？」

「いえ」

小夜は、かぶりを振った。

「泣きませんでした。……ほっといたしました。その時、自分のつめたさに、気がつきました」

「そなたでも、そうであったか」

「旦那様――」

「うむ？」

「女は、なにやら、ふかい業を背負うているのではございますまいか？」

「そうは思わぬが……」

「わたくしは、そう思います。わたくしの心には、自分でもイヤになるものが、いっぱい、ございます」

「そなた自身は、それを嫌悪していても、他人からみれば、むしろ、いじらしい心根かも知れぬ」

「そうでございましょうか？」

「そなたなどは、最もよく出来た娘だ。神様は、これ以上のつくりかたはできぬであろうな。ただ、喜怒哀楽の情を与えられているからには、泣きも笑いもしよう」

「わたくしは、そういう情を、おもてへすこしもあらわそうとなさいませぬ旦那様のようなおかたが、いちばんご立派だと存じます」

「そうではない。押えれば押えるだけ、わしの心中は、意馬心猿になって居る。わしのような男こそ、世の中ではおそろしい奴かも知れぬ」

怨霊屋敷

一

「いやなにおいがするな」

次郎吉が、云った。

近藤右京亮邸の庭の一隅――築山の深い木立の中であった。

大きな泉水をへだてて、母屋が、くろぐろと、闇に沈んでいる。

「におい？　おれには、なにも、におわねえぜ」

どぶが、けげんそうに云った。

「鼻でかぐにおいじゃないのさ。なんというのかね、古い屋敷には、それぞれ、長い歳月のあいだに、独特のにおいがただようものでね」

「そうか。……怨霊屋敷と呼ばれているくれえだから、においもいやなものだろうな」

「これア、気をつけた方がいいな親分」

「親分は、止してくれ。柄じゃねえんだ」

「まさか、どぶさんと呼ぶわけにもいくまい」

「どぶと呼びすててくれりゃいいんだ。……もう、ここへ、ひそんで、半刻経つぜ。どうするんだ？」

「そろそろ、天井裏へ、忍び込んでもいいんだがね。……この仕事は、あせるのが、禁物なのだ。辛抱が肝心――」

次郎吉は、ようやく、腰を上げた。

どぶは、あとにつづいた。

枝ぶりのいい小松のちらばった斜面を、そっと降りた次郎吉は、泉水のほとりへ立って、

「この水は、流れているのだな」

と、つぶやいた。そんなことに気づくとは、余裕のある証拠である。

「おもてに川は、ないぜ」

「裏手に、細いやつが流れているのさ。加賀宰相のお屋敷から、菊坂を落ちて、小石川へすてられている。水戸様のお屋敷を抜けているのだ。つまり、武家水さ」

地震、かみなり、火事、親爺――と恐れられた時代であった。

そのうちで、最も、心をくばらなければならぬのは、火事であった。

大名や旗本大身では、屋敷をつくる際、涸れることのない水を引き入れることに、苦心したし、最も金をかけた。

火事の際、泉水というものが、重要な役割をはたしたのである。

いわば、武家屋敷専用の水が、江戸の市内には、無数に、流れていたのである。

ただ、年月が経つにつれて、流れは、いたるところで、止ってしまい、修理の費用もないままに、大半の武家屋敷の泉水は、よどんでしまっていた。

泉水が、いつも、あたらしい水と入れかわっている屋敷は、珍しくなっていた。

この怨霊屋敷の泉水の水が、絶えず流れているのは、加賀邸から水戸邸へ通じているおかげであろう。

次郎吉という男は、流石に、こういうことにまで、ちゃんと知識をそなえていた。

「お前さん、もし追われたら、この泉水に沿って、つっ走って、裏門近くで、どぶんと、とび込むんだな。もぐりがやれるなら、水門から、のがれ出ることができるぜ」

二

どぶと次郎吉は、首尾よく、母屋の天井裏へ、忍び込むことに成功した。

しかし、これからが、ひと仕事であった。

名刀大盗正宗が、どの部屋に、置かれてあるのか、それをつきとめなければならなかった。

「これア、ひろすぎらあ！」

塵のつもった梁の上に、とまった時、どぶは、思わず、愚痴が出た。

闇は、見当がつかぬくらい、ひろく、ひろがっているのであった。

どぶは、まだ要心して、次郎吉に対して、どんな品を見つけようとしているか、打明けてはいない。

したがって、自分で、さがしあてなければならないのであった。

「絵図面は、ちゃんと、見て来たはずだぜ、親分」

「それア見て来たことは、見て来たが、こうやって、忍び込んでみると、まるっきり、想像していたのとは、大ちがいだ。とんだ仕事を、引受けたものよ」

「愚痴はあとにしよう。……どういう部屋に置かれる品なのかね？」

「一番立派な座敷だろうな」

「それじゃ、書院だろう」

「いや、客に眺めさせるしろものじゃねえようだ。ともかく、この下がどこに当るらしい、と順順に、教えてくれねえか」

「一刻も、歩けば、およそ、のみ込めるだろうね」

次郎吉とどぶは、天井裏を移動して行った。

とある箇処で、次郎吉は、張りじまいの天井板をずらして、覗きおろしていたが、そっと、どぶに、目をゆずった。

覗いてみたどぶは、思わず、息をのんだ。

半白の頭髪の、白衣に白袴をはいた男が、厚い檜板の上へ、仰臥して、胸で手を組んでいた。

あたかも、死骸が、安置されているあんばいであった。

三方は壁、一方が太い格子になっている座敷牢であった。

この人物が、当主近藤右京亮であることは、まぎれもない。

——どういうのだ、これア？

狂人が、自ら好んで、そういう寐かたをしているのであろうか。

痩せさらばえて、ほとんど骨と皮になったその姿は、鬼気迫るものがある。

そのまま、息をひきとるのではあるまいか、とみえる。

「あきれたものだ」

顔をあげてから、どぶは、吐き出した。

しかし、次郎吉の方は、妙な感心のしかたをしていた。

「狂っても、やっぱり、さむらいだね。ちゃんと、修業をしていなさる」

「修業？」

「あれは、修験道の修業に似ているよ」

二

どぶと次郎吉は、場所を移した。

次に、次郎吉が、どぶに覗かせたのは、これは、狂人の凄愴な姿とは反対に、なんとも、無邪気な光景であった。

すでに三十を越えたとみえる男が、内裏雛を畳の上へならべて、ままごと遊びに、ふけっているのであった。

——あれが、長男の市之助か。

どぶは、あきれて、隙間から目をはなすと、

「埒もねえ」

と、吐き出した。

「ものは考えようだな」

「どういうんでえ？」

「あの方が、幸せかも知れない、ということさ」

次郎吉が、云った。

「幸せだと？　冗談じゃねえ。ありゃ、生きたむくろじゃねえか」

「生きたむくろの方が、なまじ、正常の五感をそなえている人間よりも、はるかに、楽しい生涯を送っているのではあるまいかな」

「ふん——」

どぶも、次郎吉からそう云われてみると、そんな気がしなくもなかった。

「ともかく怨霊屋敷とは、名づけやがった。もう一人、めくらの娘がいるんだったっけな」

「それじゃ、ついでに、その娘御も、上からのぞいてみなさるかい」

次郎吉という男は、まるで、わが家のように、隅ずみまで、間取りを知っていた。

梁をつたって行き、

「このあたりだな」

と、張りじまいの天井板を、ずらしてみて、

「そうだ」

と、云った。

みごとなカンといえた。

どぶが、のぞいてみると、いかにも、娘の部屋らしいたたずまいであった。

なげしには、薙刀が架けてあり、違い棚の下には、琴が置いてある。

茶道具も、片隅にそろっていた。

しかし、娘自身の姿は、見当らなかった。

行燈のあかりを、ほそめていないところをみると、ちょっと出て行ったのだ、と思われる。

「さて、案内はおわったね」

次郎吉は、云った。

「どうも、いろいろと——」

どぶは、闇の中で、頭を下げた。

「わしは、これで、ひきあげるが……、お前さんは、ここで、夜あかしをしなさるかね？」
「しかたがあるめえ」
「夜あかししたら、明日の夜までは、動けねえが、いいかね？」
「昼間、抜け出るのは、危険かね？」
「盗っ人の常識さ。陽があるうちは、寝ているのがね」
次郎吉は、そう云ってから、かたわらをはなれた。
物音をたてずに、闇の中を去るわざは、どぶに、いまさらながら、首を振らせた。

四

廊下に、衣ずれの音がしたのは、それから小半刻すぎてからであった。
娘の居間の上に、じっとうずくまっていたどぶは、柄にもなく、胸をはずませた。
障子が、開かれた。
——おっ！
入って来た娘を、一瞥したとたん、どぶは、思わず、胸のうちで、叫んだ。
——こりゃ、天女だ！
こんな臈たけた、美しい女人を、どぶは、まだ見たことがなかった。
吉原あたりにも、どぶなどの手がとどかぬ高嶺の花の遊女は、いる。眺めただけで、むらむらとなって来るような色香の化身のような、みがきあげた仇姿である。
どぶは、そういう美女しか、知らなかった。美女とは、そういうものだ、と思っていた。

あるいは、たとえば、左門の屋敷の小間使いをしている小夜のような、ういういしい娘を、どぶは、あこがれていた。小夜のような娘を、一度抱くのが、どぶの夢だった。
ところが——。
いま、おのが居間に入って来た盲目の武家娘を、見下した瞬間、どぶは、女の美しさというものに対する観念を、一変させなければならなかった。
吉原の一流の遊女は、たしかに男心をそそるあでやかさは、あったが、清浄さとは程遠かった。小夜のようなういういしい生娘は、清純さを持っていたが、気品は匂うてはいなかった。
この盲目の武家娘は、清浄さと気品をかねそなえていた。のみならず、その美しさには、妖しいまでに、男心をまどわせる香をたたえている。
——どういうんだ、これア？
どぶは、生唾をのみ込んで、自分に問うた。
——こんな美しい生きものが、この世には、いやがったのか！
じっと見下しているうちに、どぶは、茫然と、われを忘れそうになった。
盲目ではあるが、わが居間に入ると、その動作にためらいはなく、娘は、茶道具に寄った。
ひとり、しずかに、点前をはじめたのである。
心をしずめるためであろう。
炭火を持参した年配の女中が、対手であった。
おそらく、娘に、幼い頃からつかえているのであろう女中は、その心を万事心得ていて、世話をしているようであった。

点前がおわった時、女中は、
「もう、お一人で、外出なさいますことは、お止しあそばしませ」
と、云った。
「早瀬には、心配をかけました」
娘は、すなおに、あやまった。
早瀬と呼ばれた女中は、真剣な面持で、
「お嬢様！」
と、見つめて、
「なにか、お悩みがございますれば、この早瀬をお使い下さいませ」

五

盲目の娘——雪は、しばらく、こたえなかった。
やがて、
「やすみます」
と、告げた。
「はい」
早瀬という女中は、雪の手をひいて、次の間に入った。
当然、どぶも、移動した。
早瀬に手つだわせて、白い寝召にきかえる光景を、どぶは、息をのんで、見下した。

雪が、肌襦袢と二布のみの姿になった瞬間など、どぶは、思わず、ぶるるっと胴ぶるいしたことだ。
まず、普通の女なら、そういう姿になると、あまり色っぽいものではないが、この武家娘の場合は、例外であった。
肌襦袢も二布も、しっとりと、肢体にまつわりついて、夜の明りに、なよやかな曲線を浮きあげ、妖しいまでに女の美しさを示したのである。
——毎夜、こういう光景を見せつけられていると、おれも、気が狂うかも知れねえ。
どぶは、抑制のきかなくなる自分の欲情を、おそれた。
「おやすみなさいませ」
早瀬は、挨拶をのこして、去って行った。
雪は、そのまま、すぐには、牀に身を横たえなかった。
しばらく、牀の上に、正座して、何事かを思いふけっている様子であった。
どういう姿勢を保とうと、ともかく、美しすぎるのだ。
どぶは、見まもっているうちに、どうにも我慢しきれぬ衝動で、歯をくいしばった。
股間が起した変化は、痛みをともなうばかりであった。
——まず、こいつを、しまつしなけりゃ、どうにもならねえ。
どぶは、片手をおろして、おのが物を、ぎゅっと、つかみしめた。
と——。
雪が、すらりと、起った。

——おっ！

どぶは、雪がこれから何をしようとするのか——それに、この男独特のカンをひらめかした。

雪は、闇の廊下へ、出た。

天井裏から尾けるどぶは、全神経を耳に集めて、その衣ずれの音に従って、身を移すことになった。

衣ずれの音は、長い廊下を、忍びやかに、動いて行く。

——どこへ行くのだろう？

兄の部屋、父の座敷牢の前も、過ぎていく。

——いけねえ！

どぶは、狼狽した。

天井裏が、それで、おわったのである。

雪は、母屋をぬけ出て行くのである。

——どうしよう？

どぶは、下へ降りることを考えた。しかし、間に合いそうもなかった。

六

——くそ！

どぶは、そこに、うずくまって、待つことにした。

ふたたび、衣ずれの音が、廊下からつたわって来るまで、動かぬことにした。

——それにしても、なんてえ美人なんだろう。ひとつ、内裏雛のように、左門の旦那のそばへ、ならべて、夫婦にしてみてえ。

同じ闇の世界に佇む男女である。

どぶは、心から、そう思った。

そこで待っている時間は、短かった。

衣ずれの音をきいて、どぶは、緊張した。

雪は、しずかに廊下をもどって行く。

どぶは、その歩みにつれて、天井裏を移動した。

いつの間にか、盲目の娘に対してだけ、心を奪われて、屋敷内の他の怪しい動きをさぐることを、どぶは、忘れていた。

雪は、寝室へもどった。

どぶにとって、さいわいだったのは、行燈が、燈心を切って細められたまま、その仄かなあかりをひろげていることであった。

そっとのぞき下したとたん、どぶは、思わず、

——うむ！

と、胸のうちで、うなった。

雪の胸には、小刀が、抱かれていたのである。

——あれが大盗正宗か！

雪の振舞いに、直感を働かせたのは、正しかったのだ。

——あの娘が、宝刀を守る。そいつを、こっちが、天井裏から、守る。

どぶは、闇の中で、にやりとした。

——こうなりゃ、二十日が二月でも、忍び甲斐があるぜ。

雪は、牀の上に坐ると、小刀を膝へ置いた。

どこからはこんで来たのか知らぬが、雪は、自分で、この献上刀を、守護する決意をした模様である。

ずいぶん、長いあいだ、雪は、そうやって、身じろぎもせずに、坐りつづけていた。

暗黒の中で、この美しい娘が、いったい、なにを想っているのか——どぶならずとも、興味をひくことだった。

ようやく——。

雪が、身を横たえるのを見とどけて、どぶは、そこをはなれた。

すべての部屋を、のぞいておかねばならぬことに、ようやく、気づいたのである。

しかし、天井裏を動きまわりながら、どぶのまぶたの裏には、雪の寐顔が、こびりついて、どうしても、はなれようとはしなかった。

八千石ともなれば、部屋数は、多い。

そのひろさに比べて、使用人の数は、すくないようであった。

空部屋ばかりが、つづいていた。

どぶは、そのうち、面倒くさくなった。

——今夜ぐらいは、こっちも、ねむらせてもらうことにするか。

七

その部屋は、別棟の離れにあった。

どぶが、雪の振舞いを尾けまわしている時、二人の男が、その部屋で、対座していた。

一人は、用人の佐倉織部であった。

もう一人は、浪人ていの、三十前後の男で眼光が鋭かった。二年あまり前から食客になっている、須貝又十郎という兵法者であった。その無想流の腕の冴えは、西国一円で、かくれもない、という。

「……つまり、八千石乗っ取りか」

須貝又十郎は、長い対座の挙句、薄ら笑いながら、云った。

「乗っ取り、と申しては、はばかりがござるが。……」

「結果は、そうなろう」

「たしかに、そうなり申すが——」

佐倉は、当惑の面持で、うなずいた。

佐倉が、須貝又十郎に打明けたのは、次のような話であった。

どうやら、今日まで、当主が狂人、嫡子が白痴であるにも拘らず、公儀から、廃家にされずに、見のがされて来たのは、老中水野出羽守に、賄賂を欠かさなかったおかげである。しかし、このたび、将軍家が代るに当って、幕閣の権勢は水野越前守の手に移る。越前守は、賄賂のきかぬ老中である。

近藤家としては、このままでは、改易をまぬがれぬ。早急に、嫡男市之助を廃して、継ぐべき者を、他家より迎えなければならぬ。

ここに、考えられるのは、近藤家の親戚にあたる旗本から、迎えるか、それとも、当主右京亮に最も血の近い者を迎えるか——いずれかである。

実は、右京亮には、かくし子があった。ただ、その生母が、深川の岡場所で働いていた、とうてい、世間にみとめられない素姓の女であったことである。

その子は、今年十四歳になる。さる貧しい御家人の養子にもらわれていた。近藤家から、多額の養育費が渡されたことは、勿論であった。

その御家人の家から、近藤家へ、嗣子として返そう、という申し出があったのは、五年ばかり前であった。

近藤家では、受けつけなかったが、最近になって、再び申し入れがあった。

実子であるからには、このことを考慮する余地もあった。

ただ、佐倉が、おそれているのは、御家人の家に、入智慧をする者がいるに相違ない、ということであった。

その少年を嗣子として引き取ることによって、近藤家が、乗っ取られる危険を、おぼえずにはいられなかった。

佐倉としては、親戚の旗本大身から、嗣子を迎えたい希望の方が、つよかった。

思案にあまって、佐倉は、須貝又十郎に、相談したのである。

しかし——。

この須貝又十郎という男も、佐倉には、油断のならぬ男に、思えるのだった。

八

「お主は、当家へ、れっきとした素姓の子弟を迎えたいのであろうが、怨霊屋敷と称ばれるこの家へ、はたして、嗣子としてやって来る者が、いるかな?」

須貝又十郎は、薄ら笑いながら云った。

「……」

佐倉は、顔を伏せた。

云われるまでもなく、佐倉の不安は、そこにあった。

たしかに、部屋住みの、養子に行くよりほかに、将来に希望のない旗本の次男、三男にとって、八千石は、魅力に相違ない。

しかし、狂人の当主と白痴の嫡男を、背負わされるのだ。なにかのおそろしいのろいをかけられたような家を継げば、おのれにも、意外な災厄がかかって来るかも知れぬのだ。

それでもなお、八千石欲しさに、養子になろうとする者は、いやしい根性の持主ではあるまいか。

いや、たしかに、そうにちがいない。

そういういやしい根性の持主に、近藤家を渡すよりも、いっそ、当主のかくし子を迎えた方が、まだしも、なぐさめになろう。

「つまりだ、雪さんに惚れて、怨霊などものともせぬ、という若者が、現れれば、これは、話が

別だな」

須貝又十郎は、云った。

「めくらではあっても、あれほどの美貌は、そこいらに、ざらに見受けられはせぬ。いや、もしかすれば、日本一の美しさとも申せる。……旗本のあいだでは、噂は高いが、まだ、雪さんの美貌を見た者は、ごく限られて居る。若い連中では、ほとんど、見た者は居るまい。……佐倉、どうだ、ひとつ、雪さんをつれて、旗本屋敷を、片はしから、歴訪してみては——。聟取りの示威運動というやつだ」

「冗談を申される」

「冗談ではない。……そのうち、雪さんのためなら、生命もいらぬ、という若者が現れるかも知れぬぞ」

「まこと、そのような御仁が、入聟になって下されば……」

「そうさ。そうなれば、近藤家安堵、お主も一息つくというものだ」

「お嬢様なら、会う御仁すべてが、魂をとばして、魅入られましょうが——」

佐倉も、ふっと、又十郎のすすめに乗る気持に傾いた。

「雪さんに惚れぬ男がいたら、それは、よほどの朴念仁野郎だ。実は、おれも、惚れている」

「え？」

「いや、ただ、惚れているだけさ。居候の分は、心得て居る」

又十郎は、笑った。

しかし、その笑いは、急に、ぴたりと止められた。

又十郎の視線が、鋭く、天井へ投げられたのである。

佐倉は、いぶかって、又十郎の視線を、追った。

又十郎は、やおら、すっと立ち上った。

九

立ち上ったとたん、又十郎は、おそるべき迅業を、発揮した。

なげしの手槍をつかむが、はやいか、天井の一箇処を、つらぬいた。

ひき抜く。突く。

ひき抜く。突く。

またたく間に、六箇処も、天井板へ孔をあけた。

それから、舌打ちして、手槍を、なげしへもどした。

「く、曲者が、居りましたか？」

佐倉は、血相を変えて、問うた。

「ただの盗っ人ではないようだ。おれの突きを、すべて、かわして、逃げた」

「そ、それは……」

「よほどの手練の者だ。盗みとは別のこんたんがあって、忍び込んで来たに相違ない。……佐倉、そのかくし子を養子にしている御家人は、どんな奴だ？」

「小日向刑部、と申して、もう五十に手のとどく、大層な飲んだくれと、きき及んで居ります」

「あまり評判のよくない奴なのだな」

「左様――、借金がつもりつもって、妻女が素姓をかくして、料亭の仲居頭になっているという噂でござる」

「では――もしかすれば、小日向刑部が、やとった曲者かも知れぬ」

「なんの、こんたんがあって、忍び込ませたのでござろうか！」

「そうだな。……まず、考えられるのは、大盗正宗を盗むことだ」

「……」

佐倉は、又十郎から云われるまでもなく、すでに、そうではあるまいか、と推理していた。わざと問うてみて、又十郎も自分と同じ考えをするのを、たしかめたのである。

佐倉が、町小路左門に、大盗正宗の守護がたを、依頼したのは、実は、小日向刑部はじめ、近藤家乗っ取りを策す者たちを、警戒しなければならぬ、と考えたからであった。

大盗正宗を盗み取って、それを種にして、脅しかけて来て、無理矢理に、かくし子を押しつけて跡目相続させる。そういう陰謀を、佐倉は、予測したのである。

「佐倉、大盗正宗は、安全な場所に、置かれてあるのだろうな？」

又十郎は、たずねた。

「もとよりのこと」

その置き場所は、雪とこの自分しか知らぬ。又十郎に知らせることも、用心しているのであった。

「あの手練の者ならば、置き場所を、かぎあてるかも知れぬ」

又十郎は、云った。

「……」

佐倉は、返辞をしなかった。

――あるいは、天井裏にいたのは、町小路左門殿から遣されて来た者かも知れぬ。

佐倉の心には、その考えも、わいていたのである。

――いずれにしても、あと二十日、必死の守護をしなければならぬ！

異変

一

次の日の黄昏どき――。

食客、須貝又十郎が、ふらりと、雪を、その居間に、おとずれた。

「おじゃまつかまつる」

娘の居間に入る、礼儀として、障子を二枚あけはなっておいて、又十郎は、座についた。

「卒爾なお願いをいたすが、お耳にとめられたい」

「なんでありましょうか？」

「旗本の次三男衆に、その美しいおすがたを見せる機会を、お持ちなさるまいか？」

「……？」

雪は、わずかに、首をかしげてみせた。

「食客のぶんざいで、さし出たことを申す、とお怒りかも存ぜぬが、近藤家の存亡が、貴女の肩にかかっている以上、これは、多くの人の意見を代表するものとして、おききねがいたい。……貴女は、大盗正宗を献上するのを機会に、聟養子を、お迎えなさらねばならぬ、と存ずる」

「……」

「このことは、それがしが、おすすめするまでもなく、貴女ご自身が、すでに胸に置いて居られるか、と存じまする。……ただ、貴女は、怨霊屋敷と称ばれる家になど、まともな聟養子が来てくれるはずもない、とあきらめが先立って居られるのかも存ぜぬ。……貴女は、不幸にして、ご自分の顔を、鏡の中で、ごらんになったことがない。貴女は、世にもたぐいまれな美貌をお持ちなのだ。いかなる男の心をも、溶かす魅力を、そなえて居られる。貴女を眺めた旗本の次三男衆は、こぞって、聟養子たらんと、のぞむに相違ござるまい。これは、確信をもって、申し上げられる」

「……」

「近藤家を存続させるためにも、また、貴女ご自身の幸せのためにも——貴女は、ひろく、その美しいお顔を、披露される必要がある」

「……」

「いまひとつ、おつたえすれば、お父上のかくし子と称する今年十四歳の少年が、当家の嗣子たらんと希望している事実が、ござる。しかし、その少年の母親は、深川岡場所で、夜毎、無数の男と枕を交したいやしい女であり、はたして、お父上の実子か否か、疑わしい。とうてい、正式に迎える子では、あり申さぬ。このこともまた考慮されて、貴女は、決心なさらねば、と存ずる」

「ご厚意かたじけなく存じます」

雪は、頭を下げた。

「ご承知下さるか？」

「数日、考えてみとう存じます」

「お考えの挙句、拒まれるに於ては、近藤家は、滅びること必至でござるぞ」

「……」

「近藤家が、当代をもって滅びてもよいのであれば、拒まれるがよろしかろうが……、貴女が、よもや、羞恥のために、自家を滅すとは、考えられぬ。……では、数日お待ち申す」

又十郎は、一人でしゃべっておいて、座を立った。

二

雪は、又十郎が去っても、同じ姿勢をくずさなかった。

うつ向いて、じっと、彫像のように、動かなかった。

やがて、老女の早瀬が、食膳をはこんで来た。

「どうあそばしました？」

早瀬は、けげんな視線を、雪の顔へあてた。

「お顔色がすぐれませぬが、お加減でも？」

「いえ——」

雪は、かぶりを振った。しかし、箸をとりあげたものの、また、膳へもどした。
「やはり、お加減が？」
早瀬は、はやく牀に就くようにすすめた。
雪は、すなおに、したがった。
しかし——。
早瀬が去ると、雪は、掛具をあげて、しずかに、起きた。
天井裏には、どぶがいた。
ほの白い素足が、畳をふむのを、見下して、どぶは、二度も三度も、生唾をのみ込んだ。
——畳になりてえ！
心から、そう思ったのである。
あの美しい小さな素足で、胸やら腹やら、いや、顔でもかまわぬ、じわっとふみつけられたら、どんなに、気持がいいだろう。
どぶは、べつに、自分を変態とは思っていなかった。
どんな男でも、あの素足で、ふまれたら、死んでもいいほどの快感をおぼえるに相違ない。どぶは、そう思わずにはいられなかった。
雪は、手さぐりで、居間の厨子棚に寄ると、例の大盗正宗を、とり出した。
そして、それを胸へかかえると、次の間へもどった。
牀の上に坐って、宝刀を、膝に置く。
それから、長いあいだ、うつ向いて、じっと動かぬ。

この振舞いは、前夜も、その前の夜も、同じであった。
——いってえ、なにを、考えているんだろうな？
どぶには、見当もつかなかった。
昨日の昼、町小路屋敷へ、報告がてら、立寄ると、左門から、雪の訪問を受けた、と教えられた。
「あの娘は、他人の守護は無用である、と申しに来た」
左門は、そう云って、なぜか、冷たい微笑をうかべた。
「わざわざことわりに参ったことに、興味をおぼえる。……あの娘が、刀を一人で守ろうとしているのであれば、お前も、見張り甲斐があろう」
「目に毒でしてね、寐召姿など眺め下していると、むらむらっとなって、いつ、てめえが狼に化けそうになるか——その方が、心配でなりませんや」
どぶは、正直に、告げたものだった。

三

左門は、どぶの気持などは、一向に斟酌せぬ冷やかさで、
「これは、わしの予感だが、お前が、目をはなさずにいれば、必ず、なにか、異変が起るに相違ない」
と、云った。
「異変——ってえと、どんな？」

「そこまでは、わしも、予想がつかぬ。しかし、お前を狼狽させるほどの異変であろうことは、まず、まちがいはないようだ」

「曲者が十人も押し入って来るような異変じゃ、あっしは、手も足も出せません。まあ、むこうにまわして大立廻りをやらかすには、せいぜい、四人てえところでござんすかね」

「十人が二十人でも、お前は、ふせがねばなるまい」

「生命はひとつしか、ございませんよ」

「生命をすててもいいほどの美女ではないのか、雪という娘は――」

そう云われては、どぶも、一言もなかった。

――さて、こうやって、天井裏から、眺め下している夜が、何日つづくかだ。

どぶは、自分に、つぶやいた。

――十日も眺め下していると、もう、てめえ自身の欲情に制止はつかなくなるぜ。生命をすててもかまわねえ、と思うのは、その時だ。町小路左門ともあろう御仁が、このどぶの肝心のところを、ご存じねえのだ。

たしかに、どぶは、ものの三日も、女の肌に接しないと、いらいらして、無性やたらに怒りっぽくなって来るのであった。

女好きの男たちに、きいてみても、自分ほど極端なのは、いなかった。どぶは、いつの間にか、おのれの体質は、特異に生れついているのだ、と思い込んでいた。

十四の折に、四十すぎた下女にとびかかって、男になったどぶであった。

と――突然。

隙間風が、入ったのでもないのに、行燈のあかりが、急に、小さくなり、ふっと、消えた。

一瞬。

どぶの脳裡を、不吉な予感が、走った。

予感は、的中した。

ものの十もかぞえぬうちに、鋭い悲鳴がほとばしった。

同時に、居間の丸窓が、蹴破られるような烈しい音をたてた。

――いけねえ!

天井裏に在るもどかしさに、どぶは、かあっと全身の血をわきたてた。

闇に目は馴れているはずであったが、灯を失った直後の眼下の暗黒で、何が起ったかを、見とどける視力は、なかった。

どぶは、とっさに、庭へ向って、身をおどらせることにきめた。

何者かが、侵入して、雪に悲鳴をあげさせておいて、庭へ逃げ去ったに相違ないのだ。

これは、疑う余地はないようであった。

どぶは、鼠と化したような敏捷さで、天井裏を奔った。

四

しかし――。

月のある庭は、ただ、しいんと、ふかい静寂を保っているばかりであった。

どぶは、庭の一隅に、突っ立った自分を、ひどく間抜けなものに、感じた。

一方——。

老女の早瀬が、悲鳴をきりつけて、雪の居間へ駆けつけていた。

「ど、どうあそばしました？　お嬢様！　お嬢様っ！」

早瀬は、手さぐりで、行燈に寄ると、わななく手で、火打ちを打った。

闇を追いやって、赤いあかりがひろがった時、早瀬は、牀の上に、あられもない姿でうつ伏している雪を、見出した。

肩も下肢も、あらわにむき出されていた。

「お、お嬢様っ！」

早瀬が、馳せ寄って、抱き起そうとすると、雪は、はげしく、首を振った。

「く、く、曲者を！」

「お嬢様！　曲者は、もう、あの窓から、逃げて居ります」

「い、いえ……、刀を——」

「え？　刀を、どう、なさいました？」

「大盗正宗を、曲者が、わたくしの手から、奪って……」

「えっ！」

早瀬は、仰天した。

もう一人、愕然と色を失った者がいた。

駆けつけて来た用人の佐倉織部であった。

佐倉は、そのまま、廊下を奔って、須貝又十郎を、呼びたてた。

又十郎は、離れから、とび出して来た。

「どうした？」

「曲者を、追って下されっ！」

「曲者が、どうした？」

佐倉は、奔り寄ると、あえぎあえぎ、

「お嬢様から、大盗正宗を、奪って、遁走いたしたのだ」

と、告げた。

又十郎は、庭を見わたし、侵入者ならば、ひそむであろう場所へ見当をつけて、疾駆した。

佐倉は、はげしく、首を振って、

「こ、これは、内密に、せねばならぬ！　外にもらしては、ならぬ！　絶対に、内密に——」

と、自分に云いきかせた。

佐倉が、その寝室へひきかえして来た時には、雪は、もう身じまいを、ととのえて、牀の上に坐っていた。

「お嬢様！」

佐倉が、呼びかけると、雪は、うなだれた。

「織部、許して下され。……わたくしが、あさはかにも、刀を守ろうとしたのが、まちがって居りました」

と、詫びた。

「こ、このことは、内密に、いたさねばなりませぬ」

佐倉は、自分に云いきかせた言葉を、ここでも、くりかえした。
「は、はい」
雪は、うなずいた。

五

「お嬢様、曲者は、どのような者であったか、おわかりではありませぬか？」
佐倉は、たずねた。
「たとえば、忍びの術を心得た者のようであったとか……、あるいは、忍び込みには馴れていない者であったとか――」
雪は、首をかしげて、じっと思いかえしている様子であったが、
「忍びには修練のできた者のようであった気がいたします。……わたくしは、忍び入られた気配も、おぼえませんでした」
と、云った。
盲目の敏感な神経にふれぬように、忍び入って来て、宝刀を奪い去ったとすれば、よほどの手練者に相違ない。
「小日向刑部めが、忍者をやとったか！」
佐倉は、吐き出した。
この時、廊下に、黒い影がうずくまるのに気づいて、佐倉は、はっと、頭をまわした。
「なんだ、その方は？」

「へい。……町小路左門様から命じられて、お刀の見張りに参った岡っ引でございます」
「ぬけぬけと、申すな！　お刀は、奪われたのだぞ！」
佐倉は、思わず、どなりつけた。
「見張りの役に、立たねえで、面目次第もございません。……弁解がましゅうございますが、あっしは、ここの天井裏に、いたのでございます」
「そ、それで、どうして、曲者が、忍び入って来たことに、気づかなかったのじゃ？　うつけが！」
「全く、申しわけない次第でございます。……風のような曲者だった、と申し上げられます。行燈のあかりが、消えた。お嬢様の悲鳴がきこえた。窓が破られた。その間が、せいぜい五つもかぞえぬほどの短さでございました」
「行燈のあかりを吹き消したのならば、当然、この居間へ踏み込んでいたのではないか。……その方、居睡りでも、いたして居ったのであろう」
「冗談じゃねえ。あっしは、あかずに、お嬢様の美しい寝顔を――」
と、云いかけて、あわてて、首を振ったどぶは、
「曲者は、あかりのあるところへ、踏み込んじゃ居りません。これは、はっきりと申し上げられます」
それは、その通りだ。
張りじまいの天井板は、一寸以上もずらして、隙間をつくってあり、どぶの目に、死角はなかったのだ。

「行燈のあかりが、都合よく、しぜんに、消えたものではあるまい。曲者が、消したのじゃ！」
「そりゃ、たしかに――。だが、どうやって、踏み込みもせずに、消しやがったのか、こいつは、謎でさ」
「たわけ！」
佐倉は、一喝した。
「首をひねっている場合ではあるまい。曲者を追わぬか！」

六

翌朝――。
どぶは、異変のおかげで、いまは、公然と、近藤邸内を、歩きまわる自由を、ゆるされた。
――どうも、合点がいかねえ。
宏大な敷地を、くまなく、かぎまわって、泉水のほとりへもどったどぶは、腕を組んで、首を振った。
いかに忍びの巧者でも、全く、その足跡をのこさぬ、というわけには、いかぬものである。のみならず、素人の目はごまかせるかも知れぬが、どぶのような男の鋭い目から、忍び独特の足跡を、見のがされることは、できぬ。
ところが、その忍びの足跡は、どこにも、全く、ついていなかったのである。
――こいつは、謎が多すぎる！
どぶは、目に見えぬほどのゆるやかさで流れている水面を、眺めながら、胸のうちで、つぶや

いた。
――まるで、夜風のような曲者野郎だ。いや、夜風なら、音をたてるが、音も気配もなく、忍び入って、行燈のあかりを消して、刀をぬすみやがった。
もう一度、首を振った。
その時――。
どぶは、ふと、泉水へかぶさるように組まれた石のわきのくさむらに、小さな浮子を、発見した。
なにげなくひろいあげてみて、
――鯉を釣る阿呆もねえだろうが……。
と、けげんに、眺めた。
――あの白痴の市之助が、釣るのだろうか？
そうとしか、考えられなかった。
「おい！」
不意に、背後から、声が、かかった。
どぶは、ふりかえって、そこに、須貝又十郎を見出した。
どぶは、まだ、この食客とは、顔を合せていなかった。
「なんだ、お前は？」
「へい。岡っ引でございます」
「岡っ引が、どうして、旗本屋敷へ、入り込んで居る？」

「ご用人にたのまれましてな。お刀を見張りに参りましたので――」
「大盗正宗は、昨夜、盗まれたぞ」
「あっしは、その時、お嬢様のお居間の天井裏に居りましたので、へい」
「なんだと？」
どぶは、険しい形相になった又十郎へ、にやっとしてみせて、
「旦那は、お出来なさる」
「なに？」
「旦那が突きあげなすった手槍で、あっしは、あやうく、片端になるところでござんした」
「あの曲者は、お前だったのか！」
「へい。天井裏をはいまわっているうちに、あの離れへも、おうかがいしちまった次第なんで――」
又十郎は、不快な面持になった。

七

「刀は、盗まれたのだ。もう、お前のような奴は、用はない。去れ！」
又十郎は、冷やかに、云った。
「そうはいかねえんで……。見張り役の落度でございますからね。さがし出さなけりゃ、面目ねえ」
「天井裏で、見張って居るさなかに、盗まれるような間抜けに、どうして、とりかえせるか！

出て行けと申したら、出て行け！」
どぶとしては、屋敷の隅々までさがして、徒労だったのだから、いつまでも、とどまっている必要もなかった。
「なんとか、さがし出して、持参いたします。それじゃ、ご免なすって――」
腰をかがめておいて、歩き出した。
刹那――。
抜きつけの凄じい一太刀が、背後から、襲って来た。
どぶは、叫びとともに、置石を蹴った。
全く予想もしない不意撃ちであったので、辛じて両断をまぬがれる業しかつかえなかった。
どぶは、もろに、水面へ、おのが五体をたたきつけた。
ひともぐりして、首をのぞかせたどぶは、ぶるっと水を振りはらって、
「冗談じゃねえ！」
「貴様、生かしては置けぬ！」
又十郎は、仕損じたおのれに腹を立てて、呶号した。
「斬られる理由は、ありませんぜ」
「ある！　貴様が、大盗正宗が盗み去られたことを口外せぬ、という保証は、どこにもない！」
「てめえの落度を、てめえの口からばらすばかはいねえ」
「用人から依頼されただけの役目だ。責任を負う、という料簡が、貴様にあるかどうか、疑わしい」

「ずいぶん疑いぶかいご浪人だ」
どぶは、そう云いながら、水中に立ちあがった。泉水は、意外に浅く、腰までしかなかった。
「貴様！　貴様自身が、そもそも怪しい奴だ。ただの岡っ引が、おれの槍や刀を、こうも見事にかわせるものではない。大盗正宗を、盗んだのは、実は、貴様かも知れぬぞ！」
又十郎は、泉水へふみ込んで来ようとした。
そこへ――。
佐倉織部が、あたふたと、駆けつけて来た。
「須貝殿！　その男を討つのは、無用になされい！」
どぶが、与力町小路左門から、遣されて来た男であることを、告げて、佐倉は、又十郎に、白刃を腰に納めるように、うながした。
又十郎は、町小路左門という盲目の旗本のことは、きき知っていた。
「このこと口外させぬように、しかと、申し渡しておかねばなるまい」
又十郎は、佐倉へ、念を押しておいて、去った。
どぶは、文字通りどぶ鼠になって上って来た。

八

「あの長屋へ参れば、着換えの着物があるはずじゃ」
佐倉は、云いおいて、歩き出そうとした。
「ご用人さん――」

どぶは、呼びとめた。
「若殿様は、この泉水で、鯉釣りをなさいますかい？」
「なにをたわけなことを申す」
「へへ、それだけうかがっておけば、よろしいんで――」
どぶは、遠ざかりながら、
――浮子が曲者か。
と、つぶやいた。
つぶやいたとたん、脳裡に、なにやら、ひらめくものをおぼえた。
その夜は、どぶは、長屋の小者部屋で寝た。
あとから思いかえせば、岡っ引としては、最もうかつな一夜をすごしたものであった。やはり、雪の居間の天井裏へ、忍ぶべきであったのだ。
宝刀を奪い去られたからには、雪の寝顔を眺め下してもしかたがない、と思ったのである。事実、どぶは、ひどい睡眠不足だったのである。
翌朝はやく、どぶは、近藤邸の裏門から、ぬけ出した。
ものの二町も行かぬうちに、背後から、ポンと肩をたたかれた。
ふりかえると、次郎吉が、にやにやしていた。
「なんだ、お前さんか。泥棒猫みてえに、足音を消して忍び寄りやがるから、びっくりするじゃねえか」
「のんびりしていなさるようだが、いいんですかい？」

「べつに、のんびりしているわけじゃねえが……」
「あわてなすっても、いいようだ」
「なんだと？」
「むこうの辻番を、のぞいてみなさるといい」
「なんだ！」
「行けば、判る」
「気を持たすねえ」
その辻へ、どぶは、いそいだ。
当時、武家地にあるのを辻番といい、町方にあるのを自身番といった。辻番は、大名旗本屋敷持ちで、町方の同心や岡っ引は、無関係であった。
辻番の役人は、武家屋敷を守るために詰めて居り、十手などは持っていなかった。町奉行所支配ではなかったのである。
したがって、どぶは、自身番へ立寄るあんばいには、いかなかった。
突棒、差股、袖がらみなどが、かざってある番所の前へ来ると、六尺棒を小脇にかかえた番人に、ぺこりと頭を下げて、
「へい、お早ようございます」
と、挨拶して、
「ちょっと、なかをのぞかせて下さるわけには、参りますまいか」
と、願った。

「死人は、お前の知りあいか？」
番人が、問うた。
——そうか、次郎吉が見ろと云ったのは、死人なのか。

九

「へい。……そのう、ちょっと、心あたりがございまして——」
どぶは、云った。
「あらためるがよかろう」
「有難う存じます」
土間に入って、こもをかぶせてある死人に、どぶは、近寄った。
板の間には、若い役人がいて、
「岡っ引——。見ても、わからんぞ」
と、云った。
「ごめんなすって」
どぶは、こもをあげてみた。
——これは！
唖然となった。死人には、首がなかったのである。
成程、役人が、見てもわからぬ、と云ったはずである。
「旦那、こいつを、川から、ひろいあげなすったので？」

「うむ。むこうの水門の前に、ふわふわ浮いて居った」
役人の指さした方角の水門は、近藤邸のものである。
——辻斬りをくらった野郎じゃねえ。
どぶは、死体を、ひっくりかえした。
その腰に、鳶口に似た道具をさしているのを、みとめて、どぶは、
——うなぎ捕りか。
と、さとった。
——この川に、うなぎはいねえはずだ。
加賀屋敷から、水戸屋敷へ落ちる水である。よごさぬように、配慮されている。澄んで底までが見えるような流れに、うなぎなどが棲む余地はない。
また、たとえ、うなぎやその他の魚がいたとしても、武家水を、町人がよごすことは、厳しく禁じられている。
うなぎ捕りなどが、こっそりもぐり込む流れではなかったのである。
どぶは、その白くふやけた手に、細引の切れはしが握りしめられているのを、じっと見まもって、
——どうやら、合点がいったぞ！
と、自分にうなずいた。
役人に礼をのべて、辻番を出たどぶは、水門に向って、いそいだ。
と——。

「どぶの親分、首は、流れて、下にあるぜ」
その声が、かかった。
次郎吉であった。待っていたのである。
「どこに——？」
「隣の屋敷へ流れ込む際に、ひっかかっている」
どぶは、次郎吉に指さされて、そこへ、近づいて行った。
石垣に沿うて、数十本の杭がならんでいたが、そのなかほどに、藻のように、頭髪が、ゆらゆらと、ゆれていた。
一瞥しただけでは、まさか、そこに人間の首が、ひっかかっているとは、わからなかったが、じっと見据えると、たしかに、胴をはなれたやつであった。
どぶは、裾をまくりあげると、じゃぶじゃぶと、二間幅の流れへ入って行った。

十

杭にからんだ頭髪をほどいて、首を持ちあげたどぶは、顔をしかめて、
「重いな」
と、云った。
往還に立っていた次郎吉は、辻番の番人や役人が、いそいで、近づいて来るのをみとめて、
「じゃ、あとで——」
と、歩き出した。

「待ってくれ、おれも、行く」
どぶとしては、死顔を見とどけておけば、もうここに用はなかった。
岸へあがったどぶは、番人に、首を渡しておいて、次郎吉と、肩をならべた。
「やっぱり、おめえさんは、辻番の役人に顔を見られるのを、きらうところをみると、もっぱら武家屋敷だけを狙う盗っ人らしいな」
次郎吉は、しかし、それにこたえる代りに、
「わしは、あのうなぎ捕りを知っているよ」
と、云った。
「教えてくれ」
「佐兵衛という男で、もとは、渡り奉公の折助だった。近頃は、水道橋ぎわに、蒲焼きの店を出していた。店といっても、小屋がけに毛のはえたようなものだが……。わしは、ちょくちょく、寄っていた。佐兵衛は、器用な男で、焼きかたが上手だった」
「……」
次郎吉は、じっと前方を見据えて、口をへの字にむすんでいるどぶを、横目で見た。
「思案にあまった、という様子だね、親分」
「親分は、止してくれ、と云ってるじゃねえか」
「お前さんが見張っていたものが、盗まれたのかね？」
「そうだ、まんまとやられた」
どぶは、袂から、浮子をつまみ出した。

「こいつを、泉水に浮かせておいて、水門口まで、細引をひいておいた。曲者野郎は、あれを盗んで、泉水へ走り寄って、浮子を切って、細引へ、あれを結びつけた。水門口で待ちかまえていた奴が、細引をたぐって、あれを取った。つまり、曲者野郎は、二人いた。水門口にいた曲者が、あの佐兵衛だ。邸内から抜け出した曲者は、佐兵衛に近づくと、いきなり、首を刎ねとばしておいて、あれを持って、逃げやがった……そういうことになるんだな」
「あれ、とは？」
「……」
「刀じゃないのかね。大盗正宗――」
「あてやがった」
「近藤家が、宝刀を、新しい公方様に献上する、ということぐらい、わしの耳にも入っているさ」
次郎吉は、どうやら、どぶをともなって、近藤邸へ忍び入った時から、どぶがなにを見つけようとしているのか、ちゃんとさとっていたに相違ない。
「それにしても、妙だね」
次郎吉は、言った。
「泉水に沈めて、盗み出すような手間を、どうしてかけたのか」

その行方

一

次郎吉の疑う通り、曲者は、刀をつかんで、そのまま、屋敷を抜け出して行けばよかったはずである。それを、わざわざ、泉水に沈めて、細引をたぐって、水門口へ、ひき出したのは、どういうこんたんであったか。

どぶは、しかし、いま、その疑惑に、頭を使っているいとまはなかった。

首を刎ねられた佐兵衛というなぎ捕りが、曲者の一人であることは、まちがいないのだ。

まず、佐兵衛の身辺を洗ってみなければならぬ。

「成程、これアうすぎたねえや」

縄のれんが、半分ばかりちぎれた店の前に立って、どぶは、首を振った。

『うなぎ売ります』という木札がぶらさがっているので、蒲焼き屋とわかる。万川魚の掛行燈もない。

のれんをくぐって、入ってみると、腰掛け樽が三つばかり置いてあるだけで、焼き台に火もない。勝手をのぞき込んでみると、鰻船は、空であった。

「おい、誰か、いねえか？」

呼んでみたが、しいんとして、人の気配はなかった。

――佐兵衛という奴は、独身者か。

次郎吉に、それをききもらしていた。

もう一度、大声をかけてみて、どぶは、舌打ちして、おもてへ出た。

とたんに、凄じい、白刃の一撃が、まっ向から来た。

「おっ！」

どぶは、のけぞって、背中を烈しく障子へぶちつけつつ、辛じて、すれすれに、切先を鼻さきに流した。

「なんでえ！」

土間へ、退ったどぶは、第二撃を警戒しながら、ひややかに、刺客を観察した。

覆面をした、着流しの浪人ていの男であった。

不意撃ちを失敗した狼狽をかくしきれず、突きの構えをもって、ふみ込んで来ようとした。

「てめえか、刀を盗みやがったのは――」

どぶは、じりじりと、壁ぎわへ寄りながら、にやりとした。

「ええい！」

懸声もろとも、電光の突きが来た。

どぶは、余裕をもって、体をひらくと、閃光を流しざま、手刀を、刺客の手くびへくれた。

「うっ！」

たたらを踏むやつを、足がらみにして、のめらせておいて、どぶは、その背中へのりかかった。

「へへ……、そこいらの岡っ引とは、チトちがうぜ。じたばたせずに、往生際を、きれいにしてもらおう」

片腕をねじあげておいて、その顔を包んだ黒い布を、はぎとった。

意外に、年配であった。

無精髭をはやして、いかにもみすぼらしい面相である。

「刺客面じゃねえや」

二

「さあ、きこうじゃねえか。どうして、おれを斬ろうとしたかだ」

後手にしばりあげた刺客を、奥の三畳間へひき据えて、どぶは、ひややかに見据えた。

刺客は、むすっと、口をつぐんで、こたえぬ。

「そいじゃ、こっちから、おめえをやとった奴を、云ってやろうか。いま、近藤家乗っ取りを企てている御家人がいる。小日向刑部という奴だ。おめえは、その小日向刑部に、やとわれて、大盗正宗を盗み出し、仲間の佐兵衛を殺し、ついでに、かぎまわる岡っ引も、片づけようとしやがった。そうだろう?」

「……」

どぶは、こっちの話をききながら、刺客の顔に、はじめて耳にするけげんな表情がうかぶのを、みとめた。

——ちがうな!

どぶは、看てとりつつも、

「どうだ、図星だろう」

と云った。

「看破られ申した」

刺客は、こたえた。

「ふざけるな!」

どぶは、怒鳴りつけた。

「てめえみてえな尾羽打ち枯らした痩浪人を、刺客にやとうほど、ヤキがまわっている直参が、どこにいる。刀を盗んだのも、てめえじゃねえ。……ありていに、泥を吐かねえと、その腕を一本、へし折るか、片目を突きつぶすぞ!」

どぶは、きめつけた。

「許されい!」

浪人者は、卑屈に、頭を下げた。

「だから、泥を吐け、と云ってるんだ」

「それがしには、子供が六人、居り申す」

「それが、どうした?」

「佐兵衛殿から、先月、三両の金子をめぐまれ、おかげで、どうやら、生きのびることができ申した。……昨日、佐兵衛殿より、ある危険な仕事をしなければならなくなったゆえ、手助けをたのむ、と依頼され、引受け申した」

「ふむ、それで？」
「この店へ、亥刻（午後十時）頃に来て、待っていてくれるように、と云われて、待って居り申したが……、ついに、佐兵衛殿は、帰って参らず――夜明かしつかまつった」
「朝になって、岡っ引がやって来て、さぐる恰好をしたので、こやつが佐兵衛の敵かと思って、斬りつけた、というわけか」
「その通りでござる。……佐兵衛殿は、もとは、武家奉公をされた仁で、人格が成って居り申す。悪事を働くような人物ではござらぬ。それがしが、誓って申し上げられる」
その言葉に、嘘はないようであった。
「いまとなっては、善玉か悪玉か、しらべようはねえや」
「では、やはり佐兵衛殿は……」
「死んだよ、首を刎ねられてな」
どぶが、告げると、浪人者の顔からさらに一層血の気が引いた。

三

それから五日間、どぶは、江戸中を、足を擂り粉木にして、歩きまわった。
刀鍛冶、研師、刀屋、そして、刀の蒐集に熱中している町人を、片っぱしから、たずねまわったのである。
徒労であった。
「あアあ！」

どぶは、本所一つ目橋袂の小料理屋「ひさご」の二階で、手枕になると、
「参った、参った」
と、大声をあげた。
衝立でいくつかに仕切られた座敷には、もう客の影もなかった。
どうやら、どぶは、ここで、夜明しするつもりである。
どぶは、家を持たない男であった。
――どうでも、左門の旦那に、頭を下げなけりゃ、ならなくなったか。
どぶは、それをやりたくないばかりに、一人で、躍起になって、盗まれた宝刀を、さがしまわったのであった。
大盗正宗は自分の目の前で、盗まれたのである。おめおめと、左門の前へ出て、そう報告をできるものではなかった。
しかし、いかに、躍起になっても、手がかりさえもつかめなかった。
――しようがねえ。
どぶは、観念した。
――左門の旦那に、恥を打明けて、智慧をかりるよりほかはあるめえ。
そうつぶやいた折であった。
衝立を三つばかりへだてたむこうの席から、しぶいのどの端唄が、きこえて来た。
鶏の声、鐘の音さえ、身にしみて
いとどさびしき寐やの内

待つ身はつらいひじまくら
思わせぶりな、ほととぎす
どぶは、はね起きた。
衝立を蹴とばすようにして、近づくと、その席で、手酌で飲んでいたのは、次郎吉であった。
「おれを、こけにしやがるのか、盗っ人野郎！」
噛みつくようにどなるどぶを、次郎吉は、微笑で見上げて、
「おちつくことだ」
と、云った。
「これが、おちついていられるけえ！」
どぶは、むかいへ腰を下すと、
「天に翔けたか、地にもぐったか——刀は、消えちまって、皆目見当もつかねえ」
「そこで、智慧を貸すために、こうして、わしが来たのさ」
「なんだと？」
「お前さんは肝心のところを、看のがしたようだ」
「なにを、看のがした、というんだ？」
「首さ」
「首？」
「そうさ、佐兵衛の首さ」
「佐兵衛の首が、どうしたというんだ？」

「当節、あれほど、あざやかに一刀両断できる手練者は、ざらにはいない、ということさ」

四

どぶは、次郎吉の言葉をきいて、にわかに、目を光らせた。
「そうか！　そこに気がつかなかったとは、どぶ一代の不覚！」
ぴしゃっと、膝をたたいた。
「あの刎ねっぷりは、ただの腕前じゃねえ」
「そうさな。ひとつや二つの首を斬っただけでは、あれほど、見事に刎ねられるものじゃない」
「つまり——首を斬るのを、商売にしている男、というわけだ」
「まあ、そう見てまちがいはなさそうだ」
「首斬り袈裟右衛門！」
どぶは、立ち上った。
「親分、対手は、首斬り袈裟右衛門だ。まかりまちがえると、お前さんの首が、とぶことになるよ」
次郎吉は、忠告した。
「云われるまでもねえや。……しかし、そうと見当がついたからにゃ、腕を拱いているわけにいかねえ。行って来らあ」
どぶは、「ひさご」を、とび出した。
夜更けの街をいそぎながら、どぶは、次郎吉に指摘されるまで、そのことに気がつかなかった

自分のうかつを、

——間抜けめ！

と、ののしった。

燈台下暗し、というやつであった。

首斬り袈裟右衛門は、小伝馬町牢屋敷から、ひき出された死罪の者の首を刎ねるのを、一手にひき受けている男であった。

十年ばかり前までは、山田朝右衛門が、その役であった。首斬り朝右衛門の名は、日本中で知らぬ者はないくらいであった。その朝右衛門が、老齢になって、弟子の袈裟右衛門に、役をゆずったのである。

袈裟右衛門は、浅草奥山をうろついていた浮浪の孤児であった。それを、山田朝右衛門が、ひろって、据物斬りを仕込んで、自分の後継者にしたのである。

袈裟右衛門は、師匠以上の腕前であった。また、性格も冷酷で、まるで、首斬り役になるために生れて来た、という評判であった。

いったい、首斬り役というのは、奉行所の役人でもなければ、公儀の禄を食んでいる武士でもなかった。ただの浪人であった。町奉行所の火方盗賊改めの与力から、依頼を受けて、死罪人の首を斬るのであった。

浪人山田朝右衛門が、この役を依頼されるようになった由来は、はっきりとしていない。

首斬り役には、同心がいた。しかし、その同心は、決して、首を斬らずに、浪人山田朝右衛門に、その役を代行させた。

死体の検死は、御徒目付、与力、同心などが、牢屋役人とともに立合うのであるが、首斬り役を、その同心に代って、浪人が為しても、べつに誰も、なんとも云わないのであった。いつとない慣例になっていたからである。

首斬りは、刀の研代として、金子二分が、同心に与えられた。同心は、しかし、その二分を、朝右衛門には、渡さなかった。朝右衛門は、大名旗本大身から、新刀試しを依頼され、その礼金をもらっていたからである。

五

元禄の頃——。

御留守居与力を勤めていた旗本に、鵜飼十郎左衛門という人物がいた。据物斬りの達人であった。身長六尺二寸、力量二十人力と称された巨漢であった。

三十歳の時、公儀お火の番に召出されて、将軍家御道具おためしを申しつけられ、二十六振りの刀で、死罪人の生胴を斬った。

首を刎ねるのは、抱き首に落す、といって、のど皮一枚をのこして、斬るのが作法であった。そうすれば、首は、その膝へ落ちて、自ら抱くかたちになる。のど皮一枚をのこさなければ、刎ねられた首は、一間余も飛んでしまって、見ぐるしいのであった。

十郎左衛門は、二十六人の死罪人を、一人のこらず、抱き首に斬り落してみせたのである。

十郎左衛門の名は一躍とどろき、将軍家のみならず、諸大名からも、新刀試しの依頼が、ぞくぞくと来た。

十郎左衛門は、死罪人を、牢屋から、自邸へ、はこんで来て、庭で、生胴試しをやった、という。それでも、間に合わず、辻斬りもやった、とつたえられている。

三十歳からはじめて、六十歳で隠居した十郎左衛門は、三十年間に、千五百人を斬り、供養塔を巣鴨火之番町の自邸の庭と、伝通院開山堂のうしろに建てた、という。

この鵜飼十郎左衛門が、隠居するにあたって、後継者としてえらんだのが、山田朝右衛門という浪人者であった。

山田朝右衛門が、腕が立ったこともあろうが、旗本の中では、そのような陰惨な役目をひきうける者がいなかったに相違ない。

爾来、山田朝右衛門は、幾代にもわたって、新刀試しの役目を継いでいるうちに、死罪人の首斬り役を一手にひき受けるようになったのである。

鵜飼十郎左衛門は、いやしくも二百石取りの旗本であったので、牢屋へおもむくことはせず、死罪人を自邸へはこばせ、あくまで、将軍家お道具おためし役である格式を保った。しかし、浪人である山田朝右衛門は、そういう格式など保つ必要はなかった。したがって、いつの間にか、首斬り役になったのである。

山田家は、麹町平河町にあった。

山田家へ行って、金子二分を出すと、肺病の薬として、人ぎもをくれる、という噂があった。

山田家では、今日幾人死刑になる者がある、というと、牢屋敷へおもむく時、その数だけ燈明をあげた。ひとつ、首を刎ねると、その燈明がひとつ消える。二つ、首を刎ねると、燈明も二つ消える。家人は、燈明がぜんぶ消えるのを見て、今日のお役目はすんだ、と知った。

そういう怪談じみた話も、まことしやかに、市中につたわっていた。

いまは、朝右衛門は、大久保の方へ隠居――、その家には、弟子の袈裟右衛門がいる。

この袈裟右衛門は、冷酷非情な男で、新刀試しを、大名から依頼されると、死罪人ではあきたらず、辻斬りに出る、という評判があったのである。

六

さて――。

「ひさご」を出たどぶが、まっすぐに、麹町平河町の山田朝右衛門の家まで行って、

――待てよ！

と、思いかえして、踵をめぐらしたのは、そこは、岡っ引である自覚があった所以である。

――袈裟右衛門の行動を、洗ってから、乗り込んでも、おそくはねえ。

そう思いかえしたのであった。

大盗正宗は、袈裟右衛門の手にある、と見当はついたのである。

あせることはなかった。

袈裟右衛門が、うなぎ捕りの佐兵衛と共謀になり、近藤家へ忍び込んで、大盗正宗を盗んだ、と考えるのは、どうも、はやのみ込みのような気がしたどぶであった。

袈裟右衛門ほどの手練者ならば、いったん手にした宝刀を、わざわざ、泉水へ沈めて、水門口の佐兵衛へ、細引でたぐらせるはずはなさそうである。

雪の手から奪ったならば、そのまま、つかんで、屋敷の外へ、抜け出て行くのではあるまい

か。

——袈裟右衛門は、佐兵衛と共謀ではない。

どこかの大名か旗本に依頼された新刀試しに、辻斬りに出た。そして、あの往還を歩いているうちに、水門口から、細引で、刀をたぐり出した佐兵衛に、出会った。

袈裟右衛門は、こいつ恰好の獲物とばかり、一閃裡に、首をはねとばして、刀を奪った。

どうも、そう考えた方が、よさそうであった。

尤も——。

この推理も、断定はしかねる。袈裟右衛門が、偶然、そこを通りかかった、ということに、ひっかかる。

偶然ではなかったのではないか。袈裟右衛門は、佐兵衛が、その時刻、そこにいることを知って、近づいて行ったのではないか。

つまり、佐兵衛が、大盗正宗を手にするのを知っていて、やって来た。そして、首を刎ねて、奪った。

袈裟右衛門は、近藤家乗っ取りをたくらむ御家人小日向刑部の一味ではなかろうか。

——迷わせやがる！

どぶは、袈裟右衛門の昨日までの行動を洗うことにした。

どうやって、洗うか——そこは、どぶ独特の嗅覚にものいわせた。

二日後——。

どぶは、妙にはればれとした顔つきで、町小路左門邸を、おとずれた。

玄関さきを掃いている小間使いの小夜に、しのび寄って、

「ばあっ！」

と、おどかしておいて、

「へへ、やっぱり、小夜さんの方がいいや。滅法美人でも、妖気のただよっていやがるのは、しまつにおえねえ。ういういしいってえやつが、娘の宝だあ」

七

盲目の与力は、書院の縁側に坐って、朝陽の中に、ひっそりとひたっていた。

「お早うございます」

どぶが、挨拶しても、べつに、応えもせず、その姿勢を微動もさせなかった。

幾年つきあっても、どぶにとって、この氷のような態度は、苦手であった。

「お詫び申し上げなけりゃ、なりません」

膝をそろえると、どぶは、頭を下げた。

「大盗正宗が、盗まれたか」

左門は、云いあてた。

「へい」

どぶは、左門の推量の鋭さに、いまさらながら、おどろきつつ、その冷たい横顔を見やった。

「逐一申し上げます」

どぶは、次郎吉という男の手引きで、近藤家へ忍び込んだ時のことから、くわしく、報告し

た。

左門は、どぶの話が終るまで、相槌ひとつ、打たなかった。

「……というわけでございます。大盗正宗は、山田袈裟右衛門の手許にあることは、まちがいない、と見当をつけやした」

どぶは、そう告げて、左門の言葉を待った。

「うなぎ捕りの佐兵衛の首の斬り口のあざやかさを視て、袈裟右衛門の仕業と判断するのは、お前らしくもない。江戸には、辻斬りをやるさむらいは、二人や三人ではあるまい」

左門は、云った。

すると、どぶは、にやっとした。

「あっしも、一度は、そう思いました。ところが、袈裟右衛門の素姓を洗ってみますと、奴が下手人であることは、疑いないものとなりましたので、へい。……袈裟右衛門は、浅草かいわいをうろついていた天涯孤独の浮浪児であったのを、山田朝右衛門に、ひろわれた、といわれて居りますが、実は、餓鬼の頃に、近藤右京亮屋敷の小者小屋で、育って居ります」

「ふむ！」

「袈裟右衛門の母親は、近藤の長男の、白痴の市之助の乳母だったわけなんで——。つまり、市之助と袈裟右衛門は、乳兄弟でござんした。母親が、十五か六の頃、亡くなったので、袈裟右衛門は、近藤屋敷をとび出して、なにやら、一人で食っていたのを、朝右衛門にひろわれて、首斬りの後継ぎにされたのでさ。……袈裟右衛門にとっては、近藤家は、恩のある主家ってえことになります。……だから、あっしゃ、佐兵衛の首を刎ねたのは、奴の仕業にちげえねえ、と確信

持ったのでございます」

「袈裟右衛門が、近頃でも、近藤家に出入している、という事実は、しらべたか？」

「そのことなんで——」

どぶは、首をひねりながら、

「どうかぎまわってみても、そればかりは、つきとめられず、じれってえ思いをして居ります。最近は、死罪人も出ねえので、小伝馬町の牢屋敷の方へも出かけず、奴が外へ出たのを見かけた者は、一人も居りません」

と、云った。

八

左門は、薄ら笑って、

「死罪人がいなければ、新刀試しをするには、辻斬りということになる。袈裟右衛門は、昼は家にいて、夜行の徒になっているのであろうな」

と、云った。

「そういうわけでございますね」

どぶは、うなずいた。

「夜陰にまぎれて、近藤家をたずねている、ということも、考えられる」

「殿様——」

どぶは、左門を、そう呼んで、

「どうお考えになります、袈裟右衛門が、大盗正宗を、取って行ったということを？」

と、訊ねた。

どぶは、袈裟右衛門が、近藤家嫡男市之助と乳兄弟であることをつきとめて、しめた、と小躍りしたものであったが、いま、こうして、左門に語っているうちに、なにやら、その事実の蔭にある謎が、どうしても解きかねるもどかしさに、いらだたしくなっていた。

左門の明快な一言を、ききたかった。

しかし——。

左門は、しばらく、沈黙をまもった。

どぶには、こういう左門の態度が、いよいよ、やりきれなかった。

やがて、左門は、口をひらいた。

「めくらの娘が、一人で、大盗正宗を、おのが居間へ、抱いて来て、守ることにした。夜半、行燈のあかりが消えて、闇の中で、大盗正宗が、奪われた。お前ほどの闇に目の利く者が、曲者の侵入も、遁れ去るのも、見とどけられなかった。朝になって、お前は、泉水のほとりで、浮子を見つけた。外へ出てみると、細引のはしきれをつかんだうなぎ捕りの、首なし死体があった。その佐兵衛を斬ったのは、山田袈裟右衛門と見当つけて、しらべてみると、子供の頃、近藤家でやしなわれていた、と判った。……こういうことか」

「へい、そういうわけなんで……」

どぶは、自分の報告を、あらためて、左門の口からきかされたものの、脳裡には、なんのあたらしい直感もひらめかなかった。

しだいに、もやもやと、霧がわきあがって来て、視界がなくなってしまうような不安さえおぼえた。

「どぶ——」

「へい」

どぶは、首をのばして、左門の言葉を待った。

「袈裟右衛門から、大盗正宗を、とりもどして参るがよい」

——なんだ！

どぶは、気が抜けた。

「へえ、そりゃ、もう、これから乗り込むつもりで居りますが……」

「手ごわい対手だぞ。まかりまちがえば、お前の首が、とぶ」

「めったなことじゃ、ひとつしかねえ首を、胴から、はなすわけには参りません」

どぶは、頭を下げると、腰を上げた。

腰を上げながら、

——わけのわからねえ殿様だ！

と、妙にいまいましかった。

九

「ほい——ここだ」

どぶは、麹町平河町のとある小路に入って、萱葺きの長屋門の門桁に、一尺ばかりの大きな定

紋がはめ込んである家の前に、立って、四角なあごをなでた。

当時、門に定紋をつけるのは、大名だけに許されたならわしであった。

山田朝右衛門は、旗本でもない浪人にもかかわらず、その門に、丸の中に一の字を書いた紋を、はめ込んでいた。

これは、その主家鵜飼十郎左衛門から受け継いだならわしであった。

鵜飼十郎左衛門は、将軍家御道具おためし役で、死罪人を、わが屋敷へ、牢屋からはこばせて、首を斬った。

武家は、表札をかかげないものであったから、万が一、まちがえて、死罪人を隣家へはこばれては、迷惑をかけるので、鵜飼家であることをわかりやすいように、門に定紋をはめ込んだのである。

山田朝右衛門は、べつに、首斬りを自家の庭ではやらなかったが、そのならわしだけを、鵜飼十郎左衛門から、踏襲したのである。

浪人の住居にしては、立派な構えであった。

どぶは、くぐりから入ると、

「次郎吉なら、さしずめ、いやなにおいがする、と云うところだ」

と、つぶやいた。

玄関さきに立って、大声で案内を乞うと、しばらく、返辞がなく、やがて、いかにも老いぼれた印象の、背中にこぶを盛りあげた小男が、現れた。

「与力町小路左門殿の御用をつとめて居ります者でございます。ちょっと、お目にかからせて頂きとう存じます」

どぶは、いんぎんに、申し入れた。

小男は、黙って、奥へ入った。

袈裟右衛門は、在宅している。

——ことわりやがるにちげえねえ。

そう判断したどぶは、かまわず、ふみ込むことにした。

居間にいた袈裟右衛門は、はたして、小男から取り次がれると、

「多忙と申して、追いかえせ」

と、命じた。

その時、どぶは、すでに、次の間に立っていた。

さっと、仕切りの襖をどぶが開けた瞬間、もう袈裟右衛門は、床の間の刀架けから、差料をつかみ取っていた。

「へい、べつに、あっしは、修羅場を覚悟したわけじゃねえんで……」

どぶは、わざとおちつきはらってみせて、その場へ、坐った。

袈裟右衛門は、冷やかな視線を、どぶへ据えて、無言でいる。

まだ三十前の、にがみ走った男っぷりである。長身であり、いかにも、立姿に鋭気がみなぎっていた。

「話しあいが、ついて、納得がいったなら、あっしは、おとなしく、ひきさがります」

どぶは、おだやかに、云った。

十

「なんの話しあいだ？」
袈裟右衛門は、冷やかに、問うた。
「お前様が、手に入れなすった大盗正宗を、こっちへ渡して頂きてえ、という相談でさ」
「……」
「おねげえ申します」
どぶは、ペコリと頭を下げた。
据物斬りの冴えた一太刀が、頭上へ降って来るのを、覚悟の上であった。油断はなかった。
しかし——来なかった。
袈裟右衛門は、意外に、おだやかな声音で、
「わしが、どうして持っている、と見当をつけた？」
と、問うた。
「へえ。そこは、蛇の道は蛇で——」
「それでは、返答になるまい」
「じゃ、申し上げます。お前様は、うなぎ捕りの佐兵衛の首を、斬りなすった。その見事な斬りくちと、お前様が、近藤家の嫡男市之助殿とは乳兄弟であること——このふたつで、参上した次第なんで、へい」
「岡っ引！」

「へい」
「宗旨は、なんだ？」
「宗旨？」
「供養のしかたがある」
「返辞は、その刀でする、と仰言る？」
「しかたがあるまい」
「人の首を斬るのをあきないにしておいでだと、そんなに、名刀というやつが欲しいものでござんすかねえ」
「ちがう！」
「ちがう——と仰言ると？」
「貴様などに、きかせても、はじまらぬ」
「あっしゃ、大盗正宗を、近藤家に返して頂きてえ、とお願いしているんですぜ。……旦那も、山田袈裟右衛門という名を天下に売った御仁だ。泥棒になり下っちゃ、面目にかかわりましょう」
その皮肉が、おわらぬうちに、抜き討ちの一閃が、来た。
どぶは、かわすいとまはなく、腰の十手を抜きざま、受けた。
「できるの！」
袈裟右衛門は、にやりとした。
「旦那！　敵になりに来たんじゃねえ！」

どぶは、云った。
袈裟右衛門は、しかし、凄い形相で、第二撃をくらわせるべく、ふりかぶった。
どぶは、左手で十手をかまえつつ、右手で、ゆっくりと、その仕込みを抜いた。
「ふむ！」
袈裟右衛門は、双刃の小刀に変った十手を視て、ひくく呻いた。
「貴様――、やはり、ただの岡っ引ではなかったな」
「ただの岡っ引でさ。世間がひどう物騒になって来たから、こういうしろものを作ってみただけのことでね」
どぶは、薄ら笑ってみせた。

十一

まっ向から、第二撃の閃光が、落ちた。
と同時に――。
どぶの五体は、畳の上を一廻転していた。
「うぬっ！」
袈裟右衛門は、無二無三に、斬り伏せるべく、撃ちおろして来た。
どぶは、三畳あまりを、駒のようにころがった。
とみた瞬間、畳一枚を、ぱっと、はねあげた。
袈裟右衛門が、それをしたたかに斬り下げた隙に、どぶは、すっくと立っていた。

刀をひき抜き、畳を蹴倒した時、袈裟右衛門の形相は、悪鬼だった。
こんどは、青眼にかまえて、じりじりと迫って来た。
どぶは、十手刀を、ダラリと下げて、右まわりに、身を移した。
背後に、床の間が来た時、袈裟右衛門は、凄じい懸声とともに、斬りつけた。
どぶは、床の間へ、跳びさがった。
すると、背中が、筆太に南無阿弥陀仏と記した掛物に、ふれた。
掛物が、音たてて、落ちた。
瞬間――。
袈裟右衛門は、なぜか、けだものじみた叫びを発して、突きの一手をはなって来た。
袈裟右衛門は、兵法者ではない。その突きの残心に、隙が生じた。
どぶは、余裕をもって、袈裟右衛門の肩を、突き刺した。
すると、袈裟右衛門は、喚きたてつつ、刀をすてて、組みついて来た。
どぶは、組みつかれまいと、夢中で、身を躍らせた。
――しまった！
どぶは、その意志なくして、ふかぶかと、十手刀を、対手の腹へ刺し通したのに、狼狽した。
袈裟右衛門は、身を二つに折ると、その場へずるずると、崩れ落ちた。
「旦那！」
どぶは、かかえ起した。
「お前様が、わるいんだぜ！」

袈裟右衛門は、わななく手で、宙をさぐるようにした。
「ま、ま——正宗を、近藤へ、か、返さないで、くれ」
「なぜだ？　どうして、返しちゃ、いけねえんだ？　旦那——え、おい、どうして、返しちゃ、いけねえんだ？」
どぶは、耳もとで、大声をあげた。
袈裟右衛門は、ただ、かぶりを振ったばかりであった。
それから、視力をうしなったまなざしを、宙へ、送って、
「わしの、いのちが、雪さんなのだ。……雪さんのために……」
と、つぶやいて、がっくりと落入った。
なんの意味か合点しかねるままに、どぶは、床の間を、見やった。
掛物のはずれたあとの壁が、小さな口をひらいていた。
その孔の中に、大盗正宗は、かくしてあった。

女心無情

一

それから、半刻のちには——。
どぶは、町小路家の書院に、かしこまっていた。

前には、大盗正宗が、置いてある。
左門は、しばらく待たせてから、入って来た。
「山田袈裟右衛門は、手強かったか？」
左門は、まず、そう訊ねた。
「へい、相当な腕前でございました」
「手負わせるだけでは、すまなかったか？」
「妙なことに、自分で自分の生命をすてたような気がいたしやす」
「ふむ——」
どぶは、大盗正宗を、左門の膝の前へ置いた。
「たしかに、取って参りました」
しかし、左門は、手をふれようとせず、
「袈裟右衛門は、なにか、遺言いたしたか？」
と、訊ねた。
「遺言、といえるかどうか、わかりませんが、……雪さんは、わしの生命だ、とつぶやいて、落ち入りました」
「そうか。やはり……」
「やはり、と申しやすと？」
「袈裟右衛門は、近藤家でやしなわれていた時から、あの雪という娘を、恋していたに相違ない。その心は、ずっと、変らなかったであろう」

「成程――。しかし、それほど恋していた娘を、困らせるようなことを、どうして、しでかしましたかね」

「お前は、袈裟右衛門と問答したのではないか」

そう云われて、どぶは、はっと思い出した。

「そういえば、袈裟右衛門は、近藤家へは、刀をかえすことはできぬ、と意味ありげに、申しました」

「袈裟右衛門は、雪の心を知っていた」

「へえ――？」

「どぶ、まだ、判らぬか？」

「判らぬか、と仰言いますと？」

「ははは……」

左門は、ひくい声で、笑った。

「お前ほどの頭の切れる男でも、女心というものは、判らぬらしい」

「へえ、あっしゃ、いままで、女に惚れられたことが、ただのいっぺんもありませんのでね」

「ひがむことはない。惚れられずとも、惚れたことがあれば、女心は、判るはずだ。お前は、生命がけで、女に惚れたこともないのであろう」

「この面相じゃ、惚れてみたところで、惚れかえしてくれることは、金輪際ありやせんからね」

「そこが、お前の性根で、抜けた点であろう」

「しようがありませんや」

「そのために、お前は、天井裏から、雪の振舞いを眺め下しながら、その心を看破れなかったのだ」

「へえ――？」

「刀は、曲者に奪われたのではない」

左門は、ずばりと、断定してみせた。

二

「それじゃ、刀が失くなったのは！」

どぶは、目をひき剝いた。

「そうだ。雪自身のカラクリであった。曲者が、侵入した、とみせかけただけだ」

左門は、云った。

「そうか！　わかりやした。行燈のあかりを消したのも、丸窓を破ったのも、あの娘のしわざだったのでござんすね」

「お前ほどの、闇に目の利く男が、曲者の侵入を、見のがすはずはない。……雪は、曲者が押し入ったとみせかけて、刀を胸に抱いて、俯伏した。お前をはじめ、用人佐倉や須貝又十郎が、あわてて、架空の曲者を追いかけた隙に、雪は、刀を、どこかへ、そっと、かくした」

「成程、よく判りやした。あっしが、もう一度、あの娘を監視しなかったのが、不覚でござんした。あっしが、曲者をさがして、うろうろしているあいだに、あの娘は、大盗正宗を持って、そっと、庭へ出た。たぶん、夜が明けた頃合だったに相違ねえ。泉水には、あらかじめ、浮子を

つけた細引が、塀外の水門口まで、つたわせてあった。あの娘は、その浮子を切って、刀をむすびつけると、底へ沈めた——というわけでございます。……水門口には、うなぎ捕りの佐兵衛が、待ちかまえていて、細引を、ひっぱって、刀をたぐり寄せた」

「それは、ちがうであろう」

「へえ？」

「佐兵衛という男は、もとは、武家奉公をしていた、と申していたな」

「へい、そうなんで——」

「佐兵衛は、武家の泉水には、食用として、鯉やうなぎが飼ってあることを知って居った。それらの魚が、よく逃げ出すので、水門口で、獲ることにしていたのであろう。この密漁は、辻番がねむっている夜明けがたに限る。……あの朝、近藤家の水門口に行ったのが、佐兵衛の不運であった。細引が、杭にむすびつけられてあるのを、不審に思い、たぐってみたら、刀が出て来た。そこへ、雪と手筈をうちあわせていた袈裟右衛門が、やって来た。自分が、たぐるはずであった細引を、うなぎ捕りにたぐられ、刀を手にされているのを見つけた袈裟右衛門は、狼狽して、うむを云わせず、佐兵衛の首を刎ねて、刀をとりかえした」

左門の明快な言葉に、どぶは、いくども大きくうなずいた。

「つまり、その……、あの雪という娘御は、わざと、大盗正宗が、盗まれたことにしようと、計った、というわけでございますね」

「そうだ」

「献上の宝刀が、盗まれれば、家が断絶することを、知っていながら、そうした、と仰言るので？」

「たしかに——」

「それが、女心だ、と仰言るので？」

「判らぬか！」

「判らねえ」

どぶは、首を振った。

三

左門は、微笑した。

「雪は、わが家が滅びることを、のぞんだのだ」

「どうしてでございます？」

「近藤家が、代々必ず一人は、狂人か白痴が出て居ることは、すでに、お前にきかせた。……雪にとって、この呪われた家系は、堪えがたいものであった。父は狂人、兄は白痴、そして、自身は盲目だ。このむざんな家系は、わが身を最後として、断たれなければならぬ。雪は、いつとなく、そう思いきめたに相違ない」

「……」

どぶは、息をのんで、耳をすましている。

「用人佐倉をはじめ、周囲の者が、いずれ、大盗正宗を献上するのを機会に、兄市之助を廃嫡にして、この自分に、聟を迎えて、家の存続をはかるのは、目に見えたこと。そうなれば、自分が

産むであろう子供が、またもや、白痴か狂人であるおそれがある。それを想像しただけでも、雪は、おそろしかった。それよりは、いっそ、献上すべき宝刀を曲者に盗み去られたことにして、家を改易にしよう。近藤家を、この世より消し去ろう。雪は、そう決意した。そこで、その決意を、袈裟右衛門に打明けて、協力をたのんだ。雪に惚れた袈裟右衛門が、かぶりを横に振るはずはない。計画は、予定通りに、成された。……つまり、わしとお前は、余計なことをしたことになる」

そこまできいた時、どぶは、急に、そわそわとおちつかなくなった。

その気配に、左門が、

「なにを、あわてて居る？」

と、問うた。

「へ、へえ。……あの屋敷の中が、なんとなく、気がかりになって来ましたので――」

「もう、手おくれであろう」

「え？」

「雪は、おそらく、もういま頃は、自害して、相果てて居るであろう」

「そ、そんな――もったいねえ！」

「佳人薄命と申すではないか。生きながらえさせて、どうなるものでもあるまい」

「冗談じゃねえ。このお屋敷へつれて来たって、そこは、なんとか――」

「たわけ！」

左門は、ひくく、叱咤した。

「死なせてやるのが慈悲――という場合もあることを、岡っ引ならば、心得るがよかろう」

「そりゃ、わからないこともありませんが、あんまり、可哀そうで……、一度ぐらいは、うれしい思いを、させてあげてえ、と考えるのも、人情じゃござんすまいか」

「お前は、このわしに、雪を抱け、とでもすすめたいのか？」

「是非おねげえしてえところでございます」

「同病、相あわれむように、仕向けようとしても、そうは、都合よく、参らぬ。……それよりもどぶ」

「へい」

「この大盗正宗を、どこかへ、すてて参れ」

四

夏が、来ていた。

かっ、と眩しい朝陽のさす両国橋を、どぶは、首を振りながら、渡って行く。

そっと来て、

なんにも云わず、好きの膝

つもりしあとの色を見て、

またわびている粋の痴話

ならば、こうしていてほしや

「てなことを、ゆうべ、云われた面じゃないねえ、その面は――」

ふいに、横あいから、皮肉な言葉が、なげられた。

「なんでえ？」

どぶは、振りかえって、欄干によりかかっているはなれ島のお仙を、みとめて、

「朝っぱらから、そんなところで、油を売っていやがって、みっともねえ」

「川の流れを見てくらす、ささ、しょんがえ——というところさ。……このあいだ、おまいさんの親分を、たずねて行って、あたしゃ、生きた心地もなく、しっぽを巻いたよ」

「どうしたい？」

「それがさ。釣竿に、餌のかわりに鼠をくくりつけて、小猿に、とびつかせているじゃないか。あきれたねえ。そればかりじゃないさ。あたしに、鼠の丸焼きをご馳走してやるから、ゆっくりして行けとさ」

「はっはっは……、百年の恋も、一時に、さめやがったろう」

「あたしゃ、一度惚れたら、あとへとはひきさがらないよ。さがらないけど、どうもねえ、鼠や猿を見せつけられると、色気なんぞどこへやら、せっかくのこの玉の肌に、ざわざわと悪寒が走っちまう。……どぶ旦那、親分に云っとくれ。鼠や猿は、ごかんべん下さいって——」

「鼠や猿に、ちぢみあがっていて、恋しい男がくどき落せるけえ」

どぶは、さっさとはなれて行った。

お仙が、何か呼びかけたが、耳に入れなかった。

やがて、どぶが、入って行ったのは、深川も場末の、おそろしくうすぎたない裏長屋であった。

もう午前中から、蚊のうなりが、わああんと耳を打って来る。

「ごめんよ」

一軒の破れ格子をひらいて、首をつッ込んだ。

十四五の少年が、せっせと、小刀で傘の骨をけずっていた。

そのむこうに、ぼろ夜具に、中年の女が、やつれた顔で、横たわっていた。少年の母親であった。

少年は、御家人小日向刑部の養子となっていたが、ごく最近、追い出されたあわれな身の上であった。実母と、こうして、わびずまいをしている。

どぶが、顔をのぞけると、少年は、あわてて、居ずまいを正して、おじぎをした。

礼儀正しくしつけられていたし、その表情に、気象の良さをみせていた。

少年母子にとって、この岡っ引は、妙に親切な存在であった。

五

母子には、どうして、この岡っ引が親切にしてくれるのか、よくわからなかった。

小日向刑部の家を、少年が追い出された時、引きとって、実母に会わせてくれたのも、この長屋を借りて、住まわせてくれたのも、どぶであった。

「どうだい、加減は？」

どぶは、病人を見やった。

「はい、おかげさまで、すこしずつでございますが、気分がよくなって居ります」

掛具をあげて、女は、起き上った。
岡場所にいたというが、品のいい顔だちであった。
「夏をがまんすりゃ、秋になったら働けるだろう」
「はい。……親分のご親切のほど、なんとお礼を申し上げてよろしいか……、有難う存じます」
女は、両手を合せた。
どぶは、ちょっと、照れてから、少年に、
「どうだい、その刀、よく切れるだろう？」
と、云った。
少年が持っている脇差は、どぶが与えたのである。
「はい、大層よく切れます。これは、もしかすれば、名刀ではありませぬか？」
「ははは……、もとは、太閤秀吉様の差料だ、と云ったら、おどろくか」
「……」
少年は、まさか、という表情になった。
「名刀かどうか、わからねえが、ま、よく切れるなら、大切に使ってもらいてえ」
「はい。一生、持って居ります」
「そうねがいてえな」
どぶは、胸のうちで、
——この大盗正宗は、おめえが、受け継ぐさだめだったのだ。
と、つぶやいていた。

近藤家は、絶えたのである。
あの日、雪は、狂人の父と白痴の兄を、毒殺しておいて、自らは、のどを突いて、相果てたのであった。
となれば、近藤家の血統を享けたのは、この世で、この少年ただ一人であった。
家宝の大盗正宗を、受け継ぐのに、なんのふしぎはないわけであった。
ただ、どぶが、それと知らさずに、手渡しただけであった。
どぶは、今日もまた、いくばくかの金を置いて、おもてへ出た。
——あの子供は、どうやら、きちがいにもバカにもならずに、済むらしい。ま、なんとか、まっとうな道を、歩いてもらいてえものだ。
柄にもなく、どぶは、そう祈った。
深川八幡の門前を通りすぎようとした時であった。
「どぶ！」
険しい声が、かかった。
どぶは、その顔を見さだめもせず、三十六計をきめて、つッ走り出した。どぶを憎む敵は、江戸中いたるところにいたのである。

第二話　白骨御殿

夢遊役者

一

当時――。

江戸の市民は、季節のうつりかわりをたのしむくらしをしていた、といってよい。

旧暦の五月――夏至、半夏生、梅雨、竹酔日など、しゃれた呼称をつけていた。

月のはじめは、端午を迎え、江戸市中に、吹貫き鯉が、ひるがえった。

合歓の花が、夕に咲き、葵は午に傾いた。鯉のぼりの下の沼や川では、水鶏が啼いた。

隅田堤の三めぐりや、根津権現の神さびた池沼には、杜若花が、美しく咲きみだれた。

半夏生ともなれば、水のあるところには、螢が、飛んだ。

落合姿見橋のあたり、王子谷中、目白下江戸川のほとり、麻布古川橋たもとなど、日ぐれになると、かれんな光の虫は、幾千となく、夜空と草かげをいろどった、という。

そして、間もなく、入梅を迎えた。

しとしとと降りつづきはじめるのを待って、市中には、梅干用の梅の実を売る声が、いたるところに、きかれたのである。

「江戸府内絵本風俗往来」に、初夏の景色を描いて、次のように、つたえている。

「夕方、雷鳴相止むと、ひとしくいままで軒下にたたずみて、雨やどりせし人々、ようやく、東

西に散じ、一時とだえる通路も、ふたたび、人と車の往き来しげく、夜になれば、一天、雲吹き散じて、月色雲のすき間より照り、家内の庭、植込みの樹竹、水気したたり、岩石のあいだなる下草は、地にふし、飛石のおもて、清く洗われ、吹き送る風のすずしく、すでに、苦熱を流し去りて、心よく、白昼にありては、樹間の蟬の声ふたたびさわがしく、夜間にありては、蝙蝠のとび交うもおかし」

こうして、夏を迎えると、市民たちが待ちのぞんだ両国の川開きと相成るのであった。

その宵――。

「おうおうっ！」

ぞろぞろと、両国橋めざして、歩いて行く群衆を、かきわけるようにして、ほろ酔いの男が、大声をあげていた。

「どいつもこいつも、目の色変えやがって、川開きに行きやがる。なにが、面白いんでえ。こん畜生！」

前を行く年寄がふりかえって笑いながら、

「開くということは、めでたいことでな。天地開闢というくらいのものだ。秘仏を開帳すれば縁日になるし、店を開けば祝い酒が来るのう」

「わかってらい。賭場をひらきゃ、オケラが出るし、山開きすりゃ、遭難すらあ。なにが、めでてえんだ」

「お前さんは、つぼみをひらかせたことはないかな？」

「へへへ、それだ。股をひらいて、袖口噛んでか――いっぺん、やってみてえや」

まわりの人々が、どっと笑った。

男は、酔眼をまわして、

「なにが、おかしいんでえ。おれにゃ、ちゃんと夫婦約束したおぼこがいるんだぞ」

二

「年は十八、番茶も出花だ。……へへへ、このあいだ会った時に、約束したんだぞ。かたく約束白ちりめんの仇にゃ解かないしごきおび、ってな。どうだ、うらやましいだろう」

酔っぱらいは、かたわらの通行人へ、からみついた。

からみつかれたのは、お数寄屋坊主の河内山宗俊であった。

「うらやましいのう。新世帯を、いつ持つのだ?」

「来年春だ。家は狭くも肩身や顔はひろくうれしい新世帯と来らあ」

「そのうれしさもせいぜい半年だの。三年経ったら角が生え、五年経ったら化けるだろうな」

「なアに、あの娘は、いまから化けてら。恋にゃ心もついほそりがち主を待つ夜はろくろ首、と来た」

そう云った時、初花火が、景気のいい音をひびかせて、宵空に、ぱあっ、とひらいた。

「玉屋っ!」

どっと、歓声があがった。

つづいて、もうひとつ——。

「鍵屋っ!」

ひろい大川は、涼船でうずまっていた。

橋の上、両岸、そして、花火の見えるかぎりの屋上、火の見櫓、物干台は、人でいっぱいであった。

岡っ引どぶも、橋の欄干の上へ、あぶなげもなく、腰かけて、見物に加わっていた。

不意に、うしろから、ぽん、と肩をたたかれて、ふりかえると、河内山の顔があった。

「へえ、こんばんは——」

「親分、のんびり、口をあけて、花火を、見あげているひまは、なさそうだぜ」

「なんです?」

「百本杭に、土左衛門がひっかかっているのを、見て来た」

「べつに、珍しいことじゃありませんや。明日まで、ひっかかっていやがれ」

「ただの土左衛門じゃないのだな、これが——」

「首を突きあげて、花火でも見物していましたかい?」

「あわれや、眼窩がぽっかり孔をあけていたな。土左衛門は、水ぶくれになるのがふつうだが、そいつは、反対に、皮も肉もなくなって居ったぞ」

「……?」

「皆、上の空で、誰も気づいて居らぬ。お主、行って、ひろいあげてみるがいい。花火よりは、よほどおもしろい見世物だ」

すすめられて、どぶは、半信半疑で、欄干を降りた。

つづけさまに、花火が、うちあげられ、数万の群衆が、どよめいた。

どぶは、歩きながら、若いきれいな女の顔へ、視線を移した。
無心に空を仰いでいる顔が、なんとも、好き心をそそる。
「玉屋がとり持つ縁かいな——といやがるが、土左衛門が対手じゃ、話にならねえ」
せっかく手柄にさせてやろうと、自分をさがして告げてくれた河内山の親切も、あまりありがたくはなかった。

三

「おうおう——親分、なにをさがしているんだい？」
百本杭へ、提灯をかざして、しきりに物色しているどぶへ、顔見知りの職人が、声をかけた。
河岸道にいっぱいにあふれた群衆は、のこらず、空を仰いでいるのに、一人だけ、水際へ視線を移しているのだから、いぶかられるのも、むりはなかった。
どぶは、ふりかえって、若い大工をみとめると、
「七か、手つだってくれ、いま土左衛門をひきあげる」
「縁起でもねえ。今夜は川開きだから、明日にしてもらいてえな」
そう云いながらも、七助という男も、杭にひっかかったものはないか、とさがしはじめた。
やがて——。
「いたっ、ここだ！」
七助が、叫んだ。
どぶは、いそいで、そこへ、近づいて行って提灯を、さしのべた。

杭に、藻のようにひっからまっている黒いものが、見えた。
頭髪である。
どぶは、杭へ、片足をかけると、無造作に、ゆらゆらと浮いている髪の毛を、つかんだ。
ぐっと、ひっぱりあげると、水の中から、首が出た。
のぞいていた七助が、
「ひゃっ！」
と、悲鳴をあげた。
顔は、なかった。目も鼻も口も耳もなくなっていた。しかし、髑髏ではなかった。まだ額や頬には、皮や肉がついていた。
なんとも、名状しがたいむざんな土左衛門であった。
どぶは、しかし、ちょっと、顔をしかめただけで、腕に力をこめると、ずるずると、死体をひきあげた。
もうその時は、まわりの見物人は、視線をそこへ集中させていたが、ひきあげられた死体を一瞥して、一斉に、
「わっ！」
と、恐怖の悲鳴をあげた。
ほとんど白骨になりながら、まだ五体がちゃんとつながれていてところどころに、皮と肉がついている、なんともむごたらしいさまは、悪夢をさそうに相違ない。
路上へ、ほうり出すと、どぶは、額の汗をぬぐって、

「隅田川には、人間の肉をくらう魚が棲んでいやがるのか」

と、つぶやいた。

それとも、野犬に食いあらされたのを、誰かが、流れへ、投げ込んだのか。

いずれにしても、この死体は、飢えたけだものに食われたもの、と解釈するよりほかはなかった。

こわいもの見たさで、河岸道の群衆は、そこへ、どっとなだれ寄せて来た。

四

次の日の朝——。

どぶは、小梅村の町小路左門邸をたずねるべく、本所を抜けて、横川に架った業平橋を、渡ろうとしていた。

横川を過ぎると、景色は、一変する。

のどかな田畑がひろがるのであった。見わたすかぎりの青田、ところどころにこんもりとわだかまる欅の林、そして、ずっと彼方に、古寺の大屋根と五重塔が、浮きあがっている。

どぶは、左門に会うのは苦手だが、田舎景色は好きである。どぶは、備前の田舎で生れた男であった。

「小梅に、色女を待たせておいて、十日に一度かよう、てなしかけなら、こいつは、法楽だが——」

どぶは、やぞうをきめて、首を振った。

夏景色
月にうかれてほととぎす
思いこがれてなきあかす
短き夜半は、ねむられぬ
枕も、じゃまになるわいな
てなこと、くどく女が欲しい。

と——。

野道を、ふらふらと、歩いて来る人影をみとめて、どぶは、眉宇をひそめた。

遠目には、芸妓のように思われたが、近づくと、これは、歌舞伎の女形であった。

——女形が、どうして、こんなところを、うろついていやがるのだ？

どぶは、首をかしげた。

男のくせに、女装をしている女形は、ふつう、町なかを、歩いたりなどせぬものであった。どこかへ出かける時は、かならず、駕籠で行き、なるべく、世人に姿を見せぬように、つとめるのであった。

大方、小梅村の大商人の別荘へ、招かれて、一夜をすごしたものに相違あるまいが、どうして、駕籠で帰らぬのか。

五六歩の距離に、近づいて、どぶは、

「なんでえ？」

と、細目を光らせた。

その女形の顔つきは、あきらかに、尋常ではなかった。

——狂ってやがる！

一瞬、どぶは、そう思った。

しかし、そうではなかった。

焦点を失った眸子を、宙に置いて、どぶの存在も気がつかぬように、ふらふらと行きかける女形に、どぶは、こころみに、

「おい！」

と、鋭い声をかけてみた。

とたんに、女形は、びくっと肩をふるわせて、どぶを、視た。

怯えた顔色は、あきらかに、正気のものであった。

「おめえ、どうかしたのか？」

と問うと、意外に、すなおに、

「あい——」

と、こくりとうなずいた。

まだ二十歳を出たばかりであろう。女形になるだけあって、切長な眸子、細く高く通った鼻梁など、いかにも優しいつくりである。

五

しかし、これは、浮世絵になる有名な女形ではない。どぶも、芝居にはくわしくはないが、堺町の中村座、葺屋町の市村座や、木挽町の守田座などの名題ならば、ひと通り、顔を見知っている。

「おい！　しっかりしろい！」

どぶは、女形の肩を、ゆさぶった。

その時、なにやら、妙な匂いが、ぷうんと、どぶの鼻を衝いた。

——おかしな媚薬でも、飲まされやがったか。

どぶは、あごへ手をかけると、ぐいと、正面へ向けて、

「おい、横川へ突っ込んで、正気にもどしてやろうか」

と、おどしてみた。

すると、女形は、うつろなまなざしを、どぶへ当てると、

「もう……どうなってもいい、どうなっても——」

と、つぶやいた。

それから、視線を、宙にうつすと、両手をさしのべた。

踊の所作ともみえる身ぶりで、

「あのような、美しい極楽鳥の舞う竜宮城が、この世に、あったのじゃ」

と、口走った。

「手がつけられねえ。……おめえ、竜宮城へ行った夢をみやがったのか」

「夢じゃござんせん。ほんとに……美しい極楽鳥のとんでいる竜宮城が——」

「冗談もやすみやすみに云え。海の底の竜宮城に、鳥がとんでいるわけがねえ」

「いえ……、魚も、美しい魚も、たくさん、いましたわえ」
「なにを、寝呆けてやがる。……てめえ、妙な薬をのまされやがって、幻覚を起しやがったな」
「ほほほ……」
女形は、不意に、かん高い笑い声をたてた。
「幻覚かえ。……あれが、幻覚かえ。……あたしは、もう一度、あの美しい世界で、おぼれたい」
「やれやれ、とんだ浦島太郎だ」
どぶは、面倒くさくなって、女形を突きとばした。
女形は、そのまま、雲の上でも踏むような足どりで、遠ざかって行く。
どぶは、ふと気づいて、
「おい、おめえ、何座の役者だ?」
と、声をかけた。
「あたしは……、品川の森村座の、中村菊也――」
「森村座か」
どぶは、首を振った。
品川にある森村座というのは、名題になれない、門閥からはずれた巧者たちが、反逆して、たてこもっている小屋であった。
この中村菊也も、その一人であろう。
どぶは、舌打ちした。

「金をくさるほどため込みやがった商人どもが、かげで、どんなことをしてやがることか」

六

どぶは、町小路邸の裏門の潜り戸から入ると、むうっとおそって来た草いきれに、
「ふうっ!」
と、吐息した。
「どういう料簡なんだろうな。この家の殿は――。三千石を返しちまって、与力になるなんざ、いくら盲目になって、ひねくれたからって、どう考えたって、まっとうな神経じゃねえや」
屋敷を、ぼうぼうと、夏草の生い茂るにまかせて、平然としている左門の気持が、さっぱり理解できぬことであった。
この広い敷地内で、くらしているのは、主人のほかに、小間使いの小夜と、からだが二つに曲った七十過ぎの用人の二人だけであった。
庭へまわったどぶは、泉水のほとりで、しきりに、笊を使っている用人をみとめた。
「なにをしているんだい、爺さん?」
どぶは、そばへ寄って、耳もとでどなった。
それでも、用人は、「え?」ときき返した。
「笊で、何をすくっているんだ、ときいているんだ」
「鮒じゃ」
用人は、こたえた。

「今晩のおかずかい？」
「左様――」
「かしてみな」
どぶは、よれよれの唐桟留を脱ぎすてると、ざぶざぶと、泉水の中に入って行った。
腰までつかりながら、笊をひとすくいすると、鯉、鮒、なまずなど、十数尾もはねあがった。
「おそろしく、ごったに、飼ってやがるんだな」
どぶは、あきれた。
「鮒だけじゃぞ。五尾もあればよい。あとは、放してくれ」
用人は、云った。
どぶは、ついでに、台所へ行くと、器用に、鮒のうろこをはいで、にえたった醤油汁の中へ、ほうり込んだ。
そこへ、小夜が姿をみせた。
「親分は、板前をやったことがおありなのですか？」
と、たずねた。
「器用貧乏てえやつでね、竹籠造り、板削り、壁塗り、手料理、祭囃子から着物のつくろいまで――なんでもやれらあ。こういう亭主を持ちゃ、女房は寝てくらせるものを、ままならねえ世の中だ」
「女のひとを、くどくのだけは、苦手なのですね」
「女ってえ生きものは、男を見る目がねえや。くそおもしろくもねえ」

「夫婦になる、といえば、女は弱いのですよ」
「じゃ、小夜さん、なってくれろ、とたのんだら、うんと云ってくれるか？」
「わたくしは、だめです。お殿様のお世話をしなければなりませぬもの――」

七

左門は、居間にいた。
どぶが来た、と報らされると、
「ここへ、参るように――」
と、云った。
「ごめん下さいまし」
どぶが、縁側にかしこまると、左門は、「寄れ」と命じた。
何気なく、どぶが膝行したとたん、左門は、背後に置いてある大刀を把るが早いか、
「えいっ！」
抜きつけの一閃を、あびせて来た。
どぶは、かわすいとまもなく、あっと、上半身を反らしただけであった。
白刃の切先は、どぶの額へ、紙一重で停められていた。
左門は、すっと、刀を引くと、鞘へ納めた。
「お、おどかさないで、おくんなせえまし」
どぶは、顔の汗を、手の甲でぬぐった。

盲目の身で、なんとも鮮やかな手練ぶりであった。
「酔いをさませ、どぶ」
「へ？　あっしゃ、飲んじゃ居りませんぜ」
「酒の代りに、別のものを飲んだであろう」
「別のもの、と申しやすと？」
「酒よりも、もっと酔うしろものだ」
その言葉をきいて、どぶは、はっとなった。
「う、うつり香ってやつだ」
「なんと申した？」
「殿様――、あっしは、お屋敷にうかがう途中で、歌舞伎役者に、出会うたのでございます。そいつが、妙な匂いを、ぷんぷんさせていやがった。きちげえかと思って、とっつかまえた時、その匂いが移って来やがった。そういうわけでございます」
「……」
「まちげえござんせん」
どぶは、中村菊也という女形の様子を、くわしく語り、
「この小梅村あたりに、別荘をつくってやがる商人どもは、かげで、何をしてやがるか、知れたものじゃございません」
と、云った。
「女形に、竜宮城の夢をみさせた、か。……信じられぬ」

「あっしが、ひとつ、調べてみましょうか？」
「お前は、次郎吉とやら申す盗賊に、忍びのコツを教えられて、かるがるしゅう忍び込む考えになったようだが、みだりに、生命を粗末にせぬがよい。当今は、大名旗本の屋敷より、商人の家の方が、警戒が厳重の模様だ」
「判って居りやす。しかし、商人どもが、金があるにまかせて、大層もねえ遊びにうつつをぬかしていやがる、と思うと、むなくそが、わるくなります。大名、旗本衆が、貧乏になって、やりくり算段に、悲鳴をあげていなさる当節、商人どもを、いい気にならせておくのは、癪でございますぜ」
「社会がそういうしくみになって居るのだ。いずれ、このしくみは、崩壊いたすであろう」
「へ？」
「士・農・工・商などと、身分や上下に割る制度が、永久につづくものでない」

八

「そいじゃ、いずれは、武家も町人も百姓も、身分が同じになる時世が、来る、と仰言るんで――？」
「おそらくな」
「将軍様は、どうなりやす？」
「滅びよう」
れっきとした旗本の身でありながら、左門は、平然として、そう断定してみせた。

どぶは、ひくく、唸った。

——この殿様にかかっちゃ、一生負け犬だ。

どぶは、かぶとをぬいだ。

「ところで、あっしは、昨夜、妙な土左衛門を、百本杭から、ひきあげました」

その白骨死体について、どぶが、くわしく語るのを、左門は、眉宇もうごかさずに、ききおわると、

「年寄の役人のうちで、そのような死体を、これまで見た者がいたか？」

「いえ、一人も、いやしません。野犬に食いあらされた死体を見た御仁は、幾人も居りましたが、食いあらされかたが、まるっきりちがって居るそうなんで……、つまり、あれは、地獄から鬼どもが、出て来て、生肉をていねいにくらいやがって——いうならば、骨までしゃぶった、というあんばいなのでございます」

「……」

「ま、そうとしか、考えようがないほどの、なんとも、奇妙奇天烈な土左衛門でございました」

肉が腐って、なくなったというのではない証拠は、頭髪を、つかんで、いくらつよくひっぱってみても、抜けなかったことで、あきらかだったのである。

「人間の肉をくらう種族が、どこかの山中から、降りて来やがった、と解釈できますまいか？」

「そういう種族が、出現したとすれば、第二、第三の犠牲者が、出るであろうな」

「そうなったら、これア忙しくなりやす。この炎天の下を、歩きまわるのは、思っただけで、うんざりだ」

「お前が、その死体を、ひきあげたからには、やむを得まい」

「それアまあ、そういうわけでございますがね……。牛や馬を食うというのなら、まだ、話がわかりますが、人間の肉をくらうというのは、正気ではやれるわざじゃござんせんねえ」

「オランダ医師にきいたことがあるが、未開の蛮人は、隣地の敵と闘って、勝つと、殺した敵の肉を、焼きも煮もせずに、くらうそうだ。……われわれの遠いむかしの先祖も、そうしたであろうな」

「ぶるぶるっ……寒気がして来やがった。——じゃ、これで、御免を蒙ります」

どぶは、頭を下げた。

いつものことであるが、どぶは、何か奇怪な事件が起ると、左門に、相談にやって来るのだが、その時、決して、膝を打って、そうか、と合点できるような言葉を与えられたためしはないのであった。

左門は、最初は、ただ黙って、ききおくだけであった。

九

左門は、どぶに、勝手にしゃべらせておいて、決して、自分から、手さぐってみるような推理を口には、出さないのであった。

その心中では、いろいろと思いうかぶことが、あるに相違なかった。しかし、それらが、自身にとって、あいまいである場合は、どぶにきかせることは、絶対にせぬのだ。

したがって——。

どぶは、左門に、報告し、その指示を仰いで、自分の行動をきめることは、ほとんどなかった。

どぶは、おのれ自身の考えで、歩くよりほかはなかった。

そして、どうやら、事件の真相へ、どぶの手が、かかった時、左門の存在がたのもしいものとして、どぶの決断をささえるのであった。

どぶは、台所へしりぞいて、煮えあがった鮒の味かげんをみた。

「うむ。わるくはねえ」

かたわらの小夜に、にやっとしてみせ、

「こいつで、一杯ご馳走になってゆくか」

と、云った。

「はい、どうぞ――」

小夜が、左門の給仕をすませて、膳部を下げて来た時どぶは、もう、かなりの酒を、胃袋へ流し込んでいた。

「いい心もちになりやがった。おれは、近頃、どっちかといえば、女より酒の方が、よくなって来たぜ」

「親分は、そろそろ、世帯を持ったらいかがですか？」

「へへ……、小夜さんにそうすすめられると、ぞくぞくと、うれしくならあ。……ういういしい女房がよう、亭主のおそい戻りを待っている図なんざ、わるくねえな。

火鉢にもたれて、待つ夜は胸も

ちょうど薬鑵のたてる音

と来た。

但し、これが、人三化七のかかあだと、家の前まで戻って来て、また、くるっと、踵をまわすことにならあ」

「親分には、かみさんにしてもよい、という女子衆は、いないのですか？」

「いらあな、ごまんと――」

「じゃ、すぐ、世帯をお持ちなさいな」

「冗談じゃねえ、ごまんといても、それは、こっちが、そう思うだけで、むこう様は、知らねえ話だ。……世の中ってえやつは、ままならねえや。女房になってやろう、という女は、こっちが、ご免を蒙りたい莫連かくわせものばかりでな。……小夜さん、この江戸の男と女の頭数の比率を、知っていなさるかい？」

「存じません」

「人別帳でしらべると、男が百に女が六十だ。これじゃ、話にならねえ。おれのような、飲んだくれの一文無しの御用ききに、良い女房があたるはずがねえやな」

「そんなに、女のひとが、足りないのですか？」

「京大坂は、その逆よ。くそおもしろくもねえ」

どぶは、いまいましく、首を振った。

恋慕くずれ

一

「あつい！」

愛宕下の往還を、渋団扇で胸へ風を入れながら、のそのそと歩くどぶは、いくどめかの独語を、もらした。

実際、ここ数日のむし暑さは、堪えがたいものがあった。

往還上からは、ほとんど人影も絶えている。

「誰にたのまれたわけでもねえに、この炎天を、うろつくなんざ、こけの骨頂か」

自嘲のつぶやきをもらしたどぶの耳に、すずしげな風鈴の音が、ひびいて来た。

湯屋の格子の前へ吊られた釣忍につけてあるのが、鳴ったのである。

「ひと風呂、あびるか」

どぶは、土間に入ると、もう一度、

「あついな」

と、云った。

番台の親爺が、笑いながら、

「暑い時にも、寒い時にも、湯にかぎりやす」

「あいにくだが、湯は好きじゃねえんだ」

「ほ——これア、異なことを仰せられ、たてまつる。どうしてですかい、お客さん？」

「あらい立てしてあぶらを取る気、初手の小ぬかの当てこすり、たアどうだ」

「へっ、おそれ入りやした」

親爺は、衣類棚の前に立ったどぶの腰に、十手があるのをみとめて、あわてて、手で口をおさえた。

こんなうすぎたない岡っ引は、はじめてであった。

熱湯に、ひとうなりしたどぶは、二階へあがった。

二階の十畳間には、炉がきってあり、薬鑵の湯が煮たっている。茶道具、菓子箱の前に、十六七の小娘が、坐っている。

若い職人たちが、湯あがり姿で、将棋をさしていたし、手代風の男が寝そべって、貸本を読んでいた。

湯屋の二階は、若い衆の遊び場所であった。

「あい、旦那——」

小娘にさし出されたお市豆を、ひとつ、つまんだどぶは、

「どうだい、姐ちゃん、この親分の女房にならねえか」

と、からかった。

「いやだ！」

にべもなく、かぶりを振った。

すると、将棋をさしていた職人の一人が、
「へへ、親分――、そいつは、もう生娘じゃねえんだぜ」
と、云った。
「これア恐れ入ったな。もう男がいるのか」
「品川の森村座の中村菊也ってえ女形に、首ったけになりやがって、呉れちまったのさ」
「なに!?」
どぶは、目を光らせて、小娘を見すえた。
「ほんとか、それア?」
小娘は、うつ向いて、こたえなかった。
「ところがよう、たった、いっぺんで、振られちまやがったんだ」
職人は、云った。

二

「それは、いつのことだ?」
どぶは、職人をふりかえって、たずねた。
「いつだっけな。……そうだ、麻布の古川橋の舟宿の二階で、こいつが、菊也と手をとりあって、螢狩りとしゃれてやがるのを、見とどけてから、もう一月にならあ」
「どうして、一度だけの首尾で、振られた?」
どぶは、小娘の顔を、のぞき込んだ。

小娘は、袂で顔を掩うと、しくしく泣き出した。
「親分も、カンがにぶいぜ。役者が、こんな小便くせえのを、二度も三度も、対手にするもんけえ。……いや、おれたちが、あんまり可哀そうだから、掛け合ってやったのよ。その時の菊也め、云い草が、憎いや。あたしは、このところ、さる高貴の姫様のご寵愛を得て居りまするゆえ、もう、しもじもの女子衆に、肌身は、許せませぬ」
声色をつかって、妙なしなをつくってみせてから、げらげらと笑った。
「……?」
どぶは、しかし、横川で出会った中村菊也の夢遊病者のような姿を、思いうかべて、笑えなかった。
――高貴の姫様、か?
どぶは、急に、立ち上った。
「そいつは、本当かも知れねえ」
「え? ……親分、野郎は、中村座や市村座の人気者じゃねえのだぜ。馬糞くせえ品川のぼろ小屋の名なし女形じゃねえか」
「そういう役者だからこそ、ひょっとすると、高貴の姫君が、こっそり買うのに、都合がよかったのかも知れねえ」
どぶは、湯屋をとび出すと、品川へ向って、足をはやめた。
もう暑さも忘れていた。
カンというやつであった。

中村菊也の夢遊状態は、ただ、男女の悦楽に酔いしれたものではなかった。と今にして、推察できた。

——あれは、なにか、途方もねえ媚薬をくらわされたからに相違ねえ。

小梅の里あたりに、そういう淫靡な場所が設けられているのではあるまいか。

——もしかすると？

どぶは、百本杭にひっかかっていた白骨死体も、そんな場所からかつぎ出されて、大川へ投げすてられたような想像力がはたらいたのである。

森村座は、品川の大木戸に近い、とある横丁にあったが、なるほど、うすぎたない小屋であった。

楽屋へ入ろうとしたとたん、ぷうん、と線香のにおいが、ただよった。

のっそり入ったどぶは、

「誰かいねえか？」

と、呼んだ。

眉を落した、皺だらけの役者の顔が、のぞいた。

「中村菊也に会いてえ」

そう云うと、役者は、かぶりを振って、

「あいにく、昨夜、亡くなりましてございます」

三

「亡くなった？」

どぶは、眉宇をひそめた。

「どういうんだ、それア？」

「あい——。お岩になって、化けているうちに、ほんとうに、幽霊になっていたのでござんすわえ」

この森村座の芝居は、思いきったどぎつい趣向をこらすことで、客を寄せ集めていた。

したがって、年中怪奇な因果ものを出していた。夏になると、幽霊を出すのは、定石だが、同じ「四谷怪談」でも、市村座や守田座と同じでは、太刀打ちできないから、見物席の床を破って、お岩が、浮かびあがったり、舞台の上で宙吊りになって漂ったり、さまざまの趣向をこらしていた。

中村菊也は、幽霊役者で、殊に、お岩を得意としていた。

昨日も——。

舞台の上から、見物席の上へ、ふわふわと漂い出て、さんざ、客に悲鳴をあげさせておいて、見物席のまん中に設けてある仕掛け穴から、消えようとした。

その時、どうしたわけか、穴へ沈まずに、かたわらの客へ、どさっと、よりかかってしまったのであった。

その客が、

「止しやがれ！」
と、突きはなすと、そのまま、ぐったりと、横たわってしまった。
お岩は、死体となっていたのである。
その胸には、ふかぶかと、小柄が、刺さっていた。
おそらく、舞台から見物席へ、宙を漂い出た時、どこからか、小柄を投じられたものに相違なかった。
「その小柄は、あるかい？」
「あい」
どぶは、受けとってみた。
そこいらの貧乏ざむらいの差料についている品ではなかった。見事な金の竜の飾りがしてあった。
「これア、借りて行くぜ」
どぶは、小柄を、ふところにして、おもてへ出た。
小屋者たちの話では、検屍した町方同心は、中村菊也のあまりに真に迫った幽霊ぶりに、思わず、芝居ということを忘れた武士が、小柄を投じたに相違ない、と判断した、という。
つまり、少々頭がおかしくなった武士のしわざだろう、というわけであった。
「お前らは、これからは、あまり客をこわがらせぬことだ」
それが、同心ののこしたせりふであったそうだ。
——間抜けた推測をしやがるものだ。

ようやく、風が涼しくなった往還を歩きながら、どぶは、その同心を、あざわらった。
——頭にござった奴なら、小柄を投げる前に、わめきたてるに相違ねえじゃねえか。まわりに気づかれぬように、殺したのは、殺すこんたんを持って、小屋に入った証拠なんだ。

四

「——という、次第なんで、へい」
その翌朝、左門の前にかしこまったどぶは、中村菊也のむざんな横死を、逐一報告して、頭を下げた。
左門の膝には、小猿がいた。
小猿が勝手に、膝にのるにまかせておいて、左門は、じっと動かずにいるだけなのであった。
どぶは、左門がいつまでも黙っているので、しかたなく、
「これア、あっしのカンでございますが、百本杭にひっかかっていた白骨死体と、中村菊也が殺されたことと、なにか、関りあいがあるように、感じられてなりやせんが……、いかがなもので……」
と、云った。
「お前のカンが正しければ、これから、つぎつぎと犠牲者が、出るであろうな」
「どこかに、怪しい場所が、あるに相違ございません」
「……」
「どうぞ、殿様のカンを働かせて頂きとう存じます」

「……」

どぶは、左門の言葉を、待った。

左門は、かなり長い沈黙を、まもった。

どぶは、左門の膝の小猿を、小面憎いものに眺めて、舌を出したり、睨みつけたりした。

「どぶ――」

ようやく、左門が、口をひらいた。

「へい」

「中村菊也の胸を刺した小柄には、金の竜が彫ってあった、と申したな?」

「へい。ここに持参して居りやすが、立派な造りでございます」

「しかし、それを投げた者が、必ずしも、武士とは限るまいが……」

「へえ?」

「もし武士だとすれば、中村菊也が、この小梅の里をうろついていたことから推して、抜け出て来た屋敷が、どこか、見当をつけてみる必要がある」

「そ、そうなんでございます」

「小梅、押上、柳島から亀戸にかけて、ちらばって居る大名、旗本の別邸は、数が知れて居る。西尾隠岐守、前田丹後守、井上筑後守、堀長門守、津軽越中守、加藤於兎三郎、堀丹波守、石川主殿頭、脇坂淡路守、斎藤内蔵助、松浦豊後守……いずれも、べつに、怪しくはない」

「そいじゃ、やっぱり、徒党を組んで、抜荷でもやって居る浪人者どもの隠れ家が、このあたりにあるのじゃございますまいか」

「住人のすくないこのあたりを、隠れ家にえらぶ莫迦は居るまい。……法を犯す者が、徒党を組む時は、必ず、燈台下の暗い場所をえらぶであろうな。町家のたて込んだ神田界隈が、かえって、目立たぬ隠れ場所になる」

「……」

「横川以東で、ごく最近、屋敷を設けた家があるとすれば、それが怪しいと、見当をつけてもよいが……」

そう云ったとたん、左門の表情が、にわかにひきしまるのを、どぶは、視た。

五

「どうなさいました?」

どぶは、思わず、問うた。

左門が、表情を変える、ということは、曾てないことであった。

左門は、しかし、すぐ、無表情にかえった。

「新しく屋敷を構えた者が、いる」

「え、居りますかい?」

どぶは、のり出した。

「但し――」

左門は、小猿を、膝から投げ出した。

「ただの屋敷ではない」

「と仰言いますと？」

「将軍家ご息女が、輿入れされた屋敷だ」

「へえ、そいつは、どうも……、あっしら駄犬は、お屋敷内にどんな怪しい気配があっても、遠吠えするよりほかはねえ」

「そうでもないぞ」

左門は、うすら笑った。

「将軍家ご息女、と申しても、おもて向きは、中臈ということになって居る。生母が、厠附きのお端下であったため、お手がついたことを、公にできなかったのだな」

「へっ、厠でお手がついた、とは、これがほんとのくせえ仲だ」

「したがって、生れた娘は、ご息女とはみとめられず、中臈にされた。しかし、ご息女であることはまぎれもなく周知であったため、特別の扱いをされていた模様だ。また、性情も驕慢であり、その振舞いには、目にあまるものがあったようだ。……佐保、たしか、そういう名であったな」

三年前の梅雨晴れの一日、江戸城内に、町入り能興行が催された。

将軍家若君誕生の祝儀があって、そのよろこびを、江戸の町人たちにも、頒ったのである。

町入り能興行とは、すなわち、町人たちを江戸城に入れて、能興行を見物させることをいった。

えらばれる町人は、名主、地面持ち、家作持ち、老舗の主人などであった。

当日は、紋付に麻上下をつけるのが、さだめであったが、それを持っていない者は、縞の衣服に紙製の紋を貼りつけることも、黙認された。

将軍家をはじめ、諸大名が、町人と一堂に集うて、催しものを愉しむ唯一の機会であった。

町人たちは、さだめられた時刻に、大手門を入り、中之門に至ると、一人宛雨傘を一本ずつ与えられた。もし万一、雨が降った場合の用心のためであった。したがって、渡された傘が証拠になり、もし傘を持っていなければ、不審の者として、場所へ入ることを許されなかった。

町人が坐らされた場所は、露地であったが、そこにならぶと、酒の下賜があった。

酒を入れてあるのは、錫製の瓶子であったが、これは下げ渡されるので、町人は、これを町内へ持ちかえるのを無上の光栄としたものであった。

いわば、江戸城内の無礼講であった。

この時、佐保という驕姫が、一人の若ざむらいをみそめたのであった。

六

佐保がみそめた若ざむらいは、二万石の小大名の小姓であった。

佐保の希望は、ただちに、用部屋へつたえられた。

いかに、かげで、かわや姫と呼ばれている娘でも、将軍家実子であることが、あきらかである以上、十石取りの陪臣に、輿入れすることは、許されなかった。

用部屋に於て、老中、若年寄の相談の結果、佐保の希望は、しりぞけられた。

すると、佐保は、たけり狂って、いさめた老女を、懐剣で刺し、おのれも、自害して果てようとした。

女中たち十数人が、必死になって、懐剣をとりあげると、佐保は、庭へ奔り出て、井戸へ身を投じようとした。

真剣であったか、狂言であったか——いずれにせよ、佐保の物狂おしい振舞いは、大奥すべての人々から、愛想をつかされた。

佐保の身柄は、芝の御用屋敷（俗に謂う比丘尼屋敷）へ移された。

比丘尼屋敷というのは、逝去した前将軍の側妾たちが、その位牌をそれぞれ護持して、大奥からひき移って、その余生をすごすところであった。

幾年か前のことであった。

先代の将軍家が逝去して、八人の側妾が、御用屋敷入りした。その中に、お琴の方という、まだ二十三歳の美しい女性がいた。

大奥への御機嫌うかがい、芝増上寺への御廟参のほかは、一切外出を禁じられた無聊の日々が一年すぎた。

たまたま、御用屋敷の茶亭の修築があり、それにあたった大工肝煎なにがしという男が、錦絵の半四郎とそっくりの男前であった。

お琴の方は、一目視て、無聊に飢えていた心に、火がつけられた。

お琴の方の気持は、おのずと、その大工につたわり、ひそかに、媾曳の約束がなされた。

お琴の方が、生家の菩提所へかようことが多くなったのは、それからであった。

文字通り薄氷を踏む密会が、月に一度、つづけられた。

他の側妾たちも、何もすることがなく、迎え送る日々をもてあましているのであった。しぜんに、他人の振舞いに、目を光らせることになる。

お琴の方の行動が怪しい、と疑惑を抱くのに、さほどの月日を必要としなかった。

やがて——。

某日、お琴の方は、実兄が急病であるゆえ、至急に、自邸へ来るように、という報せを受けた。

お琴の方は、おどろいて、駕籠で、御用屋敷を出た。

そして、それきり、お琴の方は、還っては来なかった。

お琴の方が、生家へ戻ったのは、まちがいなかった。しかし、急病であるはずの実兄は、書院に、厳然として端座して居り、お琴の方をその前に据えると、

「手討ちにいたす。理由は、自らの胸に問え」

と、宣告したのであった。

実兄は、側妾の連名による密告を受けとっていたのである。

七

比丘尼屋敷とは、そのように、陰惨な隠居所であった。

佐保は、ここへ移されて、はじめの一月ほどは、おとなしくしていたが、ほどなく、理由をつけて、外出しはじめた。

べつに、位牌を護持しているわけでもなく、罪をとがめられている身でもなかったので、外出を制することはできなかった。

芝居見物、花見、屋形船遊びはまだよい方で、浅草奥山や両国広小路の盛り場を、平然とねりあるくにいたって、大層な評判になった。

これが、町奉行より用部屋へ報告され、

「やむを得ぬ。恋慕の男へ、輿入れさせよう」

ということになった。

しかし、小大名の十石取りの小姓のところへ、嫁がせることはできなかった。

先年、廃家になっていた七千石の旗本を、その小姓に継がせ、それに佐保を輿入れさせる面倒な手続きが、とられた。

大番頭、土屋千四郎。

それが、その婿に与えられた身分と姓名であった。

これだけならば、まことに、めでたい結びであった。

不幸な娘が、一人いた。

その小姓には、許婚者がいた。同じ藩の小納戸の娘であった。相思相愛であった。

降ってわいたような命令が下るや、小姓は、ひとたびは、はげしく拒否した。

しかし、藩王から、じきじきに、

「たのむ！」

と、頭を下げられては、家臣として、なお首を横に振るわけには、いかなかった。

江戸城用部屋で決定したことを、二万石の小大名が、はねつける勇気があろうはずはなかった。

「藩のためと思って、お受けしてくれ」

そう云われると、小姓は、

「はい」

と、両手をつかえ、頭を下げざるを得なかった。

第三者からみれば、これは、異数の出世なのであった。

許婚者をすてるぐらい、さしたる苦痛ではないことに思われた。

しかし、相思相愛の仲である男女としては、一度は、心中まで覚悟したほどの、地獄の苦しみであった。

藩のために、という大義名分が、若ざむらいに、泪をはらわせ、娘をすてさせた。

すてられた娘は、その夜、懐剣で、のどを突いて、死んだ。

もとより、この不祥事は、厳秘にふされた。

ひとつの悲劇を生んで、その婚礼は、はなやかに挙行された。

想いを遂げた佐保は、婚礼の日、絶え間なく、高い笑い声をたてていた、という。

おのが意志が通らぬことはない、という自信は、ますます、佐保の性情をおごったものにさせたようであった。

八

「どぶ、どうだな。このような夫婦が、仲むつまじくすごせると思うか？」

左門は、問うた。

「惚れあった夫婦だって、三年経ちゃ、あきがきまさあ。……婚礼の夜、牀入りした時から、この夫婦仲は、しらじらしいものだったのじゃござんすまいか」
「お互いに、女房を持ったことのない身ゆえ、夫婦とはどういうものか、早計には、きめられぬが、まず、常識として、このような夫婦が、円満な家をつくれるわけがあるまいな」
「あたりまえでございますよ。あっしのような野郎でも、そんな女房なんざ、七里けっぱい、ぶるぶるだ。まっぴら御免を蒙りやす。……どうも、さむらいという身分の御仁は、てめえ自身の気持で、自由に何ひとつ振舞えねえ、お気の毒な存在でございますね」
「だから、いずれ、遠からず、武家制度というものは、滅びると先日申した」
「そうなったら、どういう世の中になりやしょう？」
「金を持って居る奴が、勝であろうな」
「するてえと、大坂商人あたりが、大名旗本に、とって代る、というわけなんで――？」
「たぶん、な」
「そいつも、ちっとばかり面白くねえな。いまでさえ、大商人どもは、さんざ、したい放題のことをしてやがる。こいつらに、身分地位まで呉れちまったら、これア、いまのご時世よりも、やりきれねえことになりゃしませんかねえ」
「いずれ、と申しても、わたしやお前が、あの世へ逝ったあとのことだろう。見ないでも、すむ」
「へえ――。ところで、そのお屋敷でございますが、一丁さぐってみることに、いたしやしょうか？」

「まず、このあたりで、さぐってみるとすれば、その屋敷であろうが、岡っ引風情がふみ込める家ではないが、厄介だな」
「忍びのコツは、のみ込んだつもりで居りやすが……」
「わたしが、耳にしたところでは、公儀が、この屋敷を、なにかに利用している気配がある」
「何か、と仰言いますと？」
「公儀も、金の工面には、苦労している。武家法度というものを、つくったのはよいが、その制度がいまでは、おのれでおのれのくびを締めることに相成って居る。金もうけを、商人だけにまかせては居られぬ時世だ。公儀自身も、金をつくるてだてをしなければならなくなった。それには、おのれでつくった制度を、おのれで破ることも、敢えてしなければならなくなった。江戸城内で、これをやるわけにはいかぬ。世間の目をごまかして、ひそかな場所をつくる必要がある。……たとえば、加賀や薩摩が、さまざまの名目をつくって、蔭では、抜荷買いをやっているが、そういうてだてを、公儀も、とらねばならぬほど、財政は困窮しているのだ」
「成程――」
どぶは、目を光らせた。

九

左門は、云った。
「もし、公儀が、その屋敷を、そのような手段につかっているとすれば、警備は、厳重だ」
「へえ――」

どぶは、無精髭のあごを、なでた。
「岡っ引一人の力では、手に負えるものではない」
「ときけば、いよいよ、武者ぶるいが起ります」
「……」
「あたって砕けることにいたします。いざとなったら、おたすけ下さいまし」
どぶは、頭を下げておいて、縁側へ出た。
「どぶ――」
左門は、呼びとめた。
「へい、なにか？」
「お前は、前身は、さむらいであった」
この事実は、左門のほかは、知らぬことであった。
備前の海辺にある一万石の小藩の馬廻り役――それが、どぶの前身であった。
さむらいをすてたのは、かなりこみ入った事情があり、そのために、どぶは、三人ばかり、家中の者を殺傷していた。
切腹をまぬがれぬ身であったが、そこを、左門に、救われたのである。
救った時に、左門は、条件を出した。
「岡っ引になれ」
それであった。
どぶは、左門を見かえして、

「あっしに、装をかえて、そのお屋敷を、さぐれ、と仰言います」
「その方が、便利であろう。町小路家に、大小をたばさむ家来が、もう一人ぐらい、いてもよい。……爺に、そう申して、衣服を借りるがよい」
「無腰になって、久しゅうございますが、恰好がつくかどうか――？」
どぶは、首をひねりながら、下っていった。
用人に、その旨を告げると、
「お前が、武士のまねをいたすのか？」
あきれた表情を、された。
「馬子にも衣裳だアな。なんとか、ごまかすから、貸してくんねえな。……なに、刀は、抜かねえから、竹光でいいんだ」
よもや、元は武士であったとは知らぬ用人は、左門にききに行き、
「わたしが、そうするように命じたのだ」
という返辞に、
――酔狂なことだ。
と思いつつ、土蔵へ入って行った。
やがて――。
どぶは、いかにも、下級ざむらいらしいいでたちになって、庭へ出た。
使いからもどって来た小夜が、その姿を見て、
「あら！」

と、目を見はった。

「へへ……、どうだい。こうなると、まんざらでもねえだろう、小夜さん。見なおしたかい？」

小夜は、首をすくめて、くすっと、笑ったばかりであった。

今様吉田御殿

一

数日過ぎたある日——。

炎暑はつづいていた。

陽盛りの街中には、人影もまれになっているくらいであったが、ここ深川の木場には、ならんだいかだの上に、点々として、釣人が、腰を下して、浮子が動くのを辛抱づよく待っている。さまざまの笠で、眩しい陽光を避けているのだが、沖から渡って来る汐風もかえって、肌を汗ばませるのに役立つばかりの、灼りつけられる暑さに、じっと我慢しているとは、よほど、釣の好きな連中とみえる。

河岸道を歩いて来たどぶは、その景色を眺めて、

「家で邪魔者あつかいをされた奴、浮世のすね者、それから、悩みごとを忘れてえとねがっている野郎——そういうのが、そろっていやがる」

と、つぶやいた。

ただ、釣が好きで、この炎暑の中に、幾刻も、じっと太公望をきめ込んでいる、とは到底、どぶには、考えられなかった。

海辺に生れて育った男であったが、釣などは、一度もしたことがなかったのである。

いかだの上へとび降りたどぶは、釣人たちへ近づいて、一人一人へ鋭く視線を走らせたが、

——こいつだ！

と、うなずいた。

深編笠で顔をかくしている武士であった。衣服は立派であったし、竿も、びくも、他の釣人が持参しているのとは、ちがっている。

どぶは、武士の背後に、立った。

やがて、浮子にあたりが来た。

武士は、竿をはねあげた。

かかったのは、ハゼであった。

武士は、しかし、そのハゼを、釣針から取ると、びくには入れずに、また、水中へ投げもどした。

ハゼは秋の彼岸から、といわれている。彼岸の中日に釣ったハゼを喰べると、中風にならない、などという迷信も生れていた。

そのために、武士は、ハゼをすてたのであろうか。

どぶは、びくの中をのぞいてみた。

何も、一尾も入っていない。

「失礼ながら、なぜ、ハゼをおすてなされるのですかな？」
にわか武士のどぶは、問うた。
「……」
武士は、返辞をしなかった。
「彼岸にならねば、ハゼを喰べぬ、という市中のならわしに、したがって居られますか？」
それをきくと、武士は、
「そのようなならわしがあるなどとは、知らなかった」
と、云った。
「では、どうして、また放ってやられるのですかな。せっかく釣りあげられたのを、もったいない」
「それがしの勝手でござろう」
武士は、ひややかに、こたえた。

二

「もし、釣りあげられた魚が、ご不用ならば、身共に頂戴できますまいか」
どぶは、申し入れた。
「欲しければ、お持ちになるがよいが、そうやって、うしろに、いつまでも立って居られるのは、当方は、少々迷惑に存ずる」
武士は、云った。

「は——まことに、申しわけありませぬ。……ご清遊中を、とんだおじゃまをして、恐縮に存じますが、実は、てまえは、少々、人相を観まするのでな」
「……」
武士は、そう云われて、眉宇をひそめると、あらためて、話しかけて来た見知らぬ他人を、見かえした。
小藩の下級武士以外の何者でもない、見るからに泥くさい田舎者である。醜男も、ここまで徹底すると、かえって、愛敬があるていの男である。
勤番で、江戸へ出て来て、うろうろと見物して歩いているのだ、と受けとれる。
「身共の人相が、どうかいたして居る、と云われるのか？」
「は——。非礼をおゆるし下さるならば、申しあげますが……」
どぶは、神妙な表情で、云った。
「うかがおう」
武士——旗本大番頭・七千石・土屋千四郎は、緊張した面持をみせた。
どぶは、わざと、田舎者らしく卑屈な態度をつくって、
「いや、そ、そのように、ひらきなおって下さると、甚だ申しあげにくうござるが……、ここまで、ぶらぶらと、参りまして、ふと、お手前様のお貌を、拝見したとたん、はっと、相成りましてな」
「凶相だと云われる？」
「い、いや、そうは申しませぬ。……決して、お手前様のお貌は、凶相ではございませんぞ。い

や、むしろ、異数の出世をなさる相と、お見受けつかまつりました。ただ――」

「ただ――？」

「つまり、そのう……ただ、手前が学んだ人相学によれば、お手前様の、その眉間にある黒子、また、口の両脇に刻まれた皺、さらに、その耳朶のかたち――など、すべて、出世なされば、なさるほど、ご家庭上の不幸をおまねきなさることを、顕して居りまするな」

「……」

「あるいはまた、身辺に、なにやら、怪しいきざしがあり、やがて、それが、途方もない不幸な出来事となって、お手前様を憂悶の極に、陥らせる」

「……」

「もしや、お手前様が、そのことを、お気づきなされているのであれば……」

「……」

「いまのうちに、身分地位をおすてなさる――ということは、できないまでも、なにか、至急の方策をお樹てなさらぬと、あとで、とりかえしのつかぬことに相成るやも知れませぬな」

三

不意に――。

土屋千四郎が、口をひらくと、哄笑を発した。

その声の高さは、かなり距離のはなれている他の釣人たちまでが、びっくりして、こちらへ、視線を向けたくらいであった。

「はっははは……」

土屋千四郎は、笑いつづけた。

ひどくしつこい笑いかたであった。

――おかしくて、笑ってはいねえんだ！

どぶは、そこは独特の鋭いカンで、看てとった。

笑いおさめた時、土屋千四郎は、きわめて鄭重に、頭を下げた。

「観相の儀、忝じけない。身共が、出世の相を所有している由、みごとに的中つかまつった。……身共は、目下は旗本の列に加わり、七千石の屋敷をかまえて居り申すが、もとをただせば、田舎の小藩の十石取りの小姓の身――、まさしく、異数の出世をいたしたと申せる。それも、それがしが、なにか非常の才能、天賦があって、おとりたてにあずかったというのであれば、まだしも、なんの取柄もない凡夫にすぎ申さなんだのが、降ってわいたような幸運をさずかり申した。貴公の観られた通りの出世人相でござろうな」

「はあ――」

どぶは、土屋千四郎の自嘲のひびきをこめた告白を、きいて、うなずいたが、すかさず、

「失礼ながら、そのお小姓よりおとりたてになる際、なにか、身辺に、ご不幸は、起りませなんだか？」

「……」

「起ったのでは、ありませぬかな？」

「……」

対手の端正な顔に、苦渋の色が、一瞬、刷かれるのを、どぶは、冷たく正視した。

ややあって、土屋千四郎は、かぶりを振った。

「いや、何事も、起りはいたさなんだ」

「左様でありますか」

どぶは、土屋千四郎がかくすのは、当然だと思った。

「で——現在は、お幸せなので？」

「いかにも！」

土屋千四郎は、はっきりと、うなずいた。

「途方もないおとりたてにあずかりながら、江戸城内でさげすまれることもなく、妻との仲も円満であり、家来たちもよくつかえてくれて居り……何ひとつ、不足不満は、ない。ごらんの通り、一人で外出して、半日の釣を愉しむ閑暇もござるよ」

そうこたえて、土屋千四郎は、明るく微笑してみせた。

そう云われると、どぶも、言葉の返しようもなかった。

「それは、まことに、お幸せなことでございます」

「左様——、幸せすぎて、かえって、それが、身共のしりをおちつかせなくして居ると申せようか」

土屋千四郎は、やおら、立ち上った。

「お近づきのしるしに、一献さしあげたい」

四

やがて、土屋千四郎とどぶは、深川随一の料亭八百吉に、あがった。

すでに、馴染になっているらしく、土屋千四郎の姿を見るや、女将はじめ、女中全部が走り出て来て、嬌声をあげた。

「色男とは、果報なものでござる」

どぶは、思わず、ひがみを、口にした。

こんな高級料亭に、まだ一度もあがったことのなかったどぶである。

したがって、素姓のばれるおそれはないつもりであった。

いかにも、途方もない場所にともなわれて、恐縮しきったていで、片隅にかしこまった。

すでに——。

羽織と称される芸妓が七八人、幇間を二人ばかり加えて、座敷はにぎやかになった。

土屋千四郎は、しかし、床柱を背にして坐って、芸者の酌を受けるだけで、自分からさわごうとはしなかった。

口数もすくなく、ただ微笑しながら、芸妓の踊りや、幇間の滑稽な芸を、眺めているだけであった。

——もともと、こんな遊びをする柄じゃねえんだ。屋敷の中が、くそ面白くねえから、むりに、うさばらしをしてやがるのだ。

どぶは、その様子を、ぬすみ視ながら、胸のうちで、つぶやいた。

芸妓たちも、酔って、ようやく座がみだれた頃あい、一人の幇間が、どぶの前へ来て、酌をするふりをしながら、小声で、

「あっしは、親分を、知って居りやす」

と、云った。

どぶは、なにか可笑しいことを云われたように、にこにこして、

「御用筋で、化けた。……おめえ、あの殿様の供をして、押上のお屋敷へ、行ったことはねえか？」

と、たずねた。

「とんでもありやせんや。土屋の殿様は、ちゃあんと、晩飯前には、お帰んなさいます。芸妓や幇間末社をひきつれて、ご帰還なんてえ、粋なまねをなさるわけがありやせん。なにしろ、奥方様は、公方様のご落胤でございますからね」

「その奥方様が、手のつけられねえほどの悍馬だ、ときいたことはねえか？」

「さあ――？　そこまではね。しかし、たぶん、そりゃそうでござんしょうね。こちとら下賤のやからが、ご推察申し上げたてまつっても、公方様の御落胤を、お嬶になさりゃ、これア、肩のこることでござんしょうからね」

「殿様は、ここで、よく遊びなさる模様だな？」

「十日に一度ぐらい、でござんすかね」

「いつも、ああやって、おっとり坐っているだけかい？」

「ご自分からさわぎなさることは、ござんせんね」

その時、土屋千四郎が、どぶへ声をかけた、

「こちらへ寄られい」

五

どぶは、土屋千四郎の前に、坐った。

かなり酩酊のていをよそおって、

「どうも、相判りませぬな」

と、云った。

「なにが――？」

千四郎は、微笑を保ちながら、見かえした。

「お手前様の人相が――でござる」

酔眼を据えて、どぶは、舌なめずりした。

「お手前様は、出世なさればなさるほど、不幸になる御仁じゃ。いや、そうにまちがいござらぬのでござる！」

「……」

千四郎は、こんどは、木場に於ける時とちがって、否定はしなかった。

「白状なされては、いかがなものでありましょうや？」

どぶは、首を突き出した。

「お手前様と奥方様が、仲むつまじゅうくらして居られる道理がない」

「……」

「さ——正直に、白状なされませい！」

どぶは、千四郎の膝へ、手をかけた。

千四郎の顔面から、微笑が消えていた。

しかし、白状する代りに、しずかに、どぶの手をどけると、

「貴公は、今宵は、ここで、ゆっくりとすごされるがよい」

と云いおいて、立ち上った。

「これは、何事！　わし——いや、それがしを、一人、すててておかれますのか！」

「せっかく、出府されたのだ。隅田川の水で洗いあげた白い肌も、味わってみられるがよかろう」

「もし！　勤番者を、さげすまれるか！　……田舎者でも、武士の誇りがござる」

叫びたてるどぶにかまわず、千四郎は、さっさと、座敷を出て行った。

芸妓、幇間が、のこらず、送って出て行き、とりのこされたどぶは、とたんに、あぐらをかいて、ひとつ、くしゃみをした。

岡っ引と看破った幇間が、すぐに、もどって来て、

「親分、抱きやすか？」

と、云った。

「あたりめえだ。殿様のおゆるしが出たんだ。抱かずに、けえれるか」

「七人のうち、どの妓がご所望で？」

「こっちが、ご所望でも、あっちが、そっぽを向きやがったら、お手あげじゃねえか。……このおれでもいい、とうなずくやつを、つれて来な」

「親分でいい、とうなずく妓がいるかどうか」

「この野郎、おれをこけにしやがると、てめえのへそくりを、客の懐中から盗ったことにして、まきあげちまうぞ」

「くわばら！　……親分と看破ったばっかりに、とんだ藪蛇だ」

幇間は、出て行った。

どぶは、大きなくしゃみを、もう一度してから、

「女を抱こうか、七千石取ろか——酔うて、伏見の千両松、と来やがった」

と、大声で、云って首を振った。

六

その日の黄昏どき——。

どぶは、もとのよれよれの貧乏姿にもどって、押上村の野道を、ひろっていた。

ふたり暑さを川風に
流す浮名の涼み船
合わす調子の爪びきは
水ももらさぬ縁かいな

顔に似合わぬ美声を、夕風にのせて、ほろ酔い機嫌ともみえる足どりで、大雲寺、最教寺とふ

たつの古刹のならんだ広い往還を通って、最教寺沿いに、道を曲った。
いつの間に、そこに建てられたのか、真新しい海鼠塀が、およそ二町も、のびていた。
ひとつの森を、そのまま、屋敷内に容れたらしく、塀の上にそびえているのは、いずれも、欝蒼とした老樹であった。
「へっ——忍び込む夜の、その間夫振りは、か」
どぶは、枝ぶりを仰ぎながら、小声で唄いつつ、塀に沿うて、歩いた。
「泥棒かぶりに、尻端折り、抜き足さし足しのび足、情婦は、どこかい、二階かい」
とたんに——。
「こらっ！」
呶声が、かかった。
ふりかえると、いつの間にか、武士が二人、つッ立って、睨んでいた。
「ざれ歌などをうたう場所ではない。立去れ！」
「へえ——」
どぶは、卑屈に、腰を折った。
「あっしは、べつに、そのう……怪しい者じゃございませんので——」
「うろうろするな、と申して居るのだ」
「うろうろしているから、うろんな奴というわけですかね」
「黙れっ！　雑言、許さんぞ！」
「大層きびしく警護なすっておいでですが、このお屋敷は、いってえ、どなた様が、おすまいなので——？」
「その方などの知るところではない。立去らんか！」
「おっと、そのぶんにはすておかん、と仰言られる前に、去ります、消えます——さようなら」
酔っぱらいとみせて、どぶは、よたよたと走って、遠ざかった。
しかし——。
陽が落ち、月が空に冴えた頃合、どぶは、最教寺に隣りあわせた雑木林の中から、するりと、出て来た。
ゆっくりと、その新しい屋敷に近づきながら、
——こいつは、どうやら、いのちがけの仕事になりやがった。
と、自分に覚悟をさせていた。
外を歩いているだけで、見咎められたのである。
塀内へ、忍び込んで、発見されたならば、それこそ、総動員で襲いかかって来るに相違ない。
ということは——。
忍び込む甲斐があるというわけである。

七

こんどは、路上で誰何されないように、前後へ、鋭く神経を配りつつ、どぶは、海鼠塀に沿うて、進んだ。
正門は、避けた。

向いの雑木林に、身をひそめて、警備の士が二人づれで行きすぎるのをやりすごすことが二度ばかりあって、どぶは、裏手へまわった。

その時——。

裏門脇の潜り戸が、開かれた。

とっさに、どぶは、地面へ、ぴたっと身を伏せた。

出て来たのは、数人の武士にまもられた駕籠であった。

——ひとつ、こいつを尾けてみるか。

どぶは、忍び込むのを、あとまわしにした。

もし、主人の土屋千四郎が、どこかへ出かけるのであったならば、どうやら、尾行は、徒労ということになろう。

別の人物ならば、むだ足にはならぬような気がした。

——あるいは、厠姫かも知れねえぞ。

そう想像すると、どぶは、胸がはずんだ。

駕籠が、土屋家のものであることは、月光で、その紋を、どぶは、視てとったのである。

裏から、ひそやかに出て行くのは、人目をはばかるからであり、これは、主人夫婦か、そうでなければ、内密の訪問客を送るのを、意味している。

内密の訪問客ならば、これこそ、尾ける甲斐があるというものであった。

四人の武士に前後をまもられた駕籠は、しずしずと、西へ向って進んだ。

——どうなる、こうなる、ああなりゃ、どっこい、か。天網恢々、疎にしてもらさず、という

やつだぞ。

どぶは、妙にうきうきして来た。

駕籠は、やがて、小梅村をまわって、西尾隠岐守の下屋敷前を過ぎた。

業平橋にさしかかったので、

——旗本屋敷に入りやがるな。

と、どぶは、見当をつけた。

業平橋を渡れば、旗本の家がならぶ外割下水に入ることになるのだ。

意外にも——。

駕籠は、業平橋の上で、停った。

「おや？」

どぶは、思わず、のびあがった。

四人の武士が、駕籠わきへ寄った。

とみるや、人間を一人、ひき出して、橋上から、横川の流れへ、投げたではないか。

高い水音が、宵空にひびいた。

駕籠は、何事もなかったように、ひきかえして来る。

——畜生！　やりやがった！

どぶは、駕籠を行きすぎさせると、いそいで、業平橋へ近づこうとした。

すこしばかりあせっていたので、駕籠がものの三間も行き過ぎないうちに、どぶは、物蔭から出たため、武士の一人がふりかえって、

「お——彼奴！」

と、叫んだ。それは、夕刻、海鼠塀外で、見咎めた武士だったのである。

八

「待てっ！」

呶鳴られて、どぶは、舌打ちした。

こうなれば、居直るよりほかはなかった。

どぶは、駕籠をすてて、馳せて来る四人の武士を、平然と、迎えた。

——死体を横川へすてるのを、見たんだぞ。こっちに、たんかの利があるぜ。

「貴様は、先刻、屋敷前をうろうろしていた男だな」

一人が、云った。

「よく、お判りで——」

どぶは、対手がたを小莫迦にしたような態度をみせた。

「おのれは、屋敷をさぐりに来た怪しい奴だな？」

「怪しまれるようなことを、お屋敷内で、なすっておいでなので？」

「雑言、許せぬ！」

四人は、一斉に、抜刀した。

どぶは、一歩退って、

「そっちが、そう出るなら、こっちも、正体を、はっきりさせやすかね」

やおら、懐中にかくしていた十手を、抜き出してみせた。

「これでさ、あっしの正体は——」

十手をひらひらさせてから、

「ここ十日あまりのうちに、妙な事件が起って居りやす。大川の百本杭に、白骨死体が、ひっかかった。それから三四日経って、品川の芝居小屋の女形が、殺された。どうも、この下手人は、同じ野郎らしい。……白骨死体を大川へ運んだのも、中村菊也へ小柄を投げつけたのも——実は、お前さんがたのしわざじゃねえのか。それが証拠に、いま、また、横川へ、死体を投げ込んだ」

どぶの言葉のおわらぬうちに、一人が真正面から、斬りつけて来た。

どぶは、苦もなく十手で、払ってから、

「これが返辞なら、下手人であることを白状したことになる」

と、云った。

「手ごわいぞ！」

一人が、叫んだ。

すると、いちばんうしろにいた者が、

「おれにまかせろ！」

と、云って、前へ出て来た。

ぴたりと青眼につけた構えを、すかし見て、どぶは、

「できるね。お前さんが、中村菊也を、殺ったのじゃないかね」

と、あびせた。

「貴様、とんで火に入る夏の虫だ」

「ご冗談で——。あっしを、ただの岡っ引と見て下すっちゃ、困りやす。これでも、もとはさむらいで、兵法ひと通りは修めて居るんでね」

「えいっ！」

凄じい一撃が、来た。

「むっ！」

どぶは、この男専用の長い十手で——右手で柄を、左手でその先端をつかむと——頭上へかざして、その一撃を、受けとめた。

「うぬっ！」

対手は、力ずくで、どぶを圧倒しようとした。

九

ちょうど、頭上へ横たえた十手の、まん中あたりを、白刃は、噛んでいた。

押す力と受ける力と——その差が、すこしずつ、目に見えて来た。

どぶのからだが、だんだん沈みはじめた。

と——一瞬。

「おりゃっ！」

どぶは、懸声とともに、体当りをくれた。

対手は、ひくく、「うっ！」と呻くと、上半身を折った。

白刃を杖にして、身を支えようとしたが、それが叶わず、どさっと、地べたへ膝をつき、徐々に崩れた。

わきをすりぬけたどぶの両手には、その十手が二つにわかれていた。

左手には、鞘になった鉄棒がにぎられ、右手には、双刃の細く鋭いやつがさげられていた。

残りの三人は、意外な仕込み十手に、驚愕しつつ、切先をそろえた。

いま、脾腹を刺された者が、一番の使い手であろう。

たのみとする手練者を仆されて、三人は、かなり怯じ気づいているに相違なかったが、あとへ退けぬ立場にあるらしく、じりじりと肉薄して来る。

「止しゃいいんだ。お前さんがたこそ、とんで火に入る夏の虫だアな」

どぶは、うそぶいた。

「えいっ！」

「やあっ！」

のどをしぼった気合もろとも、一人が突きに、一人がおがみ撃ちに、襲いかかって来た。

どぶは、充分の余裕をもって、おがみ撃ちの白刃を、鞘で受けとめておいて、突きに来た白刃を肩わきに流した。

そして、

「痛いぞ！」

と、叫びざま、まず突きの敵の片目を、ぐさと刺した。

それを、ひき抜いたとみた刹那には、もう一人の片目をも、容赦なく、つぶしていた。
のこったのは、一人である。
どぶは、ツツッと迫って、
「どうするね？」
と、云いかけた。
その返辞は、狂気じみた呶号であった。
夜闇を截って、すて身の斬り込みを、敢えてはなって来たが……。
どぶが、無造作ともみえる動きで、十手刀をさしのべるや、敵は、それをのぞむがごとく、とびかかって来て、鋭い尖端に、おのが胸いたを、与えてしまった。
あっけない、といえる闘いであった。
どぶは、十手を、腰に落すと、すたすたと業平橋へ、進んで行った。
四人の敵には、いずれへも、致命傷は与えなかったつもりである。
敗北を蒙ったからには、のめのめと、屋敷へは戻ってゆけぬであろうが、生命をとりとめれば、なんとか生きてゆく手段もあろう。どぶは、案外、人を憎まぬ男であった。

十

やがて、どぶは、横川へ、小舟をうかべて、提灯を水面にかざしながら、視線をまわしていた。
船頭は、いぶかって、
「なにをさがしなさるんで？」

と、問うた。
「土左衛門だ」
「げっ！」
船頭は、かぶりを振った。
「冗談じゃねえ。……まさか、この舟へひきあげるんじゃねえでしょうね？」
「ひきあげさせてもらうぜ」
「恨みが、舟へのりうつって来たら、たまらねえ」
船頭は、ぶつぶつ云ったが、どぶの腰にある十手に対して、つよく反対もできなかった。
「お――あそこだ」
どぶが、叫んだ。
舟は、ゆっくりと、葦を鳴らして、どぶの指さすところへ、漕ぎ寄せられた。
どぶは、片手をのばして、水面にふわふわと漂う衣服をつかんだ。
力をこめて、ひきあげようとして、
「おっ！」
流石のどぶが、ぞうっと、総毛立った。
その顔が、どくろと化していたのである。
左様――。
骸骨となっているのは、顔だけであった。頸はちゃんと胴につながって居り、手も足も完全であった。

「船頭、足の方をつかまえろ！」

どぶは、命じておいて、ずるずると、死体を、ひきあげた。

船頭は、やれやれと首を振ってから、何気なく、その死顔を、提灯のあかりに、一瞥した。とたん、

「わあっ！」

と、悲鳴をあげて、腰を抜かしてしまった。

どぶの方は、

「これで、はっきりしやがった」

と、自信に満ちた独語を、もらしていた。

百本杭にひっかかっていた白骨死体が、あの土屋千四郎邸から、かつぎ出されたことは、疑う余地はなくなったのである。

それにしても、これは、なんというむごたらしい殺しかたであろうか。

五体は、まだ、生命を失ってから間もない、と判るにもかかわらず、顔だけが、どくろになっているとは！

どういう殺しかたをしたのか、想像もつかぬ。

——顔だけを、地獄の鬼に、むさぼり食わせた、というのか？

どぶは、首をひねった。

——こいつは、いくら、左門の殿にも、見当がつくめえ。

どぶは、この死人を、衣裳から見当つけて、寺小姓と看た。大僧正などというやからから、夜毎もてあそばれている陰間に相違ないのであった。

誰も知らない

一

「いやはや、さてはや——早野勘平、早駕籠で、はやさしかかる大手門、会うてかなしや、城代の、大石恋しも赤穂が浜」

首を振りながら、町小路家の裏門をくぐったどぶは、台所口から、顔をのぞけて、そこにいる小夜に、

「ひとつだけ、きかあ、小夜さん」

と、云った。

「なんですか、親分？」

「死ぬほど、惚れる、ということは、知っていなさるね？」

「女は、みんな、そういう恋にあこがれています」

「ところがだ、殺すほど惚れる、という気持は、わかりやすかね、小夜さん？」

「それは、男のひとでしょう」

「どっこい、女にも、そういう気持を持ったのが、たまには、いるらしい」

「まあ、そうですか」

「小夜さんの心の中にも、しんそこ惚れたら、殺して喰べてしまいたいほどになるおそろしい気持がありやすかね？」

「気味のわるいことを云わないで下さい」

「おぼこの小夜さんに、きくのが野暮か。……殿様は？」

「お午寐です」

「いいご身分だ。こちとらも、盲目になりてえ」

「殺すほど惚れてもらって、針で目でも突いてもらったら、いかがですか」

「ほら——そういう邪険なことを云うところをみると、小夜さんのような、ういういしいお嬢さんも、どこかに、おそろしい夜叉がひそんでいる証拠だぜ」

「いやなこと——」

小夜は、つんとなって、横を向いた。

「左門の殿様は、そいつを見抜いて、手をつけねえのかも知れねえ」

「親分！」

小夜は、きっとなった。

「云っていいことと、わるいことがあります」

「平にご容赦——」

どぶは、庭へまわった。

松の枝から、ぴょんと、小猿がとび降りて来て、どぶの肩にとまった。

「ちょっ！」

どぶは、舌打ちして、

「なれなれしくしてもらうめえ。おれとおめえは、相性がわるいんだ」

と、はらいのけた。

どぶは、申年生れであった。

左門は、座敷に、横たわっていた。

「呼んでみようか、呼ばずにもどろか——会いに来たには、来てみたが、主は手枕、空寐入り」

どぶは、小声でつぶやきながら、縁側へ、そっと上った。

また、小猿が、どぶの膝へぴょんとのった。

どぶは、袂から、非常に美しい鳥の羽根を、とり出すと、まずそれで、自分の鼻さきをなでてみせて、小猿に渡し、左門の方へ押しやった。

二

小猿に起されて、しずかに坐った左門の手には、その綺麗な羽根が、持たれていた。

「この羽根が、どうかしたか、どぶ？」

「へい」

どぶは、いつもながらの左門の鋭い直感力に、感服しながら、

「昨日の宵のことでございます。あっしが、例の——厠姫屋敷をさぐりに行きましたところ、駕籠が一挺、裏門から出てめえりやしてね……」

どぶは、その奇怪な死人遺棄の出来事を、くわしく語って、

「なんとも、はや——面だけが、髑髏に——目玉はえぐりとられ、鼻も口も耳もなくなり、頬も頤も骨だらけになったそいつが、しっかと、にぎりしめていたのが、その羽根なんでございます。赤と青と黄がまだらになって、目がさめるような美しさでございます」

「南方の土人国に棲む極楽鳥、という鳥のものかも知れぬな」

「極楽鳥——成程。死人が、極楽浄土へ行くことを願って、にぎりしめていた、というあんばいでございますが、どうも、あっしには、なんとも、合点がいかねえ」

「それは、そうであろう。顔だけが、髑髏になった死体など、いまだ、きいたことがない」

「ま、これで、百本杭の白骨死体も、厠姫屋敷からはこび出されて、すてられた、と判明いたしやしたが……、いってえ、どういうしかけで、あんなむごたらしいざまになるものでござんしょう？」

「わたしにも、判らぬ」

「へえ——」

どぶは、しかし、左門が、心中では、なにか、鋭い推理力を働かせているのではあるまいか、とその顔を、じっと、見まもった。

すると——。

「ひとつだけ、わたしが、自信をもって、云えることがある」

左門が、云った。

「なんでございましょう？」

「殺された女形——中村菊也、と申したな——それが、夢遊病者のようになっていたのは、たぶん、阿片の毒に冒されていたからであろう」

「へえ？　阿片！」

「百本杭の土左衛門も、昨夜お前がひきあげた陰間のような小姓姿の死人も、いずれも、阿片をのまされて、中毒に罹っていたに相違ない。その状態で、殺されたのであろう」

「するってえと……、阿片の中毒がひどくなったら、肉が落ちて、くたばると、髑髏になるのでございましょうか？」

「そうはなるまい。白骨や髑髏にされたのは、別の毒物に漬けられたのかも知れぬ。それは、わたしにも、なんとも、見当はつかぬ」

「阿片中毒に罹っていたことだけは、確信なさいますので——？」

「お前が、中村菊也にふれた直後、わたしの前に来た時、その匂いがした」

盲人の嗅覚であった。異常な鋭さだったのである。

三

「つまり——」

どぶは、小さな目を光らせた。

「土屋千四郎邸内では、阿片を密用している。それも、厠姫が、使っているのではないか、とお考えなさいますので？」

「誰が用いて居るか——それは、つきとめてみなければ、断定はできまい」

左門は、こたえた。

「しかし、殿様――。あっしが、勤番侍に身を変えて、当ってみたところじゃ、土屋千四郎は、至極まっとうな御仁でございました。それはもう、誰からも好感を持たれるような、口ぶりも、態度も、怪しい気配なぞ、みじんもない……」

「孤独な翳など、みじんもなかった、と申すのか？」

「へえ――孤独な翳、と仰言られると、それは、どことやら、さびしそうなところもみえないことはございませんでしたが――」

「お前に、首をひねらせなかったところをみると、よほど人間ができている、とみえる。それとも、心中を全く押しかくす狡猾な性を持って居るかな」

「あっしは、どうも、善良な御仁のように見受けやした」

どぶは、土屋千四郎に、深川随一の料亭八百吉で饗応を受けた話をした。

黙ってきおわった時、左門は、ふっと、口辺へ、皮肉な微笑をうかべた。

「どぶ――」

「へえ？」

「土屋に、女を抱かせられたのではないのか？」

どぶは、あっとなった。

――この殿様には、何ひとつ、かくしだてができねえ！

「おそれ入りました」

どぶは、ぺこりと、頭を下げた。

「そのために、お前の眼力が、にぶったのかも知れぬ」

「へえ――」

「その料亭を出た土屋が、はたして、帰邸したかどうか、そこまで、つきとめるのが、お前のつとめではなかったか」

「申しわけございませぬ。酒と女となると、あっしは、からきし、だらしがなくなって、われながら、愛想がつきます」

「ま、そこが、お前らしく、人間くさい点であろう。……どぶ、このまま、すてておくと、次々と、むごたらしい殺人が、つづけられるであろう。早急に、くいとめねばならぬ」

「殿様、あの屋敷じゃ、大目付から、評定所へお申し出があって、お取調べ、ということになるのじゃございますまいか」

「いや――」

左門は、首を振った。

「閣老が承知の上で、あの屋敷を、なにか――金の工面の場所に使っているのであれば、大目付といえども、手がつけられぬ」

「左様で――」

「お前の力で、やるのだ、どぶ！」

左門は、きっぱり云った。

四

どぶは、左門から、「お前一人の力でやるのだ」と云われて、思わず、臍の下のあたりが、冷

たくなった。

「へい」

うなずいたものの、どぶは、肩に重いものがのしかかって来るのをおぼえた。

左門は、うすい微笑をうかべて、

「土屋の屋敷に、忍び込めば、お前が、舌なめずりする光景が、目撃できるかも知れぬ」

と、云った。

「生命とひきかえに拝見するんじゃ、あまり、ぞっといたしません」

「手伝ってくれる者は、他に居らぬのだ」

「わかって居りやす」

「土屋の屋敷へ、忍び込む前に、大奥医師の小杉戸玄斎を、たずねるがよい。いま、手紙を書いてつかわす」

左門は、手をたたいた。

小夜に、紙と筆を持参させる左門を、どぶは、けげんに見まもった。

盲目で、字が書けるのであろうか——その疑問が、当然起っていた。

左門は、小夜に、墨をすらせておいて、巻紙と筆を把った。

すらすらと、巻紙の上へ、筆を走らせはじめた手つきに、なんのぎごちなさもなかった。

どぶは、舌を巻いた。

「では、これを——」

封書を手渡されて、どぶは、思わず、

「お見事なもので——」

と、云った。

『小杉戸玄斎殿、硯北』という筆蹟は、能筆というよりほかはなかった。

左門は、たしか、十歳の頃、盲目になった、とどぶは、きいていた。十歳までの手習いで、このように能筆になれる道理がない。盲目になってから、習ったのであろうが、臨書の不可能な身で、どうして、このような書道家になれたのであろうか。

どぶには、見当もつかなかった。

左門は、どぶの疑問に、とんじゃくなしに、その美しい羽根を、小夜へさし出し、

「小夜、お前は、このような羽根をもった美しい鳥を飼ってみたいか？」

と、たずねていた。

「まあ、きれいな！」

小夜は、受けとってみて、

「それは、もう、飼ってみとうございます」

「くちばしから、人を殺す毒を出す鳥であってもか？」

「え？　そ、そのようなおそろしい鳥が、いるのでございますか？」

「たとえば、の話だ」

「そんな毒をもった鳥ならば、ごめん蒙ります」

「はは……、お前なら、そうであろうな。ところが、世の中には、そういう毒をもった生きものを好む女性もいるらしい」

「ほんとでございますか？」
「ほんとうか嘘か、どぶが、これから、突きとめに参る」

五

大奥医師・小杉戸玄斎は、小肥りの、小さな目に、丸い鼻をもった、あまり品のない五十男であった。

下級ざむらいの装になったどぶが、さし出した町小路左門の手紙を、

「ほう、珍しい。町小路殿が、わしに書状をな」

と、受けとって、すぐに、披いた。

黙読してから、玄斎は、

「ふむ！」

と、ひとつ、呻くように、鼻を鳴らした。

「これは、難題じゃな」

どぶを見かえして、

「町小路殿は、大奥に於いて、麻薬使用の有無を、問われて居る」

と、云った。

「おきかせたまわりますよう、願い上げます」

どぶは、頭を下げた。

「わしは、大奥出入りの医師じゃ。したがって、大奥のおくらしぶりについて、これを、巷間に

つたえることは、かたく禁じられて居るな」

「承知つかまつります」

「ところが、町小路殿は、そのかくされている一面を、教えろ、と申される。こまったのう」

「何卒、お打明けの程を――」

「かくされた場所を、知りたいというのは、人情であろうな。まして、数百人の年若い女人が、くらして居る長局の中のありさまと来ては、市中にある人々が、ひとしく興味を抱くはず――。それだけに、秘密はきびしく守られて居る」

玄斎は、どぶの顔を見ないで、語り出した。

江戸城はじめ大名の奥向では、御殿女中たちは、一種の幽閉状態ですごしている。

そこは、男子禁制である。七歳以上の男子は、大奥に泊めることは、許されていないのである。

表方の役人に会えるのは、御年寄とか、表使いとか、お使い番とかいう役目の女中だけであり、その他の女中は、一年中、男の顔を見ることはない。病気になって、医師に診察してもらう以外は、男と口をきくことはないのであった。

のみならず――。

御目見以上の高級の女中ともなると、奉公の期限がない。一生を、大奥ですごすのである。停年のない奉公ともなると、女としての感情は、尋常ではなくなるのは、当然であろう。

先年――。

水野越前守が老中になって、大奥女中のぜいたくを取りしまろうとした。すると、姉小路とい

う御年寄が、越前守に、
「妾をお持ちでありましょうか？」
と問うた。
越前守が、ある、とこたえると、
姉小路は、笑いながら、
「お手前様が、倹約政治をなさる御仁であっても、妾を持つのをお止めなさるわけに参らぬように、生涯禁欲を強いられてるわたくしどもが、少々のぜいたくをしても、これをおとがめなさることはできますまい」
と、こたえた、という。

六

「尼僧となって、仏につかえている身ではあるまいし、御殿奉公をしている女人らが、禁欲を一生強いられては、その代償として、うさばらしをなすのは、いたしかたのないことでな」
大奥医師・小杉戸玄斎は、笑いながら、どぶに、云った。
「信仰、戒律を強いられては居らぬ大奥の女中たちが、その欲情をまぎらわす手段として、ひそかに入手に苦心するしろものは、お手前も、およそ想像がつくであろうがな」
「は——、つまり、あれで？」
「左様、あれじゃ。長局の部屋には、必ず、枕草紙とあれが置いてあるな。天竺の水牛でつくったのとか、オランダから輸入された硝子製のやつとかな。お手前も、室町の横丁に、あれを専門

で売る店があることを、ご存じではないかな。こっそりと、頭巾で顔を包んで買いに来るのは、侯門内家の婦人が多いそうな。掖庭に幸いをのぞみ、永巷に泪を流すは、懐春女の常なり、という次第。……これを、とがめるわけに参るまい。さて、あれを用いるにあたって、空想をめぐらすだけでは、あきたらず、なにやら怪しい媚薬が欲しゅうなるのも、これは人情と申すもの。そこは、それ、蛇の道は蛇、というわけで、女人の執念というやつは、おそろしい。必ず、手に入れるのだな」
「女中がたの手に入るまでの道筋を、ご存じでありましょうか？」
「知らん——とこたえるよりほかはない」
玄斎は、かぶりを振った。
どぶは、にやっとして、
「そこまでお教え下さったのですから、ついでに、何卒——」
と、たのんだ。
「こたえられぬものは、こたえられぬわさ。そうであろうが——」
玄斎は——玄斎もまた、にやにやした。
どぶは、すかさず、話題を転じた。
「土屋千四郎という七千石のお旗本へ、お輿入れなされたご中臈がおいでございますな？」
「うむ」
「あの姫君——いや、ご中臈は、大奥の頃は、やはり、あれやら媚薬などをお用いでありましたでしょうな？」

「さあな。佐保様が、お輿入れなされたのは、たしか、二十一であったな」
「二十一ならば、あれを用いることをおぼえられていても、ふしぎはありますまい」
「ということじゃな」
「うかがいますが、姫君がお輿入れになるにあたっては、大奥医師である貴方様が、姫君のおからだを、念を入れて、診てさしあげ、五体正常——決して、つまり、その、小野小町ではない、と証をたてられるのでございましょうな？」
「医師のつとめじゃからな」
「佐保様というご中臈のおからだも、おしらべになったことと存じます。とすれば、あれを用いられたかどうか、すぐにお判りであったと存じますが……」

七

ひどく突っ込んだ質問をするどぶの真剣な表情を、玄斎は、いささか、迷惑そうに見かえした。
「ま——それは、お手前のご想像にまかせよう」
ぬらりと、にげた。
どぶは、しかし、ひきさがらなかった。
「佐保様は、すでに、その時、媚薬の中毒に罹られては居りませなんだか！」
「お手前！」
玄斎も、ようやく、警戒の態度を示した。

「わしは、町小路殿とは、かねてご懇意にねがって居るゆえ、依頼があれば、助力を惜しむにやぶさかではないが……、もし、佐保様のお身に、探索の手をのばす、と申されるのであれば、この小杉戸玄斎、平に、かかわりあいは、ごめんを蒙りたい」
「つまり、土屋千四郎殿のお屋敷内で、何が起っているか——一切、知らぬ顔をしていたい、と申されますのか」
どぶは、ずばりと、云ってのけた。
玄斎の顔面が、さっと、色を変えた。
——わかった！
どぶは、内心、叫んだ。
「お手前は、町小路殿に、伝えられい。土屋邸に関することは、いっさい、知らぬふりをされた方が、身のためである、とな」
玄斎は、つよい語気で、忠告した。
「伝えたく存じますが、わがあるじは、こうと思いきめたことは、断乎として、やりとげる気象でありますゆえ……」
「いや、他の屋敷のことなら、わしは、止めだてはせぬ。しかし、土屋邸内のことは、いかん！」
玄斎は、そう云って、膝をひとつ打った。
どぶは、黙って、頭を下げた。
玄斎は、わざわざ、玄関まで送って出て来て、
「よろしいな。くれぐれも、申しておく。町小路殿は、自ら身をほろぼすような振舞いをされて

はならぬ！」

と、くりかえした。

「お言葉、耳に入れて、忘れませぬ」

どぶは、門を出ると、ふうっと吐息した。

――さて、はや、いやはや、だ。

小杉戸玄斎が、色を作して、あれほど、くどく、念を押したのである。たしかに、これは、大変な対手を敵にすることになった。

――しようがねえや！

どぶは、首を振った。

――乗りかかった船だ。ここで、足を停めるわけにいかねえじゃねえか。

左門は、おそらく、町奉行が、忠告しても、ひきさがりはしないであろう。

どぶとしては、「お前一人の力でやれ！」と左門から云われたことを、思い出して、

「やらざアなるめえ！」

と、自分に云いきかせた。

性根のすわったところを、左門に知ってもらう――それが、ひとつの生甲斐ともなっているどぶであった。

地獄極楽

一

どぶは、ついに、単身、土屋千四郎屋敷へ、乗り込むことにした。

「うかうかしている間に、この夕風には、秋のにおいがしやがらあ」

田舎ざむらいの野暮な装になったどぶは、押上村の野道を、のそのそ辿りながら、つぶやいた。

日中は相変らずの炎暑であったが、朝夕は、ずいぶんしのぎやすくなっていた。

どぶは、小きざみに、首を振りながら、

「さても――午飯おわるや、ねむ気しきりに催し、市中路上の往来も、陽の光のつよさに堪えかねて、一時はとだえるまま、しぜん、近隣なんの物音もきこえず、職人どもは午やすみの肱枕、店では、算盤にもたれる手代もあれば、硯函へ肱をつきたる番頭もみえ、舟こぎする小僧もあり、勝手の方でも、女中ども思い思いのしのび眠り、奥では子供を寝かしながらの母親が、湯もじをみだして、くの字のかたち、いずれも他愛なきありさまにて、ふっと目がさめれば、もはや夕飯、行水に汗を流し、膳に向って、焼酎あわもり、さては亀の年のうるおいに、旦那の好きな囲碁将棋、また夜が更けて、翌日も、午飯おわれば、ねむるものと、まなこがおぼえている気楽なご時世も、江戸のならいとは、いとおかしけれ――」

と——行きすぎかけた古寺の門前の腰掛け茶屋から、
「なにを、ぶつぶつ、云っていなさるね？」
と、声が、かかった。
視線を向けたどぶは、
「これア、お前さんか」
と立ちどまった。
茶屋から出て来たのは、次郎吉という、もっぱら大名屋敷を狙って、夜働きする盗賊であった。童顔で、小肥りで、どう見ても、かたぎの小商人である。
「今日はまた、珍しく二本差しで——よう似合うていなさる」
「西国小藩の馬廻り役・十石三人扶持、岡っ引どぶ左衛門、見知りおかれい」
「ははは……、とても、これから、一命をなげ出して、ひと働きやろうという御仁には、見えぬ」
「なんだと!?」
どぶは、急に、鋭い目つきで、次郎吉を、見据えた。
「どうして、それを、知っているんだ？」
「蛇の道は蛇でね」
「おれのあとを、くっついてまわったとしか思えねえぜ」
「そんな酔狂なまねはしないね」
「じゃ、判るはずがねえじゃねえか。おれは、こんどは、お前さんに、助けてくれ、とたのむ気はねえぜ」
「あんたにはたのまれなかったがね」
「じゃ、誰に？」
「昨日、町小路左門様に、呼ばれてね」
どぶは、目をみはった。
「おめえ、殿様を知っているのか？」

二

「とんでもない」
次郎吉は、かぶりを振った。
「この盗っ人が、与力の殿様と知りあっているはずがない。……突然、使いが、みえたのさ、うちへ——」
この男は、日本橋の横丁で、小さな小間物店をひらいているのであった。十四五の小女一人をつかって、昼間は、まことに、つつましく、くらしている。
「へえ！　殿様がどうして、お前さんの店と正体を知っていなすったのか？」
どぶは、首をひねった。
「わしの方はまた、あんたが、しゃべっちまったのか、と思ったのだが……」
「おれは、しゃべらねえぜ。岡っ引が、盗っ人に手助けしてもらっている、と知られちゃ、赤っ恥をさらすことにならあな」

「はじめて、町小路の殿様にお会いしたんだが、目あきなんぞ、くらべもならねえ、万事お見通しだった」
「そうだろう。おれの親分だ。出来がちがってら。……で、なんて、云われたんだ？」
「どぶを、助けてやってもらいたい、と頭を下げなすった」
「ふうん！」
自分一人の力でやれ、と命じたのは、ほかならぬ左門ではなかったか。
ここで、一番、「おれは一人でやる！」と見得をきりたいところであった。のどもとまで、それが出たが、どぶは、ぐっとのみ下して、
「殿様のせっかくの好意だ。受けるとするか」
と、云った。
「あの殿様に、命令されると、これあ、蛇に見込まれた蛙だね。……あんたのような男が、一文にもならぬ岡っ引稼業を、まめにつとめているわけが、よく判ったよ」
次郎吉は、黄昏の明るさの中で、微笑した。
「へっ、同じ蛙でも、鼻っさきから、背中へ、ずうんと一本、太い骨が通っていらあ。あなが ち、町小路左門という蛇に見込まれているわけじゃねえんだぜ」
「ことわってもらわなくとも、よくわかっている。……ところで、土屋千四郎という旗本の屋敷へ、忍び込みなさるらしいが、あの屋敷は、わしも、手びきがしにくい」
「どうしてだい？」
「大名旗本屋敷は、格式石高によって、敷地のひろさから、建物の構造が、きめられている。しかし、あの厠姫のお下り屋敷は、まるで、十万石以上の大名屋敷のひろさでね。建物も、わけのわからぬ構造らしい。……いやなに、新築した頃、わしは、物珍しさに、そっと忍び込んでみたことがあるのだ」
「いやなら、ひきさがってもらおうぜ」
「だから、ひきさがる、と云っているのじゃない。いい機会をもらった、とよろこんでいるくらいさ。……ただ、あんたが、まごまごして、どじをふむといけないと思ってね」
「べらぼうめ！　まごつかねえように、こうして、ちゃんとさむれえになっているのじゃねえか」

三

どぶは、土屋邸の正門に立った時には、一人になっていた。
小脇に、進物らしい包みをかかえて、いかにも、使者とみせかけた。
どぶは、番士に、長崎奉行配下の横目である、と名のった。これは、考えた挙句の嘘であった。
公儀自ら、この屋敷を、海外との秘密の交易場所としているのであれば、長崎奉行よりの使者と名のれば、なんなく、主人に引見してもらえるはずであった。
はたして——。
どぶは、すぐに、書院へみちびかれた。
たしかに、これは、七千石の旗本のすまいにしては、規模が大きすぎた。

一万石以下七千石までの屋敷は、五十間四方が、ふつうであった。

ところが、この邸宅は、その数倍の規模であった。

将軍家姫君が輿入れした屋敷であれば、宅地の制を無視してもかまわないであろう。しかし、佐保という女性は、公には、姫君ではなく、大奥の中﨟でしかなかったのである。分限が、おのずときまっていたはずである。

にも拘らず、十万石相当の大規模な構造を持ったのは、必ず、その必要があったからに相違ない。

どぶは、敵の本拠へ乗り込んだ緊張感で、しばらくは、じっと、二間床の山水の掛物へ、目を据えていたが、

——こうコチコチになっちゃ、神経が八方へ配れねえ。

と、自分に云いきかせて、猫背を出すと、小声で、

「やぼな屋敷の、大小すてて、か」

と、うたった。

「腰も身がるな、町ずまい——よい、よい、よいやさあ……。ほら、おいでなすった」

跫音が、近づいた。

どぶは、上唇を、ぺろりとなめた。

障子が開かれたが、どぶは、すぐには、頭をあげなかった。

「お主であったか」

土屋千四郎のしずかな声をきいてから、どぶは、

「卒爾に、夜ぶん参上つかまつったご無礼の段、ご容赦下されい」

と、挨拶した。

「お主が長崎奉行の下で働いて居られるとは？」

「まっ赤ないつわりでござる」

どぶは、しゃあしゃあと云ってのけてから、

「しかし、ここに持参つかまつりましたのは、長崎のオランダ商館より出たる品にて、先般のお礼のしるしに、さしあげたく存じますれば、何卒、ごらん下さいますよう——」

と云って、風呂敷をひらいた。

土屋千四郎の前へ、さし出されたのは、洋書であった。

千四郎は、手にとった。

もとより、横文字を読めるはずもなかろうが、ぱらぱらとひらいてみて、千四郎の目は、とある頁に、釘づけになった。

四

洋書のその頁には、金髪の裸女が、三人の男に愛撫されているきわどい絵があったのである。

どぶは、土屋千四郎の顔面が蒼ざめ、こめかみが、痙攣するのを、ひややかに、見まもった。

千四郎は、しかし、何も云わずに、洋書を、すっと、どぶへ、押しやった。

「身共には、不用の書である故、おかえしいたす」

「左様でござるかな。もう一度、丹念にごらん下されい」

「その必要はない」
千四郎は、昂る声を、つとめて抑えて、かぶりをふると、
「おひきとりを願おう」
と、云った。
「ふたつ、三つ、おうかがいいたしたき儀がありまするが、如何なもので？」
どぶは、わざと、いやらしい微笑をうかべてみせた。
「見知らぬ御仁と、身共は、問答を好まぬ」
「そちら様が、好みなさらずとも、こちらには、是非とも、おうかがいいたさねばならぬことでござる」
「……」
「お手前様は、やはり、目下ご不幸の状態に、おありなさる。これは、しかと、見とどけ申しました」
「見とどけたとは？」
千四郎は、鋭い表情で、どぶを睨んだ。
「先夜のことでござる」
どぶは、この当主に対しては、正面から、この邸内の秘密を暴露してみせるほぞをかためて、乗り込んだのである。
「ご当家がやとって居られる四人の士が、一挺の駕籠を、擁して、ひそやかに、裏門を出られ申した。横川に至って、駕籠の中に押しこめていた一個の死体を、流れへ、どぶん、とほうり込まれました。……その死体たるや、なんともはや、奇々怪々の——息をひきとって間もないにもかかわらず、顔面だけが、どくろに相成った寺小姓でありましたな。ご当家のあるじであるお手前様が、このことを、ご存じないはずはありますまい」
「……」
「どうして、あのような、むごたらしい死体が、お屋敷内にて、つくられたのか——それを、うかがえませぬかな？」
「……」
「川開きの夜、大川の百本杭に、ひっかかっていた白骨死体も、あるいは、ご当家で、つくられたものか、とおぼしく、また、品川の芝居小屋で、中村菊也という女形が、小柄を投げられて、殺されましたが、その下手人も、どうやら、ご当家おやといの士の一人かと——」
「お主！」
千四郎は、かわいた声で、
「何者だ？　まず、それをあきらかにしてもらわねばならぬ」
「犬——でござる」
「犬!?」
「公儀の犬に、かぎまわられるおぼえはない、と仰せられますかな」

五

しばらく、重苦しい沈黙があった。

おそろしい苦悶が、土屋千四郎の胸中をさいなんでいるようであった。
「もし――もしも」
千四郎は、喘ぐように、口をひらくと、
「お主の云うことが、事実とみとめれば、どうする所存か？」
「町奉行所が、どうする、という権限はありませぬ。ご当主たるお手前様が、解決なさらねばならぬことかと存じます。裁くべきものは裁いて、罰を加えるべきでござる」
「……」
千四郎は、こたえなかった。
こたえられなかったのである。
無言で、すっと、座を立った。
次の瞬間――。
千四郎の五体は、躍って、なげしの槍を、つかむや、ひとしごきして、穂先を、ピタリと、どぶの胸もとへ、擬した。
どぶは、平然として、坐ったままであった。
「……む！」
千四郎は、まなじりが裂けんばかりに、双眼をみひらいて、どぶを睨みつけた。
「てまえを突き殺されても、ことの解決にはなりませぬな。これは、お手前様ご自身の覚悟の問題でござる」
どぶは、云った。

千四郎は、槍をなげすてた。
「お主のうしろには、誰人がいる？」
それを、問うた。
「盲目の与力――町小路左門殿がおいでです」
「そうか！」
千四郎は、町小路左門がいかなる人物か、知っているようであった。
「身共に、いま、云えることは――」
千四郎は、にがいものを押し出すように、云った。
「罪は、すべて、身共に帰す、ということだ。身共が、妻を愛することが叶わなかった、ということから、この屋敷の不幸は起った。……いまとなっては、身共には、どうすることもできぬ」
「……」
こんどは、どぶが、黙ってきく番であった。
「人間の情というものは、努力して、変えられるものではない。愛そうと努めれば、かえって、嫌悪がわく。それを押しかくそうとしても、女の敏い神経が、さとらぬはずはない。……いまでは、他人以上の冷たさが、互いの居場所を遠くへだてた」
「……」
「見て見ぬふりをしているのは、身共の卑怯であろう。それは、みとめる。しかし、妻をそのようなおそろしい女にしたのが、おのれ自身であるからには、身共に、成敗の権はない。そうではなかろうか」

「……」

「身共は、ただ、座して、天の裁きが下るのを、待っているばかりだ。……お主が、もし、その使者ならば、どうか、自由に振舞ってくれてよい」

六

四半刻のち——。

どぶは、辞去するとみせかけて、闇の庭へ出た。

土屋千四郎は、べつに、妻佐保が、どの建物に住んでいるとは、教えはしなかった。

ただ、さきに立って、書院を出る時、

「お主、犬ならば、嗅覚は冴えて居ろう」

と、暗示を与えたのであった。

嗅ぐことであった。

どぶは、嗅ぎつつ、ひとつの建物へ、近づいた。

それは、松でかこまれたかなり大きな構えの建物であった。

見張りの者の有無に、神経を配りつつ、どぶは、縁側へあがった。

たてきられた障子の内側には、灯があった。

すばやく、障子をひらいて、するりと入ったが、そこは、無人であった。

襖へ寄って、耳をすました。

廊下をへだてる奥の部屋には、あきらかに、人の気配があった。

どぶは、嗅いだ。

——このにおいだ!

にやりとして、襖へ手をかけた。

その瞬間、どぶは、天井裏には、すでに、次郎吉が、ひそんでいるような気がした。

廊下へ出た。

そのにおいは、つよくどぶの鼻孔をおそった。

——さて、これからだ!

どぶは、臍の下へ、力をこめた。

奥の部屋へ——仕切りは板戸になっていたが、それを、そろりと開こうとしたせつな、

「曲者!」

鋭い叫びが、左右から同時に、あびせかけられた。

どぶは、両側から迫る者たちの手に、短銃がにぎりしめられているのを、みとめるや、かえって、度胸が生れた。

「左様——無断侵入の曲者でござる」

と、云って、板戸を、さっと、ひき開けた。

どぶの目に映ったその部屋の光景は、どぶほどのすれっからしをして、あっと息をのませるに充分であった。

敷具の上に、白羽二重の寝召いちまいの女体が仰臥していた。

その四方に、餓狼がえじきにむらがるように、素裸の男四人が、うずくまって、白い女体の、

のどもとへ、手へ、胸へ、足へ、吸いついていたのである。
目蓋をとじて、男どもの愛撫に身をまかせた女性の顔は、意外に、無表情であった。滑石のように艶やかな肌は、なんの反応も示してはいなかった。
男どもの愛撫が、まだ足らぬのであろうか。
いや、どの男も、無我夢中で、吸いつき、その悦びに、五体をうごめかしているのであった。
その裸形は、麻薬におかされた放恣なみにくさをあらわしていた。

七

土屋千四郎妻佐保は、ふっと、まぶたをひらいた。
二人の士に短銃をつきつけられて、入って来たどぶを、みとめると、やおら、身を起した。
四人の裸男どもは、なお、女体を吸いつづけようと、うごめいた。佐保は、うるさげに、はらいのけた。
「その方、何者じゃ？」
佐保は、とろりと潤んだまなざしを、どぶにつけた。
どぶは、とっさに、ひと芝居うつことにきめた。
「薬が、欲しゅうござる」
「なんの薬じゃ？」
「その男らが、浮世のすべてを忘れて、貴女様にすがりついて居る——そういう羽化登仙の状態になりとうござる。……何卒、薬を、おめぐみ下されい」

「ほほほ……」
佐保は、狂的な笑い声をたてると、ゆらりと、立ちあがった。
「その面でか！　たわけ者！　その方は、おのが面を、鏡にうつしたことが、あるのか。身の程知らずめが——」
佐保は、どぶの顔へ、いきなり、ぺっと唾をはきかけた。
どぶは、かっとなったが、顔には示さず、
「薬を！」
と、うめくように叫んだ。
すると、佐保は、また高笑いしてから、
「人食魚のえじきが、舞い込んで来たものよ。……こやつを、えじき部屋へ、投げ込んでおくがよい」
と云いすてて、すす……と奥へ去った。
どぶは、引きたてられた。
長い廊下を、幾曲りかして、さらに、階段を上ったり、下ったりした挙句、突き込まれたのは、鉄格子のはまった暗い密室であった。
二人ばかり、壁ぎわへ、守宮のように吸いついて、死んだように動かぬ男がいた。
どぶは、近づいて、からだをひっくりかえしてみた。
二人とも、まだ二十歳ばかりの、のっぺりした色白の優男であった。
「おい！」

ゆさぶってみたが、なんの反応も示さなかった。
麻薬中毒の果てに、いまは、死を待つばかりになっているていであった。
「どうにも、こうにも、おれのようなまっとうな人間が住むところじゃねえや」
どぶは、あぐらをかくと、鼻毛を二三本ひき抜いた。
べつに、不安はおぼえてはいない。
こんなきちがい屋敷で、一命を落すなどということは、考えられないのだ。
「人食魚のえじきにする、と云やがったな」
どぶは、つぶやいた。
「魚ってえのは、人間が食うものだと思っていたが、人間を食う魚がいるのかい。こんなチョボ一は、きいたことがねえや」

八

——もうそろそろ、夜が明ける頃だな。
どぶが、闇をすかして、鉄格子の外を、見やった時であった。
しのびやかな足音が、近づいた。
このえじき部屋と称する牢の前に来た黒い影は、錠前をはずすと、
「親分、お待ちどお——」
と、云った。
次郎吉であった。

「待たせたぜ」
どぶは、身を起して、云った。
「屋敷が広すぎるのでね、お前さんがどこへほうり込まれたか、さがすのに苦労した」
「ここは、どのあたりだい？」
「地下になっている。上は、倉さ」
「なんの倉だ？」
「どうやら、南蛮の珍品が、山と積まれているようだね」
「一度、拝見してえものだ」
「そんなものより、もっと面白い見世物がある。案内しようかね」
「なんでえ、それは？」
「見るまでのおたのしみにしておこう」
階段をのぼったところに一人、廊下に二人、猿ぐつわをかまされ、後手にしばられた番士が、倒れていた。次郎吉のしわざに相違なかった。
「やるね、旦那は——」
どぶが、云うと、次郎吉は、
「奥方の寝所の厨子棚から、薬を頂戴したのさ。これは、よく利くね。……お前さんが、どうしても首をたてに振らぬ女を、わがものにしたい時には、これを、かがせるがいい、手拭いにつけて、鼻へ寄せると、とたんに、ばたりだ」
と、云った。

次郎吉が、どぶをともなったのは、母屋と松の林をへだてた古めかしい寝殿造の別棟であった。

もう、夜は、しらしらと明けていた。

その建物へ近づいたどぶは、あきれて、目を見はった。

「なんでえ、これア！」

釣殿というのであろう、泉水の上へ、簀子縁をのり出している風雅なたたずまいが、まるで化物屋敷のように荒れはてているのであった。

勾欄は折れ、簀子縁は落葉でうずまり、几帳は破れ、畳にもまた落葉が吹きたまっていた。

くもの巣が、いっぱい、かかっている。

「どういうんだ、この建物は？」

「公方様のお姫様が、輿入れなさると、初夜ってえやつをすごすのに、こういう御殿を建てるのじゃないのかね」

次郎吉が、智慧のあるところを、口にした。

「そうか、なアるほど――」

どぶは、合点した。

この釣殿は、土屋千四郎と佐保が、夫婦の契りをむすぶために、設けられたのだ。

その几帳のかげには、臥牀が、ちゃんと延べられてある。

つまり、三年前に、その華やかな婚礼のために建てられ、初夜の時のままに、今日まで放置されてあるのだ。

九

「わからねえ！」

どぶは、殿上へ立ち、破れ几帳のかげに延べられた臥牀を、見下すと、かぶりを振った。

新郎新婦が、相抱いたであろう初夜の臥牀は、どうやら起き上って掛具をはねた――そのかたちのまま、三年間、誰にも一指もふれられずに、放置されているのだ。

いまは、鼠の巣になって居り、どぶがかたわらに立つと、小さなやつが、チョロチョロと、掛具の下へかくれた。

落葉もかかり、くもの糸も張られている。

吹けば、塵埃が、舞いあがるだろう。

「つまり――」

どぶは、次郎吉を振りかえって、

「お姫様と土屋千四郎は、いったんは、この中へ入った。……契ったか、契らなかったか――どうやら、夜が明けた時には、もう冷たい仲になって、この牀を、見すてたというわけだろうぜ」

「そして、三年間、おっぽらかしているという次第だね」

「これを見りゃ、夫婦仲が、どういうものか、見当がつく。……女房は、恋いこがれて、狂言自殺を企ててまでも、婿にした亭主の、冷たい態度に、かっとなって、夜毎、若い色男をひきずり込んで、痴情狂いだ。亭主は、その女房にそっぽを向いて、釣ざんまいという次第さな」

すると、次郎吉は、うすら笑って、

「その程度の夫婦なら、世間には、いくらでも、ころがっているがね」
と、云った。
「この今様吉田御殿は、もっと、おそろしい生地獄だ」
次郎吉は、どぶをうながして、六曲屏風のかげに入ると、床板を、ひきあげた。
ぽっかりと、大きな孔があいた。
孔には、まっすぐに、梯子段が通じていた。
それをつたって降りるにつれて、熱風が吹きあげて来た。
なんとも形容しようのない香気が、その熱風に含まれていた。
地の底へ降り立ったとたん、どぶは、前方に遊泳する無数の魚群に、きもをつぶした。
「こ、これア！」
次郎吉は、すでに、昨日のうちに、この驚くべき地下の別世界をたしかめたおちつきで、
「さしずめ、ここは、水族の館というわけだ」
と、云った。
巨大な玻璃の水槽が、据えつけてあるのだ。
近寄ったどぶは、遊泳しているのが、ただの魚ではないのを、みとめた。極彩色の、まるで、あらゆる絵具を使ってつくりあげたような、しかも、珍奇なかたちをした魚群なのであった。
のみならず、巨大な水槽は、ひとつだけではなく、奥へいくつも据えられている模様であった。

十

次に——。
水槽部屋を過ぎて、階段をのぼり、重い鉄扉をひらくと、さらに、どぶを仰天させる別世界が、そこにあった。
生れてはじめて接する異様な密林が、つくられて居り、その枝葉のかげに、目もさめるような美しい鳥が、啼きかわし、飛び交っていた。
「な、なんでえ、これア？」
樹木ひとつを眺めても、これは、自分らが住む日本のものではないのであった。
むうっとこもる熱気の中に、これらは、ふかぶかと茂っているのだ。
「まるで極楽だ！」
どぶは、呻くように、つぶやいた。
小さな鶏ほどの大きさの鳥が、頭上で羽づくろいしているのだが、そのかたちの優美さ、赤、青、黄さまざまの色彩をあつめたすがたの鮮やかさ。
くちばしの異様に長いの、枝の高処から地上までたれた長い尾、真紅のあたまに純白の羽根を持ったの、小指ほどの小さいの……。
「お！」
どぶは、次郎吉に、袖をひっぱられて、身を伏せた。
密林の奥から、大きな竹籠をかかえた人影が、こちらへ、歩いて来る。

女であった。

ほとんど半裸で、胸と腰に、更紗を巻きつけただけの肌は、琥珀色をしていた。

あきらかに、異邦の、しかも、熱帯の島の娘であった。

ゆたかな褐色の頭髪を、肩に散らして、彫のふかい顔を仰向けながら、五彩異形の鳥たちに、餌を与えて、歩いているのだ。

待ちうけていた鳥たちは、一斉に、啼きたてたり、はばたいたりした。なかには、娘の頭や肩へ、とびのって、餌をせがむ。

娘は笑いながら、なにか異邦の言葉をかけて、そのくちばしへ、いたずらっぽく、唇をつけたりしている。

娘が、遠ざかるのを待って、次郎吉は、

「こっちだ、親分――」

と、どぶを、うながした。

暗い洞穴のような場所をくぐり、やがて、次郎吉が、闇の中で、なにやら、しきりに、戸らしいものを、ゴトゴトとゆりうごかしていたが、突然、あかるくなった。

次郎吉とどぶが、地下から抜け出たのは、林の中の粗末な小屋であった。

薪や炭やらを積みかさねられた土間の片隅から、匐いあがった二人は、悪夢でもみたあとの、腑抜けたような表情を、見合せた。

「あきれたねえ」

どぶは、薪へ腰を下すと、かぶりを振った。

「あきれた！　どうにも、正気の沙汰じゃねえや」

「なに、あんな景色は、海の外へ出りゃ、いくらもあるのだろうよ」

次郎吉は、云った。

「どうやら、南蛮人につくらせたものだな」

散り別れ

一

どぶは、町小路邸内へ、よろけ込んでから、ぶっ倒れ、そのまま、人事不省に陥った。

次郎吉と別れるまでは、さして、ふらふらもしていなかったのが、一人になって、野道を歩き出してから、烈しいめまいにおそわれたのであった。

どうやら、えじき部屋へ投げ込まれた際、のどのかわきを訴えて、水を二杯ばかり飲ませてもらったが、その水の中に、毒薬が混じてあったらしい。

常人ならば、すぐに、全身にまわって、次郎吉に救い出された頃にはもう、足どりもあやしいものになっていたに相違ない。

どぶのからだは、二十代に、きたえてあった。

備前の山中で、三年ばかり、仙人のようなくらしをしたこともある。その三年間、けものと同じものを食って、生命をつないだ。毒茸を食って、十日あまりも倒れていたこともある。生来、

丈夫にできているからだが、そのようなきたえかたをしていたので、毒薬をのまされても、すぐには、効目をあらわさなかった、とみえる。

町小路左門は、小夜から、どぶが、台所で倒れた、と告げられるや、べつにおどろきもせず、薬函の中の、しかじかの薬をのませるようにと指示した。

どぶは、しかし、その薬をのまされても、二昼夜、人事不省のままであった。

ようやく——。

意識をとりもどしたどぶは、しばらく、どこへ寝かされているのかさえも判らぬていで、あんぐり口をあけていた。

「親分！」

小夜に、ゆすぶられて、

「ああ、ここは——」

と、目をしばたたいた。

「親分、しっかりしなさい」

「生命を、とりとめたらしいな、小夜さん」

どぶは、げっそり殺げた頬へ、むりに笑いを刻もうとした。

「一時は、どうなるか、と心配しましたよ」

「すまねえ、すまねえ。……どうやら、三途の川を、はんぶんくれえ渡っていた」

「よかったこと！　親分は、強いんですね」

「そうかんたんに、お陀仏になっちゃかなわねえ」

どぶは、起き上った。

まだ、頭の中は、石を詰め込まれたように重かったし、視野がおぼろだった。

「ひでえ目に遭わせやがった」

奇怪な地下室の光景は、悪夢の中で眺めたような気さえする。

「ともかく、殿様に、報告しなけりゃならねえ」

どぶは、立ち上って、よろついた。

「まだ、むりですよ、親分。やすんでいなさい」

小夜が、手を貸した。

「なに、小夜さんにこうして、手を握ってもらっていりゃ、こんどは、本当に、地獄へ入っても、悔いはねえや」

二

左門の居間に入ったどぶは、両手をつかえて、

「醜態をさらしやして、申しわけございません」

と、頭を下げた。

「もう、加減はよいか？」

「へい、大丈夫でございます」

「土屋邸内では、いろいろと面白い見世物を眺めた模様だな」

「どうして、ご存じなんで？」

「お前が、しきりに、うわ言を申していたのでな」
「逐一、お報せいたします」
どぶは、おのが目で見とどけたことを、のこらず、話した。
左門は、無言裡に、ききおわるや、
「わしに、ついて参るがよい」
と、命じて、すっと、立った。
どぶは、左門がどこへ行くのか、いぶかしいままに、あとに従った。
左門は、目あき同様の馴れた足どりで、廊下を過ぎると、書院に入った。
書院には、客がいたのである。
どぶは、その客を一瞥して、はっと息をのんだ。
それは、土屋千四郎に、まぎれもなかった。
左門は、土屋千四郎を書院に待たせておいて、どぶの報告をきいたのである。
「お待たせいたした」
左門が、座に就いて、挨拶すると、千四郎は、蒼ざめるほど緊張した顔を俯向けて、
「不意に参上つかまつり、非礼の儀、おゆるし下され」
と、鄭重に頭を下げた。
千四郎は、左門のうしろにしたがっている男がどぶであることをみとめたが、当然この屋敷へ戻って来ているもの、と承知しているような様子をみせた。
「お話を、うけたまわり申す」

左門は、ひややかに、うながした。
千四郎は、さらにふかく、顔を伏せた。
「身共は――」
しばしの沈黙ののち、千四郎は、呼吸が苦しげな語調で、云った。
「お手前に、救いを乞いに参ったのではござらぬ」
「……」
左門は、無言であった。
「ただ……、お手前にだけ、まことのことを、知って頂きたく、それだけの意志をもって、参上いたした」
「うけたまわる」
「すでに、お手前は、そこにいる御用聞きの者に命じて、身共が身辺を、お調べなされた。お調べになったと思われることは、くどくどしくは、申し上げ申さぬ。……身共が、一万石の小大名の小姓から、お取立てにあずかり、七千石の知行をたまわって、廃家になっていた直参布衣を継いだことは、すでにご存じのはず――。身共は、その際、相思相愛であった許婚者を、すて申した。その娘は、悲嘆のあまり、自害して相果て申した。このことも、もはや、お調べずみかと存ずる」

三

土屋千四郎の告白が、つづく。

「かかる不幸な目に遭わせてまでも、身共を婿にいたした中蔦――佐保が、心優しい女子であったならば、また事情も別になったでござろう。……わが妻は、驕慢この上ない気象の女子でござった。それは、婚礼の夜、すでに、現れ申した。そのために、申すもはばかることながら、その臥牀で、契ろうとして契れず、身共は、自害したあわれな許婚者の俤が、つきまとうてはなれぬままに、妻をふりすてて、寝所を去り申した。……そして、ついに、今日まで、一度も、契っては居り申さぬ」

土屋千四郎が、おのれがあわれな傀儡であることを、知らされたのは、新邸に入ってものの十日も経たぬうちであった。

幕閣に於ては、驕慢な厠姫のわがままをゆるして、小藩の小姓を七千石の旗本大身にひきあげてやり、新邸を構えさせるにあたって、かねてからの陰険なひとつの計画を実行したのであった。

海外諸国との交易は、徳川幕府としては、武家法度の第一条に明記する禁令であった。

ところが――。

江戸城ならびに大坂城の金庫は、まさに底をつき、もはや、進退谷まる財政難に陥っている幕府としては、自ら制した禁令をも破らざるを得ぬと、密議一決したのであった。

しかし、公儀自らが禁令を破ったことが、世間に知れることは、絶対に避けねばならなかった。

そこで、若年寄の一人が、全責任を負うて、悪党となって私腹をこやすとみせて、密貿易の秘密組織をつくり、その本拠を、土屋千四郎と厠姫佐保の新邸に置いたのである。

長崎奉行、船手頭、中川御番衆、蔵前札差、廻船問屋、大坂両替商など、多くの人々が、血判誓紙の上で、一味徒党を組んだ。

密貿易は、大いに成果を挙げた。

同時に――。

大奥へは、怪しげな玩弄器物、麻薬が、ひそかに持ち込まれた。

千四郎妻佐保も、この麻薬を、手に入れた。

千四郎に同衾を拒否された驕慢な厠姫が、屋敷を今様吉田御殿にして、夜毎、さまざまの若い男をひき入れたのは、当然の推移であった。

一方では――。

密貿易に加担した富有の商人どもが、各種の珍奇な品を海の彼方から運び込むうちに、ひとつ、この世の極楽をつくりあげてくれようではないか、と増上慢な密議をこらした。

そして、つくりあげたのが、どぶが眺めた地下の世界であった。

佐保が、この地下の世界を利用しない道理がなかった。

おのが淫楽のために、ひき入れた男を、そのままには、屋敷の外へ解き放ってやるのをはばかる、となれば、そこに、さまざまの殺しかたが思案される。

おのが肌を愛撫せしめた男たちを、殺すのも、驕姫の残忍な性を満足させることになるのであった。

四

その地下の巨大な水槽には、人食魚ぴらにあも、数多く飼われていた。

佐保は、その水槽へ、おのが肌を愛撫せしめた男を、投げ込んで、むざんにも、白骨と化せしめる残忍の所業を、敢てしたのであった。

どぶが、大川の百本杭で発見した白骨死体も、横川からひきあげたむざんな屍骸も、そのあわれないけにえだったわけである。

佐保自身、また、麻薬中毒となり、いまでは、それを飲まざるを得なくなっている。

なお——。

地下の楽園には、オランダ船より売られた南方の島の娘がいるが、いま、土屋千四郎が愛しているのは、その娘だけだ、という。

「以上、包みかくすところなく、打明け申した」

土屋千四郎は、告白を終えると、左門に向って、頭を下げた。

「では、これにて——」

立ち上る千四郎に向って、どぶは、あわてて、声をかけようとしたが、とっさに、言葉が見つからず、いたずらに、口をぱくぱくさせるのみであった。

不幸な若い旗本は、去った。

書院には、しばらく、沈黙があった。

「殿様——」

どぶは、左門を見つめて、

「あのお旗本は、死ぬ覚悟をして、打明けに参られたのでござんすね」

「そうであろうな」

「止めるてだては、ござりますまいか？」

「ない」

左門は、冷やかにこたえた。

「しかし、いまになって、死ぬ覚悟など……」

「いや、土屋千四郎は、おのが新邸が、公儀密貿易の本拠と知った時に、死ぬ覚悟をしたのに相違ない」

「へえ——？」

「白骨死体を、衆人の目のつく、大川や横川へすてたのも、中村菊也を殺したのも、土屋自身のしわざであろう。そうすれば、当然、巷の噂になり、町奉行所が動き、やがて、探索の目が、わが屋敷へそそがれる——と、土屋は、考えた。世間が疑惑すれば、公儀といえども、密貿易を中止せざるを得ぬ。土屋は、世間の力というものを借りて、おのが屋敷を崩壊させたい、とのぞんだ」

「成程——」

「お前は、明日にも、土屋邸へ行って、その崩壊のさまを、見とどけて参るがよい」

「承知いたしました」

どぶは、左門が立って出て行くのを見送ってから、こぶしをかためて、自分の頭をたたいた。

「こん畜生！　どうにも、こうにも、ずきずきしやがって――」

三四度、頭を振ってから、

「そうだ！　明日といわず、今夜のうちにも――すこしも、早う、おお、そうじゃ！」

と、立ち上った。

五

その地下の楽園では――。

小更紗と名をつけられた南方の島の娘が、餌籠をかかえて、この朝も、鳥たちを呼んで、密林の中をまわっていた。

鳥たちは、喜々として、小更紗のまわりへ、飛びあつまって来て、あるいは、頭へ、あるいは、肩へとまって、さわがしく、餌をせがんだ。

なかには、その大きなくちばしで、小更紗の頬をつつくのもいた。

小更紗は、くすぐったげに、身をよじって笑いながら、餌をついばませる。

いかにも、無心で、愉しそうであった。

ここが見知らぬ異国の地下であることなど、全く忘れているかのようであった。

と――、

小更紗は、うしろに、人の気配を感じて、ふりかえった。

いつの間に現われたのか、そこに立っていたのは、佐保であった。

まなじりがひきつれ、眸子が血走り、かわいた唇が、こまかく痙攣していた。

小更紗は、その凄愴な形相に、戦慄して、肩をすくめると、あとずさりをした。

「そなた――」

佐保は、針の鋭さを、眼眸にこめて、云った。

「わたくしの良人に、情をかけられて居るのかえ？」

「……？」

小更紗は、まだこの国の言葉には、ほとんど通じていないらしく、ただ、怯えの色をみせているばかりであった。

佐保にとっては、対手が、言葉を解そうが解すまいが、そんなことは、どうでもよく、烈しい嫉妬をむき出して、

「その黒い肌が、わが良人にとって、どれだけの魅力がある、というのであろうの」

と、云いつつ、迫った。

小更紗は、一瞬、悲鳴をあげて、にげ出そうとした。

佐保は、ひととびに、とびついて、小更紗の頭髪を、ひっつかんだ。

「ふふふ……、おとなしゅういたすがよい。そなたのような、人目にあてられぬ娘は、やがて、こうなる宿命であったのじゃ」

そうあびせつつ、片腕をうしろにねじあげて、歩かせた。

佐保が、小更紗を押しやって、入ったのは、巨大な水槽のある部屋であった。

水槽のうちで、ひとつだけ、池のように、土の中へ埋め込まれたのがあった。

まん中に、木橋が架けられてあった。

これの水だけは、なぜか、黄色ににごっていて、中の魚のすがたは、みとめられなかった。
しかし、無数の魚がいることは、水面の波立ちで、判った。
人食魚ぴらにあは、この水槽に飼われていたのである。
佐保は、それに架けられた木橋の上に、小更紗を押しやると、
「ほれ……、この中の人食魚のえじきに、そなたがなるのじゃ！」
と、云った。

六

小更紗も、この水槽の中にいるのが、どんなおそろしい魚であるか、知っていた。
「あ、ぁあ……ぁっ！」
悲鳴をあげて、佐保の手からのがれようと、もがいた。
「ふふふ……、おそろしいか！　おそろしいであろう！　……人間が、魚のえじきになるのじゃ。小気味よう、むさぼり食うてくれるわ！」
佐保は、夜叉の凄じさを、その笑い声にこめつつ、小更紗を、水槽の中へ、突き落そうとした。
そうされまいと、文字通り必死で、小更紗は、反抗した。
しかし、ついに、その上半身が、弓なりに、水面上へ、反った。
その時——、
「佐保！　その手を、はなせ！」

土屋千四郎の鋭い声が、かかった。
佐保は、じろっと、良人をにらんだが、
「この黒い肌が、いとしいか、千四郎！」
と、云った。
すでに、良人とはみなさず、自身は、将軍の実娘である誇りを示す態度であった。
「はなさぬか！　はなさぬと！」
千四郎は、腰の差料を、抜きはなった。
「わたくしを、斬る、というのか！　将軍家のむすめであるわたくしを——」
「は、はなさねば、斬る！」
千四郎は、一歩迫った。
「斬れるものなら、斬ってみよ！」
叫びざま、佐保は、小更紗を、突きとばした。
「ぁあっ！」
高い水飛沫をあげて、小更紗のからだが、水中へ、沈んだ。
とみるや——。
もの凄い勢いで、水面がふくれあがり、水中に狂いまわる魚群の動きが起った。
小更紗の片手が、さいごの苦悶を示して、水面を割って出た。
その手が沈むや、それなり、小更紗のからだは、浮かびあがらなかった。
目に見えぬ凶悪な魚群は、ひとしきり、水中をはねまわっていたが、やがて、しずかになった。

それを見とどけておいて、佐保は、千四郎に向い立った。
「千四郎！　斬れるものなら、斬ってみよ！」
「むむっ！」
千四郎の双眼は、とび出さんばかりに、ひき剝かれていた。
「斬れるか？　え、斬れるか？　すべての非は、お前にあるのじゃ！　初夜の臥牀で、わたくしをすてたお前の冷酷がまねいた罪じゃ！」
「むむっ！」
いったん、千四郎は、刀をふりあげたが、とびかかる気力はなかった。
「行け！　去れっ！　おれを、一人にしろ！」
千四郎は、絶叫した。

七

その時——。
どぶは、この屋敷の中の松林にひそんでいた。
彼方に、例の古めかしい寝殿造りの別棟があった。
朝陽にあたったその建物は、数十年も、そのままに放置されたように、古び荒れはてて見える。
——そうか。地下に、熱気のこもった部屋がつくってあるために、この建物はぼろぼろになりやがったんだ。

どぶは、納得した。
と——。
泉水の中の築山の巨松のかげから、華やかな衣裳がうごいた。
「お！」
どぶが、目を見はっていると、ふらふらと歩み出て来たのは、佐保にまぎれもなかった。
白磁のように冷たい顔は、この世のものとも思われぬ無気味さであった。
そのまま、石橋を渡って、その釣殿の簀子縁にあがる足どりは、さながら、幽鬼であった。
どぶは、異様な興味をそそられるまま、松林を抜け出して、近づいた。
佐保は、破れ几帳をまわると、落葉と塵埃とくもの巣にまみれた臥牀へ、倒れた。
「……？」
さらに、近づこうとしたどぶは、不意に、はげしく身もだえして、すすり哭きはじめた佐保の狂態に、足を釘づけされた。
その時であった。
突如として、どぶの立つ地面の下が、ごおうっ、と奇怪な音を鳴らした。
「なんだ？」
どぶは、あわをくらって、松林へ逃げ込んだ。
地面の下の轟音は、しだいに、高くなった。
「おおっ！」
どぶは、わが目を疑った。

寝殿造りの建物が、にわかに、ぐらっとゆれたのである。
それは、宛然、舞台の上の屋台崩しのように、かんまんに、崩壊する怪しい光景であった。
どぶは、ただ茫然と、われを忘れて、見まもった。
建物は、音もなく地の底へ、ひき込まれるように、崩壊した。
とみるや、その中から、濛っと、黒煙がわきあがって、その残骸を押しつつんだ。
その黒煙が、天に冲した時、さらに、ひときわ凄じい轟音とともに、火柱が、噴き出た。
——この世のおわりだ！
どぶは、思わず、そう思ったくらいであった。
火柱は、空一杯に、火の粉をまきちらして、熱気を四方へみなぎらせた。
「南無！」
どぶほどの男が、われ知らず両手を合せたくらいの、それは、名状しがたいひとつの世界の終る地獄図絵だったのである。

第三話　大凶祈願

迷信時代

一

白い浴衣に洗い髪
土手の柳が夜風にゆれて
まねくその手の
やれおそろしや
と見りゃ、どっこい
河うそ、うそうそ、うその皮
剝いで、蹴とばしゃ
どぶんと落ちる神田川
あと白波と、去せにけり

いい調子で、口から出まかせを唄いながら、どぶが、ひょいと、首を突っ込んだのは、浅草花川戸の戸沢長屋の木戸口にある質屋であった。

秋風の立った宵の口で、長屋からは雑多な煮もの焼きものの匂いが、流れ出て来ていた。

「おかみ、いねえか？」

小声で呼んだが、返辞がないので、すっと入り込み、首をのばして、

「結界の銭函をそのままにしておいたら、無用心じゃねえか。おい、いねえか」

と、云いつつ、上って行き、

「結界、どこかい、二階かい。それとも、お上が、下とは、こりゃ、どうかい。へへ、いばり散らすも、下の中、と来た」

奥の四畳半の唐紙を、がらっとひきあけたとたん、

「おっ！」

と、どぶは、目をひき剝いた。

山伏ていの、総髪切り下げ、白衣の男が、この質屋のお内儀を、仰臥させ、あられもなく、下肢を大の字にひろげさせて、途方もなく大きな珠数で、その恥部を撫でながら、なにやら、ぶつぶつと、呪文めいたことを、となえている最中であった。

お内儀は、恍惚の境をさまようているような表情であった。

「この野郎！」

どぶは、山伏の腰を蹴とばして、つんのめらせた。

「な、なにをいたす！」

山伏は、真っ赤になって、どぶを睨みつけた。

「いたす、はそっちだろう、このド助平め！　さっさと去せろ。ぐずぐずしてやがると、ふんじばって、番屋へしょっぴくぞ！」

どぶは、懐中の十手をひき抜くと、山伏の鼻さきへ、突きつけた。

ぎょっとなった山伏は、あわてふためいて、おもてへ逃げ出した。

どぶは、みだれた衣類をつくろうお内儀を、冷やかに見下して、
「丁稚を使いに出したチョンの間に、山伏をひきずり込んで、ご開帳とは、おそれ入りやした」
と、あびせた。
そういうどぶ自身、この質屋の後家を半年前に、手ごめ同様にものにして、月に二度か三度、やって来て、弄んでいたのである。
大きな口がきけた立場ではなかった。
「あたしゃ、なにも、悪いことなんかしていないさ」
お内儀は、ふくれ面で、云った。

二

「あられもねえざまをさらけ出して、なにも悪いことは、していねえと仰せられるのか」
どぶは、首をふった。
「そうさ。あたしゃ、ご祈禱してもらっていただけじゃないか。お前さんが、見た通りさ」
「成程な。ご祈禱というやつも、いろいろあるものだな。女の大切なところを、珠数でなでまわされるご祈禱があるのけえ?」
「あたしのからだの中に、犬神様が忍び込んだ、というのさ。それを追い出してしまわないと、商売はあがったり、男も——お前さんのことだよ——逃げる、というんで、あたしゃ、はずかしいのを、じっとがまんして、ご祈禱してもらってたのじゃないか」
「ちょっ!」

どぶは、舌打ちした。
「犬神だと——、わらわせるねえ。そんなものが、この世にいてたまるけえ。どいつも、こいつも、近頃は、箸の上げ下げまで、縁起かつぎをしやがって……江戸中、迷信だらけになりやがった」
どぶは、いまいましく、吐き出した。
まさに、その通りであった。
けものや鳥を、神にしたり主にしたりする俗習は、ふるくからあった。弁財天の蛇、八幡社の鳩、大黒天の鼠、稲荷社の狐、毘沙門天の百足、天照大神の蟻、日吉山王の猿など——。
神や主にして、ただ拝んでいるあいだは無難だったが、そのうちに、勝手に祟りやら罰やらを、日常生活の中へつくりあげて、自分自身をしばるようになってから、だんだん、しまつに負えなくなった。
この時代——。
霊怪幽魂、化身魍魎の存在を信じて疑わぬ者が、九割九分であった。
人は死ぬと、霊魂は四十九日をすぎるまで、わが家の棟を去らず、とか。墓場で燃える燐火は、亡霊だとか。永く不住となって、荒廃した屋敷は、必ず幽霊が出現するとか。
絵師は、せいぜい人をこわがらせるために、顔色蒼ざめ、目がくぼみ、痩せさらばえて、髪をふりみだし、脚を模糊の中に没した悄然たる姿を描いた。
そして、そのもの凄い幽霊の存在を、人々は、信じたのである。
おかげで、祟りやら罰やらのおそろしさを口走る祈禱師、巫女、口寄せのたぐいから、筮竹を

ひねくる易者などが、大はやりであった。

江戸では、一町毎に一人、辻という辻に、易者が出ていて、男女の相性、縁談の吉凶、遺失物の所在、逃亡人の行方、転任の方向、一代の禍福などを、まことしやかな面つきで、述べたてていた。

こうなると、日常のありとあらゆることが、吉凶につながって来る。

鴉が啼く、犬が長吠えするのは凶事のきざし、朝のうちくもが室内に入って来るのは吉事のしるし、などはご愛敬だが、頭痛腹痛を止めるために、護符を呑んで、かえって、悶絶したり、嫉妬に狂う女が、丑の刻詣でをして、のろう対手の藁人形へ五寸釘を打ち込むなどというのは、陰惨であった。

三

「いいか、こん畜生！」

どぶは、質屋の後家を、前にひき据えて、どなった。

「犬神なんてえしろものは、四国西国の山の中の、天照大神時代からくらしっぷりが寸分かわっていねえ土ン百姓どもが、つくりあげた、屁みてえな迷信だぞ。それが、花のお江戸へ、乗り込んで来やがったとは、お笑い草だが、まともに信じ込むてめえの頭は、どうかしてやしねえか」

「だって、――」

「だっても、くそもあるけえ。犬神をおそれたあまりに、裾をおっぴろげて、かくしどころを、山伏におがませやがるとは、あきれて、ものが云えねえ」

「かんにんして――。だって、あたしゃ、お前さんに逃げられたら、どうしよう、と思ってつい……」

お内儀は、どぶに、すがりついた。

しかたなく――でもなかったが、どぶは、熟れた三十女のからだを抱くと、牀の上へ倒れ込んだ。

やがて――。

ひと汗かいて、起き上ったどぶは、またあらためて、

「いってえ、どういうんだろうな」

と、首をひねった。

お内儀は、あらわになった下肢を、掩いもせずに、死んだように、陶酔の余韻に身をひたしていたが、

「なにがさ？」

と、ものうげに、きいた。

「まるで、日本中の雄も雌も、なにかの祟りをおそれているあんばいだってことよ」

「疫病のせいだよ。去年から今年にかけて、何万人も、死んじまったろう。あたしゃ、そのせいだと思うよ」

「ふうん」

「夏になってから、急に、質入れが多くなったと思ったら、わけは、家や庭を直すのだとさ」

お内儀は、起きあがって、どぶにしなだれかかりながら、

「鬼門がおそろしゅうて、そっちをこわして、こっちへ建て増ししたり、庭の松や石燈籠を移してみたり、みんな血眼になっているのも、家相を観てもらったのだねえ。うちも、どうやら、厠の位置がいけないらしい」

「そういえば、近頃、やたらに、引越しがふえていやがる。……ばかくせえ。鬼門なんざ、くそくらえだ」

「お前さんみたいに、家を持たないひとは、かまわないだろうけどさ。……ね、お前さん、いっそ、思いきって、この家へ、入婿になっておくれな」

「金輪際、女房は持たねえ主義だ、おれは――」

「それは、前からきいているけど……、そろそろ、腰をおちつけてもいいんじゃないか。……お前さん、あたしのからだを、一万人に一人、と云ったじゃないか」

「つまらねえ殺し文句を云ったものだ」

「なんだって？」

「こっちのことだ」

どぶは、さっさと立ち上っていた。

四

次の日の朝――。

どぶは、久しくごぶさたしていた町小路左門邸の裏門をくぐった。

花壇に美しく咲いた白菊を、剪りとっている小間使いの小夜をみとめると、どぶは、そっと、

足音をしのばせて、背後へ寄り、

「うらめしやあ――」

せいぜいおそろしげなつくり声をかけた。

しかし、小夜は、すこしもびっくりせず、ふりかえって、

「どうかしたのですか、親分？」

と、見まもった。

「はりあいがねえことおびただしいや。おぼこなら、うそでも、仰天してもらいたいね」

「だって、ちゃんと、影法師がさしたのですもの」

「影で、あっしということが、判りやすかね？」

「ここが、どなたのお屋敷か、忘れたのですか、親分？」

「おそれ入りやした。ご主人様が闇の世界にいなさると、召使いまでが、目は不要になっている。……惚れているんだねえ、お小夜さん」

「はい、惚れて居ります」

「これだ！　ところでお小夜さんは、犬神なんてえしろものは、信じちゃいませんね？」

「犬神って、なんですか？」

「有難てえ。ご存じないのなら、それで、結構なんだ。せめて、このお屋敷内だけでも、阿呆くせえ迷信は、入り込んでもらいたくねえやな」

「あら、あたしだって、縁起ぐらいかつぎますよ」

「どんな縁起を――？」

「茶柱が立てばうれしいし、お正月には、宝船の絵を枕の下に置いてやすみます」
「それぐらいは、乙女心のいじらしさだ。……目の色変えて、家相手相人相に夢中になってやがる奴らの、あさましい料簡とは、ちがわあ」
「親分も、あたしを、うらめしや、とおどかしたのですから、幽霊を信じているのでしょう？」
「てへんだ。はばかりながら、雪隠ながら、このどぶ親分は、死んだらそれきり、きれいに、無くなる、とかたく信じておりやすね」
「あの世なんか、ない、と仰言るの？」
「あってたまるものけえ。地獄極楽は、坊主がつくった大嘘のこんこんちきだ」
「そうかしら――」
「お小夜さんは、あると思っていなさるのか？」
「あるのかないのか、まだ、考えたことがありません」
「そのまま、死ぬまで、考えねえでもらいたいね」
「でも、年をとったら、後生を願うのは、しかたがないでしょう」
「女が、皺くちゃ婆あになったら――」
云いかけて、どぶは、あわてて、口をつぐみ、そこをはなれた。
「親分、お殿様は、お庭です」
小夜は、告げた。

五

盲目の与力は、泉水のむこうの築山の岩へ、腰を下していた。
その手には、長い竹竿があった。さきに、鳥黐がついている。
どぶは、泉水のこちら側で、興味をもって、眺めた。
この季節になると、このあたりには、さまざまの小鳥が、飛んで来て、しきりに啼きたてながら、梢を移る。目白、ひめ、あとり、ひわなど……。
小鳥狩、という言葉もあった。
小鳥狩は、もっぱら、旗本御家人の子弟に許された遊びであった。武術修練、という名目であったろう。したがって、卑怯なわなにかけては、捕えず、小鳥のすばやさに対して、こちらもすばやく襲う、といういくつかの方法があったが、長い竹竿で、鳥黐で捕える方法が主であった。貧しい御家人の家では、鶯、うずら、駒鳥などを捕えて、啼音を仕込んで、売るという内職にもなっていた。町家の子らには、小鳥狩は許されていなかった。
幼い頃に盲目になった左門は、この小鳥狩を、武術修業のひとつにしたに相違ない。
そして、それを思い出して、秋の陽ざしの中で、こころみようとしているのであった。
どぶが、興味をもって、見まもるうちに、左門は、やおら、竹竿を、直立させ、すこしずつ、挙げた。
一瞬――。
さっと、竹竿は、突き上げられた。

バタバタと羽音をたてて、一羽の小鳥が、もがくのが、どぶの目に映った。
いそいで、近づいたどぶは、みごとに、鳥黐に刺された目白を、そっと取りはなして、
「どうなさいます?」
と、左門に問うた。
「放してやれ」
左門は、岩から立ち上ると、ゆっくりと、築山を降りた。
遠目では、盲目とは見えぬ足どりであった。
左門は、書院の縁側に腰を下してから、
「市中に、妙なものが、流行りはじめたな」
と、云った。
「犬神様、というやつでございましょう?」
「うむ」
「いってえ、どういうのでございましょうね、これア――」
「天下泰平のせい、といえば、それまでだが、こういう現象は、ほめたものではない」
「全くで――」
「先日、小松九郎兵衛が参って、なげいて居った」
小松九郎兵衛というのは、町方同心の一人で、もう五十すぎの腕利きであった。
「小松の話では、どうやら、犬神は、五代様までさかのぼるようだ」
「へえ?」

「元禄の頃の、大さわぎは、お前も、きいて居ろう。正気の沙汰ではなかったようだ」
五代――将軍綱吉の生類憐愍令は、江戸市民を、塗炭の苦しみに陥れたものであった。

六

犬が人間よりも威張っていたのであった。お犬様が駕籠に乗り、さむらいが、それの供をして、歩いた。
将軍綱吉は、戌年であった。右馬頭ともいった。
綱吉の母桂昌院の帰依僧隆光から、
「上様は、天理を以て、天下の主とお成りあそばしましたが、善根をほどこしたまわぬと、御寿命が短い、と八卦に出て居ります。戌の年のお生れで、しかも、御治世の元和二年は、戌年でありましたゆえ、これよりは、狗を愛され、無益の殺生を禁じ、天下に、生類憐愍の令を布きたまわれば、御寿命も永かろうと存じます」
と、すすめられたのをきっかけに、綱吉のきちがいじみた悪政が、はじまったのである。
尤も、当時は、赤犬などは、平気でぶち殺して、煮たり焼いたりして、食ってしまう風習があったのである。
それにしても、この生類憐愍令の施行は、ひどいものであった。
悲惨な例は、かぞえきれないくらいであった。
秋田淡路守下屋敷の家臣は、わが子が喘息に苦しんでいるのを見かねて、小児喘息に燕を喰べさせるとよく効く、ときいて、吹矢でこれを落としたことが、発覚して、五歳の息子とともに、

小塚原で、斬罪に処せられた。

大八車を、犬に曳かせて、びっこにさせた科で、遠島に処せられた人足も出た。

病馬をすてた農夫も、流罪に処せられた。

犬猫、牛馬はもとより、鶏も、亀も、うなぎもどじょうも、食用として飼うことを禁じられた。

宝永二年には、

「牛馬は、重荷、あるいはかさ高のものを負わしむべからず。使うときは、なるべきほどにいたわり、疲労せざるように、愛畜すべし」

という法令も発布されている。

小鳥とか蛇とか、白鼠とかに、技芸を教えて、見世物にすることも、かたく禁じられた。

生類のうちで、犬が、特別に庇護されたことは、もちろんである。

狂犬であっても、これを杖打つことは、許されなかった。犬を殺傷して、死刑に処せられた者が、三百余人の多きにのぼった。

まことに、滅茶滅茶な時代であった。

犬を傷つけたために、罰せられるのをおそれて自殺した者もあったくらいである。犬が子を生めば、ただちに役所に届け出なければならなかった。犬が病めば、近所隣りの者たちが、これを看まもって、犬医者に高い診察料を支払った。犬がのうのうと往来に寝そべっていれば、通行人の方が、これを避けて、遠まわりした。

都西の中野村には、方一里の犬小屋が設けられ、五千匹が集められた。その食料は、江戸市民に提供させた。犬一匹に対して、人間一日の食の半分であった。

そのキャンキャンワンワンの吠声は、数里の彼方まで、きこえた、という。

今日から顧れば、まるで悪夢のような出来事であった。

七

ところが——。

時代が下って、十二代将軍の治政下の今日、またぞろ、犬をあがめる風潮が起ったのである。

こんどは、上からの命令ではなく、庶民の間から、起った。

犬が神になって祟る、というのである。

誰が云い出したものか——おそらく、怪しげな祈禱師が口から出まかせにしゃべったものに相違なかろうが——この犬神は、遠くさかのぼって、五代将軍綱吉の、あの凄まじい生類憐愍時代に生れたものだ、という。

将軍綱吉の愛妾の一人に、お由良の方という美貌の女性がいた。

これが、途方もない犬きちがいであった。

宝永六年正月、将軍綱吉は、六十四歳で逝ったが、それを待ちかまえていた閣老たちは、生類憐愍令を解き、日本中にあふれていた犬を、片っぱしから、殺させた。

正月から三月までの三月間に、殺された犬は、七万匹の多きに達した。

まことに、てのひらをかえすような、容赦のないやりかたであった。

将軍綱吉の愛妾たちは、それぞれに位牌を与えられて、外桜田の御用屋敷へ移されていたが、

このあまりな閣老の態度の急変ぶりに、ただもう、あきれ、おののいた。

愛妾たちは、それぞれ、一匹ずつ愛犬をつれて、大奥から御用屋敷にひき移ったのであったが、その愛犬さえも、いつの間にか、役人の手で何処かへつれ去られて、殺されてしまったのである。

愛妾たちのうち、最も犬好きであったお由良の方は、自分の愛犬が拉致されると、半狂乱になった。

そして、ついに、食を断って、自殺同様の死にかたをしたのであったが、毎日口走ったのは、

「日本全土で殺されたお犬様の亡霊を、集めて、わたしは犬神となって、七代の後までも、祟りつづけてくれようぞ！」

との呪いの言葉であった。

それから、七代を経て、お由良の方は、犬神となって、めざましい祟りをしはじめた、という次第であった。

もし、祟るなら、お由良の方は、六代将軍家宣の治世から、早速に、行動を開始すべきであったろうが、どういうものか、十二代将軍の今日まで、鳴りをひそめていて、急に、祟りはじめた、という次第であった。

どうも、そこらあたり、理窟が合わないが、一般庶民は、そういう不合理など、どうでもよく、ただもう、ひたすら祟られぬように、護符を貼ったり、祈禱師の許へ足をはこんだり、家を建てかえたりし、大わらわのていである。

そのむかし、虐殺された七万余の犬の亡霊をひきつれたお由良の方は、いまでは、

「お犬の方さま」

と称ばれて、庶民の間で、知らぬ者はないように有名になっている。

火事も疫病も、家庭内の不幸も、すべて、「お犬の方さま」の祟りというわけであった。

八

「ばかげたことだが、いったん流行りはじめると、これを、阻止することは、不可能だ」

左門は、云った。

「へえ」

どぶは、うなずいた。

「庶民は弱いもの、お上の命令に絶対服従するもの——という考えは、まちがって居る。一人一人は弱いものだが、これが集団となると、洪水のような暴威を発揮する。識者からみれば、たわけきった迷妄であっても、これを目覚めさせるてだては、ない。ただ、拱手して傍観しているよりほかはないのだ」

「たしかに、その通りでございます」

「ただ、この迷妄が、思いがけない犯罪を、生むことになるのが、おそろしい。小松が申していたが、近頃は、大名旗本の中にも、お犬の方さまの祟りを信じて居る者がいる、という」

「ほんとうでございますか？」

どぶは、あきれて、左門を、見つめた。

「土井但馬守光貞なども、その一人のようだ」

土井但馬守光貞といえば、つい数年前まで、若年寄をつとめた大名であった。

茨城の、鹿島灘に面する治領三万石は、さしてゆたかではないが、若年寄時代に、海運の事に大いに力をそそぎ、そのおかげで、莫大な私利を得た、といわれている。

「いま、吉原の廓と日本堤でへだてる田圃のまん中に、お犬の方の霊廟が建てられているときく」

「へい。あっしも、きいて居ります。なんでも、日本中から、犬好きの寄附をつのって、大層な建物をお建てようとしているらしゅうございます」

「その土地の提供者が、土井但馬守だ」

「へえ、そうでございますか。土井様も、よほどの犬好きなんで――？」

「お由良の方が、茨城の出で、あるいは、但馬守と、先祖は縁戚の関係で、あったかも知れぬ」

「成程――」

「わたしが、想像するに、土井但馬守は、必ずしも、お犬の方の祟りを信じては居るまい。また、格別の犬好きとも思われぬ。……但馬守は、大名に似合わぬ利殖の道に長けている人物らしい。霊廟を建てることにして、寄附金を募れば、おそらく、十万両や十五万両の巨額が集まるであろう。その金を、商人どもに浮貸しをして、それから生ずる金利をふところに入れる。まず、そんなところではあるまいか」

いつもながらの、左門の鋭い観察であった。

「しかし、殿様――霊廟を建てるのを、止めることはできますまい。もし、止めようとすれば、大騒動になります」

どぶは云った。

「わたしは、建ったものを、つぶしてやろう、と考えて居る」

「つぶす？　……そんなことが、できるものでございますか？」

「人間の手がつくりあげたものを、人間の手でつぶすのだ。できぬ相談ではない」

九

どぶに、また、ひとつ、大仕事が、与えられた。

前若年寄土井但馬守光貞が、自身の地所を提供し、日本全土から寄附を募って、建立している「お犬の方さま」の霊廟を、ぶちこわすことであった。

とりあえず――。

「お犬の方さま」とは、どういうしろものか、実地に当ってみることにした。

時ノ鐘にほど近い十軒店町の茶舗駿河屋が、庭に祠を建て、白髪鬼女面の巫女を寄宿させて、さかんに、祈禱させている、という噂をきき込み、一日、どぶは、駿河屋へ乗り込んだ。

祠は、母屋と土蔵とのあいだの中庭に、稲荷の祠と同じ構えで、つくられていた。ただ、稲荷は赤いのに対して、こっちは、無数にならべられた小さな鳥居が、白塗りであった。「お犬の方さま」が愛した犬が、白だった、と解釈したものに相違ない。

いましも――。

祠の前では、白装の巫女が、憑霊状態になって、なにやら口伝らしい呪文をとなえつつ、単純でかんたんな舞踊を示していた。

五十年配の、噂通り、眼窩がおちくぼみ、鷲鼻、反っ歯の異様な形相の女であった。

店のあるじはじめ、近所かいわいから集った町人たちは、鳥居のてまえの地べたに坐り込ん

で、一心に合掌している。

——埒もねえ、とはこのことだ。

どぶは、信者たちのあいだを、ずかずかと通りぬけると、鳥居の中の敷石を進んだ。

駿河屋のあるじが、びっくりして、

「あ——もし！」

と、あわてて、ひきとめようとすると、どぶは、いきなり、懐中から例の仕込み十手をひきぬいて、

「ご用筋だ。黙って、見ていてもらおうぜ」

と、脅した。

「な、なにをなされます？」

「なにをするか、見ていりゃ、判らあ」

どぶは、にやりとすると、仕込んだ双刃の直刀を、きらりと抜くや、目にもとまらぬ迅業で、鳥居の柱を、両断した。

あっという間に、五柱ばかりが、切られて、音たてて倒れた。

巫女が、その形相をさらに凄じいものにして、どぶを睨みつけた。

「無礼者！　狼藉をはたらくと、犬罰の祟りが、おのれの一家を滅すぞ！」

「へっ！　犬罰だと——。わらわせるねえ。元禄の時世じゃあるめえし、人間の上に犬を置かれてたまるけえ」

どぶは、巫女を突きのけると、祠の扉をひきあけた。

埴輪めいた犬が、祭壇に置かれてあった。

どぶは、そいつを、手づかみにした。

「な、なにをするのじゃ！」

むしゃぶりついて来た巫女を、足払いで、ひっくりかえしておいて、

「おい、信者衆——。祟るか祟らねえか、よく見ていろ」

云いざま、敷石へ、たたきつけた。

十

粘土でこねあげて、白塗りにした犬は、粉みじんに砕け散った。

駿河屋のあるじはじめ、老若男女十余人は、仰天して、口もきけなかった。

巫女は、その場へ、べったりと平伏して、物狂おしく、呪文を喚きたてている。

どぶは、そばにしゃがみ込むと、

「おい、婆さん——、どこから流れて来やがったか知らねえが、そろそろ江戸を退散しちゃどうだ？」

と、云った。

巫女は、どぶを睨みつけると、

「お犬の方さまの祟りのおそろしさを、思い知るぞ！」

と、叫んだ。

「どういうあんばいに、祟られるか、ひとつ、きかせてもらおうじゃねえか」

「おう、きかせてやろうず。おのれの体内に、赤犬、駒犬、ぶち犬、黒犬、白犬が、ぞろぞろとはいり込んで、狂いまわるのじゃ。おのれは、高い熱にとりつかれて、うなされ、のたうち、痩せおとろえて、もだえ死ぬ」

「ふん、その犬どもを追いはらうのは、おめえの祈禱が効験があると云やがるのか」

「そうじゃ。お犬の方さまに、お許しを乞えば、口から耳から足さきから、犬は、ぞろぞろとはい出して、どこかへ行ってしまうならいぞ」

「はっはっは……、お笑い草も、こうなっちゃ、すててておけねえ。おい！　婆さん、そういうおめえのからだの中に、赤、駒、ぶち、黒、白が入り込んでいやがるのじゃねえのか」

「なにを、たわけなことを――」

「いるか、いねえか、調べてくれるか」

どぶは、いきなり、双刃の直刀を、ひと振りした。

巫女の袴の紐が、切られた。

悲鳴をあげて、遁げようとするのへ、どぶの十手刀は、容赦なく、あびせかけられた。

袴が落ちた。上着が背中から真二つに截られた。襦袢も剝ぎとられた。

みるみるうちに、痩せこけた裸身が、陽ざしにあてられ、巫女は、もう、生きた心地もなく、あちらへよろけ、こちらへ泳いだ。

しなびた乳房も、あさ黒い腹部も、たるんだ臀も、すべてあらわにされて、とうとう、巫女は、泣き声をあげて、どぶに、両手を合せた。

「へへへ……、このうすぎたねえからだの中に、犬どもが入り込んでいやがるのか。よし、腹を

かっさばいてくれらあ！」

「ゆ、ゆるして！」

「おや、とうとう、人間らしい声を出しやがったな。犬どもは、その臍から、逃げ出しやがったな」

「ああ！　も、もう、江戸から、出て行きます。だから、ゆるして！」

素裸の初老女は、両手で顔を掩うと、わっと、泣き出した。

「おい、駿河屋！」

どぶは、颯爽として、云った。

「お犬の方さまの正体は、これだぜ。わかったか。わかったら、この祠を、たったいま、ぶっこわせ！」

怪異

一

数日後、どぶが、市井の「お犬の方さま」騒ぎの報告に、町小路家を訪れると、左門の前には、町方同心の小松九郎兵衛が、坐っていた。

人類の先祖は猿であった、とみとめたくなるような皺だらけの風貌で、痩せこけた小柄な姿は、とうてい町奉行所きっての腕利きとは見えなかった。

どうやら、その報告は終った模様で、小松九郎兵衛は、小夜がたてた抹茶を、さもうまそうに飲んでいた。

どぶは、縁側にかしこまった。

左門が、

「きこう」

と、うながした。

どぶは、自分が見聞したことを、手短かに、要領よく、報告した。

ききおわった左門は、九郎兵衛に向って、

「この男を、にわか同心にしてもらおうか」

と、云った。

「は――」

九郎兵衛は、どぶをふりかえると、

「日本堤わきの土井家の地所から、木乃伊が、発見された」

と、云った。

「へえ？　木乃伊！」

「御霊廟建立にあてられたその地所は、土井家累代の墓地であった」

「へえ、あそこが……」

どぶも、三日ばかり前、そこを見て来ていた。

見わたすかぎりの田圃の中に、離れ小島のあんばいに、こんもりと森がのこっていた。

お由良の方の霊廟は、その森の中をひらいて、建立されることになっていた。

どぶが、出かけて行った時も、十数人の人足が、しきりに立働いていた。

「地層の関係でありましょうな、あの森を中心とした一帯は、湿気がすくなく、地を掘ると、瓦斯が立ち昇ります」

九郎兵衛は、左門に、云った。

「棺の中の死骸が、木乃伊になったのは、そのせいかと存じられます」

昨日、人足たちが、掘りかえしているうちに、朽ちた棺を発見し、そっと地上へはこびあげると、棺がばらばらに崩れて、木乃伊が現われたのであった。

そのことが、土井家に通報されると、当主但馬守は、

「せっかくの貴重な木乃伊であるから、学者、医師に立合わせて、調べてみることにいたそう」

と、云ったのである。

その一体だけではなく、ほかにも、幾体かの木乃伊が埋められてあるに相違ない、と判断された。

町奉行所からも、何人かが出張ることになった。

小松九郎兵衛は、左門にも出向いて頂けないか、とすすめに来たのであった。

左門は、自分の代りに、どぶを同心にしたてて、九郎兵衛にしたがわせることにしたのである。

二

いつの頃からか、そこは、五重の杜、と称ばれるようになっていた。

物識りげな故老に述べさせると、そのむかし、京の都から奥羽の任地におもむくさる公卿が、この土地で、客死し、従うていた官女が、これをなげいて、五重の唐衣を木枝にかけて、あとを追うて自殺したので、この名称が起ったそうである。

この一帯が土井家の所有に帰したのは、さしてふるいことではないが、むかしから、森は、墓地として、立木も伐られず、そのままにされていたので、狐狸のたぐいがひそんでいるという噂があった。

墓地といっても、土井家代々の殿様及び奥方の正式の墓地は、国許の菩提寺にあり、むしろ、ここは、定府の家臣その他、傭い人を葬るところといえた。ただ、土井家の墓地ときこえている以上、形式的に、殿様及び奥方の墓碑が建てられ、家臣と傭い人たちの墓が、それにかしずくあんばいになっていた。

このたび——。

当主但馬守が、この五重の杜を「お犬の方さま」の霊廟に提供するために、墓地をとりはらうことにしたのも、先祖の遺骨は、ここにはない、という気楽さがあったためである。

家臣及び傭い人の遺骸だけを、移せばよかったのである。

木乃伊は、その中にあった。

小松九郎兵衛の供をして、同心姿になったどぶが、その翌日、五重の杜へ出かけて行ってみると、ものものしい竹矢来がめぐらされていた。

矢来の外には、噂をきいて、百人以上の野次馬が集っていたが、もとより、距離が遠くて、掘り出される木乃伊を、見物できるはずもなかった。

ただ、集って、がやがやとさわいでいるばかりであった。

現場に立会っているのは、十数名で、土井家の重役らしい人物、公儀目付、町奉行所の与力、名のある学者、医師など、いずれも、年配者ばかりであった。

小松九郎兵衛とどぶが、到着した時、すでに、棺が四つあまり、地上へはこびあげられていた。

「へえ！　まだ、腐っていねえ棺もございますねえ」

どぶは、九郎兵衛に、ささやいた。

「三四年前に葬ったのもあるな」

九郎兵衛は、うなずいた。

「死んで、木乃伊になってまで、人目にさらされるのは、かなわねえ」

どぶは、首を振った。

やがて、また、ひとつ、掘り出された棺が、人足たちの手で、はこびあげられた。

その棺も、まだ腐蝕してはいなかった。

「これア、何年くらい経って居りましょうね！」

どぶは、九郎兵衛に、たずねた。

「さあ？　……よくは、判らんが、二十年以上は経過しているのではないか」

三

ふと——。

どぶは、立会い人の中に、若い女が一人、まじっているのに気がついた。

それまで、木立の中に、かくれるようにして、佇んでいて、急に、出て来て、その棺が、はこびあげられるのへ、なぜか異常に緊張した面持で、必死なまでの視線をあてたのである。

武家の娘ではなかった。ただの町家の者にしては、仇っぽいが、さりとて、料亭や水茶屋のようなところで働いているとも見えなかった。

ちょっと、えたいの知れぬ、という印象だった。

人足の手で、蓋が開かれた。

人々の眼眸が、その中へ、注がれた。

九郎兵衛もどぶも、のぞき込んだ。

その一体も、やはり木乃伊になっていた。

眼窩がおちくぼんでいるほかは、眉も鼻梁も唇も、そのまま残っていた。

これは、女であった。しかも、若い、と看てとれた。

胸で組みあわされた両手に、皮も肉もついている。

死んでのち、どれくらい経ったか知らぬが、ちゃんと、人間のかたちをとどめているということは、なんとも無気味な眺めであった。

のみならず——。

九郎兵衛が、思わず、

「これは、病気じゃないな」

と、つぶやき、どぶも、それを、みとめた。

額、頤、頸根に、あきらかに、刀痕をとどめていたのである。

「お手討ちか」

どぶは、外気にふれて、一瞬裡に風化しはじめた死体を、眺めながら、わざと、はっきりと云った。

とたんに、むかい側から覗いていた若い女が、その言葉に、反応を示した。

きらり、と眸子を光らせて、どぶを視た。

どうやら、この女は、この死体を見とどける目的で、立会っているのだ、とどぶは、察知した。

と同時に——。

——はてな?

と、直感がひらめいて、木乃伊の貌と、女の貌を、すばやく、観くらべた。

しかし、もう次の瞬間には、木乃伊の貌は、みるみるうちに崩れて、その急速な崩れかたに、どぶは、息をのまねばならなかった。

外気にふれて、たちまち、変色し、音もなく、崩れるさまは、凄絶の二字につきた。

どぶが、はっとわれにかえって、顔をあげた時、もう、むかい側に、若い女の姿はなかった。

見物をおわって、竹矢来の外へ出て行きつつ、どぶは、九郎兵衛に、云った。

「若い女が、居りましたね」
「うむ」
「あの女の顔は、木乃伊の骨相に似かよっては居りませんでしたか？」
「お前も、気づいたか」
九郎兵衛も、すでに、それをみとめていたのである。

四

どぶは、木乃伊見物の逐一を、左門に報せた。
立会い人の中に交っていた若い女の貌と、女木乃伊の貌が、どうやら似かよっていた、ときいた左門は、
「面白いな」
と、云った。
「へえ。つまり、お手討ちをくらった女の娘が、見物に来たのじゃねえか——そんな想像を、してみやしたが……」
「そこへ入れてもらったからには、土井家と、かかわりのある女であろうが、お前は、玄人じみて居った、と申していたな？」
「へい。水商売をやっているのが、かたぎにみせかけた——そんな女でございました」
「ふむ」
左門は、べつに、その女が、どこの者か、調べてみよ、とは命じなかった。

しばらく、無言でいてから、ふと、思い出したように、
「土井家には、これから、怪異が起るかも知れぬ」
と云った。
「墓をあばいた祟りが起る、と仰言るので——？」
「祟りか。そうだな、祟りと云えそうな怪異が、起るであろうな」
「どうして、それが、おわかりなさいますんで？」
「げんに、起って居る」
「へえ——？」
「小松九郎兵衛が、今朝がた、報せに参った。——土井家には、東照神君（家康）から拝領したという実物大の木馬がある。それが、この春以来、ときどき、夜更けて、かたかたと、邸内を歩きまわるそうな」
「そ、そんな——ばかくせえ！」
「小松が、昨日、お前とわかれて、土井邸を訪ねて行くと、側用人から、そっと打明けられて、どうしたものか、と相談受けた」
「じゃ、その側用人も、木馬が動くのを、目撃した、というんで——？」
「そうだ。この目で見とどけた、と申していた由」
「あきれた話でございますね。とても、信じられねえ」
どぶは、かぶりを振った。
「こう泰平がうちつづくと、木の葉が沈んで、石が浮く矛盾した現象も起る」

「殿様――」

どぶは、いささか、ひらきなおったかたちで、

「貴方様も、幽霊とか化物とか――あり得ねえような怪異ってえしろものが、この世に存在する、とお信じなさいますのか？」

「信じては居らぬ」

「じゃ、生命のねえ木馬が、動くなんてえ、阿呆らしい話を、本当だと……」

「怪異は信じて居らぬが、木馬が歩くことは、ないことはあるまい、と思う」

「どうも、仰言ることが、よくのみこめかねます」

「どうして、木馬が歩くか、それを調べるのが、お前の役目だ」

左門は、うすい笑みを、口辺に刷きながら、云った。

五

どぶが、土井邸へ、もぐり込んだのは、それから三日ほど経ってからであった。

ちょうど、土井邸では、庭の茶亭の修築をしていたので、どぶは、その棟梁にたのんで、下働きの職人に化けたのであった。

もぐり込む前に、どぶは、あらかじめ、土井家に就いての知識を仕入れていた。

前若年寄土井但馬守光貞が、海運によって、しこたま私腹をこやした、という事実の有無は、これから調べることになるが、その私生活のゆたかさは、きいてまわった限りでは、十万石二十万石の大名も及ばぬくらいであった。

近年、吉原の廓へ、忍びでかよう大名など、一人もいない、と思っていたどぶは、土井但馬守が、江戸町の大まがきで、

「寐かた様」

と呼ばれて、大層な歓迎を受けている、ということを、つきとめた。

土井但馬守は、「お犬の方さま」を信仰する大名として有名であり、「寐ぬ」の語呂合せで、「寐かた様」と呼ばれるようになった模様であった。

その遊興ぶりは、富有な大商人どもも及ばぬほどの派手さであった。

もとより、廓の連中は、口がかたく、土井但馬守が、月のうちどれほどかよって来るか、また、散財の内容も決してしゃべろうとはしなかったが、どぶが、幾人かに当ってみたかぎりでは、あきれるほどの費消ぶりと受けとれた。

大名の内証が、どれほど逼迫しているか、どぶも、よく知っている。

吉原の廓で、大金を使うなどということは、重役たちが、絶対にみとめるところではない。

家臣の俸給を借りあげていない大名は、一家もない、といっても過言ではないのであった。

大名の台所は火の車である、というのが、庶民の間では、常識となっている時世であった。

そういう時世に、平然として、遊里で、大金を湯水のごとく使っている、ということは、家中がそれをみとめるくらい、裕福である証拠であった。つまり、土井但馬守自身が、藩の財政にあてる分とは、別のたくわえを持っていることを意味した。

三万石といえば、二千坪の藩邸であるが、これが、絶えず修築されているのであった。女中の数も、他家に比べて、多い、という。その奥向きのぜいたくさも、出入商人の足のはこびの多さ

で、およそ、想像がついた。

但馬守には、四人の子がいるが、その子らも、まことに、気ままに遊びくらしている模様であった。

長男　縫之助
次男　万之助
むすめ　菊
三男　真之助

この四人が使う金だけでも、月に百両は下るまい、という出入商人の噂であった。

六

土井邸へもぐり込んで、三日目——。

午飯刻のひまをみて、どぶは、広い庭園を、ぶらぶら歩いた。

廻遊式の庭園は、およそ、見事なものであった。

敷砂や蘚苔にかこまれた飛石の苑路をたどると、つくばい、井筒を添えた石組みの美しさ、泉水に沿うて行けば、滝があり、汀がつくられ、石橋を渡って、築山を越えれば、一転して、枯山水の情景となるあんばいであった。

苔をのせた石灯籠や、下木、下草を配した真木など、すべて、吟味に吟味をかさねたものと思われた。

しかし——。

庭園に就いての知識など、一向に持ち合せていないどぶが、途中で、

——はてな？

と、首をかしげた。

大層な金を投じてつくられたには相違ないが、どうも、あまりにも、人工的すぎるような、ある安っぽさを、どぶは、感じたのである。

——庭園てえしろものは、金をかければ、かけるほど、佗びとかさびとかのおもむきが、出て来るものじゃねえのかな。

幽玄とか閑寂とか、そういう境地に、人を置かせるのが、最もすぐれた庭園のはずであった。

ところが、この庭園は、たとえば、松の枝ぶりなど、一見すると、まことによく手入れされて、立派なのだが、立ちどまって、じっと眺めているうちに、それが、人工によってひどく不自然にゆがめられているいやみの印象を受けるのだ。

どぶは、町小路家の庭と比べてみた。

町小路家の庭は、べつに庭師を入れてはいない。老いた用人が、ひまをみて、手入れをするだけである。だから、樹木はしげるにまかせてあるし、苑路には、いつも落葉がちらばっている。下草ものび放題であったし、袖垣も中門も四阿も、ふるびて、ところどころこわれている。

しかし、どぶのような無趣味な男でも、その庭に入ると、なんとなく、おちついた気分になるのであった。

荒れているとみえて、実は、深山幽谷に在る観を抱かせるように、自然なたたずまいなのであった。

これは、どうやら、左門の父が、茶道の奥旨に達した人で、露地という様式に、造詣が深かったためであろう。老用人が、主人の指示によって、いつとなく、庭師以上の心得を持つようになったに相違ない。

夏などは、草ぼうぼうと生い茂るにまかせているのだが、もとより人手のないせいではあっても、かえって、静けさ寂しさの妙味をあらわす効果があるのかも知れなかった。

どぶは、この土井邸の、あまりにも吟味されすぎた、すみずみまでに手をかけた庭園を眺めて、はじめて、町小路家のそれの方が、はるかに雅趣があることに、気がついた。

七

——そうか。

どぶは、合点した。

——この庭は、いじくりまわしすぎて、木も石も草も水も、なにもかも、妙てけれんの変てこらいになりやがったんだ。だから、歩いているうちに、イライラして来るんだ。

神経のにぶい者なら、その見事な造りに、ただ、感嘆するに相違ないであろうが、生死の境をいくたびかくぐり抜けて来たどぶのような男は、世間の塵労垢染の中にくらしているだけに、かえって、まことの美しさ、清らかさが、判るのであった。

宿直の士が二人、見まわりに来たのに出会ったどぶは、卑屈な身振りで、

「お庭を拝見させて頂いて居ります」

と、頭を下げた。

「どうだ、職人——、これほどの立派な庭園は、江戸にも見当るまい」

「へい、仰言る通り、ご立派でございます」

——立派だというのは、名園ということにはならねえや。

そう胸のうちで、つぶやきながら、

「さぞかし、一流の庭師が、手入れに余念がないのでございましょうな？」

と、たずねた。

「うむ。おそらく、猫の島兵衛は、日本一の庭師であろうな。……それ、あそこにうずくまって居る」

指差されて、どぶが見やると、段違い刈込みの寄植まがきで、剪定鋏の音をひびかせている後姿があった。

半白のあたまで、腰も曲りかけている。

どぶは、そこへ、近づいた。

「親方、精が出るね」

声をかけたが、耳が遠いのか、ふり向きもしなかった。

どぶは、しかし、この老爺に対して、一言皮肉をあびせたい気分になっていた。

日本一の庭師なら、こんなあまりにもいやみな、イライラする庭をつくるはずがない、と思われる。

殿様の命令で、やむなく、造りすぎているのであれば、心中に、不平不満があふれているに相違ない。

もし、おのが手にまかせられているのであれば、その得意の鼻柱を、へし折ってやりたかった。

「親方！」

どぶは、大声で、呼びかけた。

すると、

「耳はある」

冷たい返辞が、かえって来た。

「そうか。偏屈だ、というわけだな。とかく、名人てえのは、偏屈だが、ひとつ、下っ端職人に、親方が、どうして、こんな庭を造りなすったか、うかがいてえ」

どぶは、云った。

猫の島兵衛と呼ばれる老いた庭師は、はじめて、どぶを見かえした。

「どうして、造った、とはなんだね？」

「あっしは、庭のことはよく判らねえ。判らねえが、このお庭を拝見しているうちに、どうにも、ちイとばかり首をかしげたくなったんでさ」

八

「ふん――」

老庭師は、じいっと、どぶを見据えた。

「なにが、気に食わないのかね？」

「こっちが思ったままを、云わせてもらっても、かまわねえかね？」

「かまわないとも」

「このお庭は、立派だ。立派すぎる。金が、かかっている。しかし、どうも、あっしゃ、面白くねえね」

「どう面白くないかね？」

「おちつかねえんだ。眺めりゃ眺めるほど、イライラして来るんだ。松の枝ぶりひとつ眺めても、なんだか、キザったらしくて、いやみで、人の気持を寄せつけねえような恰好をしているんだ」

「……」

「べつに、親方に対してこんたんがあって、ケチをつけるんじゃありませんぜ。あっしにゃ、親方が、わざと、枝をひん曲げたように思われてならねえんだ。どうですかい？」

そう云われても、猫の島兵衛は、べつに、慍らなかった。

ひくいこもり声で、

「わしの性根が曲っているせいかも知れぬ」

と、云った。

「そう返辞されると、こっちがこまるんだが……、親方は、このお庭を、お殿様から、まかせられて居るんですかい？」

「ああ、まかせられている。ちょうど、三十年になる」

「ふうん、三十年かかって、こんな庭をつくりあげたのか。で――お殿様は、お気に召しているんですかい？」

「べつに、お叱りをこうむったことはない」
「親方は、このお庭が、自慢ですかい？」
「自慢するに足りる、と思うている」
島兵衛は、はっきりとこたえた。
「木や石や草は、自然なかたちにみせかけるところに、庭師の腕があるのじゃねえのかな。いかにも、人の手をかけましてございい、というかたちを、むき出しちゃ、風情がねえ、と思うんだが……」
「それぞれの庭師によって、つくりかたが、ちがうでありうて」
「親方は、これまで、このお庭に、ケチをつけられたことが、一度も、ねえんですかい？」
「ある、幾度もな」
「しかし、自分の考えを押し通した——というわけか」
島兵衛は、ちょっとの間、返辞をしなかった。
ふたたび、まがきを刈込みにかかりながら、つぶやくように、云ったのは、
「もし、大地震でも起って、このお庭がめちゃめちゃになったら、こんどは、お前さんが、感服してくれるような、まったく趣きのちがったやつを、つくるだろうな。わずか数歩あるいただけで、天地人三方の幽玄美をあじわわせるような、野趣そのままの露地をな」
その言葉であった。
老庭師は、この庭園が、どぶの指摘する通り、人工的すぎるいやみをたたえていることを、ちゃんと知っているのであった。

九

猫の島兵衛は、どぶの質問にこたえて、この庭園を自慢に思っている、と云ったが、それは、草木石水を、かくも人工的に造りあげることができる、ということを誇っている、という意味なのか？
そうとすれば、この老庭師は、よほどのひねくれ者である。
「成程な」
どぶは、いった。
「こういうお庭なら、ほんものの馬より、人間が造った木馬が、歩いた方が、ふさわしいやね」
しかし、島兵衛は、もう、全くのつんぼになったように、仕事にうち込んで、どぶを見かえろうとはしなかった。
その宵——。
元のよれよれの岡っ引姿にもどったどぶが、ふらりと現れたのは、浅草広小路を、茶屋町へすこし入った横丁にある小料理屋万喜であった。
「おや、いらっしゃいまし」
小股の切れあがった色年増のおかみに、にっこりと迎えられて、どぶは、親指を示した。
「主は、どこかい、二階かい？」
色年増は、お数寄屋坊主河内山宗俊の情婦であった。
「吉原で遊びくたびれて、ここで、ぐうぐう高いびき。あたしゃ、いい加減、不満だよ」

「どうでげす、坊主を岡っ引に乗りかえちゃ」
「坊主には、まだお布施が入るけど、御用聞きには、ねえ――」
「醜男には、情がありやすぜ。天女に仕える漁師の心構えってえやつだ。舟をあやつる棹かげん――、その棹が、ただの太さじゃねえ。いっぺん、見せようか」
「坊主は、耳がよくきこえるよ。二階へ上って、ひっぱたかれないように、要心おし」
どぶは、やぞうをきめて、袂をひらひらさせながら、階段をのぼって行った。
河内山宗俊は寐そべって、枕草紙を読んでいたが、
「くだらねえ。ひとつ、おれが、書いてやろうか。後家専用と銘うって――」
と、大あくびして、ほうり出した。
それから、どぶへ視線をあてると、
「どうだえ、景気は？」
「あいかわらず――懐中わずか二十文」
「そろそろ、犬稼業の足を洗うか。同じ犬でも、お犬の方さまは、大繁盛だぜ。尤も、お前の面は、祈禱師には向かねえな」
「そこで、癪だから、お犬の方の亡霊を、この江戸市中から、追っぱらってくれようと決心した次第でさあ」
「大それた料簡を起さねえ方がいいぜ。この河内山も、そろそろ宗旨がえをして、狐に対抗するお犬大明神でも、おっ建ててくれようか、と思案中だ」
「坊主と稲荷じゃ、犬と狐――、そのそばへ、あっしゃ、猿を祀る庚申塚をつくって、ワンワン、コンコン、キッキッと、派手に客寄せすりゃ、とんだ、奥山の見世物ですぜ」
「ははは……、つまらねえ。ところで、なにか用かえ？　お前の方からたずねて来るとは、珍しい」

からくり

一

「ひとつ、おうかがいしてえことがありましてね」
どぶは、真面目な顔つきになって、云った。
「なんでえ？」
「当節、吉原で、粋人通客が、遊び興ずるのに、どんな品ものを使うか、それをお教え頂きてえんで――」
「紀伊国屋文左衛門が、大門を閉めさせ、大夫をのこらず集めて、大広間で松茸狩りをやらせたり、奈良茂が、同じく、畳へ雪を降らせて小判をまいたり、百人分の大まんじゅうをつくらせて、玄関をぶちこわして、かつぎこんだりしたのは、むかしの夢だ。……いまは、遊びかたは、みみっちいやな」
「しかし、粋の、通の、ずんと江戸前ぶった客は、乙な遊びかたをしているんじゃござんせんか？」

「せいぜい、からくり細工の亀に、盃をはこばせる趣向ぐれえなものよ」
「それだ！」
どぶは、大声を出した。
「びっくりさせるな。なんだというんだ？」
河内山は、どぶをけげんに見かえした。
「その、からくり細工でさ。亀が歩くんですかい？」
「そうだ。亀のせなかへ盃をのせて、酒を注いでやると、ヨチヨチと、畳を歩いて、むこう側に坐っている客の膝の前まで、行く。客が、盃を把り上げると、ぴたりと止まる、という巧妙な仕掛をしてあるんだ。亀を、べっこうで製ってあるのも、ミソだね」
「その亀を、どこの細工師が、つくりましたかい？　ご存じありませんかね」
「からくり唐次だよ」
「からくり唐次！」
「長崎へ長らく修業に行っていた、という野郎だ。まだ、二十五六の若い細工師だが、途方もねえ見事な腕前を持っていやがる。オランダ商館で、むこうの手妻師の弟子になっていた、というが、まんざらでたらめを云っているのじゃないらしいな。なにしろ、その亀をはじめ、人をびっくり仰天させる仕掛の細工物を、つぎつぎとつくってみせる。まあ、百聞は一見にしかずだ。一度、からくり唐次の家へ行ってみねえ」
「合点――」
どぶは、立ち上った。

「おいおい、足元から鳥が飛び立つように、なにをあわてている。べつに、今日じゃなくてもいいだろう。一杯やんな」
「そうはしていられねえんで――、ごめん」
どぶは、小料理屋を、とび出した。
からくり唐次の家は、鳥越橋を渡った天王町の新道にあった。
広小路から、まっすぐに、急いで来たどぶは、橋を渡りかかって、馴染の女すりのはなれ島のお仙に出会ったが、
「おう――」
と、うなずいただけで、さっさとすれちがった。
「なんだい？　人殺しでもあったのかい、あわをくってさ」
「人殺しは、これからはじまるんだ」
なにげなく云いかえして、どぶは、一瞬、不吉な予感をおぼえた。

二

こんどは、べつに、むごたらしい人殺しが起ったという次第ではなかった。
妙な迷信が流行して、五代将軍時代の犬きちがいの上�final の祟りをおそれて、一人の大名が、霊廟を建てようとしているだけの話である。
べつに、岡っ引が走りまわらねばならぬ事変ではないのだ。
にも拘らず、どぶは、はなれ島のお仙の問いに、なにげなく、こたえて、これから人殺しが起

る、と口走ったとたん、ぞくっ、と悪寒が、背すじをつたった。
——あの土井屋敷内で、きっと、おそろしい凶事が起るに相違ねえ。
どぶは、おのが予感があたる、と思った。
からくり唐次の家は、常磐津の女師匠でも住んでいそうな、小ぎれいなたたずまいであった。
「ごめんよ——」
格子戸をがらりと開けた——とたん、どぶは、目を見はった。
上り框に、きちんと坐った福助が、ていねいに、おじぎをしてみせたのである。
「成程、これア、みごとなからくりだ」
どぶは、感服した。
格子戸が開くと、おじぎをする仕掛が施してあるのだ。
「親方は、いなさるかい？」
どぶは、福助を人間扱いにして、声をかけた。
「どうぞ、おあがり！」
不意に、頭上で、奇妙な発声で、応じたものがある。
仰ぐと、天井近くにさし渡された横木に、黒い鳥が、とまっていた。
九官鳥であった。
「びっくりさせるねえ」
どぶは、首を振って、草履をぬいだ。
上り框にあがったとたん、障子が、すらっと開いた。

「なにから、なにまで、からくりだ」
どぶが、入ったのは、十坪あまりの広い板敷きの仕事場であった。
普通の細工師のそれのように、雑多な道具が、とりちらかされているという次第ではなかった。
まるで、剣道場のように、床板が美しくみがかれて、道具らしいものは何ひとつ、見当らぬ。
上段に、祭壇らしいものが設けられ、銀色に光るかなり大きな玉が、ひとつ、置かれてあるだけであった。
なんとなく、かしこまらなければならぬ気分で、どぶは、膝をそろえると、その玉を眺めた。
すると——。
玉が、ころりと、いかにも、しぜんに、ころげた。
「お！」
どぶは、玉が生きもののような気がした。
玉は、右へころり、左へころり、とゆっくりと、ころがりつづけるのだ。
どう眺めても、なんの仕掛もないようであった。

三

「お待たせしました」
その声があって、どぶは、われにかえった。
筒袖にたっつけをはいた、かなりにがみ走った佳い男であった。

どぶの前に坐ると、からくり唐次は、祭壇でころがりつづける玉に向って、
「これ、止めないか」
と、声をかけた。
玉は、ぴたりと停止した。
「あきれた！」
どぶは、うなった。
「いったい、どういう仕掛になっているんですかい、親方？」
しかし、からくり唐次は、ただ、微笑しただけで、こたえなかった。
からくりというものは、細工師にとって、秘中の秘であり、ひとつのからくりを完成するのに五年も十年も費すのであってみれば、肉親にさえも教えないくらいであった。
「挨拶がおくれて、申しわけねえ。おれは、どぶと呼ばれている、ごらんの通り、乞食同然の御用聞きでさ。お前さんに、きいてえことが、ひとつ、あって、参上したわけなんで――」
「親分の名は、前からうかがって居ります。親分が手をつけた事件で、未解決のものは、ひとつもないという大層な評判ですね」
「うれしがらせないでおくんなさい。おれに就いては、悪い噂の方が高けえはずだ。当人自身も、ときどき、これで十手を返上すりゃ、次の日には、小伝馬町へ、ぶち込まれる男だ、と思っている。飲む、打つ、買うために生れて来たような野郎だからね」
「ご自身の口から、正直に云いなさるのは、悪人でない証拠ですよ。本当の悪人は、決して、正直なことは申しませんし、自分をさげすんでは居りますまい」

――この細工師は、若いが、性根がすわっている。
どぶは、みとめた。
「ところで、用件というのは、怪異ばなしでね。さきの若年寄の土井但馬守というお大名の上屋敷に起っていることなんだが……、東照大権現様から、ご先祖が拝領した木馬がある。こいつが、夜な夜な、屋敷内を、歩きまわる、というんだ。ただの木馬に、なにかのたましいがのりうつる、なんてえ迷信は、あっしは、信じねえ。なにか、まやかしがあるんだろうが、どうだろう、お前さんの考えをきかせてもらいてえ。木馬は、そっくり実物大だというから、人間が中へもぐり込めるのかも知れねえ」
「左様ですね。人間が、中に入って、動かすこともできましょうし、また、そうしなくても、歩きまわらせるぐらいの仕掛は、そうむつかしいものではありません」
「ふうん。おれもね、この家をたずねて来てみて、人形にしゃべらせることもできそうな気がしている。……おれは、その木馬が、どういう仕掛になっているのか、調べてみてえ、と思うんだが、お前さん、力をかしてはくれまいか？」
どぶは、たのんだ。

四

からくり唐次は、ちょっと、考えていたが、
「まさか、その木馬を、お借りするわけにも参りますまい」
「なにしろ、徳川家康公から拝領した家宝だからな。こちらから参上して、拝見することになる

ね」

「許可が頂けるでしょうか？」

「なに、忍び込んで、無断拝見といくのさ」

「お大名のお屋敷へ、忍び込むとなると、これア、容易なわざじゃありますまい」

そう云いながら、唐次は、べつにしりごみの気色も示してはいない。

いや、むしろ、そうすることに興味ありげな表情さえみせていた。

「大名屋敷の方が、大きな商家へ忍び込むよりは、よっぽど、らくなんだ。規則ずくめで、箸の上げ下しまでに、作法をきめていやがるくせに、屋敷内の警戒なんぞは、ひどく間抜けているんだ。これア、忍び込んでみりゃ、よく判らあ。その点は、心配いらねえ。よしんば見つかっても、いくらでもごまかしはきくし、いざとなったら、このおれが、危ねえことは一手に引受けて、お前さんを、遁してやる。……お前さんも、二百年もむかしに造られた木馬のからくりを調べる興味はあるだろう？」

「それアもう――」

唐次は、うなずいた。

「これできまった。今夜のうちにも、忍び込むとするか」

どぶは、気早やに、立ち上った。

「その前に、ちょっと、うかがっておきますが、木馬が歩くのを、どなたにおききなすったので――？」

「土井家の側用人が、この目で見とどけた、と云って、小松九郎兵衛ってえ懇意の町方同心に、相談したんだ。……どうも、土井但馬守というのは、ただの大名じゃねえらしい」

「ただの大名ではない、と申しますと？」

「どうやって、ため込んだか、うなるほど金を持っているし、お犬の方さまの祟りなどというものを信じ込んで、わざわざ、てめえの墓地を提供して、霊廟を建てようとしているし、木馬は歩くし……、それに、おれが調べてみたところじゃ、息子も娘も、出来がひどくわるいらしい」

「ほう……、そういうお屋敷なのですか」

「だから、遠慮することはねえんだ。たたけばいくらでも、ほこりの出る屋敷らしいぜ」

どぶは、にやりとしてみせた。

「それにしても――」

唐次は、けげんな面持で、

「町方の御仁がたが、お大名をお調べなさるのは、あまり例のないことですね」

「皮肉は、云っこなしだ。好き好んで、お門ちがいへ、首をつッ込むわけじゃねえんだ。これも、世のため、人の為――と云えば、キザにきこえるが、江戸市中、どいつもこいつも、血眼になって、犬の亡霊を拝んでいやがるのを、黙って、見のがしていられねえじゃねえか。土井但馬守が建てる霊廟を、ぶっこわそうというのが、眼目よ。……さ、行こう」

五

「親分は、忍び込みには、馴れていなさるようだ」

闇の中で、唐次は、云った。

宵のうちに、この広大な土井但馬守邸へ、忍び込んで、深い木立の中で一刻をすごしてから、母屋へ侵入したのであった。

長い廊下が、鉤の手になったところに、三畳ばかりの小部屋があり、そこへ、どぶと唐次は、身をひそめたのである。

この屋敷に住んでいる者でも、こんなところにかくし部屋が設けられていることなど、気がついていない。一見して、ただの壁と見せかけてあるのであった。

大事の場合、討手を埋伏させておく部屋に相違なかった。

「お前さんこそ、はじめて忍び込んだにしては、おちつきすぎてらあ。まるで、以前は夜働きでもやらかしていたようだぜ」

「ご冗談を――。ところで、木馬は、どこにありますか？　土蔵の中など、押し入るのが、面倒ですが……」

「たしか、長男の縫之助が、自分の部屋へ、はこんでいる、ときいたぜ」

「それじゃ、拝見するのは、むつかしゅうはござんすまいが……。尤も、そのご長男が、腕の立つお方なら、これは、厄介ですね」

「なアに……、のらくらの遊治郎ということだ。重いものは、三味線ぐらいしか持ったことはねえだろう」

やがて、

「火の用心！」

と呼ばわる足軽の声が、行きすぎて、どぶは、唐次をうながして、部屋を出た。

廊下のところどころに、金網行燈が、ほのぐらいあかりを、闇ににじませている。

どぶは、すでに、この屋敷の構造には、くわしかった。

「ここだ！」

廊下を幾曲りかして、どぶは、唐次に告げた。

腰に用意した小瓢箪の水を、そっと、敷居へ流して、音をたてぬように、杉戸をひらいて、控え部屋へ、すり足で入った。

とたん――。

「まだ、起きていやがる」

どぶは、いまいましく、首を振った。

そうっと、襖へ近づいて、その居間の様子を、うかがおうとして、どぶの鋭敏な神経に、なにかが、ピリリッとふれた。

縫之助は、ただ起きているのではなかった。

――殺気がみなぎっている！

どぶは、自分につぶやいた。

その敷居にも、水を流して、襖を三分ばかりひらいて、覗いてみた。

瞬間――。

どぶの全身が、びくっと、戦慄した。

「どうなすったので？」

背後から、唐次が、ささやいた。

「下から、のぞいてみねえ」
どぶは、目をはなさずに、云った。
唐次は、畳に匐って、顔を、襖の隙間へ押しつけた。

六

なんとも、奇怪な光景が、そこに起っていた。
床の間に、緋おどしの甲冑が据えられていた。白い八字髭をつけた面頬をつけていたし、背中には指物を負うて居り、陣太刀も横たえているので、まるで、生きているようであった。
いや、まさに、生きていた。
采配をつかんだ右手を、挙げているのだ。のみならず、それを、ゆっくりと、動かしている。
あたかも、さしまねいているがごとくであった。
それに向って、夜具の上に仁王立ちになって、大刀をひっつかんでいるのは、但馬守光貞の嫡男縫之助にまぎれもない。
年配は三十を出たばかりだが、武芸の修業をおろそかにした、いかにも骨の柔かそうな、腰のすわらぬ立姿であった。
大刀を抜こうと、身構えながら、隙だらけのなさけなさである。
顔面は、恐怖と驚愕の色にあふれている。
それは、そうであろう。
甲冑を居間に据えるのは、元服した時、父から贈られるならわしだから、これは、十余年間

も、その床の間に据えられていたことになる。
それが、今夜、突如として、魂を入れられたように動き出したのである。
腰を抜かさなかったのが、ふしぎなくらいである。
縫之助は、枕もとの大刀をつかんで、立ち上ったものの、脳裡が混乱して、悪夢の中にいるような状態に相違ない。
甲冑は、ゆっくりと、右手を動かしつづける。
采配で、縫之助を、さしまねくあんばいであった。
「く、くそっ！」
縫之助は、うめきつつ、白刃を抜きはなった。
しかし、ふりかぶったものの、兵法を知らぬあわれさ、刀身の重さに、上半身がゆれ、腰がふらついた。
甲冑は、それをあざけるように、采配を、すうっと、高く挙げた。
「お、おのれがっ！」
縫之助は、わめきたてて、甲冑へ、斬りつけた。
にぶい金属音がひびいて、縫之助は、手がしびれた模様で、よたよたと、よろめき、がくっと膝を折った。
白刃は、甲の上に当ったはずであるが、かすり傷もついてはいなかったし、傾いてもいなかった。
しかし、その右手は、しずかに、下げられた。

それきり、ピクとも動かなくなった。
覗いているどぶと唐次は、ただもう、息をのんで、茫然としているばかりであった。
まことに信じがたい光景であった。

七

「あ、あ、あ、あ……」
ようやく、われにかえった縫之助は、悲鳴をあげて、白刃をほうり出すと、宙を泳ぐようにして、居間を逃げ出して行った。
廊下を駆ける音が、遠くに消えてから、どぶと唐次は、甲冑へ、走り寄った。
どぶは、すばやく、甲を持ちあげてみた。
「空だ。なんにも、入っちゃいねえ」
「てまえが、調べましょう」
唐次は、どぶを退かせておいて、よろいの中を、しきりに、手さぐっていた。
しかし、失望の表情で、
「何も、ありませんな」
と、云った。
「仕掛がなくて、どうして、この手が動いたんだ？」
どぶは、首をかしげた。
唐次は、その右手を、あげたり、おろしたりしてみて、

「わからない」
と、云った。
「お前さんのようなからくり細工の名人が、わからねえとすると――」
どぶは、首をすくめた。
「お化けとか、幽霊とかいうしろものを信じなけりゃならねえ」
「そういうことになりますね」
「やけにおちついているが、からくりのねえ甲冑が、動くことを、お前さんは、どう考えてるんだい？」
「こういうことは、いま、あわてても、判りませんよ。おちついて考えれば、あ、そうか、と合点がいくものです」
「そんな悠長にかまえては、いられねえ」
どぶは、舌打ちした。
――化物屋敷だ。木馬も、からくりなしで、歩きまわっていやがるかも知れねえ。
科学の未発達な時代であった。迷信などをあたまからはねのけているどぶも、さすがに、薄気味わるい思いであった。
足音が、廊下を近づいて来たので、どぶと唐次は、すばやく、控え部屋へ、しりぞいた。
縫之助が、つれて来たのは、宿直の士ではなく、庭師の島兵衛であった。
「島兵衛、よく、調べてくれ」
縫之助は、おのが居間へ入ろうとせず、廊下から、首だけ突っ込んで、ふるえ声で、云った。

「わしは、もう、この部屋は、まっぴらだ。居間をかえる」
そう云いのこすと、あたふたと、去ってしまった。
島兵衛は、無表情で、のっそりと甲冑へ寄ったが、べつに、調べようともせず、ただ、眺めやっただけで、頭をまわすと、
「そこに、誰かいるかね？」
と、問うた。
控え部屋に人のひそむ気配を、敏感に察知したのである。
どぶは、対手が、一度会った島兵衛なので、かくれている必要もないと思って、
「いるぜ」
と、こたえて、襖をひらいた。

八

「ああ、お前さんか――」
島兵衛は、どぶを見出しても、さしておどろきもせず、
「昼間は、職人に化けて、屋敷内を見ておいて、夜働きかね？」
と、云った。
「あいにくだが、盗っ人じゃねえ」
どぶは、にやりとして、懐中から、十手を抜き出すと、
「おれは、これだ」

「はあ、そうか。……そっちの、若いのが、手先というわけか」
「ちがうね。これは、からくり唐次という仕掛細工の名人よ」
「じゃ、お前さんが、この甲冑をいたずらして動かして、若殿をおどろかした、というのかね？」
「そうじゃねえんだ。忍び込んでみたら、もう、そいつが、右手をひらひらさせて、若殿を脅していやがったんだ。……おやじさん、おれが、このからくり唐次をつれて、忍び込んだのは、木馬が歩くというのを、たしかめに来たのよ。木馬に、どんな仕掛があるか、この名人に調べてもらおうと思ってね」
島兵衛は、そう云うどぶを、じっと見すえていたが、いかにも、ばかくさそうに、
「お上の御用をつとめるお前さんが、あらぬ噂におどらされちゃ、その十手が、泣くのじゃないかね」
「なんだと！」
「そうムキになることはない。木馬が歩いたり、甲冑が手を動かしたり――そんな阿呆らしい話が、あるものか」
「げんに、おれたちが、見たのだぜ。そいつが右手を挙げるのを――」
「夜中になると、小心な臆病者は、目が狂うものさ」
「信じねえだろうが、手を動かしたのは本当なんだ。なあ、おい」
どぶは、唐次に証明させようとした。
唐次は、

「まちがいありませんでした」
と、こたえた。
「じゃ、お前さんは、この中に、からくりがあると見たんだね」
「調べたんだが、何も仕掛はないのですよ」
「ははは……」
島兵衛は、かわいた笑い声をたてた。
「からくり細工師が、仕掛のねえ甲冑が動いた、と云いなさるのか。これア、とんだ茶番だ」
「おやじさんだって、そのさまを見りゃ、びっくり仰天したろうが……」
「わしは、まやかしというものが、この世で、最もきらいなのだ。どんな不思議でも、よく調べてみりゃ、原因理由がある。ただ、わけもなく、不思議が起るものじゃねえ。人間がつくった世界だ。人間が、解決できねえはずはねえ」
きっぱりと、老庭師は、云った。
その眼光の鋭さは、尋常のものではなかった。どぶは、この老爺が、ただ者ではないような気がした。

賭祈禱

一

前若年寄、土井但馬守光貞は、眉間にたて皺を寄せ、口をへの字にひきむすんでいた。
江戸家老桂木頼母と側用人毛谷三郎次が、その前で、顔を伏せていた。
重苦しい沈黙が、座敷を占めていた。
但馬守が、口をひらかなければ、江戸家老と側用人は、永久に口をひらきそうもなかった。
家臣二人の沈黙は、反抗に似ていた。
土井但馬守は、傲慢な気象であった。若い頃から、たとえ目上の者からでも、指図されることが、大きらいであった。
まして、家来から、とやかく諫言、忠告されると、血が頭にのぼって、見さかいがつかなくなるくらい逆上した。
ただ、傲慢な気象なだけに、人後に落ちるのをきらい、努力もした。
おかげで、若年寄にもなったし、かくし金も莫大にたくわえた。敵は多かったが、その敵に尻尾をつかませぬだけの知能も働かせて来た。
これまで、但馬守自身、どうにも意のままにならないでいるのは、息子たちの出来のわるさだけであった。しかし、息子たちといえども、自分には、みじんも反抗させはしなかった。

いま——。

但馬守が、当惑しているのは、思いがけぬ、多勢の使傭人の暇とりであった。

定府、勤番が、致仕して、浪人することは決してないが、屋敷を維持する上では、これらの家来たちは、べつに役に立たぬのだ。

必要なのは、中間とか女中とか、年期奉公の連中であった。

それらが、ごっそり、暇をとって出て行ってしまったのである。

藩士たちは、やっきになってひきとめたが、いずれも首を横に振って、去ってしまったのである。

この時代になると、草履取りや駕籠かきは、渡り奉公の中間ばかりであった。先祖代々から仕えている者はなかった。

こういう連中が、いなくなると、藩主は外出もできなくなる。

かれらが出て行った理由は——。

「このお屋敷には、お犬の方さまの祟りがある」

それであった。

お犬の方の霊廟を建てようとしている土井但馬守自身が、祟られている、ということになったのである。

こんな不快な、腹立たしい話はなかった。

但馬守は、ようやく、口をひらいた。

「たわけて居る！　このわしが、犬の怨霊ごときに祟られるなどとは！」

江戸家老と側用人は、小さく、

「御意」

と、うなずいた。

「わしが、直接、下男下女どもに、申しきかせてくれよう」

しかし、もうおそいのだ。

大半が、いなくなってしまったのだ。

二

「殿——」

江戸家老桂木頼母が、おそるおそる、顔をあげて、云った。

「下屋敷を、ご改築になって、装いを新しく、明るくあそばして、お引き移りなさいますれば……」

「うむ」

但馬守は、意外に、すなおに、うなずいた。

一喝をくらうものとばかりおそれていた桂木、毛谷の両名は、ほっとした。

「この儀、われら両名に、おまかせ下さいましょうか？」

「うむ——」

「世間の取沙汰もはばからねばなりませぬゆえ、内密に、すすめたく存じまする」

「世間にも、すでに、わが邸内の怪異の噂がきこえている、と申すのか？」

「いえ、まだ、そこまでは——。ただ、暇をとりました者どもが、あちらこちらで、しゃべることを、ふせぎかねますので……」

但馬守は、舌打ちした。

「よしなに、はからえ」

いら立たしげに、云いすてると、但馬守は、立ち上って、座敷を出た。

児小姓が走って、沓石にそろえた下駄をつっかけた但馬守は、

「一人にさせい」

と云いすてておいて、歩き出した。

心字の池泉のほとりを歩いているうちに、築山の臥竜松を手入れしている島兵衛の姿が、目にとまり、但馬守は、石橋を渡って、そちらへ近づいて行った。

島兵衛は、但馬守をみとめると、ひざまずいた。

「島兵衛、せっかく庭をつくりあげてもろうたが、放棄しなければならなくなったぞ」

「は——？」

島兵衛は、いぶかしげに、但馬守を仰いだ。

「下屋敷に移る。この家は、すてる」

「なにか、不都合がございましたので？」

「お前は、奉公人どもが、つぎからつぎと去ることを知って居らぬのか？」

「てまえは、お庭にばかり居りますので、一向に……」

「木や石や水を対手にくらして居るのは、俗世間のわずらわしさを知らずに、すんで、よいの

う」

「御意——」

「お前は、しかし、邸内で起る奇妙な出来事を、ひとつも、見知らぬのか？」

「枯尾花を幽霊と見るたぐいでございます」

島兵衛は、こともなげに、こたえた。

「お前のような奴ばかり奉公してくれていると、気楽だが……。木馬が歩きまわるなど——たわけきった話だ」

「……」

島兵衛は、俯向いて、黙っていた。

「そうだ、お前も、この庭で働いてから、三十年以上になるの」

「はい。おかげさまにて——」

島兵衛は、ひくく頭を下げた。

三

但馬守の姿が、遠ざかった時、島兵衛は、臥竜松のむこうの大岩の蔭に、人の気配があるのに、気がついた。

「誰だね、そこにいるのは？」

声をかけると、のそりと現われたのは、どぶであった。

今朝は、職人姿であった。

「まだ、お前さん、うろついていなさるのかえ」
島兵衛は、冷やかに云った。
「茶亭の建てなおしは中止になるよ。こんどは、渡り中間にでも化けることだね」
「いま、殿様の仰せられることを、きいたよ。おやじさん、せっかく丹精したこの庭を、すてるのは、さぞ、くやしかろうな」
「なに、こんどは、お前さんが、仙人になったような気分になるお庭を、つくるさ」
「その年じゃ、もうむりだろう」
「九十まで生きるとすりゃ、あと三十五年あるね」
「大した自信だ」
どぶは、感服してみせてから、
「ところで、おやじさんに、ちょいと、きいてえことがあるんだ。ひとつ、正直にこたえてもらいてえ」
「事柄によっちゃ、口をひらかねえ」
「三十年——いや、それ以上も、前のことかも知れねえが、このお屋敷で、お手討ちになった腰元は、いなかったかね?」
「……」
島兵衛は、こたえず、剪定鋏を動かしつづける。
「どうだろうね? おやじさん、おぼえていなさるだろう?」
「……」

「忘れているのなら、思い出しちゃくれまいか?」
「わしは——」
島兵衛は、こたえた。
「忘れたことは、思い出さねえことにしている」
「意地のわるいことを云わねえで、思い出してくれねえか?」
「お前さん、どうして、そんなことを、知りたがるのだ?」
「浅草田圃のどまん中に、なんとかの森、というこの土井家の墓地があるだろう」
「あるよ」
「そこを、お犬の方さまの霊廟にするために、墓を移していると、木乃伊が出て来たことは、きいているはずだ。おれは、このあいだ、見物に行った。その一体に、女がいたが、これは、斬り殺されたやつだった」
「……」
「これは、お手討ちになった腰元にちげえねえ、とおれは、にらんだんだ」
「……」
「殿様は、若気のあやまちで、お手討ちにしたものの、後悔して、土井家の墓地に、葬ってやった。……そうじゃなかったか?」
「……」
「おやじさん、三十年も、それ以上、庭師として、ここで働いているのなら、その出来事を知っているはずだぜ」

四

どぶは、じっと島兵衛を、見つめた。

しかし、島兵衛は、牡蠣のように口をつぐんだきり、表情も動かさぬ。

「おやじさん、殿様から、厳重に口止めされているのじゃねえのか？」

「……」

「たのむから、腰元が斬り殺されたことを、思い出してもらいてえ」

島兵衛は、じろりと、しつっこく食いさがるどぶを見やった。

「わしに、思い出させて……、それで、どうする、というのだ？」

「その女木乃伊が、ひきあげられた時、見物衆の中に、若い女がまじっていた、と思いねえ。若い女の顔と、木乃伊の顔が、おれには、なんとなく似ている——そんな気がしたのよ。いや、たしかに、似ていた。木乃伊を、じっと見る女の目つきも、ただごとじゃなかった。女と木乃伊は、なにか、ふかいつながりがある。とすりゃ、木乃伊の素姓を、調べあげたくなるじゃねえか」

「……」

「おやじさん、ここまで打明けたんだ。なんとか、こっちの相談に乗ってくんねえな」

しかし、島兵衛は、なにやら、口のうちで、ぶつぶつとつぶやいていたが、首を振って、

「わしは、知らねえ。なんにも知らねえ」

と、こたえた。

「そうかえ。これほどたのんでも、かぶりを振るところをみりゃ、本当に、なんにも知らねえのだろう」

失望して、どぶは、そこをはなれようとした。

と——。

「親分」

島兵衛が、呼びとめた。

「なんでえ？」

「このお屋敷の出来事を、大小もらさず、くわしく、日記に書いたお女中がいなさるようだ」

「そ、そうか！　ひきあわせてくれるか？」

「そのお女中は、去年、亡くなったが、日記は、たぶん、お姫様のお手もとに、のこっているはずだ。そのお女中は、お姫様付きだったからな」

「有難てえ」

「お姫様は、それ——あのむこうの、楓林の中に建物が見えるじゃろう。あの離れに、お一人で、くらしていなさる」

「恩にきるぜ、親方——」

どぶは、にやっとして、いそいで、楓林に向った。

その離れからは、琴の音が流れ出ていた。

調べているのは、「乱れ」であった。名手といえる。冴えた音に、哀しさが湛えられているのだ。

——面とむかって、お願い申し奉っても、日記を見せちゃくれねえだろうな。
そう思いながら、ともかくも、内部をうかがうべく、楓林の中へ、そっと、入っていった。
とたん——どぶは、ぎょっとなった。

五

どぶは、楓の木から、するすると匍いおりて来る白い細い蛇を、見たのである。
それも、一匹ではなかった。
あちらの幹、こちらの幹から、幾匹も、匍いおりて来るのだ。
そして、そいつらは、地べたに降りるや、琴の音の流れ出る離れへ向って、非常なはやさで、すべって行く。
「ど、どういうんだ、これア?」
どぶは、目を剝いた。
白蛇どもは、琴の調べを慕って、殺到して行くように思われる。
どぶも、いそいで、そのあとを追った。
およそ十匹あまりの白蛇は、見る間に、縁側にはねあがり、二尺ばかり開かれた障子のあいだから、室内へ、匍い込んで行った。
瞬間——。
魂消る悲鳴が、つらぬいた。
どぶが、とび込んでみると、失神した菊姫の裳裾へ、腰へ、肩へ、白蛇どもは、うねうねと匍いあがって、鎌首をもちあげている。
さすがのどぶも、あまりの気味わるさに、立往生した。元来、あまり、蛇というしろものは、好きではなかった。
「こん畜生っ!」
裳裾の一匹を、蹴とばしたが、そいつは、宙をひとうねりして落ちて来るや、たちまち乱れた裳裾の蔭へ、白い脛をつたって、奥へもぐりこもうとした。
肩にはい上っているやつは、胸もとへ、もぐろうとしていた。
「手に負えねえ!」
どぶは、とっさに、庭師でなけりゃ、片づけられぬ、と思うて、表へとび出した。
「親方! 白蛇だ! お姫さんを、なぶってやがる。なんとかしてくれっ!」
どぶに叫ばれて、島兵衛は、眉宇をひそめたが、黙って、離れへ向って、走り出した。
「なるほど……、このお屋敷は、奇々怪々だあ——」
どぶは、ならんで、走りながら、云った。
楓林へ達したどぶは、
——はてな?
あっけにとられた。
離れの中からは、また、琴の音が、流れ出て来るではないか。
菊姫は、白蛇にまぶれつかれて、琴のかたわらで、失神して倒れているはずであった。
それが、また急に起き上って、琴をひく、などということは、考えられぬ。

「なんだ？　これア、なんてえこったい！」
どぶは、あっけにとられて、足を停めた。
島兵衛も、けげんの面持で、どぶをかえり見た。
どぶは、
「と、ともかく、のぞいてくれ」
島兵衛の半纏の袖をひっぱった。
そこへ、別の方角から、
「悲鳴がきこえたぞ！」
と云って、走って来たのは、長男の縫之助であった。
若い女中がうしろに従っているところをみると、庭で、なにやらみだらな行為に耽っていたに相違ない。

六

縫之助と島兵衛とどぶが、離れの中へ、ふみ込んでみると——。
いつの間にやら、十匹の白蛇は、かげもかたちもなく、消え失せていた。
菊姫は、床柱によりかかって、死人のように蒼ざめて、茫然自失のていであった。
二十歳過ぎたばかりのこの姫は、大層な美貌であった。肌の白さは、たぐいがないくらいである。いかにも、白蛇が吸いつきそうな甘肌といえる。
「菊！」

縫之助が、かたわらへ寄って、肩へ手をかけた。
「どうしたのだ？　え？　何が起ったのだ？　……しっかりせぬか？」
ゆさぶられて、菊姫は、われにかえると、みるみる恐怖の色をあふらせた。
「こ、こわい！」
「なにが、こわいのだ？　この職人が申すには、白蛇が出たというが、まことか？」
「ああ！　こわい！　十匹も、わたくしを、襲うて来て……、ああっ！」
菊姫は、全身のふるえがとまらぬ烈しい恐怖で、兄にとりすがった。
「島兵衛！」
縫之助は、老庭師をふりかえった。
「この楓林には、白蛇が棲みついて居るのか？　知っていて、知らぬふりをしていたのなら、許さんぞ！」
「いえ、とんでもございませぬ。白蛇など、これまで、ただの一匹も、見かけたことはございませぬ」
「面妖しいではないか。この職人も見とどけて居るし、菊もおびえて居る。白蛇が棲んでいるとしか思われぬぞ」
「……」
島兵衛は、困惑のていで、目を伏せた。
「化物屋敷だ！」
縫之助は、不意に、呶号した。

「こんな化物屋敷は、ぶちこわしてしまえ！」
「若様――」
島兵衛が、云った。
「さきほど、お殿様よりうかがいましたが、下屋敷の方へ、お移りあそばす由にございます」
「ふん――」
縫之助は、口を歪めてわらった。
「下屋敷へ移れば、移ったで、そっちが、化物屋敷になるだけだ。……土井家は、のろわれて居るのだ！　何者かにのろわれて居るのだ！　そうに、きまって居る！」
甲冑におどかされた縫之助であった。怪異というものを、みとめざるを得ないのだ。
縁さきにうずくまったどぶは、縫之助の絶叫をききながら、
――どうも、わけがわからねえ。
と、首をかしげていた。
――気をうしなった姫が、どうして、起き上って、琴をひいたのか？
――いったい、白蛇が襲ったのは、何者かのしわざなのか？　なんとも、わけがわからねえ。

七

その日の夕食後――。
土井但馬守は、長男縫之助から、菊姫が白蛇に襲われたことを報告されると、
「島兵衛を呼べ」

と、命じた。
島兵衛が、宵闇の中で、縁さきにうずくまると、但馬守は、いら立たしげに、
「どういうのだ、島兵衛？」
と、問うた。
「はい――」
「毛谷は、木馬が歩くのを見たと申すし、縫之助は、甲冑が動くのに逆上して斬りつけたと申すし……、その方は、まこと、白蛇が姫を襲うのを見たのか？」
「お茶亭で働いて居ります職人が、それを目撃して、てまえが、かけつけました時には、すでにもう、白蛇は、逃げ去って居りましたが、お姫様は、大層おびえあそばされて居りました」
「なんという不快な話だ。きいて居るだけで、むかむかして来るわ！」
「仰せの通りでございますが……、実を申せば、てまえは、若様が、甲冑が動いた、と申されて、てまえをお呼びになりました時は、そのようなばかげたことはない、と内心、信じては居りませなんだ。ところが、今日ばかりは、なにやら、薄気味わるう……、いまだ、おちつきませぬ」
但馬守は、島兵衛に、そう云われると、舌打ちした。
「その方までが、怯えるか！」
但馬守は、いつの頃からか、江戸家老桂木頼母、側用人毛谷三郎次、その他主だった定府の家臣よりも、この一介の庭師の方を、信頼するようになっていた。
どうやら、それが気まぐれでない証拠には、その信頼は、十年もつづいているのであった。

「どうせよ、と申すのだ、島兵衛？」
「はい、それが……」
「それが、なんだ？　申せ」
「まことに申しあげにくいことでございまする」
「かまわぬ、申せ」
「お殿様が、最もおきらいになることを、おすすめいたしとうございます。さぞかし、お怒りあそばすとは存じまするが……」
「はやく、申せ！　怒らぬぞ！」
「青山の長者ケ丸に、お犬の方さま祈禱所がございます」
「うむ」
「一度、お足をおはこびなさいましては、いかがかと存じます」
「島兵衛！　その方までが、お犬の方の怨霊を、信じるのか？」
「いえ、信じているわけではございませぬが……、これは、ひとつの賭でございます」
「賭だと？」
「祈禱所の巫女が、なんと申しますか、それを、おきき下さいませ」
「きいてどうする？」
「もし、お屋敷に、怪異が起っていることが、祟りと申しますれば、これは、信じなければなりませぬ」

八

翌日——。
土井但馬守は、ほんのわずかの供をつれただけで、忍びの行列を、青山長者ケ丸の「お犬の方さま祈禱所」へ進めた。
どぶが、そのあとを、尾行した。
長者ケ丸は、まだ、ひろびろとした野であった。
ところどころには、まだ武蔵野のおもかげをとどめる森が、視界をさえぎっていた。
「お犬の方さま祈禱所」は、かなり大きな構えの郷士の家を、改造したものであった。
庶民たちの寄進であろう、その家の門に入る一筋道の大石には、石を刻んだ狛犬が、ずらりとならんでいた。そして、そのうしろに、白い幟が林立していた。
但馬守は、駕籠を降りて、その道を歩きながら、
「流行って居るわ」
と、吐き出した。
お犬の方の怨霊の祟りを、金もうけの手段にしようとした但馬守は、ちょっとおかしな比喩だが、飼犬に手をかまれたかたちになった、と云わねばならぬ。
それだけに、かえって面白くなかった。
島兵衛にすすめられなければ、こんなばかげた祈禱所へなど、足をはこんで来るものではなかった。

但馬守自身、お犬の方の怨霊などというものが、当節、うろついているなどとは、全く信じてはいなかったのだ。

ただ——。

島兵衛から、真剣な面持で、忠告されてみると、なにやら、背すじが、うそさむくなったのは事実である。

お下げ髪の若い巫女が、数人、玄関で、平伏して、但馬守を迎えた。

座敷に通った但馬守は、ものものしい祭壇を、一瞥して、

——ふん！　何者が、庶民をたぶらかしたものか！

と、口をへの字にまげた。

実は、但馬守は、浅草の墓地を、霊廟建立講中という集団から、一万両を受けとって、払い下げたのである。

世間では、但馬守自身が、お犬の方さまを信仰しているように、受けとっているが、とんだ思いちがいなのであった。

霊廟建立講中というのは、蔵前の札差、日本橋あたりの大きな問屋なども加った数千人の集りの模様であった。

これほど「お犬」というしろものを、流行らせたのは、相当の曲者といわねばならぬ。

但馬守が眺めたところ、その祭壇は、いかにもまやかし、といったところはすこしもなく、荘厳ささえそなえていた。

但馬守は、床几でもないか、と見まわしたが、用意してなさそうなので、しかたなく、畳の上へ、じかに端座した。

簫やらひちりきやらが、ものものしく鳴らされつづけていたが、肝心の祈禱がたの巫女は、なかなか現れなかった。

——はやくせぬか！

但馬守は、いらいらした。

九

ところで——。

行列を尾行して来たどぶは、すばやく裏手へまわって、どうやってもぐり込んだか、祭壇わきの几帳の蔭へ、ひそんでいた。

どぶもまた、但馬守と同じく、

——はやくやってもらいてえ。

と、いらいらしていた。

やがて、しずしずと現れた巫女は、白髪の老婆であった。

鼻梁が高く、あごがしゃくれ、窪んだ双眼は、異様な光を発していた。

こういうおそろしげな面つきの老婆を、見つけたのも、才能といえる。

巫女は、犬の毛ででもつくったのか、純白の采配のようなものを持っていた。

祭壇に向って、幾度も拝礼してから、やけに鋭く、カン高い声音で、呪文めいた文句をとなえはじめた。

これは、この前、どぶが、お犬祠をぶち毀した時にきいた文句と似ていた。そういえば、あの時の巫女と、この老婆は、面つきに似たところがある。

——まさか、姉妹ってえわけでもあるめえが……。

凡帳からのぞくどぶは、小首をかしげた。

祈禱の方は、高くなりひくくなり、それは、おそろしく長いあいだ、つづいた。

但馬守も、いい加減退屈した模様であった。

やがて——。

老巫女は、バッタリと倒れて、しばらく、失神のていであった。

と——不意に、

ぱっと、はねあがるや、

「ああ！　お、おそろしや！」

と、金切り声をあげた。

さすがに、但馬守も、緊張のていであった。

巫女は、叫んだ。

「木乃伊！　……木乃伊の祟りじゃ！　……お、おそろしや！　……木乃伊の祟りじゃ！」

但馬守は、そのうわ言をきいて、渋面をつくった。

巫女は、また、バタッと前へのめり伏してしまった。

若い巫女が二人、走り寄って、その老婆を、かかえおこした。

老婆は、しばらく、放心のていであったが、若い巫女から、祭壇の聖水らしいものを、飲まされて、ようやくわれにかえった様子で、但馬守に向きなおると、平伏した。

「その方……、木乃伊の祟りと申したな？」

「は、はい……いえ、お祈りのさなかに、口走りましたことは、すこしも、おぼえがございませぬ」

「おぼえがない？」

「はい。お犬の方が、のりうつられて、申されることでございまするゆえ——」

「まことか？」

「嘘いつわりを申して、なんといたしましょう。わたくしは、お犬の方さまに心身を捧げた者でございます」

十

「——と、いう次第なんで、へい」

その祈禱所から、まっすぐに、町小路家へやって来たどぶは、見聞するところ、のこらず、左門に報告した。

左門は、珍しく、坊主枕に頭をのせて、仰臥していた。

「だんだん、面白くなる」

左門は、云った。

「こっちは、だんだん、生命がけでさあ」

どぶは、鼻の下をこすった。

左門は、しばらく、何か考えていたが、
「お前の報告を、もう一度、くりかえす。……庭師島兵衛が造りあげた土井邸の庭園は、なんとも不快な印象を与えた。長男縫之助の居間に飾ってあった甲冑が、右手をあげて、縫之助をさしまねいた。縫之助は、これに斬りつけておいて、島兵衛を呼んで来た」
「へい」
「次に、こんどは、お前自身が、菊姫の住む離れに近づいたら、白蛇が十匹ばかり、ぞろぞろと匍って、菊姫を襲った。お前が、あわてて、島兵衛を呼んで来ると、失神しているはずの菊姫が、また、琴をひいている音がきこえた。ふみ込んだらば、白蛇は消え失せていた」
「こいつには、あっしも、びっくり仰天しました。なんてえ助平な蛇もいやがるんだろうってね」
「そこで、ついに、島兵衛が、但馬守に、祈禱所へ行くことをすすめた。すると、巫女が、木乃伊の祟りと、口走った。但馬守も、ここに至って、どうやら、恐怖心が生じたらしい」
「その通りなんで――」
「……」
左門は、そこでまた、沈黙をまもりはじめた。
「殿様――」
どぶは、首を突き出して、
「なにか、そのう……、これまで起ったことで、お判りになったことがありましたら、仰言って頂きてえんで――」

「べつに、何もない」
「へえ?」
「何もないが……、ひとつだけ、考えられることがあるな」
「なんでござんしょう?」
「但馬守が、いまの屋敷以上に、凝った屋敷をつくるであろう、ということだ」
「へえ?」
「これは、まちがいなかろう」
左門は、そう明言して、やおら身を起した。
そこへ、小夜が、お茶をはこんで来た。
どぶにも、すすめておいて、小夜は、
「近頃、なにやら、怪しげな人間が、ときどき、お屋敷をのぞこうとして居ります」
と、告げた。
「そいつは、どんな奴だい、お小夜さん?」
どぶが、目を光らせた。
「虚無僧だったり、乞食だったり、また、やくざみたいだったり……」
小夜は、そう云って、首をすくめてみせた。

十一

すると――。

「そろそろ、お犬の方の亡霊は、わが屋敷にも、祟ろうと、近づいて参ったか」
左門が、笑った。
「まあ、気味のわるい！」
小夜が、顔色を変えた。
「どぶ――」
「へい！」
「いまも、庭に、祟りの使いが、忍び込んでいるかも知れぬぞ」
「なんですって!?」
どぶが、庭の方へ頭をまわすのと、左門の右手から、小柄が、庭の一隅めがけて投げられるのが、同時であった。
高麗塔の蔭から、一個の影が、ぱっと、とび出した。
「野郎っ！」
どぶは、縁側から、すっとんだ。
曲者は、ふつうの職人ていであった。左手くびに、小柄を刺されて、血汐をしたたらせながら、非常な速力で、遁れようとした。
しかし――。
どぶの脚力が、まさった。
塀ぎわへ来て、向きなおった曲者は、ふところから、匕首を抜きはなった。
どぶは、ゆっくりと、腰から十手刀を抜き持った。

「じたばたしても、もう、のがれられっこはねえ。町小路左門様の屋敷へ、図々しく、侵入して来たのが、運のつきよ」
どぶは、せせら笑った。
「なにをっ！　くたばれっ！」
曲者は、猛然と、匕首を、突き出して来た。
これは、習練した業をそなえた突きであった。
どぶは、あやうく、胸いたをつらぬかれそうになって、あわてて、とび退った。
「てめえ、出来るな？」
「……」
曲者は、窮鼠、猫を噛む凄まじさで、狙って来る。
――こいつは、生捕りできそうもねえ。
どぶは、思った。
「やっ！」
気合もろとも、次の突きを放って来た。
これも紙一重で、とびかわしたどぶは、
「左門の殿様を狙って来やがったか、それとも、このおれをか？」
と、どなった。
もとより、対手は、こたえはせぬ。
「へっ、こん畜生め！　てめえは、何者かの手先だな。もしかすりゃ、土井家のまわし者かい？」

そうあびせるや、猛然と第二撃をしかけて来た。
どぶは、思わず、十手刀を、横薙ぎにした。
曲者ののどから、ぱあっと、血飛沫が、散った。
——殺しちゃいけねえ！
どぶが、思わず、そう思って、隙をみせた。それをとらえて、曲者は、塀へとびあがった。

十二

「しまった！」
どぶが、舌打ちした時には、もう曲者の姿は、塀外へ消えていた。
「野郎っ、手負ったくせに、すばしっこく、風をくらいやがった」
どぶは、いまいましく、舌打ちしてから、ひきかえして来た。
「申しわけござんせん。捕りそこないやした」
どぶは、左門に、詫びた。
「どんな装をいたして居った？」
「職人ていでございました」
「腕前は？」
「相当な野郎でございましたね」
「よかろう」
「へえ——？」

「これからは、ちょくちょく、襲って参るであろう」
「お殿様を、でございますか？」
小夜が、不安な面持で、たずねた。
「いや、どぶの方をさきに片づけようとするであろうな」
「するってえと、あの曲者は、土井家から放たれて来た野郎でござんしょうかね？」
「さあ——、まだ、よく判らぬ。いずれにしても、曲者になる方が、曲者につけ狙われるのだ。要心するに越したことはあるまい」
「なアに、馴れて居ります。ところで、これから、あっしが、眼をつけなけりゃならねえことを、指示して頂きてえもので——」
「但馬守が、ひどく凝った屋敷をつくる、ということだな」
「へえ——？」
どぶは、首をかしげた。
どうして、そのことが、重大なのか、どぶには、ちょっと見当がつかなかった。
左門は、その疑問に応えるように、
「その凝った屋敷で、われわれをおどろかせる何かが……、起るような気がする。これは、かなり漠然とした予感だが——」
「成程——完成したあかつきに、ぱあっと、こう、燃えてしまうとか……」
「……」
例によって、左門は、心中には、何か鋭い推理をはたらかせているに相違ないのだが、口には

出さぬ。

「それにしても、敵は、あっしを狙うとともに、殿様を狙うことも考えられるとすりゃ、これア、ご用人とお小夜さんの二人だけじゃ、物騒でございます。あっしの知っている、目と鼻の利く男を、寄越すことにいたしましょうか?」

「無用だ」

左門は、にべもなくことわった。

たしかに、左門は、尋常一様の盲人ではない。二人や三人、襲いかかって来ても、ビクともするものではあるまい。しかし、敵が、盲目であることの弱点を衝いて来たならば、あるいは、防ぎきれぬかも知れぬ。

どぶは、不安をおぼえずにはいられなかった。

左門が、無用としりぞけるので、しいてはすすめなかったが、どぶは、小夜の不安な面持が、気にかかった。

職人たち

一

どぶは、家というものを、持っていなかった。

その日その日の風まかせで、各処に泊りあるく。

町小路家の中間部屋で、膝小僧をかかえて寝ていたかと思うと、次の夜は、花川戸の質屋の奥の間で、後家を抱いて、寝ている。

大名屋敷の渡り奉公人の部屋で、一昼夜ぶっ通しで、博奕に血眼になっていたかと思うと、一文なしのオケラの身を、仲間の岡っ引の家へころがり込ませる。

夜鷹の小屋ですごすこともあるし、木賃宿でごろごろしていることもある。

気楽といえば気楽だが、時には、

——ええい、くそ、生きているのが、面倒くせえ。

やけっぱちになって、両国橋の欄干へ、頬杖ついて、ぼんやりと、いつまでも、川の流れを、眺めていることがある。

今日も、それだった。

尤も、今日の気抜け状態は、原因がある。

左門に命じられて、但馬守がどのような新しい屋敷を建設するか、けんめいになって、さぐったものの、出来上ったものを調べるのとは勝手がちがって、どうにも見当つかぬままに、しばらく待つことにした。

そのひまが、どぶに、賭場へ足をはこばせた。

妙なもので、気がかりを心にのこしていると、賽目のツキもなく、たちまち、すってんてんになり、あっちから借り、こっちからせしめて、つぎ込んでも、全く目が出ず、ついに、あきらめて、今朝がた、ふらふらと、その大名屋敷の賭場から、ぬけ出て来たのであった。

「へっ、浮世は、さまざまだってえのに、川だけは、同じに流れてやがら」

どぶは、首を振って、小声で、うたい出した。

川竹に、浮名を流す鳥さえも
つがいはなれぬおしどりの
中にさす月、すごすごと
別れのつらさに、袖しぼる
ほんに、しんきなことかいな
うしろに、人が立った。

「オケラかね、親分――」

云いあてられて、振りかえると、夜働きの次郎吉の小肥りの姿が、立っていた。

どう見ても、これが、大名屋敷をあらしまわっている盗賊とは受けとれない。律義な商人そのものである。

「オケラもオケラ、穴があれば、もぐり込んで、半年も冬眠してえや」

「ははは、そんなにのんびりかまえているひまはないはずだ」

「ふん。お前さん、目下のおれの仕事を、知っているのかい？」

「十軒店町の駿河屋のお犬祠をぶっこわしたり、下職に化けて、土井様のお屋敷へもぐり込んでみたり、ひどくいそがしがっていたようだね」

「まるで、おれのあとをつけまわしているように、知ってやがる」

二人は、肩をならべて、両国橋を渡った。

二

広小路から横丁へ入った小料理屋へ、どぶをさそった次郎吉は、

「うめえ！」

ありついた酒の味に、舌つづみをうつどぶを見まもりながら、

「町小路左門てえ殿様は、あんたに、途方もない大任を押しつけるんだね」

と、云った。

「なアに、大したことじゃねえさ」

「一介の岡っ引に、三万石の、先の若年寄をむこうにまわさせることが、大したことじゃないのかね？」

「なにも、三万石をぶっつぶそう、というんじゃねえ」

「左門の殿様の肚は、そうなのかも知れない」

次郎吉から、そう云われて、どぶは、はっとした。

――そうか！　但馬守がしこたま貯め込んだ莫大な金銀を、そっくりまきあげて、江戸城の御金蔵へ入れちまおう、という肚かも知れねえ。

「ふむ！」

考え込むどぶを、微笑で見まもりながら、次郎吉は、云った。

「そろそろ、わしが、手助けする時機だね」

「たのまあ」

どぶは、正直に、ぺこりと頭を下げた。
「実は、あんたが、博奕にうつつをぬかしているあいだに、わしはわしで、すこし、調べておいた」
「調べておいた、ってえ——何を？」
「土井但馬守様は、また新しく屋敷を構えるのだろう。そのことさ」
「お前さんは、千里眼かい」
どぶは、あきれて、次郎吉を、まじまじと見なおした。
「なに、あんたが、しきりに、職人衆をたずねあるいているのを、知ったからね。たぶん、土井家の新しいお屋敷を、どこの職人がやるのか、調べているのだろう、と思ってね」
「その通りだ」
「土井家では、浅草田圃のどまん中の五重の杜を提供して、お犬の方さまの霊廟をつくらせるそうだね」
「それも、知っているのか」
「同じ顔ぶれさ、新邸造りの職人は——」
「あ——そうか」
どぶは、ちょっと間抜けた表情で、合点した。
「主だった職人は、四人」
次郎吉は、その名を挙げた。
庭師　島兵衛
大工　上野黒門町の若い棟梁・小源太
指物師　からくり唐次
かざり職　多三郎

「へえ、からくり唐次が、えらばれやがったか」
どぶは、うなった。
「島兵衛をのぞけば、あとの三人は、若い。棟梁の小源太でさえも、まだ三十にもなっていない。ところが、三人とも、その腕前は、名人といっていい」
次郎吉は、説明した。

三

「ところがだ」
次郎吉は、手をたたいて、女中を呼び、肴を注文しておいて、
「面白いことに、島兵衛、小源太、唐次、多三郎が、顔を合せるやいなや、犬と猿の敵意をむき出したのだな」
「……」
どぶは、熱心に、耳を傾ける。
「四人が、土井家の座敷に集められた——その光景を、わしは、天井裏から、見下していたのさ」
「……」

「いえね、その光景を見下すために、わしは、忍び込んだのじゃない。土井家の蔵には、千両箱が山と積まれているそうなので、そのひとつを、なんとかして、頂戴しようと、実は、二年ばかり前から、考えていたのだ。さすが、ほかの大名衆とちがって、金持ともなると、蔵もただの蔵じゃない。小盗っ人一人の力なんぞでは、とても破れねえように、厳重をきわめている。だからこそ、こっちも、鼠小僧――いや、大名屋敷専門の夜働きの面目、といっちゃおかしいが、腕だめしを、したくもなろうというもの」

「……」

「破ったか破らなかったか、それは、さておき、その座敷の光景だったがね、それゃもう、てんやわんや」

「ふむ――？」

「江戸家老と側用人が、絵図面をひろげて、だいたいの構造を説明しておいて、ひきあげたあとのことだが……、職人四人が、たちまち、牙をむき出して、いがみあい出したという次第さ」

つまり――。

おのおのが、絵図面にケチをつけ、こんな仕事は、おかしくってやれねえ、と云い出し、それが、互いに、他の三人の仕事をばかにした傲慢な態度に転じ、はては、大工と指物師が、つかみあい、かざり職が庭師の胸ぐらをつかむ、という事態にまで及んだ。

側用人の毛谷三郎次が、さわぎをききつけて、かけつけて来たために、どうやらおさまったが、このぶんでは、とても協力などしそうにも思われなかった。

あらためて、江戸家老の桂木頼母が現れて、

「その方たちが、力を合せてくれなければ、お屋敷も、また、霊廟も、建たぬのだ。どうか、いさかいを止めて、智慧を合せて、見事なものをつくりあげて欲しい」

と、頭を下げた、という。

そこで、ようやく、四人も、座を蹴って立つことを思いなおした。

「しかし、なにしろ、睨みあいの凄じさは、天井裏から見下していても、空おそろしいばかりだったから、あれで、力を合せるなんてえことは、考えられぬ」

次郎吉は、云った。

「ふうん！　このことを、左門の殿様に、早くきかせてえ」

どぶは、なんとなく、ほくそ笑んだ。

四

「ところで、もうひとつ、あんたにきかせておかねばならぬことがある」

次郎吉は、云った。

「きかせてもらおう」

どぶは、もう酒を飲むのも、止めていた。

「土井家の四人のお子衆のことさ」

「それだ！　長男縫之助、次男万之助、三男真之助。一人娘の菊姫はさておき、三人とも、息子たちは、出来がわるいらしいな」

「うむ、その通りだな。……わしは、土井家には、二年前から、幾度も、忍び込んでいるので、

だいたい、その出来加減がわかっている。……長男の縫之助は、文字通りの長男の甚六だ。頭もわるいし、武芸の才もなければ、書物もひらいたことがない。どうやら、浅草奥山の見世物芸人の娘に、夢中になっている模様だね」

「見世物芸人？」

「そうだ。どの見世物小屋かは知れんが、せっせと、かよって居るらしい。家来をつかまえて、さかんに、剣道場にかようよりは、軽業師や手妻師に習った方が、役に立つぞ、などと途方もないことを云っているのを、きいた。大名旗本の子弟で、奥山の手裏剣打ちの娘の業に、敵う者は一人も居らぬだろう、などとな」

「ふん、埒もねえ。次男の万之助は、どうだ？」

「これは、もう、博奕きちがいだ、あんたと同様――」

「おれと一緒にされちゃ、たまらねえ」

「あんたも、どこかの賭場で出会ってはいないかね。鉄火な姐御にたぶらかされて、大名屋敷の奉公部屋の賭場を、夜な夜なわたりあるいているようだよ」

「面を見りゃ、すぐ、あれかと、判るだろうな」

「博奕好きだけあって、度胸はあるらしい。剣術の方も、多少はやっているのじゃないかね」

「ふん、一人ぐれえは、ヤアトウを習っていてもいいだろう」

「さて、三男の真之助という十八歳の若者だが、これは、大層もない早熟でな。文庫にとじこもって、笑い草紙、笑い絵を、無我夢中で、読み耽っている。どうやら十三四の頃から、そうらしい。そういうたぐいの本を、家来に命じて、山と集めている。読書癖も、その方面だけに集中

している、というわけだ。天井裏からのぞいていても、これは珍書だ、というような本を、手に入れているのだな」

まさに、なんとも、手のつけられぬ不良兄弟というべきであった。

「あきれたものだな」

「奥方が、早く亡くなられて、但馬守は、金もうけにいそがしく、つまり、ほうりっぱなしにされて育ったおもむきさ」

「血統がよくねえんだ」

「それは、もちろんそうだろうが、まず、わしが眺めたお大名衆の子息のうち、土井家が最低ということになるな」

五

どぶは、次郎吉に、なおよく調べてくれるように、たのんでおいて、土井家新邸を引き受けた職人衆に、あたってみるべく、その小料理屋をとび出した。

まず、訪れたのは、上り框に福助が坐っていて、格子戸が開くと、おじぎをする、からくり唐次の家であった。

九官鳥の、「どうぞ、おあがり」という声に迎えられて、気早やに、

「あがらせてもらうぜ」

と、さっさと草履をぬいでいた。

広い仕事場へ、一歩入ってみて、そこに、先客がいるのを知って、

「へえ、ごめんなさいよ」
と、声をかけた。
先客は、娘であったが、どぶの声に、ちらっと、ふりかえった。
とたんに、
「おっ！」
と、どぶは、目をみはった。
それは、先日、五重の杜へ、木乃伊見物に行った時見かけた、女木乃伊の貌と、どこやら似かよっていた娘に、まぎれもなかった。
「お、お前さん――」
どぶは、思わず、指さして、
「こないだの、木乃伊の……」
と、云いかけた。
すると、娘は、
「へんなことを云わないで下さいよ」
かなり伝法な口調で、云った。
「いや、その……、五重の杜で、お手討ちになった女中の、木乃伊の――」
そこまで云いかけると、娘は、さっと立って、バタバタと走って玄関へ出た。
「お、おい、待ちねえ。……ききてえことがある」
あわてて、呼びとめようとしたが、もうおそかった。

「どうなすったので？」
背後に、からくり唐次から、声をかけられて、どぶは、
「いま出て行った娘――、どこのだれだえ？」
と、たずねた。
「さあ――？」
唐次は、首をかしげた。
「さあ、って……、客じゃねえか」
「そうですよ。はじめてのお客です」
「しまった！」
「どうなすった？」
「どうもこうもねえやな。お前さんが、知っていると思うから、にげるにまかせたんだ。知らなかったのなら、とっつかまえるんだったぜ」
「どうして、つかまえるのです？」
「五重の杜の、それ――お前さんがたが霊廟を建てる仕事を引きうけているところよ。木乃伊が出たって話を、きいているだろう？」
「きいて居りますよ」
「このあいだ、おれは、町方の旦那と見物に行ったのよ。そうしたら、女の木乃伊が出て来やがった。それも、お手討ちのあと歴然たる屍だ。その木乃伊と、あの娘が、骨相が同じなんだ」

六

からくり唐次の双眼が、どぶの話をきいた瞬間、妙に鋭く光った。
「あの娘御が、発掘場所にいたので――？」
「そうよ。……だから、おれは、ひょっとしたら、あの木乃伊の娘じゃねえか、と勘ぐってもみたんだ」
「まさか――」
唐次は、笑った。
「お屋敷奉公の女中には、子供は居りませんぜ」
「出戻りが、子供を置いて、奉公に上ることもあらあ」
「親分は、なんでも、人を疑いなさるのが、つらいつとめだ」
「冗談じゃねえ。似ているものは似ている、と云っているだけだ。……それにしても、どうして、あの娘は、この家をたずねて来たのかな！　からくり細工をつくってもらいに来たのか？」
「さあ、どうでしょうかね。近頃、どうも頭の変なのがいて、自分を振った男とそっくりの人形をつくってくれ、と云って来たり、お大名の奥向きから、男のしろものを、本物と寸分ちがわぬように、と命じられたり……」
「おれでも、女のしろものと同じやつができりゃ、無理して買うぜ」
どぶは、さしむかって坐ると、
「さてと――、お前さんは、土井但馬守の新しい屋敷づくりに、指物師として一役買ったそうじゃねえか？」

「たしかに――」
「どういう料簡かね？　指物師なら、江戸にごまんといるが、からくり細工師は、日本中ひろしといえども、お前さんが第一人者だろう。わざわざ、指物師になることはねえだろう。それとも、新邸の道具を、すべて、からくり仕掛にせよ、という注文でも受けたのか？」
「親分――」
「親分は止してくれ。くすぐったくていけねえ。どぶと呼びすててもらっていい」
「いや、親分と呼ばせてもらいましょう。先夜、親分と、土井家のお屋敷へ忍び込んで、歩く木馬には、お目にかからなかったが、動く甲冑は、拝見しましたね」
「うむ」
「あたしは、そのからくりを、知りたくなった。指物師になって、お屋敷で仕事をしているうちに、木馬や甲冑を、とっくりと拝見し、調べる機会があるだろうと思ったのです。そのほかにも、土井家には、かなり面白い珍しいからくり細工物が、あるに相違ない、とにらんで居ります」
「しかし、あの時、お前さんは、甲冑の中を調べたぜ。なんの仕掛もねえ、と云いなすった」
「そこですよ、面白いのは――」
「てえと？」
「なんの仕掛もないとみせかけて、実は、あっとおどろくからくりになっている――というわけじゃありますまいか」

「成程な」
どぶは、うなずいてから、
「ところで、もうひとつ、きいてえことがある」
と、唐次を見据えた。

七

「土井家新邸は、庭師は勿論あの猫の島兵衛、大工の棟梁として、黒門町の小源太、かざり職として多三郎、そして指物師として、お前さん——この四人が、まずえらばれたそうだね？」
「よくご存じですね」
「ところが、この四人が、ひとつ座敷に集められたら、たちまち、歯をむき出して、犬と猿のいがみあいを、おっぱじめた、というじゃねえか。どういうわけかね？」
「あたしもふくめて、どうにも、一刻者ぞろいと来ているので、仲よくやろうというのは、むずかしいようですね」
「他人ごとのように云うが、喧嘩をやりながらの仕事じゃ、気が乗るめえ」
「なに、喧嘩をしている方が、やり甲斐がある場合もありますよ」
「ふうん、そんなものかねえ」
どぶは、小首をかしげた。
「親分は、職人の本性というものを、よくご存じないらしい」
唐次は、薄ら笑いながら、云った。

「どういうんだい？」
「職人というものは、自分の打込む仕事に、ケチをつけられると、それが親であろうと女房であろうと、承知しないものですよ。親なら義絶するし、女房なら三下り半をつきつける——それほど、自信を持っているから、いい仕事ができるんじゃありませんか。それが、お互いによく判っているから、職人同士、喧嘩しながら、ちゃんと、仕上げてみせるのです」
「しかし、面をつきあわせている時は、殺してやりてえぐれえ、憎みあうのじゃねえか」
「それアもう……。棟梁の小源太の小憎らしさと来たら、一言一言に、むかつきましたね。鑿で、横っ腹をえぐってやりてえと思ったぐらいでね」
「それで、力を合せて仕事を仕上げることが、できるとは、変てこらいなものだな」
「まアみていて下さい。土井様の新屋敷は、それアもう、日本一の立派なものができあがりますよ」
その言葉をきいて、どぶは、おもてへ出た。
——名人かたぎ、というやつかもしれねえが、なんとも物騒なうぬぼれだな。
どぶは、その足で、黒門町の棟梁小源太をたずねた。
棟梁という概念は、五十六十の爺さんだが、小源太は、あきれるほどの若さであった。
どぶが、入った時、小源太は、おそろしい勢いで、弟子の一人をなぐりつけていた。
どぶが、用件をきり出すと、小源太の最初のせりふが、
「なんでえ、あの庭師の島兵衛ってえ、くそ爺は——」
それであった。

「島兵衛さんが、どうかしたかね？」
「どうもこうもねえや。てめえは日本一の庭師だってえ、面つきをしてやがるが、いまのあの土井屋敷の庭は、ありゃなんでえ！」
そう云って、べっと土間へ唾を吐きすてた。

八

「あの庭が、気に入らんかね？」
どぶは、わざと、にやにやして、たずねた。
「気に入るも入らねえも、ありゃ、庭じゃねえ。あんなもの、三十年もかかってつくりあげた、と自慢たらしくぬかしやがったが、ばかばかしくて、話にならねえ。松の枝をひん曲げたり、真木をまんじゅうをくっつけたみてえに刈り込んだりするのが、庭つくりだと思っていやがるんだ。わらわせやがる。あっしゃ、あの爺がやったことは、何ひとつ、気に入らねえ。木戸もつくばいも灯籠も、井戸も、細流れも、飛石も、たたきも、待合の化粧も——なにからなにまで、気に入らねえ。あの庭は、ちょいと歩いただけで、胸がむかむかすらあ。……そもそも、庭ってえものは、気分をよくするためにつくるものだろう。そうだろう、親分？」
「そうだな」
「それが、どうだ。歩いていればいるほど、気分がわるくなって来るんだ。あの爺の根性が、ひん曲っていやがる証拠よ」
「それほど腹を立てながら、どうして、こんどの仕事をひき受けたんだ」

「面白えじゃねえか」
「面白え？」
「そうよ。あの爺の首根っこを押えつけて、こっちの思うような庭をつくらせてやるのよ。あっしがつくる塀と茶亭に、どうでも合わさせてやるんだ。爺の一人考えは、金輪際許さねえ。これア、面白いぜ」
なんとも、当るべからざる意気であった。
どぶは、小源太にまくしたてさせておいて、別れたが、往来へ出た時、ふっと、妙なことに気がついた。
——あいつ、どこやら、島兵衛に、貌つきが似てやがるぜ。他人の空似か、それとも、一刻者という奴は、顔が同じになるのかな？
どぶは、首を振った。
——実は、二十数年前に、島兵衛がすてた女房が、いつの間にか、孕んでいて、それが、小源太だった、という筋書は、とんだ因果もので、面白えんだが……。
どぶは、こんどは、かざり職の多三郎を、たずねた。
仕事最中の多三郎は、ふりかえりもせず、
「その話なら、したくねえ」
と、こたえた。
「じゃ、お前さん、仕事を降りるのか？」
「いや、降りねえ」

「しかし、まだひどう、腹を立てている様子じゃねえか」
「腹を立てているのは、こっちの勝手だ。仕事はひき受けたからには、やる」
それだけこたえたきり、あとは、何をたずねても、返辞をしなかった。
おもて へ出たどぶは、思わず、溜息をついた。
「職人てえ野郎の料簡は、さっぱり、判らねえ」
どぶは、いまいましさに、一杯やりたくなった。
「きちげえと紙一重だぜ、どいつもこいつも――」

江戸の春

一

年があらたまり、行事たくさんの正月も過ぎ、初午の幟が、梅の林間に立つ頃になると、世間はなんとなく、のんびりする。
士農工商ともに、手すきになるからである。
彼岸詣でとか、涅槃会の供養とか、野外のつみ草とか……。
市中でも、庶民たちは、なんとなくなまけて、湯屋の二階、髪結い床にとぐろをまく。
両国広小路に近い「こぶし床」も、朝から、ひまつぶしの連中が、ごろごろしていた。
暖簾には、虎髪ものすごい「三国志」の翼徳張飛が描いてあり、襖には、名馬赤兎馬にうち

またがった関羽雲長が、その長髯を、風になびかせている。
店の中は、顔を洗う金だらいや水甕を置いた台の前で、三人の剃出し（弟子）が、せっせと、床几の客の顔を剃ったり、櫛を頭髪に入れている。
この時代は、頭髪を洗うことはしなかった。目のこまかな櫛で、せっせと垢をおこし、糸なわで、ふけをしぼりあげ、さらに、髪の根を爪でかいて、かゆみを取った。これは、気持のいいものであった。
そして、手拭いを頭へまきつけて、てっぺんへ、水をかけ、水もれをふせぎつつ、こすりあげる。
ここまでを、初櫛といって、弟子の仕事であった。
それがおわるのを待って、煙草を吸っている親方が、やおら立ち上って来る。
まず、顔の剃りかげんをみて、弟子に、
「もっとていねいにやんな」
と、小言を云いながら、清剃りをやる。
それから、頭髪に、びんつけをつけて、さらに目のこまかい櫛で、梳きなおす。
それがすむと、こんどは、荒い目の櫛で、髪をひとまとめにして、仮糸でくくる。そうしてまた、はじめの櫛で梳きつつ、もとゆいで、しっかとくくって、座をつくる。
その座を、器用に、いちど前へ押しやって、ぐいとうしろへ出す。これが、まげである。銀杏、子まげ、丸まげ、なよしなど。まげは、本田とも、たばねともいう。
まげを見事につくるには、十年の修業が必要だ、といわれている。

ところで――。

うしろの八畳ばかりの畳敷きには、順番を待つ客やら、仕事をなまけた連中が、居ねむりしたり、草本を読んだり、役者や女郎の品さだめをやったり、将棋をさしたり、近所となりの噂話をしたり、一人こっそり、岡場所の女からもらった手紙を読んだりしているのであった。

「うふっ！」

草本を読んでいた一人が、笑って、

「うめえことをつくりやがるのう、どどいつ、ってえのは――」

「なんでえ？」

となりの男が、ふりかえった。

「人目しのんで、蛇目にかくれ、濡れぬようにと、濡れに行く――とはどうだ」

二

「へへ……、おれも、知っているぜ。身をば蹴らるるそれよりつらい、帰る足音ひびく胸――おととい、おれを送り出しやがった相模屋の後家のうらめしそうなやつれ姿が、目にうかばあ」

「へっ、あの後家が、やつれたら、どんどろのお化けだ」

「おきやがれ。情がちがうぞ、情が――。へへへ、同じお化けでもな、来ぬと知らねば待つ夜の長さ、ろくろ首にもなる想い、ってんだ」

「てめえを送り出したあと、どういう面になっているか。つらい別れにあとふり向けば、ひとつまなこで舌を出す、というやつさ」

「この野郎、ケチつけるひまがあったら、後家でも人の嬶でも、くどいてみろ」

「てめえ知らねえだろう。おれア、当節流行のお犬の方さまの巫女を、くどいているのよ。巫女ったって、人三化七の婆じゃねえや。こう、ぽっちゃりと餅肌が、白衣がよく似合う十八のおぼこよ」

「抱いたら、ワンと泣くかえ」

「ワンは、えげれす語で、一だ。二はツウで、こっちは、カアだ。へへ……そねめ、そねめ」

「なにをぬかしやがる。おぼこなんざ、抱いたって、くそ面白くもねえ。

おぼこのうちなら
面みて惚れよが
三十過ぎれば
閨のよし悪し

後家がいいぞ、後家が――」

がやがやとさわぐ一方、こちらの片隅では、いかにも尾羽打ち枯らした浪人者が、せっせと、料紙へ筆を走らせていたが、

「できたぞ」

と、云った。

隠居が、のぞいて、

「ほう、なかなかの達文で――」

「うむ。これで、もう、十通も書いたが……さっぱり、反応がない」

それは、仕官歎願書であった。

浪人者は、それを、声をあげて、読みはじめた。

「某頓首、再拝、謹んで書を執事の左右に奉る。夫れ人の旧を思うは、情也。理也。賢も愚も、たれか此に眷恋せざることを得んや。禽鳥の知無きも、その帰るや、なお旧巣を尋ぬ。人にして旧を忘るるは、情に非る也。理に非る也。深山幽谷に生れて、水石麋鹿と居りて遊ぶ者、一日、都会の繁昌をきき、興って曰く、なんぞ適かざると。その来ること数年にして、わずかに大都会の風味をなむれば、便ち謂う、故国は陋し、丈夫の業を開き、術を弘め、身を出し、名を顕すには、これをすてて何処にか之かんと。遂に、終焉の志を定めざるも、けだし、少し。然り而して……」

その時——。

奥の衝立の蔭から、騒々しさに目をさまして、起き上ったのは、どぶであった。

大あくびをしてから、

「うるせえな」

と、云った。

三

どぶは、この「こぶし床」に、昨夜酔っぱらって泊ってしまったのである。

どぶは、暮からずっと、遊んでいた。左門に、「遊んでいるがよい」と云われて、大っぴらに、ぶらぶらしていた。

四人の職人が、かしらに立って、いよいよ、土井家の新邸と五重の杜の霊廟が、建てられると、どぶが、報告に行くと、左門は、

「新邸がなるまで、異変は、起るまい」

と、独語したものであった。

「で——それまで、あっしは、どうすれば、よろしいので？」

「遊んでいるがよい」

左門は、こたえた。

「遊んでいろ、と仰言って……、よろしいんでございますかね？」

「わたしのカンでは、それまで、異変は起らぬ」

「へえ？」

「そのあいだに、お手討ち木乃伊と骨相が似ている娘でも、さがしあてて、素姓を調べておくとよかろう」

左門は、そう云っただけで、あとは沈黙した。

で——。

どぶは、土井家の方はすてておいて、もっぱら、江戸市中を、ぶらぶら歩きまわって、例の娘を、さがした。

冬を迎え、年があらたまり、そして春が来たが、娘は、たずね当らなかった。

ただの町娘ではない、と看てとったのだが、さて、どういう家に住んでいるのか、そのにおいをかぎわけることができなかったのである。

結局、今日まで、ただ、遊びくらしていたことになる。
「おい、どぶ――」
顔見知りの酒屋のおやじが、
「おめえ、もう五人も順番を抜かれているぜ。この次、やんな」
と、云った。
「おれは、やるために、ここにいたんじゃねえ」
「だってよう、頭はぼうぼう、面は無精髯だらけじゃねえか」
「うっちゃっといてくれ。これが、このよれよれの素袷には、似合っているだろう。業平なら、三日明けずに、やらあ」
「なに、どうして――おめえ、味のある顔だあな。頤がこう張っているところなんざ」
「この将棋の駒の角にそっくり」
と、将棋をさしている若い衆が、半畳入れた。
「角なりはつるも、身の因果」
「十手ならぬ香車を、こう、ピタリと鼻っ先へ、突きつけて、どうだ?」
「おい、こりゃ、いけねえ、一手、待て」
「一手も十手も、くそもあるもんけえ。さあ、参ったか」
「待てといったら、待て。……昨夜はおめえ、深川の檜下で、おめえが女の部屋から、出て来るのを、半刻も待ってやったじゃねえかよ」
「うるせえや。ありゃ、おれの、おごりだったんだぞ」

四

どぶは、また、大あくびしてから、
「おう――、おめえら、岡っ引をこけにしてやがるところをみると、御世泰平で、面白え話もねえらしいな」
と、云った。
「ないねえ。向う両国のならび茶屋のおつたが、駆落ちしたぐれえのものだろうぜ」
「おめえの妹が、吉原の女郎になったのは、さっぱり噂にならなかったのう。あの鼻ぺちゃじゃ、家にいても、懸想してくれる男がいねえからの」
「おきやがれ。知っているんだぞ。てめえの嬶が、間男をしているのを――。知らぬふりをしていてやったから、噂にゃならなかったんだ」
「へっ。間男しているか、していねえか、亭主のおれが、一番よく知ってら。おれに、毎晩、可愛がられているのに、どうして、ほかの男をくわえ込む余地があるけえ」
「あわれやな、知らぬは亭主ばかりなり」
「じゃ、云ってみろ。男はどこのどいつだ?」
「なにをかくそう、このおれだあ」
「へっ――。おれの嬶が、あまり器量よしなものだから、てめえ、夜な夜な、妄想をたくましくしやがって、へんずりをかいてやがる。……一分も出しゃ、貸してやらあ」
がやがやわや、とさわぎたてるのに、どぶは、三度目の大あくびをして、腰をあげかけた。

その時、
「ある！　もっぱらの評判が、ひとつだけ、ある！」
叫んだ者がいた。
「なんでえ、そりゃ！」
「奥山の手妻小屋の、玉乗りお玉が、三万石のお大名の総領息子の情婦になっている、というもっぱらの評判だぞ」
それをきいて、どぶの小さな目が光った。
「おい、その三万石てえのは、なんという大名だい？」
「さあ、そこまでは……。道楽息子も、てめえの家が判っちゃ、恥になることぐれえ知っているんだろうぜ。お留守居が、小屋へのり込んで来て、ああ、おなさけなや若君様、と泪をこぼして諫めていたというから、まちげえねえらしい」
どぶは、「こぶし床」を出ると、急ぎ足に、浅草へ向った。
——縫之助に相違ねえ。
どぶは、直感した。
縫之助が、どんな娘芸人にうつつをぬかしているのか、べつに興味もないままに、すてておいたのだが、急に調べてみる気になったのは、どぶ独特のカンが働いたからであったろう。
——ひとつ、縫之助をつかまえて、あのお手討ち木乃伊の素姓をきいてみる、という手もある。
どぶは、考えた。

木乃伊と、土井家の怪異は、べつになんの関連もないかのようである。
しかし、青山長者ケ丸の祈禱所の巫女が、木乃伊の祟り、と云うのをきいたとたん、どぶは、ピンと来たのである。

五

浅草は、江戸随一の繁華境である。
一年中、参詣人の行列が絶えたことがない。一日に、雷神門を、くぐる人数は、三万といわれている。
十二の末寺が東西にならび、その廂下に、雑多な店が、櫛の歯のようにならんでいた。珠数、太鼓、仮面、錦絵、餅、銘茶……。
ならび茶屋がつづき、それがきれたところに濡れ仏が安置されている。濡れ仏のとなりの石像が、久米平内。
二王門の宏麗が、雷神門とあい映え、広い境内のかなめになっていた。
境内には、絵馬堂、浄水所、輪堂、五重塔、神厩、山王祠などが、それぞれ、参詣人を招き寄せ、その参詣人に、物売りがより添うて、あやしげな土産物を、しつっこく売りつける。
一寸八分の観音勢至を安置する本堂は、焼けるたびに、巨大になり、五彩の帷の奥の荘厳さが、賽銭をはずませる。
線香の煙りと賽銭を投げる音が、夜明けから、日の暮れるまで、絶えることはないのであった。

本堂の左が、鐘楼と随身門、右が、淡島神社の三社十社の両殿、念仏堂、涅槃堂、その他——。

奥山というのは、淡島神社の奥の一帯を総称する。

矢場が、最も多い。手妻、軽業、曲芸、居合、小人、蛇娘、生人形、籠細工、貝細工、猿芝居、ろくろ首、餅の曲搗き、オランダ一流水からくり、女角力、ビイドロ細工……ありとあらゆる見世物が、ここには、集っていた。

「おや、親分、おめずらしい」

皺だらけの顔へ、まっ白に塗りたくって、緋の長襦袢一枚で、生人形の呼び込みをやっている婆さんが、声をかけた。

むかしは、すりであったという。遠島から赦免になって帰って来て、この奥山で、あちらの見世物、こちらの小屋に、臨時にやとわれて、呼び込みをやっている。

「へえ、今日はやけに、若がえってやがるな」

どぶは、うす気味わるそうに、眺めた。

「ほほほ……、奥山ずまいに過ぎたる姿、誰が手折るかこのつつじ、ってね。これでまだ、男にくどかれたくって、赤いものをまとって居ります」

「婆さん、手裏剣打ちで玉乗りの、お玉という娘の出ているのは、どの小屋だい？」

「おや、お玉ちゃんに、親分も、惚れたのかえ。ほんに、あの水際立った器量は、あたしの二十前とそっくりだねえ」

「はやく、教えろ」

「ほら、あそこさ。松井源水が独楽をまわしているむこう——」

「よし、わかった」

どぶが歩き出すと、婆さんは、

「親分、当ったって、むだ骨だよ。お玉ちゃんには、三万石の若殿様が、ついているんだよ」

「その若殿に用があるんだ」

どぶは、なげかえした。

六

その小屋の裏手へまわり、垂れむしろをはねて、一歩入ったどぶは、股火鉢をしている爺さんに、十手をチラと見せて、

「お玉に会いてえんだが——」

と、云った。

「へえ。お玉は馬道のご別宅の方へ行って居りやす」

「ご別宅？」

どぶが、眉宇をひそめると、爺さんは、

「へへへ……」

と、いやらしい笑いかたをした。

「そうか、三万石の大名の若殿様のお住居かい」

「へい。そうなんで——」

あの土井家上屋敷は、とり毀されたために、当主伊馬守は、中屋敷に移っているが、その子た

ちは、それぞれ、分散して、住んでいるときいた。
縫之助、万之助は、一戸を構え、菊姫は箱根へ湯治に行き、三男真之助は親戚の屋敷へ身を寄せた、という。
縫之助は、その別宅を、この奥山に隣接した馬道に構えたのだ。
「どのあたりだ？」
「門前ばらいをくらいますぜ」
「いいから、教えろ」
どぶは、小屋を出ると、その別宅へ向った。
——おれの親分は、ぶらぶら遊んでいろ、と云ったが、遊んじゃいられなかったんだ。
なんとなく、うしろからせきたてられるような気分は、これまでの経験では、なにか手がかりをつかむ直前に起るものなのであった。
——おあつらえ向きに、別宅ずまいをしてくれていた、ということになるぜ。
その家は、馬道の広い往還に面してはいたが、門も庭もないしもたやであった。
「野暮な屋敷の大小すてて、腰も身軽な町ずまい、ってえやつだ。しかし、こんな町ぐらしが、お上に知れりゃ、これだけで、廃嫡処分だ」
どぶは、つぶやきながら、格子戸をがらっと開けた。
「ごめんよ」
応じて出て来たのは、装(なり)こそかえているが、一見して大名屋敷の老女であった。
目の光らせかたと物腰で、はっきりと、それと判った。

どぶは、とっさに、
「土井様の若殿様に、お目にかからせて頂きとう存じます」
と、云った。
「そ、そのような御仁は……」
老女は、狼狽を示した。
「存じ上げているのでございます、てまえは——」
どぶは、そう云って、にやっとしてみせた。
「どのような御用向きで——？」
「お目にかかって、申し上げます。へい、どうぞ、お取次ぎを——。てまえ、動く甲冑を知っている男、と申し上げて下さいまし」

七

奥へ入った老女は、やがて、出て来ると、きわめてうさんくさげな面持をつくりながら、
「どうぞ、お上りなされ」
と、云った。
「ごめん蒙ります」
どぶが、上った時、格子戸が開けられ、
「ただいま」
きれいな声音がひびいた。

——お玉だな。

どぶは、振りかえった——瞬間、あっ、となった。

ぬか袋を口から携げた湯上りの艶な立姿は、思わず、見惚れるほどの美しさであったが、どぶをおどろかせたのは、その美しさではなかった。

お手討ち木乃伊と骨相の似かよった——その娘だったのである。

からくり唐次の家で、出会っているので、見まちがえるはずもなかった。

お玉の方も、どぶを見出して、大きく目をみはって、息をのんだ。

「お玉さん、というのは、お前さんのことか！」

どぶは、じっと見据えた。

「……」

お玉は、こんどは、逃げ出そうとせず、つんとして、上って来ると、すす……と奥へ入ろうとした。

「おっと、お玉さん、お前さんにも、あとできいてえことがある。姿をくらまさないでもらいてえ」

どぶが、云うと、お玉は、頭をまわして、冷たい眸子をかえした。

どぶは、十手を示しておいて、にやっとしてみせた。

お玉は、奥へ消えた。

「ごめん下さいまし」

どぶは、襖を開けた。

縫之助は、畳の上へひっくりかえって、小猫を腹にのせていた。

——同じ寝姿でも、おれの親分とは、雲泥の相違だ。

だらしがなさすぎるのだ。

どぶが坐っても、縫之助は、一瞥もくれようとせず、小猫をからかっていたが、それがすぎて、手の甲に爪をたてられた。

「あっ、痛っ！」

悲鳴をあげて、はね起るや、小猫を、縁側へぶんなげた。

それから、やっと、どぶを見た。

「甲冑が動くのを知っている、と申したな。どうして、知って居る？」

縫之助は、妹の菊姫が白蛇に襲われた時、どぶには会っているのだが、忘れている様子であった。

「島兵衛さんと懇意にして頂いて居りますんで、へい」

「島兵衛が、しゃべったと申すのか。島兵衛は、口のかたい爺だが——」

縫之助は、ちょっと、不審な表情になったが、

「それで、用向きはなんだ？」

「妙なことを、おうかがいいたしとうございます」

八

縫之助は、小猫にひっかかれた手の甲を、舌でなめてから、

「はよう申せ」
と、せかした。
「申し上げます。……てまえは、五重の杜で発掘された木乃伊の中に、お女中を、しかも、お手討ちになったお女中を、拝見いたしました」
「それが、どうかしたのか？」
「ところで、昨年秋に、お殿様は、青山長者ケ丸のお犬の方さま祈禱所へお出ましなさいました。その時、巫女が、祈禱の挙句、口走りましたのは、土井家には木乃伊の祟りが、ある、と――」
「ふうん」
「若殿様には、思い当ることはございませんか？」
「知らん――」
縫之助は、にべもなく、かぶりを振った。
「そのむかし――二三十年前に、お手討ちになったお女中のことは？」
「知らんぞ。わしが生れない頃のことを、知る道理があるまい。……それより、島兵衛は、あの甲冑には、からくり仕掛などしてなかった、と申して居ったが、お前には、なんと申していたか？」
「へえ。……なんとなく、祟りを信じたい、という口ぶりでございました」
「木乃伊の祟りなどと、ばかくさい。父上までが、おそれられて居るのが、腹が立つ。……といっても、もうあの上屋敷には、わしも住む気がせぬ。とりこわしたおかげで、わしは、こうして、のんびりと町ぐらしができる、というものだ」

「若殿様――」
「なんだ？」
「貴方様が可愛がっておいでのお玉でございますがね……」
と云いかけた時、襖が開けられ、そのお玉が入って来た。
「若様、そろそろ三味線の稽古のお時刻でござんすよ」
――じゃまをしやがった。
どぶは、どうせ、お玉が割り込んで来るであろうことは、予想していた。
「おお、そうだ。……町人、お前は、もう帰ってよいぞ」
縫之助は、立ち上った。
「へえ――」
どぶは、お玉へ一瞥をくれておいて、
「いずれまた、お目にかからせて頂きとう存じます」
と、頭を下げた。
どぶが、おもてへ出るやいなや、格子戸の隙間から、ぱっと、塩がふりまかれた。
――いずれ、しょっぱい思いをしやがるのは、そっちの方だぜ。
どぶは、胸のうちで、つぶやきすてて、歩き出した。
――あの娘が、縫之助の情婦だったとは、これは、とんだ辻占だったぜ。
どぶは、一種のよろこびに似たものをおぼえていた。

九

「きさらぎの空うららかにして、雪とけの、草みどりの色を発し——梅は咲いたか、桜はまだかいな」

口から出まかせを、つぶやきながら、町小路邸の裏門をくぐったどぶは、そこで、洗濯物を干している小夜を見出して、

「お小夜さん、いい日和だぜ。亀井戸の臥竜梅でも、見物に行っちゃどうだい？」

「つれて行って下さる人が居りません」

小夜は、ちょっと不機嫌な面持で、こたえた。

「そうだな。用人の爺様に杖を曳かせたんじゃ、とんだ親孝行に見られて、あじけねえし、と申して、このどぶじゃ釣合が、とれねえな。……いっそ、殿様をくどいちゃ、どうだい？」

「殿様は、ご不在です」

「へえ、そりゃ珍しいな。何処へ？」

「わかりません」

「いつから？」

「四日前からです」

「それで、お小夜さんのご機嫌ななめか。……それにしても、どこへ行ったんだろうな？」

「親分も、心あたりはありませんか？」

「ねえな。……出かける時は、お小夜さんに、何処へ参る、とちゃんと云いおくのじゃねえのか

い？」

「いいえ、いつも駕籠を、と一言だけ仰言って……。でも、こんなに三日も四日も他出したままお戻りにならないことは、ありません」

「心配で、心配で——いよいよ、自分が、殿様に惚れていることが、はっきり判った、ってわけだ」

「冗談ごとではありません。ほんとに、心配しているんです」

「お小夜さん。天下の名与力、旗本随一の智慧者、町小路左門だぜ。ただのめくらが行方知れずになったのとは、わけがちがう。……今日にも、べっこうの櫛でも土産に、ふらりと、ご帰還だ」

どぶは、宿酔いでいささか、ふらふらしていたので、小夜に、茶漬をたのんだ。

三杯目をかきこんでいる時、老用人が顔をのぞけて、

「小夜殿、殿のおかえりじゃ」

と、告げた。

小夜の顔が、ぱっとかがやいた。

「へへ……、ぬがす草鞋のひもよりさきに、胸のとけゆく旅もどり、というやつさ」

どぶにからかわれながら、小夜は、いそいそと、お茶を持って行った。

しばらくして、どぶが、挨拶に行くと、左門は、机の上へ、妙なものを、置いていた。

「なんでございます、それ？」

どぶは、首をのばした。

円形の硝子函の中で、きれいな金の玉が、ゆっくりとまわっている。

「時計だ」
「へえ？」
「半刻毎に、音楽をかなでる」
左門が、そう云った時、すずやかな音が鳴りはじめた。

十

「珍しいものでございますね」
どぶは、なにかの調べらしい音をききおわって、云った。
「いぎりす製という」
「この時計を手に入れに、お出かけなさいましたので？」
「いや、これは、どうやら、賄賂らしい」
「賄賂？　殿様にまいないを使う奴が居りますので？」
「わたしは、ただ、ちょっと、話をききに行っただけであったが、警戒されたようだ……。大坂の松田屋、知って居るであろう」
「へえ、きいて居ります。鴻池や平野屋を押えて、大層なもうけかたをして居る近江商人でございましょう」
「神奈川台に、豪壮な別宅を構えた、ときいたので、そこへ出かけて行って、三日間、馳走になって来た。帰りぎわに、これを、土産にくれた」
「どうして、松田屋なんぞを、たずねてお行きなさいましたので？」

「金というものは、どういう方法で、大もうけをするものか、ききに行ったのだ」
「どんな方法か、申しましたか？」
「松田屋の口からきいたかぎりの仕事では、五万両ともうからぬ」
「へえ――」
「ところが、松田屋は、この二十年ばかりの間に、すくなくとも、三十万両はもうけている。……抜荷だな」
「あ――そうなんで！」
「その黒幕が、土井但馬守光貞であったようだ」
「おっ！　それで！」
「松田屋は、しっぽをつかませぬ男であったが、盲人用に、この置時計をくれたのが、失敗であったようだ」
「と申しますと？」
「江戸城帝鑑間に、但馬守が献上したいぎりす製の置時計が、据えてある。これと同じ調べで、時刻を告げる」
「なある！」
どぶは、膝を打った。
「松田屋が江戸をさけて、神奈川台に別宅をもうけたのも、倉の中に珍奇の品をかくしておくためであろう。あるいは、土井家の財産を預っているのかも知れぬ。……叩けば、ほこりが、舞い立ちそうなにおいがした」

左門が、四日間留守にしたのは、土井但馬守の豊かさの原因をさぐるためであったのだ。

「お前は、どうだな？　そろそろ、遊びつかれたか」

「へえ、だんだん、五体がやわになって参りました」

どぶは、但馬守長男縫之助が、つれ込んでいる女芸人お玉が、実は、五重の杜で見かけた、お手討ち女中の木乃伊と骨相の似かよった娘であった偶然を、報告した。

左門は、それをきくと、珍しく興味を示して、

「お前は、そのお玉とやらの芸を見て来たか？」

と、たずねた。

「へい、見とどけて参りやした」

十一

「お玉の芸は、そりゃ、ちょいとしたものでございましてね。玉乗り、綱渡りは申すに及ばず、手裏剣打ちは、自分と同じ年頃の娘を、戸板の前に立たせておいて、二間はなれて、耳朶へ紙一重で打ち込んでみせます。あっしが、見たのは、それだけでございますが、そのほかに、蛇まで使ってみせるそうでございます」

「蛇をか」

「なんでも、十数匹を、からだ中にまきつける由でございます」

「その蛇は、白蛇ではないのかな」

「え――？」

どぶは、左門に、そう云われて、はっとなった。

菊姫を襲った白蛇のことが、連想されたのである。

「うっかりして居りやした。白蛇かどうか、ききのがしましたが……、きっと、白蛇にちげえねえ！」

どぶは、云ったものの、菊姫を襲った白蛇が、お玉の使っているやつかどうか、これは、つきとめなければ、なんとも云えぬことであった。

もし、あれが、お玉の白蛇であったとしたら、どういうこんたんで、そうしたのか、このこともまた、つきとめなければならぬ。

ともあれ――。

縫之助の情婦が、お玉であったことは、これは、どうも偶然ではないように思われてならぬ。

「殿様。あっしは、そろそろ、遊びを返上いたしとうございます。どうか、お命じになって下さいまし」

「土井家の新邸披露は、今月末あたりであろうか」

「あっしが、このあいだ、からくり唐次に、あたってみたところじゃ、そうらしゅうございます」

左門は、そこで、しばらく、沈黙をまもった。

どぶは、神妙に、かしこまっている。

左門が、口をひらいた。

「新邸披露の際に、何かが起る、と思われる」

「へえ？」
「どんなことが、起るか、それは、わたしにも、予想はできぬ。……しかし、起るであろうな」
「あっしが、もぐり込んで、見とどけやす」
「どぶ――」
「へい」
「何かが起っても、お前は、手出しをするな」
「いけませんか？」
「ただ、見とどけておくだけだ。その方がよい」
――どうやら、殿様の心の中じゃ、およその見当がついているに相違ない。
どぶは、思った。
これから起る何か――奇妙な出来事を、その内容は予想がつかぬとしても、左門は、口にした。
これは、鋭い直感力といわねばならぬ。
どぶは、こういう左門に、一も二もなく、頭を下げざるを得ない。

人間蒸発

一

渋谷宮益町にある土井但馬守光貞の下屋敷が、よそおいあらたに披露されたのは、弥生雛祭りの佳日であった。
当時――。
上巳雛祭りのにぎわいは、上は、江戸城大奥から、下は裏長屋のその日ぐらしの家にいたるまで、のこらず、競うた。
士農工商どの家でも、平常世話になっている目上のところへ、進物をとどけるため、往来は、その使いの武家奉公の女や商家の使いで織るようになるといっても、過言ではなかった。
武家屋敷では、花見の宴が盛大に催されたし、商家では、お得意方へ、白酒、蛤、さざえなど、あるいは重箱詰めの料理を贈り、貧しい家では、向う三軒両隣りへ、煎り豆のやりとりをした。
大名屋敷の奥方、姫君、そして勤め一途の女中がたは、墓参のほかに、屋敷外へ出たこともないために、この雛祭りの桜狩りは、一年最大の愉しみであった。
この日は、大名屋敷へ、諸芸人を招くことも、黙認されていたので、夜明けから日暮れまで、歌舞の声、三弦太鼓笛の音が、絶えることはなかった。

この日を、新装披露にえらんだのであるから、土井邸のにぎわいは、いちだんとはなやかであった。

どぶが、べつに変装せずに、のこのこ入り込んでも、見咎められるおそれは、さらになかった。

建物の中、庭園上、武家と町人、老若男女が入りみだれて、にぎわった。

書院には、老中も若年寄も坐っていたし、庭園をそぞろ歩く武家の婦人がたの中には、十万石、百万石の大名の奥方や姫君も、交っていた。

どぶは、屋敷内をひと巡りしたところで、からくり唐次と出会った。

「まったく豪勢な景色だぜ」

どぶが、云うと、唐次は、妙にむっつりした表情で、うなずいただけであった。

「この庭園は、あの上屋敷の庭とは、まるっきりちがっていらあ。どこを見まわしても、ケチのつけようがねえ。松の枝ぶり、石の置きかた、苑路の草のさまざま、小石ひとつまでが吟味されていて、どうして、同じ人間が、つくったとは思われねえ」

どぶは、わざと、最大の讃辞を呈した。

「島兵衛さんは、わしらに、文句を云わせまいと、けんめいになったようですよ」

「お前さんは、ほめねえのかね？」

どぶは、問うた。

「腕を誇る庭師なら、これぐらいの庭をつくるのは、あたりまえじゃありませんかね」

唐次は、やはり、島兵衛に対して、好感を抱いてはいないようであった。

仕上げるまでの半年間、島兵衛、小源太、唐次、多三郎の四人が、いかに反目し、罵りあいつつ、お互いの腕を競うたか、目に見えるようであった。

「建物の中へ、案内できぬので、わしの仕事ぶりが見てもらえぬのは、ざんねんですよ」

二

「お前さんが、最も力こぶを入れたのは、やっぱり、書院かね？」

どぶは、たずねてみた。

「いや――」

唐次は、かぶりを振った。

「わしが、心をこめて作ったのは、あの松林の中にある建物ですよ」

唐次は、指さした。

「ああ、あれは、さっき、おれも見たが、妙な建物だな。庫とも隠居所とも、なんとも見当がつかねえようなしろものじゃねえか」

「三男真之助様の住居ですがね、書庫を兼ねているのです」

「ふうん。書庫ってえと、野郎どもが、随喜の涙を流す、例の草紙やら絵やらを、積んでおく――？」

「そうですよ。わしは指物の都合上、拝見させて頂きましたが、それアもう大変なものです。日本中から、集めた、という盛観ですよ」

そういう建物に、最も腕をふるい、精魂こめたとは、やはり、からくりの異名をとるだけあっ

て、唐次は、相当のひねくれ者とわかる。

「そいじゃ、また――」

唐次がはなれて行くと、どぶは、なんとなく、その艶笑庫に向って、近づいた。

その時、近くの寺院から、正午を告げる梵鐘の音が、ひびくのを、どぶは、耳にのこした。

松林に入ろうとして、どぶは、脇道から姿をあらわした人影をみとめた。

まだ十六七の、前髪をつけているのがふさわしいような稚さをとどめた貌であった。本を、二三冊、小脇にかかえている。

――真之助だな。

どぶは、立ちどまって、見送った。

いかにも、書物に――しかも、人に見せられぬような淫靡な書物に、淫しているだけあって、若者らしいはつらつとした生気はどこにもなく、顔色は蒼白く、肩のあたりに、湿った陰気さがただようていた。

錆朱の色を浮かせた壁にかこまれた建物は、土廂をふかく突き出し、門にあたるところが、乳鋲を打った厚い扉になっている。

その前へ近づいた、真之助が、錠前をはずす音を、ここまで、ひびかせた。

わが秘密の城には、誰人も入れぬように、厳重に鍵をかけているのだ。

――ひとつ、そっと、あとから忍び込んで、歌麿、北斎の真筆などを、無断拝見に及んでやろうか。

どぶは、ふっと、その気になった。

その時、うしろから、

「おう――どぶの親分じゃねえか」

声をかけて来た者があった。

振りかえると、棟梁の小源太が、にやにやして、立っていた。

「ああ、棟梁かい。おれは、棟上げするまでに、お前さんが、庭師の島兵衛さんをなぐり殺すのじゃねえか、とおそれていたぜ」

「なぐり殺してえことは、十ぺんぐれえあったかな。爺さん、あっしの威勢におそれをなしたか、こっちの注文通りの露地をつくってくれたので、三途の川を渡らずに、すんだんだ。あっしの自慢は、むこうの茶亭さ。ひとつ、見てくれ」

三

どぶは、茶亭など、さっぱり興味はなかった。

「おれみてえな、茶の湯なんぞ見たこともねえ野暮天が、茶亭の良し悪しが、わかろう道理がねえ」

「まあ、そう云わねえで……。いま、茶亭には、どこかのお大名のお姫様が三人、坐っているんだ。目の栄養になるぜ」

「目の毒になるだけだ」

「どぶ親分は、相当な助平ときいたがね」

「手のとどく花なら、折るのにためらうものじゃねえが、高嶺の花は、見るだけ、目の毒よ。分

を知っているんだ、分を――」

「そうかい。……そう遠慮されたんじゃ、しいてはすすめねえや。気が変ったら茶亭をのぞいてみな」

小源太は、足早やに、遠ざかって行った。

――へん！　いまんところ、生きている娘の盛装姿よりは、歌麿、北斎が描くところの女の裾をおっぴろげた百態が、拝見してえのよ。

どぶは、胸の中で、云いすてておいて、松林の中へ、入って行った。

その建物の前へ近づいてみて、どぶは、

――おや？

と、目を疑った。

扉の錠前が、おもてから、がっちりと、かかっているではないか。

――はてね？

どぶは、念のために、錠前へ手をかけてみた。

たしかに、かかっている。

真之助は、これをはずして、内へ入った。

どぶが、小源太と話を交しているあいだに、真之助は、出て来た気配はなかった。

どぶは、小源太としゃべっている間、べつに、こちらを眺めていたわけではないが、錠前をはずす音が、あれほど高く、ここまでひびいたからには、また、かける音も、ひびかないはずはないのだ。

――どういうんだい、これア？

どぶは、あっけにとられた。

――出て行く時は、幽霊みてえに、音をたてなかった、というのか？

どぶとしては、小源太と話していても、真之助が出て来たのであれば、視野の片隅に、確実に、とらえたはずである。

――わからねえ！

狐につままれたような気分であった。

そこから、ひきかえしながら、どぶは、左門の予言を思い出した。

――新邸披露当日に、何か、異変が起る、と仰言っていたが、もしかすれば、これかも知れねえ。真之助が入ったあと、おもてから、錠前がかかっていた。奇妙なことだが、大したことではない、と思われる。しかし、実は、これが大変なことかも知れねえのだぞ！

どぶは、自分に云いきかせた。

午後になり、招かれた客が、しだいに、辞去して行き、庭園上にも、人影がまばらになって来た。

どぶは、真之助の消えたことが気がかりなままに、屋敷内をあちらこちら、ぶらぶらしつづけた。

四

陽がすっかりかげった時刻――。

どぶは、偶然、今日の招待客の中に、町方同心の小松九郎兵衛がいるのを、見つけた。
「旦那がおいでとは、すこしも気がつかなかったもので……」
と、挨拶した。
「こっちは、気がついていたが、知らぬふりをして居った」
九郎兵衛は、笑って、
「なにか、起りそうかな？」
と、きいた。
「それが……、もう、とっくに、起っているのかも知れませんぜ」
「起っている、とは？」
どぶは、真之助が、自分の城へ消えて、出て来た気配もないのに、表扉に錠前がかけられていたことを、告げた。
「そうか」
九郎兵衛は、うなずいて、
「ひとつ、ひと騒ぎさせるかな」
と、つぶやいた。
それから——。
現代の時間でかぞえてものの十分も経たないうちに、土井家の家臣たちが、大声で、
「真之助様っ！」
と呼びたてて、さがしまわりはじめた。

実は、但馬守は、長男縫之助、次男万之助を、あまり好まず、三男真之助だけを、溺愛していたのである。
そのために、真之助の願いを入れて、大層立派な艶笑庫を建ててやったのである。
家臣たちが、さがしまわりはじめた頃、どぶは、松林の中にひそんでいた。
側用人毛谷三郎次が、指物師・唐次、かざり職・多三郎の二人を連れて、急ぎ足に、その艶笑庫へ、近づいて来た。
「なるほどの。錠前がおろしてある。……が、念のために、中に入ってみよう」
毛谷三郎次が、小首をかしげつつ、多三郎に、合鍵で、はずすように命じた。
扉は、開かれた。
三人は、庫の中へ入って行った。
それを見送りつつ、どぶは、
——たぶん、中に、こもっているに相違ねえ。
そう思った。
つまり——。
どぶは、自分が小源太と話しているあいだに、誰かが来て、はずれた錠前を、そっと、かけて去ったのだ、という結論を出していた。
それ以外の考え様はなかったからである。
ところが——。
庫の中で、真之助を呼んでいた三人は、やがて、出て来た。

姿は、見当らなかったのである。

——ふうん！　するってえと、真之助は、おれが気がつかぬうちに、出て来たのか？

どぶは、自分の結論を、また、ひっくりかえされた。

毛谷三郎次は、

「どこへ、参られたのであろうの」

しきりに、首をひねりつつ、どぶの前を通りすぎた。

五

松林の中の一方の脇道を、ゆっくりとした足どりで島兵衛がやって来たのは、その時であった。

その姿をみとめて、側用人が、

「島兵衛——」

と、呼んだ。

「へい」

「お前は、真之助様のお姿を、見かけなかったか？」

「御用人様、それが……どうも——」

思い当るようなそぶりを示す島兵衛に、毛谷三郎次は、

「見かけたと申すか？」

「はい、ちょうど、正午……、裏門から出てお行きなされたのが、たしか、真之助様のお姿、と

お見かけいたしましたが——」

「真之助様が、おもてへ？　……門番は、そんなことは申して居らぬぞ。真之助様から、口止めされたとも思えぬ。第一、真之助様は、これまで、お一人で、外出をなされたことはない」

「てまえは、たしかに、あれは、真之助様だった、と思いましたが……」

「妙だな。よし、もう一度、門番に、ただしてみよう」

側用人が、遠ざかるのを、見送っておいて、島兵衛は、歩き出そうとした。

その行手を、どぶが、ちょいと、ふさいだ。

「親方、真之助様が、裏門から出て行くのを、本当に見たのかね？」

「ああ、お見かけしたよ」

「正午だ、と云ったな」

「そうだ、お寺の鐘が、鳴っていたからのう」

「その鐘の鳴りおわらぬうちだったか？」

じっと見据えるどぶの視線を、島兵衛は、眉宇をひそめて、受けとめた。

「岡っ引は、大名屋敷内の出来事には、やたらに、首を突っ込まねえものだ」

「鐘が鳴りおわらぬうちだったかどうか、きいているんだ」

どぶは、語気を鋭いものにした。

「そうだよ、鐘が鳴りおわらぬうちだ。だから、わしは、はっきりと、おぼえている」

「妙だぜ」

どぶは、にやっとした。

「なにが、妙なんだ？」
「鐘がちょうど鳴りおわった時、真之助様は、自分の庫の表扉の錠前を、はずして、中へ入って行きなすったぜ」
「……」
「これは、どういうことかね？　同じ人間が、裏門から出て行ったり、庫に入ったりしたってえのは――」
「……」
「おかしいじゃねえか」
「そうだな。どっちかが、見まちがえたのだろうよ」
島兵衛は、こたえた。
「そうだ、どっちかが、見まちがえたんだ。どっちが、見まちげえたか――それが、問題だぜ」
どぶは、皮肉な云いかたをした。

六

十日が過ぎた。
町小路左門は、どぶがやって来るや、
「真之助の行方は不明のままだな」
と、云いあてた。
土井家新邸披露の模様は、小松九郎兵衛から、すでに、くわしくきいていた。

「へい、全くもって――」
「それで――？」
左門は、うながした。
「あっしは、どうも、島兵衛がくせえ、とからくり唐次に、云ってやりました。あの爺さんは、一徹なところがあって、きらいじゃなかったが、あんまり見えすいた嘘を吐きやがったのが、気に食わねえ、と云ってやりますと、唐次は、腕を組んで、しばらく、考えて居りましたが、二三日、待ってくれ、となにやら、肚をきめた様子でございました」
「待ってやってから、どうした？」
「あっしが、唐次の家をたずねて行きますと、一緒に行ってくれ、と申して、家を出ましてね」
唐次が、どぶをともなったのは、室町二丁目にある、絵草紙屋であった。
唐次は、絵草紙屋のあるじに、歌麿の秘戯図「裸女百態」は、誰に売れた、とたずねた。
すると、あるじは、
「あれには、ほとほと、当惑いたしました。なにせ、京の御所から、てまえどもに下げ渡しになる、という噂だけで、百人ものお客様が殺到なさいましたのでね」
「その中でも、一番熱心だったのは、黒門町の棟梁の小源太じゃありませんでしたかね」
唐次は、意外なことを、口にして、どぶをおどろかせた。
「そうでございますよ。棟梁は、なにせ、職人には珍しく、歌麿、北斎、清長などの逸品を集めておいでございますからね。それアもう、熱心で、三日明けずに、まだ来ねえか、と店へおみえでございました」

棟梁の小源太が、秘戯図の蒐集家であったとは、どぶの目をみはらせるに充分であった。

「なにせ、歌麿の裸女百態は、版になって居らぬ、日本中でたったひとつしかない肉筆でございますからね、この道の好事家にとっては、垂涎の品でございます」

「で——結局、手に入れなすったのは？」

「それが、小源太棟梁ではございませんで、土井但馬守様のご三男の真之助と申される若君でございました」

「その若君が、横あいから、さらった、というわけですね？」

「はい。なにせ、さきの若年寄様の若君でございますし、お若いにもかかわらず、お集めなさっている品の見事さに、てまえも、感服いたして居りましたので……」

「小源太は、目色変えて、怒ったのじゃありませんかね？」

「ええ、そりゃもう、まるできちがいみたいに、この店でどなりたて、あばれて、町方のお役人をお呼びしたくらいでございましたよ」

あるじの言葉に、うなずいて、唐次は、どぶへ、目くばせしてみせた。

七

唐次が、このいきさつをきいたのは、島兵衛の口からであった。

唐次は、どぶから、島兵衛がくさい、と云われて、早速、島兵衛に、ただしたのである。

すると島兵衛は、

「実は、わしは、小源太をかばったのだ」

と、こたえたのであった。

島兵衛は、小源太が、浮世絵の中の秘戯図をもっぱら集めていることを知っていた。そして、歌麿の「裸女百態」を手に入れたいと躍起になっていたところ、土井真之助にさらわれて、心底から憎んでいる、ということも、耳に入れていたのである。

新邸工事の最中は、まるで仇敵同士のように罵りあっていたが、そこは名人気質というやつで、島兵衛は、いつか、小源太に、ひそかな好意を持っていた。

披露の日、真之助の姿が見えなくなった時、島兵衛は、

——もしや、小源太が、「裸女百態」を手に入れたいあまりに、真之助を……？

という疑惑を抱いたのであった。

そのために、小源太をかばう気持から、つい、真之助が裏門から出て行った、と嘘をついてしまった、という次第であった。

絵草紙屋を出て、往還をひろいながら、唐次は、どぶに云った。

「蒐集狂、といいますが、たしかに、これは、きちがいですよ。たとえ、女房子供をたたき売っても、手に入れたい、と必死になる。この気持は、わしにもよく判ります。ふつうの人は、たかが絵一枚と思われるかも知れないが、当人にすれば、それが欲しくなると、もう、寝ても覚めても、そのことだけを思いつめるものです。ほかのことは一切考えずに、一途に、どうしてもそれを手に入れようと——妄執の鬼になってしまう。そのためには、人を一人殺しても、悔いはしない。……これは当人でなければ、判らない執念と申すものです」

「ふむ！」

どぶは、真之助を、邸内から消したのが、小源太のしわざではあるまいか、と疑う島兵衛と唐次の意見を、まだ、なんとも、うなずきかねた。しかし、きいてみれば、一応の理がある。

棟梁として、その艶笑庫をつくった小源太である。はじめから、そのこんたんがあれば、どこかに仕掛をしておいて、真之助を殺して、死体をかくすことは、造作もない。

——そういえば、真之助が、庫に入ろうとする時、小源太が、おれをつかまえて、しきりに、茶亭を見てくれ、とさそっていたな。あの態度が、くせえといえば、いえる。

どぶは、ひとつ、小源太に当ってみてやろう、と思った。

「で——あっしは、唐次と別れると、小源太の家へ、乗り込みやした」

どぶは、左門に、云った。

「裸女百態が、あったのだな」

「へい、ありました。そこで、あっしは、小源太を、とっつかまえて、土井家へ、しょっぴいたのでございます。それが、昨日のことなんで——」

八

「小源太は、いま頃、但馬守から、じきじきに、しめあげられている、という次第か」

左門が、云った。

「そういうわけで……。拷問でも、くらっているのじゃございますまいか。……殿様は、どうお考えでございます？　小源太が、真之助君を殺した下手人、とお考えで——？」

「裸女百態が、小源太の家にあったのであれば、盗んだことは、まぎれもない。……しかし、は

たして、殺して奪ったかどうか、断定はできまい」

「あっしが、土井家へ、小源太をしょっぴいたのは、早まった、と仰言いますか？」

「いや、当然の処置だな。……ただ」

「へえ？」

どぶは、双眼を閉じた左門の顔を、見つめた。

「これは、わたしのカンだが、すこし、つじつまが合いすぎている」

「つじつまがねえ」

「男女の仲とか、犯罪とか——そういったものは、解決のつかぬあいだは、一見つじつまが合わぬものだ」

「そう仰言られると、たしかに、そうでございます」

「つじつまが合いすぎていることは、まだその奥に、何かが、かくされている、と考えてよい」

左門が、そう云った時、老用人が、小松九郎兵衛の来訪を、告げた。

九郎兵衛は、入って来て、どぶが、そこにいるのを見出すと、

「棟梁の小源太を、土井屋敷へ、しょっぴいたの」

と、云った。

「いまそのことを、殿様に申し上げて居ります」

「たぶん、小源太は、殺されるだろうな」

九郎兵衛は、無表情で、いかにもことなげな口調で、云った。

「殺されやすかねえ」

「但馬守という殿様は、途方もない癇癪持ちだからのう。それに、三男坊を、溺愛されとったからな」

「殺されたんじゃ、しょっぴいた意味がねえ。小源太に、泥を吐かせてもらいてえんだが……」

「泥は吐くまい。……わしは、小源太が、真之助君を殺して、かくしたとは思わん」

「じゃ、真之助君は、一人で、かくれた、という解釈なんですかい、旦那は？」

「そこまでは、考えて居らん。まだ、五里霧中に在る」

九郎兵衛は、そう云ってから、左門に向って、

「松田屋善右衛門を、ひっとらえて、しめあげましょうか？」

と、問うた。

「まだ、早かろう」

左門は、こたえた。

「しかし、すてておきますと、神奈川台の倉にある南蛮の品々を、また、どこかへ移すおそれがあります」

「移したら、また、そこへ出かける」

左門は、そうこたえて、微笑した。

九

美しく掃ききよめられた白砂上に、むざんな光景があった。

後手にしばられた小源太の顔面は、撃ち傷だらけになって、血汐を流していた。

その前に立って、木太刀を携げているのは、土井但馬守自身であった。

「強情な奴だの」

但馬守のこめかみには、太い青筋がいくつも、浮きあがっていた。

小源太は、はだけた胸もまた、血を流しながら、ふいごのようにあえがせていた。

苦痛に堪えつつも、なお、強い意志力をうしなってはいないようである。

但馬守の左右には、家臣が数人。そして、小源太の後方には、庭師の島兵衛が、うずくまっていた。

「小源太！　ありていに白状いたさぬと、撃ち殺すぞ！」

但馬守は、呶鳴りつけた。

「おれア……知らねえものは、知らねえ、と……申し上げて、居りやす」

小源太は、あえぎあえぎ、こたえた。

「おのれが！　生命が惜しゅうはないのか！」

「お、お殿様。……あっしが、真之助様を、殺して、どこかへ埋めた、とでも白状したら、あっしの生命を、たすけて下さるんでございますかね？」

「とうとう、白状いたしたな？」

「冗談じゃねえ。……やりも、しねえことを、白状できる、わけが、ねえ」

「うぬがっ！」

但馬守は、木太刀を振りあげるや、渾身の力をこめて、振り下した。

脳天に、にぶい、いやな音がして、小源太は、二三度、ぐらぐらと上半身をゆらめかせたが、

そのまま、仰向けに仆れた。
「水をかけて、息を吹きかえさせい。どうしても、白状させてくれるぞ！」
但馬守は、家臣たちへ命じた。
その時、島兵衛が、
「お殿様――」
と、呼んでおいて、小源太のそばへ、寄った。
閉じた目蓋をひらいてみ、また、脈をさぐった島兵衛は、
「事切れて居りまする」
「そうか」
但馬守は、木太刀をほうり出した。
「こやつ、真之助を殺したと白状いたしたとみとめよう。……島兵衛、死体をとりかたづけい」
「かしこまりました」
但馬守は、屋内へ去った。
島兵衛は、家臣たちへ、
「てまえ一人で、片づけます」
と、云った。
「島兵衛、ことわるまでもあるまいが、この儀、他言無用だぞ」
「わかって居ります。小源太の家の方へも、てまえから、とりつくろいます」
「たのむぞ」

家臣らに見送られて、死骸を背負って、歩き出した島兵衛は、小声で、一言、
「すまねえ！」
と、わびた。

木馬

一

「どぶっ！　覚悟しろ」
白昼、往来で、いきなり、長脇差をひき抜いて、立ちはだかった男があった。
どぶは、昨夜、ひさしぶりに、吉原の小格子女郎を買って、さっぱりした気分で、日本堤を歩いて来ていたのである。
朝酒をひっかけていて、いい日和だし、なにやら、今日はいいことでもありそうに思っていた矢先であった。
「なんでえ、てめえは――？」
見受けたところ、やくざでもないようであった。
「どぶ犬め、たたっ斬ってやる！」
「だから、斬る理由をぬかせ、と云っているんだ」
「てめえ、先月、おれの嬶を、鎌倉の東慶寺へ、送り込んだろう、どうだ？」

「ははあん、おめえが、木場の三吉か」
「やっぱり、てめえ、おれの嬶を――畜生っ！」
三吉という男は、狂ったように、滅茶滅茶に、白刃をふりまわして来た。
どぶは、先月はじめ、大川へ身投げしようとした女を救った。亭主が酒ぐせも女ぐせもわるく、ついには、酌婦をわが家へつれ込んで、とんでもない夜を営もうとするので、生きている気がしなくなった、と泣きくずれるのを眺めて、どぶは、
「鎌倉の東慶寺へ、駆け込むと、どんな悪党でも、ここへは踏み込めねえ。三年経ったら、離縁できる」
と、教えてやったのである。
どうやら、その女房は、本当に、東慶寺へ駆け込んだらしい。
「やい！　どぶっ！　ようも、ようも、おれの嬶を、尼にしやがって！」
いくら斬りつけても、かるがるとかわされてしまうので、三吉は、ふうふう喘ぎながら、にらみつけた。
「東慶寺に駆け込んだからといって、尼になるわけじゃねえ。三年経ったら、晴れて離縁して、出て来らあ。……おめえ、大家からきかされたろう。もういくら、じたばたしても、女房は、おめえの許へは、かえって来ねえ。未練たらしく、見当ちげえな逆うらみをしやがるな」
「な、なにをっ！　お、おれは、嬶に、惚れていたんだぞっ！」
「惚れていたなら、情婦をひきずり込んで、女房の前で、いちゃつくようなまねを、どうしてしやがる」

「うるせえ！　てめえが、出しゃばりやがるから……くそっ！」
「出しゃばらなかったら、おめえの女房は、土左衛門になっていたんだ」
三吉は、云いまかされると、また、白刃をふりまわしはじめた。
適当にあしらっていたどぶは、
「ええ、めんどうくせえ！」
呶鳴るや、十手をひき抜きざま、三吉の脳天へ、一発くらわせた。
三吉は、きりきり舞いして、ぶっ倒れた。
「いよう、千両役者！　そこで、大見得をきる！」
声がかかった。

二

河内山宗俊が、笑いながら、近づいて来た。
「いつもながらの、鮮やかなお手の内！」
「いくら、おだてもらっても、昨夜吉原でつかいはたして――二分はおろか、そば代ものこっちゃいませんや。おけらでさ」
「なに、今日は、こっちが、ふところがあたたけえ。どうだ、精気をとりもどさせてやろう」
河内山は、姥ヶ池ぎわにあるうなぎ屋へ、さそった。
焼きあがるまで、銚子を一本取って、ちびちびやりながら、河内山は、
「黒門町の棟梁の小源太が、土井但馬守に、木刀で、なぐり殺されたそうだな」

と、云った。

「よくご存じで――」

「蛇の道は、蛇――というほどのこともねえ。土井家に女中奉公していたわしの知りあいのとびの娘が、どうやら、小源太に惚れていたらしい。暇をとって家へもどって来ている。……わしのところへ駆け込んで来て、敵を討ってくれ、と訴えたが、対手が、土井但馬守じゃ、太刀打ちできねえやな。なにせ、大奥を――御台所をはじめ、年寄、中臈ことごとくを、南蛮の珍宝で、まるめ込んでしまっている。下手に、楯つくと、こっちの笠の台がとぶ。そうでなくてさえ、こっちは、そろそろ、かさなる悪事のかずかずに、身辺少々怪しい雲行きになっている」

「そのとびの娘は、小源太が、真之助殺しの下手人じゃねえ、と云っているんですかい？」

「真之助が、勝手に、雲がくれしたのだ、と云っていたな」

「その娘の家を教えておくんなさい」

「ここへ、ひとつ、呼んでやろうか」

「そいつは、有難え」

うなぎが焼きあがって、はこばれて来た時、使いに呼ばれたおさわという娘も、階段をあがって来た。

「おさわ、これが日本一の岡っ引、どぶ親分だ」

と河内山から、ひきあわされて、おさわは、急に柳眉をたてると、

「小源太さんを、捕えたのは、お前さんだね！」

と、にらみつけた。

「まて、話をきこうじゃねえか」

「お前さんなんかに！」

「待ちな。こっちは、証拠があって、小源太を挙げたんだ。まちがっていりゃ、あやまる」

「あやまったって、もう手おくれだよ。小源太さんは、殺されちまったじゃないか」

「……」

「仇討をしたけりゃ、話してみな」

おさわは、うつ向いて、ぽろりと、泪を一滴、膝へ落した。

「あたしは、小源太さんに、惚れていたんだ」

「そいつは、河内山の旦那に、きいた。小源太が普請に入ってから、知りあって、惚れたわけだな？」

おさわは、うなずいて、袖で泪をふいた。

三

「おめえ、真之助は、一人で勝手に雲がくれしたんだ、と河内山の旦那に、云ったそうだが、その証拠があるのか？」

どぶは、おさわを見据えて、たずねた。

「あの日は――」

おさわは、話しはじめた。

「無礼講だから、あたしは、どうしても、小源太さんを、くどきたかった」

さすがは、とびの娘であった。自分の方から、すすんで、男をわがものにしようと決心したのだ。

「だから、あたしゃ、小源太さんから、目をはなさなかった。いえ、小源太さんのあとばかり追いかけて、二人きりになる機会を、ねらっていたんだ。……真之助様が、雲がくれなすったのは、正午だ、というけど、その時、小源太さんは、茶亭にいたよ。あたしが、ちゃんと見とどけている。茶亭には、どこかのお大名のお姫様がたが三人いらしたよ。小源太さんは、そのお姫様がたと口をききたくて、入って行って、自分の仕事っぷりを自慢していたんだ。あたしゃ、ものかげから、ちゃんと見ていたんだ」

「ふむ！」

どぶは、腕を組んで、うなった。

「ちょうど、その時だろ、真之助様が、ご自分の書庫に入って、消えちまったのは――」

「そうだ。それは、このおれも知っている」

「小源太さんは、茶亭に小半刻も、いたんだよ。……どうして、真之助様を、殺せるものかね。……ワナだよ、誰かが、小源太さんを下手人にするワナだよ」

「……」

「親分！　真之助様の書庫は西、茶亭は東――まるで、反対のところに、建っているんだよ！　鳥じゃあるまいし、小源太さんが、飛んで行って殺して、また飛びかえることなんか、どうしてできるものかね」

「おめえ、小源太のあとを、ずっと、つけまわしていた、と云ったな？」

「あい――」

「書庫のある松林の入口で、小源太は、誰かと――つまり、実は、このおれだが――話をしているのを、おめえは、遠くから見ていたか？」

「あい、見ていました」

「小源太は、そのまま、まっすぐに、茶亭へ歩いて行ったか？」

「まちがいありません」

「ふむ！」

どぶは、首をひねった。

すると、小源太は、あの日より以前に、書庫から、歌麿の「裸女百態」を盗んでいたことになるのか？

「親分、どうやら、形勢不利だな」

河内山が、笑いながら、云った。

「全く！」

どぶは、みとめた。

「どうするね？」

「どうするも、こうするも、やりなおしでさ」

どぶは、立ち上った。

「島兵衛の野郎！　とっちめてくれる。いや、その前に、唐次の野郎を――」

四

どぶは、うなぎ屋を出ると、からくり唐次の家へ、とんだ。
唐次は、仕事場に、等身大の蠟人形を据えて、じっと眺めていた。
一歩入ったどぶは、生きているそのままの美しさを湛えた人形に、一瞬、目をうばわれた。
吉原芸妓を、そっくり写したものだったが、こんな艶冶な実物は一人もいない。
「ふうん！」
どぶは、ひと唸りした。
「こういう別品に、魂を入れるてだてはねえものかねえ」
そう云いながら、近づいて、のぞき込むどぶに、唐次は笑い乍ら、
「魂を入れることができたら、男を狂わせるだけでしょうよ。人形だからいいのですよ」
「なに、こっちは、いっぺん狂ってみてえやな」
どぶは、舌なめずりして、ちょっと頬へ手をふれてみて、
「やっぱり、つめてえ。人三化七でも、肌のあたたけえ方がいいか」
と、首をふっておいて、
「親方――。真之助を殺したのは、小源太じゃねえぜ」
と、云った。
「そうですかね」
唐次は、平然としている。

「小源太は、但馬守に、ぶち殺されたんだろう？」
「そうらしいですね」
「そうらしい――といって、これア、おれたちの罪だぜ。小源太は、とんだ濡れ衣をきせられて、殺されたことになるぜ」
どぶは、おさわという娘の話をきかせた。唐次は、しかし、べつに、うろたえもせず、
「小源太が、裸女百態を盗んだのが、いけなかったのじゃありませんか。島兵衛が、それをかばった。島兵衛とすりゃ、好意からついた嘘だった。親分が、小源太をしばったのも、裸女百態が家の中から見つかったから、これは、あたりまえのこと。……土井の殿様が、小源太を白状させようとしたのも、むりはない話だし、これア、どうも、やむを得なかった、と考えるよりほかはないでしょう」
「しかし、殺してもいねえ男をぶち殺させた寝ざめのわるさは、やりきれねえじゃねえか。……おれは、本当の下手人を、必ず挙げてみせる」
「親分――」
唐次は、ちょっとあわれむような表情で、
「失礼ですが、お大名屋敷内で起ったことに、町方が、首を突っ込むのは、どういうものでしょうね」
「どうもこうもねえ。乗りかかった船だ」
「本当の下手人を挙げてみたところで、お奉行所へひっぱれるわけでなし……、親分の手柄にはなりませんよ」

「手柄をたてようと思って、やっているんじゃねえや」

五

「親分が、覚悟をきめていなさるなら、わしも、及ばずながら、お役に立つことがあれば、なんでもいたします」

からくり唐次の言葉をきいて、その家を出たどぶは、歩き出しながら、

——どこか、肝心かなめのところが、狂っていやがるんだ。

と、胸のうちで、つぶやいた。

その狂っているところを、ひっぺがしてみなければ、こんどの奇怪な出来事の真相は、全く判りそうもない、と思われる。

殺された屍体が、出た。その下手人を追いかける。

そんな単純な事件ではないのであった。

どぶが、左門から命じられた時は、何も起ってはいなかった。世間に、「お犬の方」という怨霊の祟りをおそれる迷信が、ひろがっているだけであった。

ところが、どぶが、首を突っ込んでみると、なんとも奇怪な現象が、つぎつぎと、目の前で起りはじめたのである。

まるで、こっちを、とまどわせるために、誰かが、途方もないいたずらをやっているようなあんばいである。

どぶの足は、やっぱり、町小路家へ向わずにはいられなかった。

左門は、閉めきった座敷で、例の小猿に小さな木刀を持たせて、一羽の雀を追いかけまわさせていた。

小猿は、素手で雀をつかむのは得手であろうが、木刀をふりまわすのは苦手らしく、ぶざまな恰好で追いかけて、失敗するたびに、歯をむき出していた。

——残酷趣味というやつだ。

どぶは、胸のうちで、

——こんなひまがあったら、お小夜さんでも抱いてやりゃいいのに……。

そう思わずにいられなかった。

「どうも、こんどというこんどは、五里霧中というていたらくでございます」

報告を了えてから、どぶが、溜息をつくと、左門は、

「霧が濃いならば、あともどりしてみることだ」

と、云った。

「あともどりを——へえ?」

「まず、最初に土井家に起った怪異は、木馬が歩くことであったな」

「——という噂で」

「その怪異から、ずうっと、尾を引いて、次つぎに、妙な出来事が起っている」

「全く——」

「その木馬は、東照神君よりの拝領物なので、葵の御紋がついているため、怪異を起しても、遠慮して、誰も手をふれようとせぬのであろう。たまたま、その木馬を調べに、お前が、からくり

唐次をともなって、忍び入ると、長男縫之助の居間の甲冑が、動くという第二の怪異が起った。つまり、人々の注意が、木馬から甲冑へ横すべりした」

「その通りで……」

「そこへ、さらに、第三の怪異——三男真之助が、煙のごとく消えるという出来事が起った。木馬も甲冑も、一時、忘れられた。……どぶ、もう一度、振り出しへ、もどるがよい」

六

振り出しへもどれ、という左門の言葉が、どぶに、次の夜、土井家へ忍び込む決意をさせた。連れは、からくり唐次であった。

「忍び込んで、どうしなさる？」

唐次は、どぶからさそわれて、たずねた。

「木馬のカラクリを突きとめてやるんだ」

「それで——？」

「それでも、これでもねえやな。まず、振り出しへもどって、木馬からはじめるんだ」

今夜にも、と気負い立つどぶへ、唐次は、おちついた視線を当てていたが、

「今夜のうちに、仕事を片づけますから、明晩にして頂きましょう」

と、云った。

さて、その夜——。

どぶと唐次が、土井家の新邸へ、忍び込んだのは、三更（午前零時）をまわっていた。

ところが、それより一刻ばかり前、木馬のおさめられてる土蔵内では、意外な異変が起っていたのである。

どぶたちより一足さきに、その土蔵へ、忍び込んだ曲者がいた。

かざり職の多三郎であった。

この新邸の錠前と鍵を作った男である。忍び込むのに、なんの造作もないのであった。

多三郎が、そっと、近づいたのは、奥の一段高くなった板敷に安置された木馬であった。

夜歩きする木馬は、座敷牢のような太い格子の中へ、とじこめられていた。

その格子内へ入った多三郎は、なんのおそれ気もなく、百目蠟燭で照らしながら、木馬を調べていたが、苦もなく、胴の一箇処を、はずして、大きな孔をあけた。

その孔へ、多三郎は、蠟燭とともに、首を突っ込んだ。

木馬の胴の中には、やはり、巧妙な仕掛がほどこしてあったのである。

多三郎は、それを、はずしはじめた。何が目的で、そうしようとしているのか？

しかし、多三郎は、この仕事を、すぐに中止しなければならなかった。

急に、人声がひびいたからである。

それは、もつれ合う男女の声であった。

「……あたしゃ、こわくなった！」

「なにを申すか！　わしに、木馬へ乗れ、とそそのかしたのは、お前だぞ」

「だって、なんだか、急に、こわくなっちまって……」

「黙って、ついて来い！」

明りがつけられた。

浮きあがったのは、但馬守光貞の次男万之助と、一瞥して莫連と判る大年増であった。

生来の博奕好きの万之助は、大名屋敷の奉公部屋の賭場を、夜な夜なわたりあるいているうちに、この莫連と深い仲になった模様である。

今宵、どこかの賭場で、一文無しになり、しかたなく、この莫連の家へころがり込み、酔うほどに、いさかいを起した。

近頃、万之助が、男として役立たなくなったのを、莫連が、あざけったのである。

元来小心者の万之助は、今日でいうノイローゼに罹っていた。

七

鉄火な莫連にとって、不能者になった若い男など、たとえ大名の子息であっても、なんのねうちもない。

いさかいの挙句、

「お屋敷には、お化木馬がいるってえ噂じゃないか。度胸があるなら、そいつに乗って、ひとっ走りしてごらんな。そうすりゃ、萎えたものも、ピンとするだろうよ」

「よし！　庭へ引き出して、乗りまわしてくれる」

という次第になったのである。

万之助も女も、したたかに酔った勢いで、土蔵へ入って来たのであった。

しかし、女の方は、一足ふみ込んだとたん、胴ぶるいして、にわかに、酔いもさめはてた気色

であった。

「おたき、見ろ。こいつだぞ」

よろつきながら、格子へ近づいた万之助は、べろりと舌なめずりした。

そこに、かざり職の多三郎の姿は、なかった。

木馬の胴は、もとのままに蓋をされていた。多三郎は、とっさに、その胴の中へ、もぐり込んだのである。

万之助は、格子内へ入って来ると、木馬の口をとって、

「さあ、来い」

と、ひと曳きした。

木馬は、四肢を、ふるわせると、カタカタと歩きはじめた。

女は、大きく目を見はって、息をのんだ。

格子の外へ、木馬をひき出した万之助は、にやりとすると、

「おい、馬上の営みという手があるぞ」

と、云った。

「なんだって？」

「こいつを歩きまわらせながら、わしとお前が、馬上で、睦みあう。わるくない趣向だ。どうだ？」

「あたしゃ、ごめんだ」

「否やは云わせぬ！　わしの不能をさげすみ居ったお前に、またとない面白い愉しみをあじわわ

せてくれよう、というのだ。……おい、乗れ！」

「だって……」

しりごみする莫連を、万之助は、そこは若い男の腕力で、無理矢理に、馬上へ、押しあげ、膝もあらわに、またがらせた。

「ははは……、面白いぞ！」

万之助は、女と向い合せに、乗ると、抱き寄せ、

「この趣向なら、不能も直ろうと申すものだ。こら、木馬、歩けい」

命じられるまでもなく、木馬は、口をとって曳かれるか、または人を乗せると、歩く仕掛になっていた。

木馬は、土蔵を出た。

そのあいだ、馬上では、男女が、ひとつになろうと、うごめきあったが……。

「だめじゃないか」

「うっ！　畜生め！」

けんめいになればなるほど、万之助は、不能者の惨めさを思い知らされ、いたずらに、苛立った。

八

絶望が、若者を、狂暴化した。

「くそっ！　こんな木馬は、火をつけて、焼きすててくれるぞ！」

女を突き落しておいて、地上へとび降りた万之助は、狂ったように、どこかへ奔った。

おたきという莫連は、流石に、月光をあびて立つ木馬の黒い姿に、おびえた目を向けて、肩をすくめた。

すぐに、馳せもどって来た万之助の手には、油桶が携げられていた。

ぱっと油をぶちかけておいて、

「このくそ木馬め！」

罵(ののし)りつつ、燧(ひうち)を鳴らした。

「お止しよ！」

おたきが、止めようとした。

「黙って見ておれ！」

炎は、そのたてがみからあがった。

とみるや、めらめらと、背を這って、たちまち、胴をなめた。

その瞬間であった。

木馬は、その熱さに堪えられないごとく、烈しい動きを示すや、ぐるっと一廻りして、馬首を、万之助に向けた。

万之助が、思わず、二三歩退くと、木馬は、おのれに火を放った男に、襲いかかるがごとく、前進して来た。

「ああっ！」

万之助は、悲鳴をあげて、あとずさった。

燃える木馬は、まっすぐに迫って来る。

「あぁっ！」

万之助は、両手をさしのべて、ふせぐ恰好になりながら、あとへあとへと遁れようとした。

恐怖のために膝から力が抜けて、へたへたと崩れ込みそうになるのを辛うじてこらえて、よたよたと遁れようとするのであった。一目散に奔れば、木馬も追い迫ることは、かなわなかったであろう。

木馬の歩行速度は、右へよろめき、左へふらつく万之助に、肉薄するのに、充分であった。

ついに——。

万之助は、泉水の畔まで、追いつめられた。そこの置石につまずいて、ころぶや、なんともあわれな悲鳴をほとばしらせて、万之助は、匐いずった。

すでに、その時、木馬は、火だるまになっていたが、なお執念ぶかく、匐いずる万之助に、のしかかりかけた。

遠くに、立ちすくんでいるおたきは、万之助が、必死の力で立ち上るのを視た。

そして、大きくのけぞって、泉水へ落ち込むのを見とどけてから、その場へ、へたへたと坐り込んでしまった。

どぶと唐次が、邸内へ忍び入ったのは、恰度この折であった。

築山へ立って、この異様な光景を目撃し、

「おっ！　あれは、木馬だっ！」

「燃えているとはっ！」

二人は、夢中で、馳せ降りた。

そこへ至るのと、木馬が、人間の声で絶鳴をあげて倒れるのが、同時だった。

九

「——という次第で、あっしらが、馳せつけた時は、もう間に合わず、木馬の中にひそんでいた多三郎は、焼け死んで居りました」

どぶは、左門の前にかしこまって、報告した。

「多三郎が、どうして、木馬の中へもぐり込んだか、こいつもわけのわからねえことでござんすが、それよりも、もっとわけのわからねえことが、その時、起りやがったので——へい」

「……」

左門は、黙然としている。

その膝の上には、小猿が、ちょこんとうずくまっていた。

「泉水へ落ち込んだ万之助が、それっきり——鯉にでも化けたように、姿を消しちまったのでございます。土井家のさむれえたちが、十人も、泉水へとび込んで、さがしまわったにも拘らず……、消え失せてぞおわりけり」

「……」

左門は、依然として、口をつぐんだままである。

「泉水は、たかだか、胸までの深さでしかありやせんから、溺れ死ぬ気づかいはねえし、どこへ匍いあがったのなら、あっしらの目にとまらなかったはずがねえ。となりゃ、魚に化けたか、

それとも水に溶けちまったか……」

「多三郎の死体は、いかがいたした？」

ふいに、左門が、どぶのおしゃべりをさえぎって、たずねた。

「へえ、黒こげの方は、島兵衛が申し出まして、こっそり、下谷の妙法寺ってえ古寺へ、埋葬いたしやした。土井の殿様は、家柄に傷がつくのをおそれて、木馬の中に多三郎がもぐり込んでいたことは、他言無用と申し渡して、島兵衛に、こっそりむくろをしまつさせた——という次第で、へい」

左門は、小猿を、膝からはらい落した。

「あの新邸をつくったのは、島兵衛と小源太と唐次と多三郎であった」

「その通りで——」

「そのうち、小源太は、但馬守に責め殺され、多三郎は焼け死んだ。次は、島兵衛か唐次が、横死する番であろうか」

「え？　そ、それは、どういうわけなんで？」

目を見はるどぶに対して、左門は、例によって、おのが推理の根拠となることは口にせず、

「先程、小松九郎兵衛が参って、菊姫が、箱根の湯治をきりあげて、土井邸へ帰って参った由、告げた」

「へえ——」

「ところが、箱根の湯治も効験なく、どうやら、菊姫は、気鬱が昂じて、ほとんど、狂うている由」

菊姫が、十匹にもあまる白蛇に襲撃された光景は、どぶ自身が、目撃しているところであった。

その衝撃で、気が狂うのも、当然であろう。

「どぶ——。お前は、その奇怪な泉水を、もう一度調べるとともに、菊姫の身辺を見張るがよい」

姫と泉水

一

どぶは、こんどは、職人に化けて、土井家新邸へ入らなかった。

町の岡っ引として、訪ねて行き、江戸家老桂木頼母へ、左門の添書をさし出した。

桂木頼母は、側用人毛谷三郎次と相談して、どぶが、しばらく、屋敷内に起居することを許可した。

新邸へひき移ってからも、つづけさまに、奇怪な異変が起ったのである。

三男真之助が、行方不明になる。次男万之助が、また、消え去った。

大工棟梁の小源太を拷問死させ、かざり職多三郎が、木馬の中で黒こげになった。

こうなれば、いかに傲慢な気象の当主但馬守光貞も、憂鬱にならざるを得ない、というものであった。

この次は、どんな異変が起るか、というおそれが、夜もねむらせないようにしているのであった。

町方の不浄者が、乗り込んで来て調査に当るなど、本来ならば、一喝のもとにしりぞけるのであったが、奉行所随一の名与力町小路左門が、助力を申し入れて来たのであってみれば、いまは、これにすがってみる気持にもなろう、というものであった。

異変が、また、起るに相違ない、という不安は、家中一同の心にあったのである。

どぶは、こんどは、堂々と屋敷の中を、どこでも歩きまわることを許された。

その日のたそがれどき——。

どぶは、苑路を、ただ一人、歩いて来る華やかな衣裳の女性をみとめて、

「おっ！」

と、緊張した。

菊姫であった。

その歩きかたは、たしかに、神経がそこなわれていることを、示している。

おそらく、女中の目をかすめて、庭へふらふらと出て来たに相違ない。

どぶは、とっさに、臍の下へ力をこめると、菊姫の行手へ立ち、

「お姫様、お一人でお歩きになるのは、いかがなものでございましょう」

と、云いかけてみた。

すると、菊姫は、対手が何者であるか、知らぬままに、にこりとしてみせた。

「かまいませぬ。……鯉が、あたくしを、待ちくたびれているのですもの」

と、こたえた。

「鯉が——？」

どぶは、眉宇をひそめた。

「はい。ついておいでなさい。……見せてあげます」

ひらひらと、振袖をひるがえして、菊姫は、先に立った。

そこへ、あわてて、女中が追いかけて来たが、どぶは、

「警護の役目を、あっしにおまかせ頂きとう存じます」

と、申し出て、女中たちをさがらせた。

何かが、起るような予感が、どぶの心を掠めたのである。

菊姫は、泉水のほとりに立った。

二

どぶは、菊姫が、白い手を、ぱんぱんぱん、三つ叩くのを、見た。

鯉を呼んだのだ。

前の屋敷の泉水に、菊姫が手なずけた十両のねうちの錦鯉が、十尾もいて、これらは、当然この泉水に移されているはずであった。

菊姫が、手をたたけば、錦鯉たちは、一斉に浮きあがって来るのが、見ものであった。

ところが——。

泉水の水面には、なんの反応もない。

菊姫は、悲しそうに首をかしげ、救いをもとめるように、どぶをふりかえった。
この時、どぶの眼眸は、異様に鋭いものになって、水面へはなたれていた。
陽がかげり、ようやく昏れなずむ水面には、あるふしぎな変化が起っていた。
この泉水は、庭師島兵衛の最も苦心したところで、夜になると、その一郭が、ぼうっと、光るようにつくられていた。
すなわち、水ぎわの岩に、ひかり苔を植え、そこから、つづいて、水中に、ひかり藻を配して、妖しい景色を浮きあげるように工夫されていたのである。
いま——。
そこへ、視線をつけたどぶが、発見したのは、ふしぎな現象であった。
水ぎわの岩から、ひきつづいて水面まで、浮きあがった光のひろがりに、どうしたことか、中間に黒い一尺ほどの縞が入っているのであった。
これは、ひかり苔とひかり藻のあいだが、中断されていることを示している。つまり、水深が、一尺あまりさがっているのだ！
——はてな？
どぶは、その岩へ近づいた。
——水深が、さがっていることは、ここに、なにか、からくりがある証拠だぞ！
それをたしかめようとして、首をのばして、岩の下をのぞきかかった——その瞬間であった。
どぶは、背すじに、なにか冷たいものを感じて、はっと、首をまわした。
「おっ！」

どぶは、目を見はった。
たったいままで、その赤松の巨樹のかたわらに、たたずんでいた菊姫の姿が、忽然と、かき消えているのだ。
「なんだ？　どうしたんだ？」
どぶは、ぐるっと見まわした。
宵闇が降りて来た庭上に、その姿は、なかった。
菊姫のたたずんでいた老松のわきと、どぶとの距離は、ものの三間もはなれてはいないのだ。
どぶが、ちょっと、目をはなしている隙に、菊姫は、消え失せた。
「畜生っ！」
どぶは、狼狽しつつも、腹を立てた。
「こんなチョボ一があるもんけえ」
さらに、眸子をこらして、見まわしたが、その美しい姿は、どこにも見当らなかった。

三

と——。
あわをくらったどぶを、あざわらうように、どこからともなく、
「ほほほ……」
菊姫の笑い声が、ひびいて来た。
どぶは、思わず、その赤松の巨樹を、ふり仰いだ。

奇怪なことであった。

高処の枝に、ふわりとかかっているのは、菊姫の衣裳に、まぎれもないようであった。

「な、なんだ！」

どぶは、ぞっとなった。

その折、夕風が吹きつけて、衣裳は、ぱっと、あおられ、どぶの頭上へ、ふわふわと落ちて来た。

衣裳がはなつ香は、まさしく、菊姫がただよわせていたものであった。

それを受けとめて、どぶは、しばし、茫然となった。

しかし、どぶを驚愕させる出来事は、それだけではすまなかった。

不意に——。

その巨松の梢から、白いものがうごめいたとみるや、ふんわりと、空中へ、舞い出たのであった。

天女！

まさしく、それであった。

白羽二重の下着いちまいを、ひらひらと夕風にひるがえしながら、宙を舞って行くのだ。

流石のどぶも、この世にあり得ない光景に、きもも魂も奪われて、口をあけて、見送るばかりで、なすすべを知らなかった。

闇は、急速に濃くなっていたし、これを、何かのからくりと看破する目は、どぶには、なかった。

天女は、闇に溶け、遠く塀の方へ消え失せた。

こうして、また一人、土井但馬守の実子が、文字通り、蒸発してしまった。

もとより——。

どぶは、ただちに、奔って、家臣一同を呼ぶために、絶叫した。

屋敷中、すみずみまで、高張提灯がかかげられ、必死の捜索がなされたが、菊姫の姿は、ついに、見当らなかった。

どぶは、菊姫が、空中へ消えた、とは誰にも報せはしなかった。報せたところで、信じてもらえるものでもなかったし、これは、自分で謎を解かねばならぬ、とほぞをきめたのである。

但馬守光貞は、菊姫消失の報告を受けるや、

「わしに対して、のろいをかけて居るのは、お犬の方ではない。そこいらにひそんで居る人間に相違あるまい」

そう云って、口をへの字に歪め、自分に怨恨を抱く者を思い出そうと、つとめた。

しかし、あまりに多くの敵を持つ但馬守としては、

——あいつか！

と、一人の人間に、きめかねるようであった。

四

その翌朝——。

どぶは、菊姫の捜索は家臣たちにまかせておいて、泉水のほとりに立った。

昨夕見とどけた一尺の水深の差は、嘘のように、なくなっていた。
「べらぼうめ。海辺じゃあるめえし、水が高くなったり、低くなったりしてたまるものけえ！」
どぶは、ひとつ、自分のからだで、ためしてみることにした。
万之助は、この岩から落ち込んで、行方不明になったのである。
どぶは、万之助になったつもりで、たじたじと、泉水へ向って、後ずさりをして、どぶん、と仰向けに落ちてみた。
但し——。
どぶが、万之助とちがっていたのは、万一の要心に、赤松の幹へ、綱を巻きつけて、その一端を、自分の腰に、しっかとくくりつけておくのを忘れなかったことである。
どぶは、何回も、仰向けに落ち込む行為を、くりかえした。
しかし、あかるい朝陽の中では、なんの怪異も起りそうもなかった。
「はてな？」
どぶは、亀の甲ら乾し用の岩に、両手をついて、水面を凝視しながら、首をひねった。
——万之助は、水中をもぐって、向う岸へはいあがったか？
そうとしか考えられなかった。
——よし、ひとつ、もぐってくれる。
どぶは、立ち上ると、岩をひと蹴りして、水中へ跳ぼうとした。
瞬間——。
その岩が、ぐらっと傾いた。

どぶの足許には、奈落の口が、開いた。
凄じい勢いで、それへ落ち込む水流に、どぶは、巻き込まれた。
亀の甲ら乾しの岩の下には、人間一人吸い込むだけの強い吸引力をもった孔が、設けられていたのである。
どぶの裸身は、落下しつつ、きりきり舞いした。
さいわいであった。
腰に巻きつけた綱が、どぶを救った。
宙吊りになったどぶは、岸壁を蹴りながら、綱をたぐって、するすると、はいあがった。
赤松の岸辺へしがみついて、視線をやれば、水面は、何事もなかったかのように、おだやかにひろがっていた。
しかし、まさしく、そこに、水深は一尺ばかり下っているのであった。
——そうか！　判ったぜ！
どぶは、ぶるっと胴ぶるいしてから、小さな目を光らせた。
——この屋敷中が、仕掛をほどこされていやがるのだ！　この庭も、四方八方、からくりだらけなんだ。庭師の島兵衛とからくり唐次が、共謀になって、つくりやがったに相違ねえのだ。
——これで、なにもかも、はっきりするぞ！

五

どぶは、土井邸を、とび出すと、まず、いっさんに、町小路家へ、つッ走った。

——島兵衛と唐次の野郎っ、よくも、おれを、まんまとだましやがったな。いまに、見ておれ！　ひと泡、噴かせてくれる！

どぶは、町小路家の裏門から、馳せ入って、庭へまわってみて、

「おっ！」

と、目を見はった。

なんという早手まわしのことか。

からくり唐次が、後手にしばりあげられて、そこへひき据えられているではないか。

その縄をとっているのは、同心の小松九郎兵衛であった。

縁側には、左門が、端座していた。

「殿様！　ど、どうしてこいつを、しょっぴかれましたか？　……あっしゃ、たったいま、こいつが、土井邸に、からくりを仕掛けやがって、若殿や姫君を、かどわかしやがった下手人と知ったばかりでござんすぜ」

どぶは、興奮して、云った。

「小松が、お前とは別に、探索をつづけていき、どうやら、この男が、新邸のあちらこちらに妙な仕掛を施したらしい、と見当をつけた」

「成程——。たしかに、下手人は、こいつにちげえありませんや」

どぶは、唐次の髷をつかむと、ぐいと仰向かせて、

「てめえ、しらじらしく、よくも、おれに、一杯食わせやがったな。何もかも、泥を吐いちまえ。……甲冑や木馬の中にからくりを仕掛けやがったのも、真之助が書庫から消えたのも、万之助が、池の中へ消えたのも、菊姫が、空中へ消えたのも——みんな、てめえのしわざだろう！　島兵衛と共謀になりやがって、土井家の子らを、次つぎに、さらって行きやがったんだ。どうだっ？」

と、あびせかけた。

唐次は、口を一文字にひきむすんで、こたえようとせぬ。

「口を割らねえか！　割らなきゃ、割らせる方法は、百もあるぜ。……てめえ、何のこんたんがあって、真之助、万之助、菊姫を、消した？」

「……」

「消した、といっても、殺しちゃいめえ。……どこかに生かして、とじこめていやがるんだろう？　おいっ！　ぬかせ！　泥を吐け！」

「……」

どぶは、唐次が容易なことでは口を割らぬ、と見てとるや、小松九郎兵衛に目くばせして、許しを受けると、近くの置石を、かかえあげて、はこんで来て、

「よいしょ！」

と、唐次の膝の上へ、のせた。

「うっ！　む……」

唐次は、歯をくいしばった。

「ま——ゆっくりと、責めてやる。何食わぬ面をしやがって、おれをたぶらかしやがった小憎たらしさは、許しちゃおけねえ。いいか、唐次——石を抱かせるのなんざ、序の口だぞ。海老責

め、火責め、水責め、逆さ吊り、それに、絶食責めだあ！」

六

どぶがならべたさまざまの責めかたは、しかし、必要なかった。
ものの四半刻も、石を抱かされると、唐次は、油汗を流して苦痛をこらえていることに、堪えられなくなり、
「ゆ、ゆるして、くれ！」
と、悲鳴をあげた。
どぶが、石をのぞいてやると、
「水を――」
と、もとめて、ぐったりとうなだれた。
「さあ、泥を吐け！　これっぽっちでも嘘をほざきやがったら、これを末期の水にしてくれるぞ！」
唐次は、あえぎあえぎ、茶碗の水をむさぼってから、
「わ、わる気はなかった」
と、呟くように云った。
「悪気はなかった、と――。なにを、しらばくれやがる」
「い、いや、本当です。……あっしは、ただ、腕を競うた、だけの、ことなのでございます」
唐次は、白状した。

土井家の新邸を建てるにあたって、島兵衛、小源太、多三郎、それに自分がえらばれると、たがいに、自論を云いはって、大変な喧嘩になった。
喧嘩の挙句、島兵衛が、
「お互いに、腕を競いあおうじゃないか」
と、云い、「よし！」ということになった。
その時、唐次は、自分の腕前は、人を驚倒させるからくりをつくることにあるから、新邸の各処に、それを仕掛けさせてもらおう、と申し出た。
小源太と多三郎は、あとで露見したら、罪になる、としぶったが、島兵衛が、やるならやってみな、とみとめてくれたのであった。
唐次は、しかし、どこへ、どんな仕掛を施すかは、三人に打明けなかった。
三人は、しつっこく、迫ったが、唐次は、頑として、首を横に振った。
そして、新邸は、成った。
ところが、その新邸披露の当日、たちまちにして、三男真之助が、そのからくりにひっかかってしまった。
「ひっかかった？　おい、てめえ、あの書庫の中に、どんなからくりを仕掛けやがったんだ？」
「ひと口には云えません」
「なにをほざきやがる。ぬかせ！」
「……」
「野郎、この期に及んで、まだ、ごまかそうとしやがるか！」

どぶは、かっとなって、唐次の横っ面を、なぐりつけた。
「唐次！」
左門が、縁側から、声をかけた。
「お前のつくったからくりは、いずれ、これから、小松とどぶに調べさせるが……、その前に、きいておこう。真之助、万之助、菊姫は、生存いたして居るのか？」
「はい、たしかに――」
「どこに、とじこめてある？」

七

唐次は、すぐには、こたえず、俯向いていたが、
「とじこめた場所は、存じませぬ」
「知らぬ？　それは、どういうことだ？」
「島兵衛に、たのんで、どこかへ、とじこめてもらいましてございます」
「ふむ、たしかだな？」
「相違ございませぬ。……実は、真之助様が書庫から、行方不明となった、ときました時、てまえは、はじめて、自分のやったことが、おそろしくなりました。そこで、やむなく、島兵衛に、すべてのからくりを打明けて、この仕掛にひっかかった者を、救って、どこかへ、つれて行ってくれるように、たのみました。からくりにひっかかれば、大怪我をいたします。怪我をしないまでも、あまりの恐ろしさに、しばらくは、気が狂うおそれもございます。げんに、真之助様も万之助様も、菊姫様も、怪我をされたり、気が狂っておいでございます。このことが、露見すれば、てまえは打首でございますし、からくりを仕掛けるのをみとめた島兵衛も、手討ちをくらうのはまちがいございません。……そこで、島兵衛に、たのんだのでございます」
この申しひらきをきいた左門は、ふっと、うすら笑って、
「お前の申すことには、納得しがたいところがあるが、ま――よかろう。三人が生存している、として、お前は、これから、おのれが仕掛けたからくりを、小松とどぶに披露せねばなるまい」
「は、はい」
唐次は、うなだれた。
「殿――」
小松九郎兵衛が、云った。
「唐次に、からくりを示させるのは、どぶ一人でよろしいか、と存じます。てまえは、別に調べなければならぬことがあります」
「そうだな」
左門は、うなずいた。
小松九郎兵衛も、唐次の白状を信じてはいなかった。
真之助、万之助、菊姫の兄妹が、はたして生存するかどうか？
小松九郎兵衛は、至急に、調べてみなければならなかった。
「どぶ、唐次を、土井邸へ、連れて行くがよい」
「へい、かしこまりやした」

どぶは、唐次を、ひっ立てた。

そのあとで、小松九郎兵衛は、左門に、云った。

「唐次は、なにか、肝心のことを、かたく、かくして居るように、うかがわれます」

「わしも、そう思う。……あるいは、元凶は、唐次ではないかも知れぬ」

「は――」

「島兵衛と申す老人かも知れぬの」

「御意！」

「とすれば、ひと筋縄では、いくまい。しばらく、様子を見る必要もあろう。ぬかるまい」

「承知いたしました」

五つの位牌

一

「さあ、やってもらおうぜ」

どぶは、土井邸の、三男真之助のために建てられた例の艶笑庫の前に来ると、ひきつれて来た唐次に、云った。

「まず、この扉の錠前を……誰が、かけたかだ」

新邸披露の日、真之助が、この艶笑庫の中へ――扉の錠前をはずして、入るのを、どぶは、見

とどけている。

真之助は、出て来はしなかった。

ところが、どぶが小源太と、ちょっと話を交しているすきに、いつの間にか、錠前は、がっちりと、かかってしまったのである。

誰かが、扉へ近づけば、どぶの目にとまらぬはずはなかった。どぶは、ごく近い距離の松林の中にいたのである。だから、誰も近づかなかったことを証明できるのだ。

「どうなんだ、おい？」

どぶに、睨みつけられて、唐次は、薄ら笑った。

「なんの造作もないからくりですよ。入ってみれば、わかります」

「よし」

どぶは、唐次をさきに入らせておいて、内側から、扉を閉めた。

とたんに、おもて側で、がちゃりという音がひびいた。どぶは、こころみに押してみたが、ビクともするものではなかった。

内側から閉めれば、おもて側の錠前が、かかる仕掛けになっているのだ。

「へん！　きいたふうな細工をしてやがる」

どぶは、感心した。

「それで――真之助を、どこから、かどわかした？」

「かどわかしたのじゃありませんよ。勝手に、からくりにひっかかったのですよ」

「鼠取りに鼠が、ひっかかるようにか。……そこへ、案内しろい！」

二人は、艶笑庫の中へ入った。

いや、おどろくべき艶笑本、笑い絵の蒐集であった。

およそ三十坪あまりの庫の四方が、天井まで書棚になっていて、ぎっしりと積みかさねてある。

どぶは、注意ぶかく見渡したが、どこにからくりが仕掛けてあるのか、見当もつかなかった。

唐次は、ゆっくりと、北側の書棚に近づきながら、

「この朱色の棚にある品が、最も珍奇で高価な品ばかりです。もちろん、歌麿の裸女百態も、ここに置いてありました。……左様、小源太からとりかえして、ここへ、もどしてありますよ。この朱色棚の品を、どれでも、ひとそろい、とり出す、としますね。そうすると、棚からその重みが減じたために、足もとの床板が、くるりとひっくりかえって、からだが、奈落へ落ちる——という仕掛になって居ります。ごらんに入れましょう」

「待て！　てめえ、そのどんでん返しで、遁げようというこんたんじゃあるめえな」

「教えておいて、遁げるバカも居りますまい。もうちゃんと、観念して居りますよ」

二

唐次は、その朱色の棚の前に立つと、とんと床板を踏み鳴らして、

「これが、どんでん返しになります。だから、こうして、大きく股をひらいて……」

と、その通りにしながら、

「ここにのせられた、裸女百態を、とりおろしますよ」

と云って、両手で、それを持ちあげた。

とたん——。

大きく踏みひらいた両足の中の床板が、くるっと、まわって、孔をあけた。

「ふむ！」

それへ、視線を落して、どぶが、うなずいた——その瞬間。

「ぎゃっ！」

唐次は、凄じい悲鳴をあげて、のけぞった。

「おっ！」

どぶは、倒れかかる唐次へ、とびついて、うしろから、ささえた。

唐次の胸には、槍の穂先が、ふかぶかと突き刺さっていた。

つまり——。

唐次が、「裸女百態」を棚から、取りおろすと同時に、棚の奥から、ぴゅっと槍がとび出して来て、唐次の胸をつらぬいたのである。

「唐次っ！」

どぶは、たちまち血の気をうしないはじめたからくり師を、ささえながら、

「この槍が、とび出すのも、てめえの、仕掛か？」

と、問うた。

唐次は、苦痛に喘ぎつつ、

「ち、ちがう！」

と、かぶりを振った。
「じゃ、誰のしわざだ？」
「……た、たぶん、小源太が……、やった、ことだと……思います」
「本当だな？」
「……親分、もう、あたしは、だ、だめだ」
唐次は、かすかに、首を上下させると、目蓋を閉じた。
その折、どぶは、棚の奥から突き出した槍が、すうっと、ごく自然に、ひっ込むのを、視た。
そして、何事もなかったかのように、棚の奥の板壁は、閉じられてしまった。
どぶは、唐次を床の上へ寝かせておいて、要心しつつ、棚に近づき、その奥の板壁をしらべてみた。
なんの変ったところもないのだ。まことに、巧妙な仕掛であった。
どぶが、必死になって、調べつづけているうちに、不意に、ぎぎぎっと薄気味わるい音がひびいた。
はっとなって、頭をまわすと——。
唐次を横たえさせた床板が、ゆっくりと、回転しはじめたではないか。
「あぁっ！」
どぶが、驚愕の叫びをあげるあいだに、唐次の死体は、傾斜した床板をすべって、消え去ってしまった。

三

茫然として自失した瞬間が、すぎると、どぶは、無性に腹が立って来た。
「こん畜生っ！　おれを、ばかにしやがって！」
実際、嘲弄されているとしか思えない出来事であった。
しかし、すぐに、どぶは、自分をいましめた。
「おちつけ！　いまが、肝心のところだぞ。ここで、カンが狂ったら、それこそ、アブハチとらずになる」
どぶは、考えはじめた。
——唐次の白状には、嘘があった！
どぶは、まず、そうきめてみた。
なるほど、唐次は、この新邸の各処に、からくりを設けたであろう。そのために、真之助は、行方不明になった。しかし、この艶笑庫の中へ、仕掛れば、当然、真之助は、それにひっかかる。唐次は、真之助をひっかける目的で、からくりをつくったとしか思われぬ。すなわち、真之助を、かどわかすという目的で、つくったに相違ない。
また、泉水のからくりは、とうてい、唐次一人がつくったものではない。庭は、島兵衛の権限なのだ。島兵衛が、拒否すれば、唐次は、つくれなかったろう。つまり、島兵衛が、共謀だと考えられる。
また——。

多三郎は、どうして、木馬の中に、もぐり込んでいたか？　自分が唐次をさそって、木馬をしらべようと、忍び込んだ時、多三郎が、ひと足さきに、木馬の中にもぐり込んでいたのは、偶然とは考えられぬ。

それからまた。

菊姫が、空中へ舞いあがって、消え去った件であるが、これは、唐次のからくりとは、とうてい考えられぬ。

——もしかすれば？

どぶの脳裡に、ひらめくものがあった。

「そうだっ！」

どぶは、はねあがった。

庭へとび出したどぶは、島兵衛の住む北隅の小屋へ、奔った。

すると——。

いつの間にやって来たのか、小松九郎兵衛が、戸口に立っていた。

「旦那！　またあっしより一足さきにお手柄ですかい？」

「なに、お前が、とんで来るのを、こうして待っていてやったのだ」

「やっぱり、旦那のガンも、島兵衛へつけられた、ってえわけで——」

「まあ、そうだ」

どぶは、板戸をひき開けた。

「島兵衛！」

どぶは、呶鳴った。

「ネタは割れたぜ！　神妙にしろ！」

島兵衛は、古びた経几に向って、坐っていた。

几上には、経文がひらかれていた。

「……」

黙って、どぶと九郎兵衛を見かえると、いんぎんに、頭を下げた。

四

どぶと九郎兵衛は、島兵衛の前に立った。

「おい、爺さん——。われわれが、ここへ、やって来たわけは、もう、おめえには、わかっているんじゃねえか？」

どぶは、鋭く見据えて、云った。

「……」

島兵衛は、膝へ目を落して、沈黙をまもっている。

「島兵衛！　艶笑庫で、いま、唐次が死んだぜ。いや、殺された。てめえがつくったからくりに、てめえ自身が、ひっかかるこけは、あるめえ。それとも、もうのがれられぬ罪とさとって、てめえでてめえの胸へ、槍を突き刺したのか。……いずれにしても、この屋敷をつくった四人の職人のうち、小源太、多三郎、唐次——三人が、死んだ。のこったのは、爺さん、おめえ一人だ。これは、どういうわけだ？」

「……」

「おいっ！　くそ爺いっ！　返答しろい！」

どぶは、島兵衛の胸ぐらを、つかんだ。

島兵衛は、ようやく、顔をあげて、どぶを視た。

その双眼は、冷たく光っていた。

「小源太も多三郎も、それから唐次も、いずれ殺されることは、判って居りました」

「どうして、判っていた？」

「それは、いまは、申し上げられません」

「なんだと！」

「親分、このことについては、十日の猶予を頂ければ、なにもかも、判って頂けます」

「十日も待てるか！」

「おねがいでございます！　実は、てまえには、まだひとつ、やりとげなければならぬ仕事がのこって居ります」

「そうだな。長男の縫之助という若殿が、まだ一人、行方知れずになっていねえな。それを、かどわかす仕事がのこっている、というわけか」

すると、九郎兵衛が、

「どぶ、縫之助は、もう、行方知れずになった。馬道のお玉の家から、姿を消して、どこへ行ったか、不明だ」

と、云った。

「野郎っ！　爺いっ、それじゃ、ほかに、なんの仕事がのこっていると、ぬかしやがるんだ？」

「のこっている仕事と申すのは、五重の杜のお犬の方さまの霊廟建立でございます。もう九分通り、仕上って居ります。あと、十日あれば、立派に……」

「莫迦野郎っ！　おれたちはな、世間をたぶらかしてやがるお犬の方の怨霊ってえしろものを、この地上から払いのけてくれようと、苦労しているんだぞ。霊廟なんざ、今日にも、火をつけて、燃やしてやりてえくれえだ」

「親分！」

「親分と呼ぶのは、止しやがれ。柄じゃねえんだ。……おめえに、最後の仕上げをさせねえのは、もっけの幸い、というものだ」

「ちがうのだ！」

島兵衛の顔面が、一変して、凄い形相になった。

五

「あっしも、お犬の方の怨霊なんぞ、信じてはいねえ。ただ、あっしが、霊廟づくりを引きうけたのは、ほかの目的があったからなのだ！」

どぶは、そう云う老庭師の凄じい形相を、見まもりながら、

――何をしでかしやがるつもりか？

と、興味をわかせた。

「おねがいでございます。町方様！」

島兵衛は、九郎兵衛に向って、両手を合せた。
「十日の猶予を下さいまし。あっしは、もう、にげもかくれも、いたしませぬ。ただ、霊廟を仕上げなければならぬ、深い仔細があるのでございます」
「もし、許してくれなければ、真之助も万之助も菊姫も縫之助も、返さぬ、というのだな！」
「やむを得んことでございます。……御霊屋が開帳される日に、何もかもおわかりになります。……もう、これ以上、このお屋敷で、怪異は起りはいたしませぬ。……どうか、十日のご猶予を！」
島兵衛の双眼に、涙がにじみ出た。
「よし！」
九郎兵衛は、うなずいた。
「待ってやろう」
「旦那！」
どぶが、あきれて、
「冗談じゃねえ！　この爺いが、陰謀の張本人と判って居りながら、看のがすなんて――」
「看のがすのではない。ただ、十日の猶予をくれるだけだ」
「風をくらって、高とびしやがったら、どうします」
「どぶ――、わし一人の考えで、看のがすのではない。町小路の殿様が、もし島兵衛が、猶予を乞うようであったら、待ってやれ、と仰言ったのだ」
「へえ！　殿様は、この爺いが猶予を乞うことまで、お見通しだったのですかい？」

「そうだ。……どうやら、殿様には、謎をお解きになっているらしい」
「殿様は、人がわるいや。……おい、爺い、いいな、こっちの好意を、きっと裏切らねえな？」
「神仏に誓って！」
島兵衛は、平伏した。その肩は、小きざみに、ふるえていた。
九郎兵衛とどぶは、小屋を出た。
どぶは、どうもまだ不安で、首をまわしてみた。
「どぶ、わしらには、ほかにまだ調べることがあるぞ」
九郎兵衛が、云った。
「小源太、多三郎の死骸を、こっそり、葬ったのは、島兵衛だ」
「知って居りますよ。下谷の妙法寺でさ」
「これから、そこへ行って、調べてみなければならん」
「何を？」
「墓をあばいてみるのだ」

六

あきれたことだった。
人夫六人をともなって、下谷妙法寺の墓地に入って、小源太、多三郎の新墓を、掘りかえしてみると――。
早桶の中は、からっぽであった。

「あん畜生っ！」
どぶは、島兵衛に対して、烈火の憤りにかられた。
「小松の旦那！　これでも、あのくそ爺いに、十日の猶予をくれてやるんですかい！」
「こっちの予想通りだったまでのことだ。小源太も多三郎も、生きて居る。したがって、唐次も生きて居るはずだ。殺された、とみせかけただけだ。……四人は、共謀だ。だから、町小路の殿様は、わざと、島兵衛を捕えずに、最後に、何をやるか、見とどけようと仰言ったのだ」
「ふうん！　殿様は、島兵衛らが何をやらかそうとしているか、もう見当つけていなさるんで――？」
「たぶんな」
九郎兵衛は、どぶをうながして、方丈に立寄り、住職の法然に、面談をもとめた。
すると、納所を通して、
「本堂でお待ちいただきたい」
という返辞があった。
どぶは、いぶかって、
「住職に会って、どうするんですかい？」
と、問うた。
「島兵衛が、月はじめに、必ず、この寺を訪れていることを、つきとめたのだ」
「へえ、じゃ何かの因縁があるわけだな」
「それも、よほど深い因縁とみえる」

二人は、本堂にあがった。
しばらく、手持無沙汰で、待っているうちに、どぶは、なんとなく、須弥壇へ近づいてみた。
とたんに――。
「おっ！」
どぶは、蓮華座の下の段に、視線を釘づけにした。
そこに、真新しい五基の位牌が、ならんでいた。
「旦那！　これは、なんだと思いやす？」
どぶに指さされて、九郎兵衛は、のぞき込んでみて、
「ほう！」
と、声をあげた。
それらの位牌には、戒名ではなく、俗名が記されてあった。
小源太
多三郎
唐次
玉
島兵衛
「これは、妙なしろものだ」
九郎兵衛は、手をのばして、それらの位牌を、つぎつぎに、取ってみた。
奇怪なことには、その裏側の死亡年月日は、全く同じ日にされていた。

のみならず——。

ちょうど、十日さきになっていた。

十日さき——すなわち、五重の杜の霊廟が完成して、開帳する日であった。

七

「成程——」

九郎兵衛は、どぶと顔を見合せると、

「十日の猶予をくれ、と島兵衛が、ねがったはずだ。島兵衛は、その日に、死ぬ覚悟だ」

と、云った。

「それにしても、小源太、多三郎、唐次に、長男縫之助の情婦になっていたお玉まで、位牌にしてやがるとは、どういうんですかねえ」

「この五人、ただの間柄ではないらしいな」

九郎兵衛は、島兵衛の位牌の蔭に、もう一基、これだけは、ひどく古びた位牌が置かれてあるのをみとめて、手にしてみた。

これには、戒名があった。

裏がえすと、俗名お蝶、死亡しているのは、二十数年前であった。

「これア、なんだろうな?」

首をかしげているところへ、住職が、入って来た。

もうすでに古稀をこえたとおぼしい、みごとな白髭をたくわえた、見るからの善知識であった。

「お待たせ申した」

座に就いてから、二人の用向きを、たずねた。

「おうかがいしたいことは、小源太、多三郎の墓を掘ってみたところ、棺の中は空であったこと。これがひとつ。また、ここに、五基の位牌がならんでいるが、島兵衛は現存しているにもかかわらず、なぜ、生きたままでおのれの位牌をつくったか。これがふたつ。……ご住持は、おそらく、この五基の位牌に関するかくされた因縁をご存じであろう。ついでに、おきかせ下さるまいか」

九郎兵衛は、申し入れた。

住職は、べつにためらいもせずに、こたえた。

「小源太、多三郎殿を葬ったのは、島兵衛殿が、ただ一人で、されたことゆえ、棺の中の遺体の有無については、愚僧の存じ申さぬところです。……この五基の位牌がならべてあるのは、べつに、ふしぎはなく、小源太、多三郎、唐次、玉の四人は、兄妹でござる」

「兄妹!?」

どぶは、目をひきむいた。

「左様——。島兵衛殿の子たちでござる」

「ふむ!」

どぶは、うなった。

「そうか! そうだったのか!」

目の前に降りていた黒い幕が、さっとひきあげられた思いであった。

「先日、島兵衛殿が、見えられて、この五基の位牌に、かの古い位牌――それは、島兵衛殿のつれあいで、つまり四人の兄妹の母親でござるが――、ひとまとめに、回向をしてくれ、と申されるので、してさしあげた次第でござる」

「生きているわが身を、回向する？」

「名人にありがちな変った御仁でござるゆえ、生きているうちに回向してもらって満足することにしたのでござろうな」

八

「ご住持！」

九郎兵衛が、鋭く見据えて、

「島兵衛が、ただ、こんな妙な回向を、おのれの満足のためにだけ、したとお考えか？」

「人には、それぞれ、人にかくさねばならぬ秘密がござろう」

「ご住持が、われわれに語ってもかまわぬ、と思われるだけのことを、おきかせ頂けまいか！」

住職は、しばらく、考えていたが、やがて、口をひらいた。

「島兵衛と愚僧は、四十年来の知己でござる。二十四年前――つまり、このお蝶さんが亡くなられてほどなく、島兵衛殿が、小源太、多三郎、唐次、お玉の四人の子供たちを、連れて来て、この子たちの身の振りかたをたのみたい、と依頼されたのでござる。……

愚僧は、お引受けして、小源太を大工に、多三郎をかざり職に、唐次を細工師に、それぞれ、内弟子に遣ったのでござる。三人とも、父親の血をひいて、職人になれば、名人と称される腕前

になるであろう、と予想いたしたが、予想たがわず、小源太は、二十歳ですでに棟梁になり申した。尤も、親方に見込まれて、婿養子になったのでござるが、二十歳で、深川の魚清――あの大料亭を建ててみせたのだから、これが、評判にならぬはずはなかった。また、多三郎は、親方の急死によって、その家を継ぎ申したが、これが、大名旗本屋敷に出入りする家であり申したため、若くて、苦心しながら、各お屋敷を立派にかざったことでござる。唐次だけは、どういうものか、親方とそりがあわず、その家を出奔して、長崎へ行き、和蘭語を勉強して、奇想天外のからくり細工を、身につけ申した。まことに、あっぱれな伜たちと申すことができます。

なお、お玉は、浅草馬道の常磐津の女師匠の許へ、奉公に出し申したが、これは、いつの間にやら、奥山の軽業小屋に入り、たちまち、人気者になったのでござる。……この四人の兄妹の身許引受人が、愚僧であったことは、申し上げるまでもないことでござるが、島兵衛殿が実の父親であることは、世間に知る人は、一人もなかったのでござる。それと申すのも、島兵衛が、愚僧に、子たちを預けるにあたって、自分が父親であることは、かたく内緒にしてほしい、とくれぐれも頼まれたからでござる。どのような事情があって、そうしなければならぬのか――これは、島兵衛殿が口をつぐまれている以上は、こちらからは訊きただす筋合ではござらなんだ。……愚僧が、申し上げられるのは、これだけでござる」

住職の方から、これ以上は、何も語らぬ、という態度を示したのである。

九郎兵衛とどぶは、引きあげざるを得なかった。

「さあ、面白いことになりやがった！」

山門を出て行きながら、どぶは、舌なめずりした。

「どぶ――」

九郎兵衛が、云った。

「島兵衛は、せっかく、死亡日をきめたのだ。待ってやろうではないか」

九

どぶは、左門に報告にゆく九郎兵衛と、途中で別れて、なんとなく、足を浅草の方へ向けた。むっつりと、口をへの字に曲げて、道をひろいながら、どぶは、あきらかになった意外の事実を、つなぎ合せてみようとして、あたりの景色も人も目に入れぬ。

島兵衛は、小源太、多三郎、唐次の三人の息子が、それぞれ、名のある職人になるや、かれらと組んで、土井但馬守光貞の新邸をつくりあげた。

これは、ずっと以前から――そうだ、四人の子を妙法寺住職に預ける時から、計画していたことではないのか。

自分が庭師、長男が大工、次男がかざり職、三男が指物師――こうみれば、ひとつの屋敷をつくりあげる目的があった、と考えてよいことだ。

土井家新邸建築にあたって、四人が偶然えらばれたようにみせかけて、実は、島兵衛のひそかな計画が実現したのだ。わざと、四人が仲がわるいように、絶え間なく喧嘩をしてみせたのも、肉親の間がらであることを、人に知られまい、とする苦肉の策であった。

四人が協力して、つくりあげた新邸には、巧妙なからくりが仕掛けてあった。

まず三男の真之助を、何処かへ拉致した。次男の万之助も行方不明にした。次いで、菊姫をかどわかした。

それから、お玉は、縫之助の情婦になって、これを骨ぬきにした。

すなわち――。

島兵衛は、土井家に対して、なにか深い遺恨を抱いて、報復せんとしているのだ。

その報復をなしとげる日が、十日後――五重の杜の霊廟が、ひらかれる日なのだ。

――いってえ、どんな恨みのはらしかたをしようとしやがるのか？

どぶにとって、こんな興味しんしんはなかった。

おそらく、島兵衛の狙うところは、土井但馬守光貞の生命であろう。二十数年にわたって、計画を抱きつづけるほど、島兵衛の怨恨は凄じいものだったのだ。

土井邸で、庭師として、その生涯のなかばをすごしたのも、復讐のためだったとすれば、これは、なんともおそるべき人間の執念といわねばならぬ。

――島兵衛は、土井但馬守からどんなひどい目に遭ったというんだ？

――もしかすれば、島兵衛は、但馬守にとりつぶされたどこかの藩の遺臣じゃねえのかな？

どぶは、そう想像して、ふうんと深い息をした時、むこうからいそぎ足に来た男が、

「おっ！　親分――」

と、呼んだ。

どぶが手先につかっている夜明し蕎麦屋の辰という男であった。

「なんだ？」

「お玉が、小屋へもどって来て、曲芸をやって居りますぜ」

十

「よし！」
どぶは、小さな目をかがやかした。
「お玉の口を割らせてやる！」
四人兄妹のうち、小源太、多三郎、唐次の三人は、死んだ。生きのこっているのは、お玉一人である。
これを、捕えて、白状させるのが、さしずめ、いまどぶにできる唯一の仕事のようであった。
どぶは、奥山へ向って、急いだ。
ちょうど、どぶが、小屋に入った時、お玉は、新趣向による〝春がすみ天女の舞〟の曲技の最中であった。
舞台いちめんに、黒幕を引き、その前で、純白の薄衣をまとったお玉が、ふわりふわりと、空中に、舞っている。
つまり、強靱で極細の針金を、宙に張り渡して、お玉は、その上で、自在に、舞ってみせているのであった。
当然——。
どぶの脳裡には、土井邸の庭の空中に消え去った菊姫の姿が、思いうかんだ。
——そうか！
どぶは、合点した。

——あれは、これなんだ！　菊姫をどこかへかくしておいて、お玉がすばやく身代りになって、宙を舞って、逃げやがったのだ！　まんまと、一杯くわせやがった。
どぶが、ゆっくりと舞台へ、近づきかけた時——。
お玉は、空中で、ひとつ、見事なとんぼをきると、ささあっと、落下した。
舞台の上には、大きなつづらが置かれてあった。
お玉の白いからだが、その中へ、消えた。
とみるや——。
手槍をつかんだ男二人が、左右から、そのつづらを、ぶすっぶすっと、突き刺した。
見物人の中には、思わず、悲鳴をあげる者も出た。
どぶは、お玉が、つづらの底から奈落へ降りた、とみてとって、
——よし！　奈落で、とっつかまえてくれる！
と、奔り出そうとした。
その瞬間であった。
つづらの中から凄じい男の悲鳴が、ほとばしった。
槍で突いた男たちの驚愕ぶりが、それは思いもかけぬ出来事であることを、示した。
つづらの中は、空であるべきだったのだ。ところが、その中に、人間がいたのだ。
そいつを、二本の槍が、容赦なく、突き刺してしまった。
どぶは、ぱっと、舞台へ、とびあがった。
つづらの蓋をひっぱずして、のぞき込んでみると——。

その中で、血まみれになって、呻いているのは、土井但馬守の長男縫之助であった。
高手小手にしばりあげられたむざんな姿であった。
どぶは、身をひるがえして、奈落へ奔った。

十一

お玉は、うすぐらい奈落で、ふだんの着物にきかえていた。
それに向って、どぶは、近づいた。
「おい、お玉！」
「……」
ふりかえったお玉は、どぶをみとめても、おちつきはらって、にげる様子もみせない。
「おめえら親子のからくり芝居も、どうやら、大詰に来たようだな」
「そういうことでござんすねえ」
「土井縫之助を殺ったのも、親爺の島兵衛の指金か？」
「あたしが、からだをまかせた時から、若様は、くたばることが、きまっていたのさ」
「そういうおめえは、どうなんだ？」
「どうとは？」
「兄貴の小源太も唐次も、生きたか死んだか——雲がくれだ。おめえも、そうするつもりだろう？」
「あいな」

お玉は、薄闇の中で、にっこりしてみせた。
その妖しい美しさを、みとめた瞬間、どぶは、はっとなった。
「おい！　五重の杜で、掘り出された木乃伊の骨相は、おめえに似ていたぞ！　あの木乃伊は、もしかすれば、おめえのお袋——お蝶じゃなかったのか？」
「……」
「そうだ！　そうにちげえねえ。すると、おめえのお袋——すなわち、島兵衛の女房は、土井家の女中だった！」
どぶが、そう云いあてた瞬間、お玉は、ひらっと身をひるがえして、逃げ出した。
「待てっ！」
どぶは、必死で、追った。
しかし、お玉の身軽さは、文字通りましらであった。
楽屋へかけあがるや、おもてへ逃げるかわりに、衣裳箱の上へとびあがった。
こういう小屋に、天井はない。屋根裏がむき出している。
お玉は、その梁に、かるがるとのぼるや、ツツ……とつたって行った。
「勝手にしやがれ！」
どぶは、あきらめた。
とうてい、捕えられるものではなかった。
小屋を出たどぶは、
「さて、と——」

口をとがらせて、肩をすくめた。

「島兵衛の奴、どんな残忍な趣向を考えていやがるか、だ」

想像もつかぬ執念をもって、その日の来るのを待ちうけていた島兵衛である。三人の息子と、一人の娘を、その日のために、おのれの思うがままの職人、芸人にしたてあげて、手足のように動かして来たのである。

ただの趣向を用意しているはずはないのだ。

どぶは、小松九郎兵衛が十日の猶予をやると島兵衛に約束した以上、自分も腕をこまねいて、待つよりほかはなかった。

祈願成る

一

五重の杜の霊廟の成った——その日。

土井但馬守光貞の行列が、そこへ到着したのは、辰刻（午前八時）であった。

森に向って、まっすぐに、二町ばかり参詣道がつくられていた。これには、無数の白い鳥居がならべられてあった。

但馬守は、その参詣道で、乗物をすてた。

その脇にひかえていた裃姿の島兵衛が、

「ご案内つかまつります」

と、いざなった。

侍臣が三人ばかり、但馬守のあとに従おうとすると、島兵衛は、但馬守に、

「おそれながら、お一人にてお願いつかまつります」

と、云った。

「うむ」

但馬守は、侍臣たちに、ひかえて居れ、と命じておいて、島兵衛を先に立たせると、鳥居をくぐって行った。

森はそのままにのこされ、かなりの勾配の石段をのぼると、突如、目の前に、柱も扉も白一色のすがすがしい廟宇が、出現した。

但馬守は、朝陽をあびて、美しい金色に輝く鴟尾を仰ぎ、

「よう出来たの」

と、云った。

「江戸中の信者が、詣でることになりますゆえ……」

「ははは……、お犬の方信仰が、永つづきするとも思われぬが、その時、白を赤く塗りかえて、狐の方に変えるか」

島兵衛は、但馬守を、木の香のこもった拝殿にみちびき入れて、苦心したところを説明した。

それから、

「奥殿を、ごらん下さいますよう——」

と、すすめた。
但馬守と島兵衛は、拝殿とをつなぐ渡廊へ出た。
「てまえは、ここで、お待ち申し上げます」
島兵衛は、渡廊に、うずくまった。
但馬守は、ゆっくりと渡廊を渡り、奥殿の階をのぼった。
何気なく、扉を左右にひらいた——瞬間。
但馬守は、
「あっ！」
悲鳴をあげて、棒立ちになった。
奇怪な光景が、そこに、在った。
左右へ、対座のかたちにわかれて、四人ずつ——八人の人間が、並んでいた。
その左側に並んでいる人間は、すでに、生命のない屍であった。
但馬守の子ら——長男縫之助、次男万之助、三男真之助、そして菊姫であった。
息は絶えているが、腐敗をふせぐ工夫がされていて、ねむっているような状態を保って、白木の台に支えられていた。
そして——。
右側に居並んでいるのは、死んだはずの、小源太、多三郎、唐次、それに、お玉が加わって、冷たくひきしまった表情を示していた。
「こ、これは！」

但馬守は、眼球がとび出さんばかりの形相で、歯を鳴らした。

二

「お殿様——」
背後から、島兵衛の声が、かかった。
「祭壇をごらん頂きましょう」
そこには、お犬の方の霊を象徴する埴輪めいた犬が、まつられてあるはずであった。
ところが、犬の代りに、一基の位牌が、置いてあった。
「その位牌は、お蝶——てまえの女房、この四人の子の母親のものでございますよ」
「……？」
但馬守は、食い入るように、その位牌を凝視したまま、石になったかと思われる。
「お殿様！　よもや、お忘れではございますまいが、ここで、あらためて、思い出して頂きましょう。三十余年前のことだ。貴方様は、若年寄になられたばかりであった。その地位を利用して、私腹をこやさんとして、さまざまの奸計を用いて、小大名を改易にし、その蓄えるところの金品を奪いあげられた。備前二万三千石小沼主殿頭正則も、その犠牲者の一人であった。貴方様は、小沼家を、とりつぶすにあたり、主殿頭息女蝶姫の美貌に目をつけ、これをいったん町家に下げて、おのれの側妾にさし出すならば、二千石ばかりの家に再興させよう、と好餌を投げた。……蝶姫は、これを拒んで、馬廻り百石黒田島兵衛を、護衛として、江戸市中にかくれひそんだ。きびしい探索の目をのがれて、裏店を転々としているうちに、黒田島兵衛と蝶姫は、いつと

なく、夫婦のちぎりをむすび、四人の子を——小源太、多三郎、唐次、玉をもうけた。しかし、この隠れ夫婦の胸中には、若年寄土井但馬守光貞に対する復讐の念が、燃えつづけた。……十年を経て、末子の玉が物心つくのを待って、夫婦は、ついに、復讐を遂げるほぞをかためた。島兵衛は庭師となり、蝶は女中となって、土井家へ奉公した。四人の子をなしながら、三十歳の蝶は、なお、みずみずしい美貌を持っていたため、やがて、但馬守光貞が目をつけるところとなった。蝶は、これを好機として、その閨へ呼ばれるままに、入った。不運は、蝶が、但馬守に操を与えて、油断させることをせず、からだを閉ざして、生命を狙ったことであった。あせったあまり、但馬守に隙がないにもかかわらず、短剣を突きかけ、苦もなく、ねじ伏せられた。かねて、うちあわせていた島兵衛が、寝室へ忍び寄った時には、すでに、時おそく、蝶は縛りあげられていた。島兵衛は、おのが妻が、縛りあげられたまま、但馬守光貞に、犯されるのを、目撃しなければならなかった。……左様、蝶が、犯されている最中に、舌を噛んで相果てた光景が、昨日のことのように、まざまざと、甦って参る。黒田島兵衛は、この時、わが生命あるかぎり、十年二十年、たとえ三十年かかろうとも、必ず、土井光貞に、復讐せん、とおのれに誓うた。その復讐は、土井家をして、この世から根絶やしにすることであった。そのためには、土井家の子息らが生長するのを待って、これを一挙に、屠ることによって、但馬守光貞に、復讐の鬼となった者の執念のおそろしさを、骨髄にまで思い知らせてくれる、と覚悟した」

三

島兵衛ののろいの言葉は、つづく。

「黒田島兵衛は、幼い四人の子らに、主家の悲運、その母親の非業の最期を告げて、土井但馬守光貞に対する復讐のために、生命をすてよ、と誓わせた。……こうして、二十余年の歳月は、流れた。……黒田島兵衛が、一念こめて企てた復讐は、見よ。かくの通りに、成った。土井但馬守光貞！　茨城三万石土井家は、今日を以て、滅びるのだ！」

「ああっ！」

但馬守は、呻きを発して、遁れようとした。

島兵衛は、老人とも思われぬ敏捷な身ごなしで、但馬守を、奥殿の中へ、突き込んだ。

とたんに、その扉は、自然に、さっと閉じられた。

「ああっ！　ゆ、ゆるせっ！」

但馬守は、絶叫して、扉に、しがみついた。

島兵衛は、厳然として、

「小源太！　多三郎！　唐次！　お玉！　……よいか、いま、お前らは、滅んだ主家と母のために、うらみをはらすがよい！　断じて、容赦をするな！」

と、命じた。

そして、ゆっくりと、渡廊をわたって、拝殿へ、ひきかえして来た。

そこに——。

小松九郎兵衛とどぶが、異様な緊張をみせて、待っていた。

島兵衛は、庭師ではなく、小沼主殿頭家臣黒田島兵衛に還った態度で、一礼して、

「いま、おききとどけ下されたごとく、それがしが、生涯をかけた復讐は、いま、成り申した。

十日間の猶予をお与え下され、そのまま、わが復讐を、看のがして下されたご厚情、なんとおん礼を申し上げてよいか、言葉もござらぬ」

と、感謝した。

小松九郎兵衛は、どぶに、目くばせしておいて、島兵衛に向い、

「われら町方は、お犬の方の怨霊が、地上より消えはてるのを、のぞんで居り申す。したがって、この霊廟が、烏有に帰すことは、大いにねがうところでござる」

と、云った。

二人は、島兵衛を、そこにのこして、参詣道とは、反対方角の裏手の野道へ、ぬけ出した。

森から二町もはなれた時であった。

轟然たる音響とともに、森の中から、火柱が噴いて出た。

「これで、けりがついたな」

九郎兵衛は、深い感慨をこめて、つぶやいた。

どぶは、ただ、口をへの字にひきむすんで、みるみる燃えあがる霊廟を、見まもるばかりであった。

土井家の家臣一同が、参詣道を奔ったが、凄じい火勢の前に、石段をのぼることさえも、かなわなかった。

見まもるどぶは、一時に疲労をおぼえて、そこへすわり込みたくなっていた。

解説

尾崎秀樹

一　捕物帳の世界

捕物帳は一般に季感の文学だといわれている。「季の文学」としてそれをとらえたのは白石潔だった。たしかに岡本綺堂の「半七捕物帳」以来、徳川期の江戸を背景とした風物詩的興味は一貫している。それをあらためて定義づけたところに、白石の功績もあるといえよう。

綺堂が「半七捕物帳」の筆をおこしたのは大正五年六月頃からだ。ちょうど患って寝ていたときに、小さい活字が読みづらく、和本の「江戸名所図会」を眺めているうち、そこに描かれた江戸の姿をなんとか文章によって再現し、今日に伝えることはできないものかと考え、それが「半七捕物帳」の連作をうむきっかけとなったらしい。

その前後にはコナン・ドイルの「シャロック・ホームズ」が加藤朝鳥の訳で出版され、話題をよんでいただけに、半七ものはその日本版として大衆に迎えられた。綺堂みずからも半七につい

て、「江戸時代における隠れたるシャロック・ホームズ」と書いているくらいだ。

ところで捕物帳というのは、実際に小説の中に出てくるような形で、当時書きとめられていたものだろうか。綺堂は半七老人からの受け売りとして、つぎのように述べている。

「捕物帳というのは与力や同心が岡っ引等の報告を聞いて、更にこれを町奉行所に報告すると、御用部屋に当座帳のようなものがあって、書役が取りあえずこれに書き留めて置くんです。その帳面を捕物帳と云っていました」

つまり岡っ引や与力同心からの報告を書きとめておく奉行所の手控えのようなものだというが、三田村鳶魚はそれを否定している。

「……捕者（物）帳というのは、奉行所から捕者のために出動した記録であります。近頃は何の某捕物帳というわけで、同心や目明しどもまで何か記録していることがあったように思われているらしい。まあ今の巡査が持っている手帳のような工合に、考えている人もあるようですが、そんなものがあったわけではない。昔の捕物帳というのは、そういうものではないのであります」

それはともかく、「江戸名所図会」のもつ味わいを今日に伝えたいという綺堂の願いは、「半七捕物帳」の中にみごとに実現し、それ以後捕物帳の基本路線とされるにいたった。

捕物帳にはこの「半七捕物帳」のほかに、林不忘の「釘抜藤吉捕物覚書」、佐々木味津三の「右門捕物帖」、横溝正史の「人形佐七捕物帳」、野村胡堂の「銭形平次捕物控」などがつづく。ちょっと思い出す捕物名人だけでも、すでに述べた以外に若さま侍、顎十郎、瓢庵先生、加田三七、鏡屋おかく、黒門町伝七、ゆっくり雨太郎、花房一平、地獄の辰などがあげられる。

実在の人物を虚構化した連作には、遠山金さん、平賀源内、長谷川平蔵、勝海舟なども登場

し、なめくじ長屋のアウト・ローたちや「御宿かわせみ」の恋人コンビもいる。

半七が登場してすでに六十年を経たわけだが、依然として捕物帳の人気は落ちない。それはなぜだろうか。捕物帳はクライム・ノベルではあっても、ミステリーではない。なかにはかなり本格的に構成されたものもあるが、謎ときの興味よりも世話物的な味わいがつよく、一種の江戸市井ものとして書かれてきた。これは岡本綺堂以来の伝統で、野村胡堂にひき継がれ、戦後へ架橋されたわけだが、江戸の風物詩をうつすといったねらいが読者の郷愁をそそるのかもしれない。

戦前の捕物名人には比較的明朗型が多かったが、戦後になるとそれにたいするアンチ・テーゼとして、さまざまなキャラクターが創造され、ホームズとワトソンといったおきまりのコンビがくずれて、グループ化するケースもあった。しかし捕物帳の魅力は、やはり脇役の活躍に負うところが多く、平次よりはガラッ八、右門よりは伝六のほうに人気があつまるのは庶民感情だろうか。

ちょっぴり犯罪小説の味をきかし、時代ものの緊張感ももりこみ、それにホーム・ドラマ的な要素をからませたところに、捕物帳の変らない人気の秘密があるようだ。

おまけに連作形式をとれる点でも、他の長篇や短篇よりは便利であり、キャラクターの創造にもむいていることが、書き手の食指をうごかすのではないか。長篇の捕物帳もないわけではなく、一話が中篇ほどの長さをもつ作品もみられるが、その大部分は短かい連作形式をとっており、週刊誌などの読切り連作というスタイルにマッチする点も見逃せない。

しかしいずれにせよ、捕物帳はきわめて日本的なマゲもの犯罪小説であり、それぞれの主人公像への興味が、捕物帳をささえる軸となっているのではないか。

二　柴田錬三郎の時代小説

最近刊行された柴田錬三郎のエッセイ集「地べたから物申す」を読んでいたら、その中に文士になることは小学一年生頃すでに運命づけられていたようだという回想にぶつかった。

彼は自分の顕著な特質として三つあげている。第一は幼少時から読み書きが達者だったこと、第二には村きってのいたずら者であったこと、そして第三には極端な嘘つきだったというのだ。とくに興味をひかれるのはこの第三の特質で、小学五年生のとき、教師の説教癖にヘキエキし、二宮金次郎が足なえで、重い薪を背負って山を下るとき、足の痛みを忘れようとしてわざと難しい漢文の本を読んだというつくり話をデッチあげ、教師を絶句させたことがあるそうだ。

そしてその最大の特質である〝嘘つき〟を、大衆小説のストーリー・テーラーとして生かすことになったというのだが、この話はいかにも柴田錬三郎らしい。上林暁との間に「小説のウソ」について論争したときの柴田錬三郎の発言などを思いだすと、「嘘つきの特質」といういいかたが、たいへんもっともらしく受けとれるからだ。

嘘つきというと、人をだますといった意味あいが感じられるが、彼の場合その特質が生きてくるというのは、それが虚構をつくることのうまみに置き換えられるからだ。

小説はいうまでもなく虚構である。真実を描くために虚構を手段として用いるいとなみだ。しかし日本の私小説的伝統は、そういった虚構の文芸的意味に目を閉ざし、閉鎖的な世界を描くことにつとめてきた。柴田錬三郎の時代小説は、そういった悪しき伝統へのアンチ・テーゼであり、ロマンへの夢を秘めている。

彼は時代小説と現代小説では、時代小説のほうが性にあっていると述べたことがあった。それは登場人物がいわゆるシンプル・ハートの所有者だからだというが、たしかに柴田錬三郎の書く時代小説の主人公には、一定の好みとでもいったものが影を落しているようだ。容貌も、心理的にも陰影の感じられる孤独な人物であることが多い。眠狂四郎などはその典型であろう。

柴田錬三郎は大正六年三月二十六日に岡山県で生まれ、早く父が亡くなったため、母の手で育てられた。父は漢学に造詣の深かった日本画家で、鏑木清方と同門だったが、その父の血をひいたのか、幼いときから漢籍にしたしむ機会が多く、慶応義塾大学支那文学科に学んだ。

大学の予科に在学中から文学を志し、「三田文学」に「十円紙幣」を発表したのは二十一歳のときだった。その後もひきつづき同誌に作品を発表したが、昭和十七年末に召集をうけ、南方戦線へ輸送される途中、バシー海峡で遭難、七時間余にわたって海上を漂流したこともあった。このときの体験が彼の人間観、文学観に大きく影響しているようだ。

戦後は日本読書新聞の復刊に奔走したが、「三田文学」に発表した「デスマスク」が芥川賞候補となり、つづく「イエスの裔」で第二十六回直木賞を受けた。しかし彼の名が一躍有名になったのは、昭和三十一年五月から「週刊新潮」に連載された「眠狂四郎無頼控」によってである。

この連作は圧倒的な人気をよび、時代小説のリバイバルにおおいにプラスした。ニヒル剣士の系譜に属する眠狂四郎は、ころびバテレン、ジュアン・ヘルナンドと、それを取り調べた大目付の娘千津との間に生まれた運命の子であり、冴えた孤独な表情にはあきらかに戦後の意識が投影していた。

小説とは人を驚かせることの精神を基盤とするものだという考えを抱く柴田錬三郎は、眠狂四郎の創造に際しても奇抜なアイデアをこらし、一刀三拝式の剣のありかたを否定し、西部劇のガンさばきにも似た円月殺法を展開させる。

時代小説の分野では、この眠狂四郎シリーズのほかに、「剣は知っていた」「孤剣は折れず」などの剣侠もの、「赤い影法師」「南国群狼伝」などの忍法もの、「柴錬立川文庫」の連作等を執筆、中国の古典に材をとった「柴錬三国志」などを書き継いできた。

彼の時代小説の特色は、構想力に富むロマネスクな展開にある。その意味では伝奇小説の今日における重要な担い手の一人だといえる。嘘をつくことのたのしさと反骨意識は、伝奇作家としての柴田錬三郎の中に生きており、それが今日の読者を魅きつける理由ともなっているようだ。

彼は毒舌家としても有名だが、そういった歯に衣着せない態度が作中人物に生かされている点も見落せない。

三　「岡っ引どぶ」について

「岡っ引どぶ」は〈柴錬捕物帖〉と銘うたれているとおり、どぶという岡っ引を主人公にした捕物シリーズで、ここには第一話から第三話までが収められている。

どぶは極端に目が小さく、鼻孔が開いて口が大きく、ちょうど将棋の駒のような顔で、冬でも夏でもよれよれの唐桟留の着物一枚、十手さえさしていなければ浮浪者と見違えられそうな、きわめて風采のあがらない男だ。家も女房もなく、入る金はすべて酒と女に使ってしまい、飲む、

打つ、買うの三拍子そろった上に、ときには河内山宗俊と組んで悪事を働いたり、質屋の後家を手ごめにしたり、ごろつき同然の岡っ引で、その点これまでの捕物帳の主人公とはかなり違った性格だといえよう。

ただ醜男ではあるが、どことなく憎めない顔つきをしており、他の岡っ引のように顔をきかせてたかるようなことはなく、岡っ引としての腕も度胸もすぐれていて、いくつかの難事件を解決し、手柄をたてている。

彼を岡っ引にしたのは町小路左門という盲目の与力だが、この左門は三千石の旗本大身の家に生まれながら、その高禄を返上して与力の株を買ったという、町奉行所でも特殊な存在であり、どぶは冷い美貌の持ち主である左門にどうにも頭があがらない。

それというのもどぶはかつて左門に生命を救われたことがあり、その後も後楯となってかばってもらった恩がある上に、左門の美貌や鋭く冴えた神経に一種の圧迫を感じるのだ。左門はどぶにたいしてかなりな危険をともなう仕事を命じ、どぶはいつもその期待にこたえるが、しかし奇怪な事件にぶつかったどぶが左門に相談に行っても、具体的な指示はほとんどしてくれない。左門は自分の推理に自信がもてるまでは口にしようとはせず、どぶは勝手に動き、それが真相に近づいたとき、はじめて左門が決断を下すことになる。

捕物帳にはたいていホームズとワトソン役の組合せがみられるが、この「岡っ引どぶ」の場合には、ワトソン役に近いどぶの方が主人公となり、ホームズ役に対応する左門が一歩後に下った感じで組み立てられており、それが特色ともなっている。ただ左門の人物像は眠狂四郎的なニヒル剣士型であり、武家制度の批判を平気で口にするようなすごさもしめされていて、副主人公で

ありながらきわめて印象的だ。これは左門がこの作者のよく描くタイプと共通しているためだろうが、それにくらべてどぶはかなり個性的だといえる。そのどぶを表面に押しだし、彼の活躍に焦点をあわせたところが、このシリーズにおける作者なりの工夫であろう。

第二話の「白骨御殿」の中で、どぶの前身が備前の小藩の侍であったことにふれているが、最初はその前身も本名もわからないままで登場する。三年ばかり前にふらりと浅草へあらわれ、左門の手下となって働くわけだが、盗まれた浅草寺のお賽銭を発見した手柄で、その名が江戸中にひろまる。だが河内山の片棒をかついで、三浦屋の花紫を売りとばしたのがばれ、三浦屋の雇ったやくざ五人と左門の家の庭で対決し、彼の得意の武器である仕込みの十手を使って、またたく間に相手を負かしてしまうあたりから、第一話の「名刀因果」がはじまる。

呪われた血統をもつ近藤家に伝わる名刀・大盗正宗を守護してほしいとたのまれた左門は、どぶにその役を命じる。彼は近藤家の天井裏に忍びこみ、盲目の美女・雪を見守るが、彼も気づかぬうちに大盗正宗は盗まれてしまう。泉水で見かけた浮子、屋敷の水門の前で発見された首なし死体などから、どぶは首斬り袈裟右衛門が刀を持ち去ったと推理し、袈裟右衛門と対決の後それをとりもどすが、しかしこの事件の裏には、呪われた家系をみずから断とうとした雪の哀しい女心が秘められていた。

「白骨御殿」では百本杭でひきあげられた無惨な死体、どぶが道で見かけた女形の奇妙な言動につづいて、その女形が舞台で殺されるなどのできごとから、今様吉田御殿の疑いのある旗本大番頭・土屋千四郎の邸を、どぶがさぐることになる。土屋千四郎はもとある小大名の小姓だったが、その妻佐保は将軍のかくし子であり、驕慢な性格で、能興行のおりみそめた千四郎のところへ、無理をおして嫁いだのだった。千四郎はそれによって意外な出世をしたが、そのために相愛の許婚者を捨てたこともあり、そうした異常な夫婦関係がもとで、佐保は邸内に淫楽の園をつくる。さらにその邸を幕府が密貿易に利用しているふしもあり、どぶは危険をおかしてさまざまな手段でそれらの事実をさぐり出すことに成功、やがて土屋邸も崩壊するのだ。

第三話「大凶祈願」は犬神信仰の流行と、それを利用して利殖をはかる土井但馬守の邸内でおこる怪異を探策する話だ。そして土井但馬守にふかい恨みを抱く家族が、それぞれ名人といわれる職人となって復讐する過程がたどられる。

いずれも筋立てはかなり複雑で、伝奇的な味わいをしめす部分もあり、内容的にもこれまでの捕物帳とはことなった印象を与える。しかしそれが暗い感じで終らないのは、どぶの個性的な性格と、その胸のすくような活躍ぶりによるものだろう。

なお「岡っ引どぶ」の連作は、このあとに「火焔小町」「御殿女中」「京洛殺人図絵」の三話がつづいている。

（昭和五十一年五月記）

柴錬捕物帖 岡っ引どぶ

柴田錬三郎
© Eiko Saito 1976
昭和51年6月15日第1刷発行
昭和62年11月9日第23刷発行

講談社文庫
定価560円

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-131351-7 (2)

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

斎藤 栄 ライン河心中
斎藤 栄 少女まんが家殺人事件
斎藤 栄 ハムレット殺人
斎藤 栄 日本国憲法殺人事件
斎藤 栄 黒白の奇蹟
斎藤 栄 少年探偵ジャーネ君の冒険
笹沢左保 突然の明日
笹沢左保 炎の虚像
笹沢左保 空白の起点
笹沢左保 泡の女
笹沢左保 結婚って何さ
笹沢左保 傷だらけの放浪
笹沢左保 人喰い
笹沢左保 衝動ゲーム
笹沢左保 シェークスピアの誘拐
笹沢左保 恋をする女たちへ
佐木隆三 復讐するは我にあり 全二冊
佐木隆三 矇野〈死刑囚の手記から〉
佐多稲子 樹影
咲村観 経営者失格
咲村観 商戦
咲村観 商社一族
咲村観 常務会紛糾す
咲村観 メインバンク
咲村観 上杉謙信 全三冊
咲村観 秦の始皇帝
サトウハチロー 選 おかあさん 全三冊
斎藤惇夫 冒険者たち〈ガンバと十五匹の仲間〉
斎藤惇夫 グリックの冒険
早乙女勝元 火の瞳
寒川道夫編 大関松三郎詩集 山芋
西東登 蟻の木の下で
坂上弘 初めの愛
早乙女貢 風塵 全二冊
早乙女貢 沖田総司 全二冊
早乙女貢 おれは日吉丸〈新太閤記〉(一)(二) 全二冊
早乙女貢 おれは藤吉郎〈新太閤記〉(三)〜(四) 全二冊
早乙女貢 独眼竜政宗 全二冊
佐賀潜 華やかな死体
澤地久枝 烙印の女たち
澤地久枝 石川節子
坂口謹一郎 古酒新酒
澤田ふじ子 羅城門
澤田ふじ子 陸奥甲冑記
澤田ふじ子 天平大仏記
澤田ふじ子 寂野
佐々木丸美 雪の断章
佐々木丸美 忘れな草
佐々木丸美 花嫁人形
榊山潤 新名将言行録 全七冊
佐藤秀郎編 一流人 私の好きな言葉
沢田サタ編 泥まみれの死
酒井三郎 昭和研究会〈ある知識人集団の軌跡〉
佐藤忠男 映画館が学校だった

佐藤信夫　レトリック感覚
佐高　信　KKニッポン就職事情
佐高　信　会社人類学入門
佐藤綾子　愛して学んで仕事して
酒井美意子　ある華族の昭和史
斎藤吉見　倒産
佐々木隆信　ぼくはCMディレクター
さだまさし　せとぎわの魔術師
笹子勝哉　頭取敗れたり
司馬遼太郎　歳月
司馬遼太郎　王城の護衛者
司馬遼太郎　俄（にわか）〈浪華遊侠伝〉
司馬遼太郎　北斗の人
司馬遼太郎　妖怪
司馬遼太郎　尻（しり）啖（くら）え孫市
司馬遼太郎　播磨灘物語　全四冊
司馬遼太郎　おれは権現
司馬遼太郎　真説宮本武蔵
司馬遼太郎　風の武士　全二冊
司馬遼太郎　戦雲の夢
司馬遼太郎　軍師二人
司馬遼太郎　大坂侍
司馬遼太郎　最後の伊賀者
司馬遼太郎　箱根の坂　全三冊
海音寺潮五郎　司馬遼太郎　日本歴史を点検する
柴田錬三郎　三国志・英雄ここにあり　全三冊
柴田錬三郎　決闘者・宮本武蔵　全四冊
柴田錬三郎　岡っ引どぶ　正続
柴田錬三郎　異常の門　全二冊
柴田錬三郎　源氏九郎颯爽記
柴田錬三郎　秘剣揚羽蝶
柴田錬三郎　血汐笛
柴田錬三郎　お江戸日本橋　全二冊
柴田錬三郎　おれは侍だ
柴田錬三郎　顔十郎罷（まか）り通る　全二冊
柴田錬三郎　主水血笑録
新章文子　危険な関係
城山三郎　今日は再び来らず
城山三郎　梅は匂い人はこころ
城山三郎　プロフェッショナルの条件
城山三郎　歴史にみる実力者の条件
城山三郎　生き残りの条件
城山三郎　外食王の飢え
白石一郎　火炎城
白石一郎　鷹ノ羽の城
白石一郎　銭の城
白石一郎　びいどろの城
庄司　薫　バクの飼主めざして
志茂田景樹　黄色い牙
志水辰夫　飢えて狼
志水辰夫　裂けて海峡
志水辰夫　散る花もあり
渋谷勲編　なぞなぞ
清水　勲　アイデア漫画館

昭和62年8月15日現在